

日本国召喚 ～天照の咆哮～

イーグル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2017年、日本は異世界に転移した。だが転移したのは史実とは、大きく異なる歴史をたどった日本だった……。

転移して来たのは、物語開始から約100年前に日本近海に出現した未知の超巨大戦艦とその戦艦から得た技術によって大きく発展した日本だったのである。

原作より、はるかに強力な力を入れた日本が異世界に殴り込みをかける。

*2023年2月9日 題名を変更しました。

目次

設定集(仮)	1
クワ・トイネ公国編?	1
クワ・トイネ公国編	2
設定(海軍)	1
クワ・トイネ公国編	3
ロウリア王国編	01
ロウリア王国編	02
ロウリア王国編	03
ロウリア王国編	04
ロウリア王国編	05
番外編	01
パーパルディア皇国編	01
パーパルディア皇国編	02
パーパルディア皇国編	03
パーパルディア皇国編	04
パーパルディア皇国編	05
パーパルディア皇国編	06
パーパルディア皇国編	07
パーパルディア皇国編	08
パーパルディア皇国編	09
パーパルディア皇国編	10
パーパルディア皇国編	11
パーパルディア皇国編	12
パーパルディア皇国編	13

パーパルディア皇国編	14	256
パーパルディア皇国編	15	269
パーパルディア皇国編	16	277
パーパルディア皇国編	17	284
パーパルディア皇国編	18	298
設定集 各プロジェクトについて		307
パーパルディア皇国編	19	310
パーパルディア皇国編	20	320
番外編	02	326
パーパルディア皇国編	21	331
パーパルディア皇国編	22	345
魔王討伐編	01	358
魔王討伐編	02	365

設定集（仮）

設定

日本国

1911年までの歴史は、史実と同じ歴史を歩んでいる。

歴史の転換点は、1912年日本国領硫黄島の沖にて漂流している謎の超巨大戦艦3隻を発見したことに端を発する。所々大きく破損したその艦を、大日本帝国海軍が横須賀港に曳航したうえで詳しく調査した所、自国は疎かおろ各列強諸国ですら建造不可能の代物であることが発覚。

海軍はこの巨大艦に「天照」「須佐之男」「八咫鳥」と命名。

須佐之男を呉に、八咫鳥を佐世保に回航したのち破損部位を当時の最新技術で修復。海軍の象徴として配備した。また、各艦を建造時の姿に戻すためにリバースエンジニアリングを開始した。

1914年開戦の第一次世界大戦には、英国、仏国からの強い参戦希望により連合国の一員として参戦。

参戦に合わせて、天照、八咫鳥の二隻を欧州に派遣。須佐之男は太平洋上のドイツ領各諸島制圧と本国防衛のために日本周辺に待機した。

欧州に派遣された二隻の巨大艦は、ドイツら中央同盟国からとても恐れられた。特に、一番艦天照はユトランド沖海戦に参加しドイツ主力艦の大半を撃沈。連合国からはグレートガーディアン（偉大な守護者）、中央同盟からはリバイアサンと呼ばれた。

連合国の勝利に終わった大戦後の1922年ワシントン海軍軍縮条約において、天照ら三隻は解体の危機に瀕したが日本代表の譲らない態度を示し、三隻は特例として保有を許可された。

1925年から、1935年までの間に三隻は近代化改修を受けた。

天照型からのリバースエンジニアリングによって日本は、わずかな時間で急成長し世界有数の大国となった。急激な発展と同時に民主化が進行し、1937年憲法改正により天皇主権の大日本帝国から、

国民主権の日本国へと変化した。そして、米国、英国、仏国との関係改善を行った。

1939年の第二次世界大戦開戦に伴い、日本国は、天照を旗艦とする欧州救援艦隊を派遣。連合国は「グレートガーディアン」の派遣を国を挙げて喜び、ドイツはかつて、当時世界最高クラスの自国の海軍の主力艦を無傷で撃破した「リバイアサン」の再来に酷くおびえ、バルト海から出てこなかった。連合国は「50年先の技術をもつ」とまて言われる、日本製の戦車やジェット戦闘機に支えられドイツ軍を次々撃破し、ドイツ優勢だった戦局を一気に打開することに成功する。

1942年、史実より3年早くドイツが降伏し戦争は終結した。

米国、英国、仏国を抑え名実ともに世界最強の国になった日本は、1945年から、2010年代までの間世界各国の安定化と発展のために尽力をすることになる。この間、天照ら三隻は、近代化改修を受けつつ交代で日本国艦隊総旗艦を務めシーレーンの安定に貢献した。そして、2017年日本国は異世界に召喚されることになる。

日本国領土と人口

転移した時点の総人口は二億一千万。

史実の領土に加えて、台湾と千島列島、樺太を領土に持つ。

1950年までは、朝鮮半島、満州、南洋諸島も領土の一部だったが日本国による世界平和政策の一環として日本国からの独立選挙が行われそれぞれ独立した。（台湾も選挙が行われたが、結果は日本国に残留することになった）

政治について

平和を愛する自由平等主義。

だが、この国の政治を他国から見た場合、「握手には、握手を。話し合いには、話し合いを。暴力には、暴力を」である。そのため、地球では各国は日本に対してかなり慎重に対応をしていた。

同盟関係

日米英仏4カ国同盟や 環太平洋平和条約をはじめとして各国と

様々な同盟や条約を結んでいる。

その多くが、平和や世界の安定化につながるものである。

軍事について

1937年の憲法改正に伴い、大日本帝国陸軍、大日本帝国海軍から、日本国陸上防衛軍、日本国海上防衛軍に改名した。1950年に航空防衛軍が発足する。各種、軍事兵器は天照型からのリバースエンジンアリングによって史実より大きく発展、強化されている。

その他

天照型からのリバースエンジンは、民間にも大きく影響している。

一例として、この日本では初の人工衛星が1944年に打ち上げが行われた。

ワープロが1945年に、企業用コンピューターが1946年に。携帯電話、家庭用コンピューターが1955年から販売されている。

インターネットや各種通信網も1955年に提供が始まっている。また、新幹線が1959年にリニア新幹線が2000年に全線開通している。

天照型超巨大戦略戦艦について

全長 1200M

全幅 180M

常備排水量5579820トン

主機関 アマテラス型縮退炉（型式、正式機関名、最大出力不明）

補助機関 アマテラス型対消滅核融合炉（対消滅機関と核融合炉の

ハイブリット、型式、正式機関名、最大出力不明）

通常推進機 量子推進器 8基

高速航行用推進器 グラビティブースター 4基

速力 120ノット（推定）

巡行速度 40ノット（推定）

乗員 1500名

兵装 80cm三連装砲 6基

100 cm超電磁砲 4基
30 cm連装リニアガトリング砲 8基
陽電子誘導光線砲 2基
20 cm中性子ホーミングレーザー砲 4基
280 mm AGS三連装砲 16基
艦首マルチランチャー 8基
舷側マルチランチャー 10基（両舷20基）
艦尾マルチランチャー 6基
VLS 400セル
12.7 cm三連装パルスレーザー砲 200基
35 mm近接防御火器 100基
光子榴弾砲 4基
反物質連装砲 4基
格納型量子波動砲 1基

艦載機 Type-AF01 10機

同型艦 SBBA-01 天照

SBBA-02 須佐之男

SBBA-03 八咫鳥

日本大躍進の原点にして、日本平和の象徴。

1912年に硫黄島沖にて発見された超巨大艦で、無制限に弾薬を補充する無限装填装置やあらゆる攻撃を防ぐエネルギー吸収バリアなど一世紀たった今も解明されていない多くの技術が使われている。一隻で大国を滅ぼすことができる。とまで言われている艦で、対艦、対空、対地、対潜まであらゆる戦闘を行うことができる。見た目は、大和型に酷似した艦橋をもつ鋼鉄の咆哮のヴォルケンクラッツァー。

建造時の姿や建造した組織は不明。

古代の超文明の遺物、未来から来た戦闘艦、異世界からの漂流物などその出自については様々な説がある。

Type-AF01（旧名、天照型艦上噴進機）について
全長15m

翼長 14 m

エンジン AFJ E-01 核融合炉

最高速度 6000 km

最高高度 20000 m

武装 20 mm パルスレーザー 6 門

空対空ミサイル AFM-01 8 発

空対艦ミサイル AFM?02 4 発

天照型の格納庫に格納されていたVTOL型UAV。外見はエースコンバットのADF-11の形をしている。

天照型と同じく、対艦から対空、対潜に索敵まで行うことができる。

1954年から、リバースエンジンリングによって開発されたUAVFシリーズが兄弟機として存在している。

ただし、UAVFシリーズ最新型でもオリジナルの70%ほどの性能しかない。

有人型のVTOLFシリーズも存在している。

クワ・トイネ公国編? 1

雲一つない快晴の空の下、クワ・トイネ公国軍第六飛竜隊に所属する竜騎士マールパティマは、ワイバーンに跨り公国北東方面の警戒任務に就いていた。

公国の北東方向は、海ばかりが広がり陸地の類は存在しない。

この哨戒任務はクワ・トイネ公国の隣国であり、人族至上主義を掲げるロウリア王国と緊張状態が続いているため、軍船による迂回、奇襲攻撃に備え見つけた場合即座に祖国防衛に対応するためである。他にも、小さな懸念事項があった。それは、一週間前に何も無いはずの北東方向から、強い発光現象が発生したことである。何かしらの事案が北東方向から発生する可能性があるため、彼は相棒を公国の北東の空に飛ばしていた。

一瞬、空のかなたに何かが光った。

「!?!、なんだ! あれは」

自分以外いないはずの空に、何かがいる。

それは、あつという間に点となり影となった。それは、ワイバーンより大きく、速く、そして飛ばたいいかなかった。味方の騎でないのは、明らかだった。

彼はすぐに、通信用魔法魔法具を用いて本部に報告を入れる。

「我、未確認騎を確認。これより、対象に接触し確認を・・・!?!」

その先は、言えなかった。なぜなら、その所属不明機はすでに轟音を立ててマールパティマの真横を通り過ぎていたからだ。

その物体は、灰色の体色をしていて飛ばたいいない翼の先端や胴体の一部が緑や赤色に点滅していた。

彼は、あわてて振り向くと未確認騎はすでに空のかなたへと消え去っていた。信じられないことに不明騎はワイバーンの数倍以上の速度で、飛んで行ったのだ。翼も飛ばたかせずに。

「司令部、未確認騎は信じられないような速度でマイハーク方向に進行した。繰り返す、マイハーク方向に進行した。」

この報告を受けて、マイハークの司令部は蜂の巣をつついたように

上に下へと大騒ぎとなっていた。

マールパティマは、公国一の目の良さを誇る。そんな彼が発見してから、報告している間に不明騎は通り過ぎたのだ。つまり、不明騎が常識外れの速さでここ、マイハークに接近しているのだ。

クワ・トイネ有数の経済都市マイハークが攻撃を受けたら、そこそ軍の威信にかかわる。

通信魔法で、待機していた飛竜隊に

「未確認騎が一騎、マイハークに急速接近中。領空に侵入した不明騎を発見次第撃墜せよ。繰り返す、発見次第撃墜せよ。」

と、指令を出した。

地上待機をしていた10騎と上空哨戒をしていた8騎、合計18騎が不明騎を待ち構えていた。

幸運なことに彼ら飛竜隊は、不明騎に正対することができた。報告によれば、不明騎はワイバーン以上の高速でこちらに接近しているという。ならば、攻撃チャンスは通り過ぎる一瞬、一度しかない。

彼らは、人生で最も集中をし火炎弾の発射タイミングを見計らったが、未確認騎が見えたと思った時にはすでに横を通り過ぎ、振り返ればマイハークの上空に到達していた。

「未確認騎、発見するも攻撃できず。繰り返す、攻撃できず」

マイハーク防衛騎士団団長イーラは、慎重にその物体に近づいて行った。

飛竜隊の防衛網を楽々と突破し、まるで雷のような速度でマイハーク上空を通り過ぎて行った不明騎は南門から500mのところ、何かを投下して飛び去って行った。近づいてみると、それは長さ1m、直径50cm程の筒状の形をしていた。筒は上部が開閉するようになっていて、内部に何かが入っていた。

その何かを筒の外に出そうとしたとき、彼女は何かを押し出した気がした。

「皆様、初めまして。我々は日本国です。まずは、貴国の——」

クワトイネ公国 政治部会

「これが、マイハークに侵入した不明騎の落としていったものですか」

クワトイネ公国首相カナタは、目の前にある物体と書類を見ながらつぶやく。昨日、マイハーク上空に不明騎が侵入し目の前にあるものを入れた金属製の筒を投下し去っていったことを、クワトイネ防衛、軍備をつかさどる軍務局から報告を受けた。不明騎が落としていったもののうち、書類のほうは未知の文字で書かれていて何が書いてあるか分からなかったが、もう一つの音声の出る薄い箱状の物体から出る音声はこの国で、一般的に使われている言語だったので、理解することができた。

記録されていた音声を要約すると、

*不明騎は日本国という国家に所属するものである。

*領空侵犯してしまったことに対する謝罪

*日本国に関する簡単な説明

*日本国が別世界から転移してきたこと

*日本国が我が国との同盟を望んでいること

*同盟締結の為に外交官を乗せた艦隊を派遣していること
などであった。

「皆の者、この一件。どう思う、そしてどう対処する」

情報分析部所属の一人が手を上げ、発言する。

「情報分析部の調査によれば、今回の所属不明騎は列強第二位のムーが開発している飛行機械に酷似しています。ですが、ムーの開発している飛行機械は最高速度が350 km/hほどであそこまでの速度で飛行できる飛行機械は存在していません。また、音声の出る物体についても、ムーが開発した蓄音機という機械がありますがここまで小型の蓄音機はムーにも存在していないと思います。」
「まったく、未知の。しかも、下手をしたら列強国を上回る技術を持っている国ということか。」

出席者は全員、頭を抱える。相手は自分たちでは足元にも及ばない列強国並みの実力を持つ国にかもしれないのだ。ただ、音声上だけとはいえ、領空侵犯を謝罪し、我が国と対等な同盟を望んでいる謎の国、日本国。

どのように対応すべきか悩んでいる政治部会に、突然外交部の若い

外交官が、息を切らして、飛び込んできた。明らかに、非常事態だ。「何事か!!」

外交部の長である外務卿が声を張り上げる。

「報告します！公国北海上にて、二ホン国を名乗る大船団が現れました！二ホン国は、我が国との会談を強く望んでいます！」

報告を要約すると

*本日早朝、第二艦隊が350mクラスの艦艇二隻を含む船団を発見。

*臨検を行ったところ、日本国と名乗った。

*我が国に対して、敵意はない。

*我が国との同盟関係構築のための会談を望んでいる。

*そして、領空侵犯に対してあらためて、深く謝罪をする。

この報告に、政治部会に参加する誰もが、カナタの手元にある小さく薄い蓄音機と読解不明の文字が書かれた書類を見る。記録されていた音声通りだった。一部の人々は信じられなかったが、昨日、あっさりと都市上空に侵入されたことや、350mという考えられないほどの巨大船の報告もある。

日本国の実力は本物である。

クワトイネ公国首相カナタは、日本国の特使に合うことを決断した。

クワ・トイネ公国編―2

クワ・トイネ公国海軍第二艦隊と日本国派遣艦隊の会合から、2日後。

クワ・トイネ公国有数の港であるマイハーク港は、いつも以上に大きくにぎわっていた。

理由は、マイハーク港沖に見たことのないほど大きな艦が停泊しているからだ。

「船長、見てください。あの人ばかりを。まるで、10年前のムーのグランドフリート来航の時のようですよ!」

「ああ、まったくだ。しかし・・・」

日本国派遣艦隊と最初に接触した軍船ピーマの船長ミドリは、港湾施設に鈴なりにいる見物客から沖に停泊する日本国艦隊の中で最も大きい平べったい艦へと視線を移動する。

CVT-03 いざなみ

たけみかずち型核融合炉搭載型空母の3番艦で、この派遣艦隊の旗艦を務めている空母である。

ミドリは、初めてこの艦を見たとき城が海に浮かんでいるのかと、感じてしまうほどだった。

そして、臨検の為乗船したときその甲板の広さに衝撃を受け絶句した。騎馬訓練ができてしまうと。

その後のことは、あまり覚えていない。本国にこのことを連絡したり、日本艦隊をマイハーク港に誘導したりと、大忙しであったからだ。しかし、彼はこの2日間で確信したことがあった。それは、日本国との出会いは確実にクワ・トイネ公国を大きく変えていくことになる、ということだった。

日本 東京都千代田区 首相官邸

「総理、派遣艦隊からの定時連絡です。クワ・トイネ公国の公都クワトイネにて、会談が始まったとのことです」

防衛大臣 巖田 虎からの報告に、日本総理 武田 実成ら日本の政治を司る武田内閣の面々は肩の荷が少しばかり軽くなったことを、

感じた。地球なら、国際法違反ともいえる行動は良い方向に進んだよ
うだ。

武田は、短くだが人生で最も濃い一週間を、目を閉じふりかえる。
一週間前

国土が、別の世界に転移する。常識的に考えてあり得ない、物語上
の存在といえる空前絶後の現象が発生したとき武田は、日々の激務を
こなし終え寝床に身を横にしようとしていた。世界最強の国の長と
しての重圧は、自分の考えや発言、行動で簡単に世界が変わってしま
うという事実は大きなストレスとなっていた。

彼は目を閉じ疲れを癒すことにした。

「・・・!? な、なんだ？」

突然、窓の外が真昼のごとく明るくなり、夜中の1時だというのに
青空が見えた。

この不思議な現象は、約10秒間ほど続き、元に戻っていった。

「いったい、なんだったのだ・・・？」

彼は、今まで感じたことのないような不安感を感じた。

そんな、武田の不安感をさらに騒ぎ立てるかのようになり、携帯電話か
ら特徴的なアラームが鳴る。

東日本大震災にいやというほど聞いた、緊急地震速報の音だった。

「地震か!!」

武田はすぐに、付近に落下物がないか見渡した。

そのとき既に、最大に慌てふためく所もあった。

ここはそのうちのひとつ、気象庁。

「な、なんなんだ！これは・・・！」

通常、地震の震源は一か所だけのはずなのだが職員の前に置かれた
パソコンの画面に表示された計測された震源地が可視化できるシス
テムには、日本領の周りを囲むように八か所の震源地が示されてい
た。

信じられないことが二つある。一つ目はコンピューターが推定し
たマグニチュードは1.2という、地球上ではありえない数字が示され
ていたこと。二つ目は震度四の地震波が一切減衰することなく内陸

に駆け抜けていることである。

通常では、決してありえないこと。それが、現実で起きている。その事実には、気象庁職員は、ただただ呆然としていた。

「震源はどこだ!!」

血相を変え、彼の上司が飛び込んできたあと、パソコンの画面に表示されたデータを見て、余りに現実離れした数字に思わず叫ぶ。

「マグニチュード1.2だ!!そんなばかな!!」

前例のない事象に若い職員と同じように呆然とするが、すぐに我に返り

「今すぐ、各機器を再点検。データの再取得、再確認をしろ!」

と、指示をだした。

そこに、さらに悪い知らせが入ってきた。

「大変です!全気象衛星と通信が途絶しました。衛星をロスト!」

「なに、通信機器の故障?こんな時に!!」

気象庁職員は、前例のない事例に、記者会見の準備に追われる。

気象庁が混乱のさなかにあるころ、それ以上に混乱していたのが防衛庁だった。

「偵察衛星しらさぎ、おおとり、かわせみ通信途絶!全通信衛星ロストしました!」

「もう一度確認しろ!JAXSにも確認作業の協力を上げ!」

謎の発光現象と地震の後、偵察衛星や日米英仏軍事ネットワークが突然接続できなくなってしまった。

強力なEMP攻撃を受けたか、衛星を撃墜されたか、あるいは……。

防衛大臣 厳田 虎は、様々な可能性を思考していた。

世界一の技術を持つ、我が国日本がこのようなことになるのは、今までとても考えられなかった。

そんななか、一つの通信が飛び込んでくる。

「厳田大臣。第一護衛艦隊旗艦天照から、大臣あてに第一級緊急通信です!」

「なに?わかった、すぐに繋いでくれ!」

国家存亡の危機の時のみ、使用される最優先通信。しかも、それが日本が世界に誇る超巨大艦天照から発信されたこともあって、巖田は心にとつもない不安を抱えることになったが、それを表情に出さずに天照からの通信に応じる。

「私だ、一体何があったのかね。手短に頼むよ、倉田艦長。」

「はっ、天照のメインコンピューターがレーダーや各種センサーの情報をもとに現在の状況を分析したところ、ここは地球ではないとの結論が出ました」

「・・・はっ？つまり、いや、まさか・・・」

「端的に申し上げるのならば・・・。信じられないことですが、我が国が地球以外のどこかに転移したということですよ」

少し、時間は遡り謎の発光現象が発生する前

四国から100kmの沖合を航行している艦隊が、存在していた。300m越えの艦が多数いる中で、ひととき大きく存在感を放っている巨大艦がいた。

天照型超巨大戦略戦艦一番艦天照。一世紀前に、突然出現し強力無慈悲な戦闘能力と、未だに解析されつくされていない様々な技術によって、日本を世界一の強国にのし上げた戦艦である。

この艦隊の旗艦を預かる戦艦の艦橋に、この艦の艦長 倉田 昇がいた。彼は、とても優秀な人物であったからこそ、世界に三隻しか存在しない天照型の艦長に35歳という若さで就任することができた。

倉田の、父そして祖父もこの巨大戦艦の乗組員だった。倉田自身も、天照型に憧れ努力してきた。

努力してきた結果、最年少で艦長に任命された。頑張りすぎたなと、倉田は回想する。

「どうだ、倉田艦長。異常はないかね。」

「はっ、佐々木司令。全艦異常はありません。すべて、順調です。」

「うむ、それは良いことだ。ところで、このじゃじゃ馬の指揮には慣れたかね。」

「いえ、ですが我が国の象徴的な戦艦である天照がここまで繊細な艦

だとは思っていませんでした。」

「私も、最初に乗艦したときはとても驚いたさ。下手に扱おうとすぐに、へそを曲げる。だが、いざというときは、我々の理解を超えた力を発揮する。まるで、我々人間と同じ魂を持っていると感じるほどだ。」

「司令、持論を展開されるのは結構なのですが、この艦がデレて調子が狂ったらどうするのですか。」

「この程度で……。」

その時、けたたましい警報が艦に鳴り響いた。

「なんだ！ いったい何が起きた!!」

「それが、天照のメインコンピュータが突然見たことのない警告を、表示しているのです!!」

「急いで、解析しろ！ それと、総員起こし。第一種戦闘配置につけ!!」

天照の熟練兵たちが、各自の配置場所に素早く移動している間に、CICの情報分析担当官が、素早くキーボードをたたき、解析を進めていく。わずか、一分余りで出された。

その内容は、

「巨大ナ次元振動発生。対ショック姿勢ヲトラレタシ。到達マデ、アト十秒。」

だった。彼は、大慌てでこのことを報告した。

この報告を受け、倉田はすぐに行動を起こした。

「全艦、対ショック姿勢をとれ！ でかいのが来るぞ！」

この命令を出した直後、今まで経験したことのないほどの衝撃が天照を襲った。窓の外は、強烈な光に包まれていた。この時、天照が所属する第一護衛艦隊は偶然にも日本を囲むように発生した震源地の真上にいたのだ。そのため、日本で最も早くこの異常現象に遭遇することになった。

約30秒後、すべての現象が収まり海は元通りに戻った。

「各部署、被害状況知らせ。」

「船体異常なし。」

「各兵装、問題なし。」

「防御システム、正常に稼働。」

「レーダー及び各種センサー問題ありません。」

僚艦からも、問題なしの報告が上がり一息つく、倉田と佐々木。だが……。

「艦長！軍事衛星とコンタクトが取れません！完全にロスト！」

「4カ国軍事ネットワークにもアクセスできません！」

「自動航法衛星、通信途絶しました！GPS衛星も応答しません！」

「何、そんな馬鹿な！情報分析担当官すぐに、原因を調査しろ！」

倉田が、通信網の大規模ダウンに対応している間に佐々木は、このことについて考察する。

（おかしい、民間用衛星はともかく軍事衛星までダメになるとは。あの現象が起きてから、すべて一度に故障するとはとても思えない。まるで、全てなくなってしまったような気が……!?!）

「倉田艦長！天照の全てのセンサーを最大出力で使用。効果範囲の全てを探知しろ！」

「？はっ！全センサー、最大出力で使用。しかし、司令なぜそのようなご命令を？」

「いや、私の中にある疑問を確かめなくなったからだよ。」

倉田は、自分の上官の疑問が理解できなかったが、情報分析官の報告に自分の耳を疑うことになる。

「艦長！解析したところ、宇宙空間の全ての人工物体が確認できません!!恒星の位置も今までのものとは、全く違います！」

「馬鹿な！そんなことが起きるとは。一体どうなっているのだ。」

この報告は、佐々木の疑問を確証に変えた。

「倉田艦長、衛星が突然消えたわけではない。我々が、地球から消えてしまったのだ。」

日本転移から、一時間後

総理官邸では緊急閣僚会議が、行われていた。

「我が国が、地球以外の別世界に転移したのだと！そんなことがあり得るか！」

「しかし、天照型各艦からの報告のほか、JAXSからも同様の報告が上がっています。これは事実なのです。」

会議は、大荒れだった。だが、時間が経つうちに具体的な意見や報告が出るようになる。

意見の幾つかをあげると

* 日本周辺の偵察

* 周辺国との国交確立

* 農業プラントの全力稼働による食料の確保

* 国民への公表

などである。

会議は、国家防衛の話題になる。

日本は、1990年頃の冷戦終結に伴い、軍事力の一部をモスボール処理を行って保管した。

それらの、現役復帰が題材である。護衛艦は、シーレーンの安全確保のために復帰がすぐに決まったが問題は、戦艦や空母などの大型艦である。

対象になるのは、きい型原子力戦艦6隻、とさ型核融合炉搭載型戦艦4隻、ひりゅう型原子力空母10隻である。

この意見は、厳田 防衛大臣から意見が出された。武田総理や半数の閣僚は、この意見に賛成だったが財務大臣ら一部は、反対した。今のままでも十分だと考えていたのだ。

現在の大型艦は、天照型超巨大戦略戦艦3隻、ふそう型核融合炉搭載型戦艦10隻、大和型戦艦2隻、たけみかずち型核融合炉搭載型空母10隻、ひりゅう型原子力空母4隻である。これで、十分であると。

しかし、厳田は強くモスボール大型艦の現役復帰を唱えた。

理由は、

* 現在の戦力は米英仏の三か国との連携があったからこそである。

* 周辺国の政治体制が分かっているため、突然宣戦布告される可能性がある。

* 戦力を持ち、それを示すことで日本の国力をこの世界に示す必要がある。

などである。

最終的に、とさ型4隻、ひりゅう型6隻の即時現役復帰。その他、艦

艇はすぐに復帰工事が始められるように、予備工事を行うことに決定した。

このとき、日本にとって幸運なことは、天照型が全艦そろっていたことである。と言うのも、一番艦天照はつい先月まで欧州に派遣されていたのである。もし、転移が一月早かったら天照は、地球に取り残されていたかもしれない。

ともかくも、日本国はこの世界の偵察を各護衛艦隊に命令。

転移の翌日には、陸地と複数の都市を確認。

2日間の調査ののち、この国家が地球の中世時代レベルであることと、農業国家であると断定。

外交官朝田 泰司ら外交特使を乗せた、空母いざなみを旗艦とする派遣艦隊を出撃させた。

クワトイネ公国を騒がせた、所属不明騎はいざなみから発進したUAVF-11であった。

クワ・トイネ公国 公都クワ・トイネ 首相官邸

首相カナタは、これから顔合わせをする異国の外交官との会談に、応接室の前で緊張していた。

見たことのない飛行機械なる鉄竜や、要塞のような巨大艦を運用する国、日本。

本来ならば、初めての会談で首相である自分がするのはこの国の外交の順序とは違うが、現在クワトイネ公国は人間至上主義のロウリア王国との緊張状態が続いており、準有事体制のこの状況下においても、力を持つ国と友好関係を保ちたいという本音がある。

出来れば、日本国のあの超技術を、少しでも手に入れたい。

意を決して、日本国の外交官のいる応接室に入る。

カナタがドアを開くと、席に座っていた彼等は、席を立って礼をした。

「初めまして、カナタ首相。私は、日本外務局の朝田です。お会いできて、とても光栄です。」

日本の使者は、朝田のほか二人ほど随伴している。

「ええ、朝田殿。よろしくお願ひします。」

ここに、日本、クワ・トイネ両国の行く末を決めることになる「第一回日桑会談」が始まった。

「この会談の司会を務めるクワトイネ外務局のリンスイです。よろしくお願いします。早速ですが、日本国の皆様、今回の我が国への来航の理由をお聞かせ願いたい。」

「わかりました。まずは、我が国についての資料を配布させていただきます。」

そういうと、日本外交官の一人は日本についての資料を配布する。だが、

「……？すみませんが、朝田殿。これは、我々は読めませんですぞ。」

「なんと、流暢な日本語を話されるので読めるものだと思っていました。が。」

「我々からは、あなた方は大陸共通語を話しているように聞こえていますぞ。」

朝田とリンスイが、そのことに驚く傍らでカナタはこの文字が謎の鉄竜から落とされた筒の中の文章と同じ言語であることに気づく。

「このようなことが起きるとは、不思議なものですね……。では口頭で説明させていただきます。我が国、日本はこの国から北東に約1000 km付近に存在する国です。ところで、単位はお分かりになりますか？」

「ああ、大丈夫ですぞ、朝田殿。しかし、その付近には国は疎か、島もなかったはずだが……。」

「はい、我が国はこの世界とは違う「地球」という世界から転移してきたと我々は考えております。」

「馬鹿な、国が転移してくるとはとても考えられない。どれほどの魔力が必要になるか。あなた方は、ほら話を吹いているのではないのですか？」

「国ごと、転移するという事態に我々も理解できていません。我々もそのようなことを言われては、とても信じられるものではありません。そこで、お互いをよく知るために使節団の派遣を提案します。貴国の人間が直接見てきたことなら、貴国も信じることができるでしょ

う。」

「しかし……。」

「使節の派遣、私は賛成です。」

「カナタ首相!？」

リンスイが使節の派遣という提案に、悩んでいるのを見かねてカナタが割って入った。

「卿の悩みもわかる。だが、あの鉄竜や巨大船を見ただろう。彼らの実力は確かだ。もしかすると、列強以上かもしれない。それに、日本の方々には礼節を弁えていらつしやる。条件次第では、国交を結ぶことを前提に付き合ってもよいと、私は考えている。」

そして、朝田ら日本外交官に向き直り。

「二ホン国の方々よ。我が国に何を望む。まさか、観光に来たわけではあるまい。」

一瞬の沈黙ののち、朝田は口を開く。

「我が国は、貴国に対して第一に食料、その次に資源を。最後に貴国を紹介しての他国との会談、これを望んでいます。また、この世界のことについて可能な限り教えていただきたい。その対価として、我が国は貴国に、我が国が持つ技術の一部と防衛力を提供します。」

「な、なんですと!？」

その提案に、クワトイネ側は息をのむ。食料については、家畜でさえうまい飯が食えるほど豊富にとれる。二つ目と三つめも、隣国であるクイラ王国を紹介すれば解決するだろう。これらを、解決すればあの巨大船を建造できる技術力を一端とはいえ、手に入れることができるうえ、その技術力をもとにした巨大な戦力が、味方となる。ロウリア王国と緊張状態にある、クワトイネ公国としてはとてつもない好条件。逃すわけにはいかない。

「わかりました。リンスイ、可能な限り使節団の準備をしてください。大使には、ある程度権限を持たせて、派遣してください。」

「承知しました。」

クワ・トイネ公国は、日本国に使節を派遣することを決定した。

設定（海軍） 1

日本の戦艦

大和型戦艦

全長 263 m

全幅 38.9 m

喫水 10.58 m

排水量 72809 トン

機関 ガスタービンエンジン（皇紀九〇式ガスタービン、出力合計
20万馬力）

最大速度 30ノット

巡航速度 18ノット

航続距離 7500海里

乗員 1000名（最終時）

兵装（最終時）

46 cm三連装砲 3基

15 cm三連装砲 2基

12.7 cm単装速射砲 8基

35 mm近接防御火器 40基

VLS 64セル

艦載機 UAVF-8 4機（最終時）

同型艦 BBN-001 大和

BBN-002 武蔵

BBN-003 信濃

BBN-004 肥前

日本が、世界で初めて建造したガスタービンを主機関とする戦艦。
30ノットの高速性、46 cm砲の火力、高い対空戦闘能力を備えた新
世代高速戦艦の先駆けとなった。

史実より早い、1930年に一番艦大和の建造が呉で始まった。

第二次世界大戦では、就役していた大和、武蔵が欧州に派遣されそ

の火力で上陸作戦成功に大きく寄与した。

後継艦の登場で1970年に一端退役するが、1980年に米ソ間の冷戦が激化したことに伴って、近代化改修を受けて現役に復帰した。

大和、武蔵は1992年に、南シナ海の原油をめぐる発生した南シナ戦争に参加したのを最後に、退役し大和は呉、武蔵は長崎に博物館船として保存、公開されることになった。残る信濃、肥前は1995年から砲撃練習艦として活動している。

きい型原子力戦艦

全長 320 m

全幅 42.3 m

喫水 11.8 m

排水量 104500トン

機関 原子炉 (皇紀零式艦船用原子炉、出力25万馬力)

推進器 タービン

最大速度 33ノット

巡航速度 18ノット

乗員 1200名(最終時)

兵装 (最終時)

51 cm三連装砲 3基

20 cm三連装砲 2基

12.7 cm単装速射砲 12基

20 mm三連装パルスレーザ砲 10基

35 mm近接防御火器 36基

VLS 64セル

艦載機 UAV-9 6機(最終時)

同型艦 BBK-001 きい

BBK-002 おわり

BBK-003 えぞ

BBK-004 みかわ

BBK-005 はりま

B B K | 0 0 6 みの

金剛型や扶桑型、伊勢型の老朽化に伴う代替艦として建造した史上初の原子力戦艦。大和型を上回る51cm砲の搭載や速力の向上など、世界に名を轟かせた。

海軍の命名規則変更の影響で、艦名はひらがな表記になっている。

一番艦 きは1940年に建造開始。そのため、第二次世界大戦には参加していない。本来10隻の建造予定だったが、新型核融合炉の完成で後期4艦は、とさ型となった。

1980年代に、大規模近代化改修を実施した本級は南シナ戦争に従事した後、2000年から、順次予備役になっていった。

とさ型核融合炉搭載型戦艦

全長 320 m

全幅 42.3 m

喫水 11.8 m

排水量 112400トン

機関 核融合炉（核融合炉一型、出力27万馬力）

推進器 タービン

最大速度 33ノット

巡航速度 18ノット

乗員 1200名（最終時）

兵装 （最終時）

51cm三連装砲 3基

20cm三連装砲 2基

12.7cm単装速射砲 12基

20mm三連装パルスレーザー砲 20基

35mm近接防御火器 26基

VLS 64セル

艦載機 UAVF-9改 6機

同型艦 BBT-001 とさ

BBT-002 せつつ

BBT-003 おうみ

BBT-004 でわ

きい型原子力戦艦の7番艦から10番艦になる予定だったが、計画の途中で艦船用の核融合炉が完成したことで、設計変更を行い完成した戦艦。きい型との変更点は、機関の変更と一部兵装の変更である。これは変更時すでに主砲や副砲が既に完成していて、大きな変更ができなかったためである。

きい型と同じく1980年代に大規模改修を行い、日本の海防の重要な戦力として機能した。

2005年から、順次予備役に編入。とくに、4番艦では2013年まで現役だった。

ふそう型核融合炉搭載型戦艦

全長 390 m

全幅 45 m

喫水 12.6 m

排水量 217060トン

機関 核融合炉（核融合炉二型、出力35万馬力）

推進器 タービン

最大速度 33ノット

巡行速度 18ノット

乗員 1300名

兵装

61 cm三連装砲 4基

228 mm AGS三連装砲 8基

12.7 cm単装速射砲 14基

20 mm三連装パルスレーザー砲 30基

35 mm近接防御火器 30基

VLS 128セル

艦載機 UAV-11 6機

同型艦 BBH-001 ふそう

BBH-002 むつ

BBH-003 ながと

B B H | 0 0 4 やましろ
B B H | 0 0 5 ひゆうが
B B H | 0 0 6 いず
B B H | 0 0 7 さつま
B B H | 0 0 8 いずも
B B H | 0 0 9 えちご
B B H | 0 1 0 いせ

1965年から就役を始めた、世界で最後に建造された戦艦。

大きい型、とさ型より巨大な61cm砲を搭載した核融合炉搭載型戦艦として、1960年から建造が始まった。

本級の登場は国内外に大きな影響を与え、各国の巨大戦艦建造競争に終止符を打つことになった。

1992年の南シナ戦争に参戦したほか、2000年から2008年まで中東各国の要請により海賊対策艦隊の旗艦として7番艦さつまが活躍することになる。

日本国転移時、天照型以外唯一の全艦現役の戦艦として活動していた。

金剛型について

大きい型原子力戦艦の就役で、1940年に全艦退役になる予定だったが第二次世界大戦後の影響で欧州に派遣されることになった。高速性を持って通商破壊作戦に従事し、ドイツの補給網を破壊した。

戦争終結後、日英友好のあかしとして金剛が横須賀の三笠公園に博物館船として係留されることになった。他の三隻は、スクラップとして売却解体された。

扶桑型、伊勢型、長門型について

大きい型、とさ型の就役で扶桑型、伊勢型は1945年に退役。一番艦扶桑は、日本初の国産超弩級戦艦として、呉に保存されることになった。山城と、伊勢型の3隻はスクラップとして売却解体された。

長門型は1958年まで現役を務めた後、長門が下関港に保存された。陸奥はスクラップとして売却解体された。

日本の空母

ひりゅう型原子力空母

全長 330 m

全幅 76.83 m

喫水 11.3 m

排水量 102000トン

機関 原子炉 (皇紀零式艦船用原子炉、出力25万馬力)

推進器 タービン

最大速度 35ノット

巡航速度 18ノット

乗員 3000名

兵装 艦対空ミサイル発射機 2基

近接防御用ミサイル発射機 2基

35 mm近接防御火器 6基

艦載機 70機 (VTOL F-111 UAV F-111)

同型艦 CVH-001 ひりゅう

CVH-002 そうりゅう

CVH-003 かつらぎ

CVH-004 じゅんよう

CVH-005 ひよう

CVH-006 しんよう

CVH-007 りゅうほう

CVH-008 ずいほう

CVH-009 しょうかく

CVH-010 しょうほう

CVH-011 ずいかく

CVH-012 たいほう

CVH-013 ほうしょう

CVH-014 うんりゅう

世界初の原子力空母として建造された艦で、1940年から建造開始。史実の蒼龍型、飛竜型にあたる艦であるため最初はガスタービン機関駆動として計画されたものの、天照型からのリバースエンジニア

リング作業中に、偶然見つかった空母のデータをもとにして再設計された。外見は、ニミッツ級そっくりである。

最初は10隻の建造予定だったが、1955年に鳳翔、龍驤、赤城、加賀の代艦として4隻追加建造された。

現在は、たけみかずち級の就役に伴い予備役編入が進み、転移時は後期4隻が現役である。

たけみかずち型核融合炉搭載型空母

全長 360 m

全幅 76.83 m

喫水 12.6 m

排水量 125300トン

機関 核融合炉 (核融合炉四型、出力25万馬力)

推進器 タービン

最大速度 35ノット

巡航速度 18ノット

乗員 3000名

兵装 艦対空ミサイル発射機 4基

近接防御用ミサイル発射機 4基

35 mm近接防御火器 10基

艦載機 90機 (VTOL F-11 UAV F-11)

同型艦 CVT-001 たけみかずち

CVT-002 たけみなかた

CVT-003 いざなみ

CVT-004 はくりゆう

CVT-005 りゆうじょう

CVT-006 せいりゆう

CVT-007 ほうりゆう

CVT-008 はくほう

CVT-009 かいよう

CVT-010 たいよう

現在も建造中

建造から、半世紀たったひりゅう型の代艦として建造が開始された
新型核融合炉搭載型空母。

ひりゅう型を上回る性能に加え、天照型に匹敵する艦隊統制能力を
与えられた。

1990年から、建造が開始され日本の新たな戦力の要として活動
を開始した。

日本転移時、10隻が就役していた本級は現在も建造中である。

????
型戦艦

性能は機密により、すべて開示不能である。

1990年にたけみかずち型空母と同時に計画された幻の戦艦。

きい型の代艦であり、ふそう型を超えられと言われている。計画は途
中で、中止されたとされているが・・・？

クワ・トイネ公国編―3

クワ・トイネ公国 外務局

最初の日本とクワ・トイネの会談で派遣が決まった後、外務局に勤める職員たちは使節団の人員調整や特命大使の権限についての調整など、日本との国交開設に向けての準備に追われていた。

「ヤゴウーニホンとかいう新興国に使節団として行くらしいじゃないか。うらやましいよ、何しろあの巨大船を作ってしまう国だからな。俺も行ってみたいよ。」

同僚の一人が、話しかけてくる。使節団派遣は、別に珍しいことではない。この世界では、国王が変わると国名が変わる国が珍しくなく、中程度の国ではよくあることである。まれに、大国が分裂していくつも国になることだってある。

ただ、そういった国々は、政治体制の変更で大きな混乱が起こっていることが多い。つまり、治安が悪いのだ。そういった場所に向かう使節団に被害者が出ることも珍しくない。なので、誰もやりたがらない仕事なのだ。また、衛生環境や食糧事情なども不人気なことを後押ししていた。

ただ、今回は違う。皆々、とても気になっていた国への派遣なのだ。ヤゴウが目を通した資料によると、使節団が派遣される国は日本国というらしい。初めて見たときは、目を疑い何度も見直した。ワイバーンが全く追いつけない鉄竜、手の中に納まるほど小さな蓄音機、350mという城のような、帆をはずずに航行する巨大船。

「信じられないな……。」

ヤゴウは、思考を巡らす。

もし、これらがすべて事実ならばとてつもない技術を持っていることになる。羽ばたかずに飛ぶ飛行物体といえは列強一位のミリシアルか、同じく列強二位のムーしか持っていないものだ。蓄音機もまた、数年前にムーによって開発されたばかりのものだ。帆をはずさず、航行できる船も列強二国しか持っていないものだ。

今、マイハーク港に入港している日本艦隊は、明らかにムーの、1

0年前に来航したムーのグランドフリートを構成していた「ソウコウ
ジュンヨウカン」という軍艦より大きく、洗練されている。

列強を超える国力を持つかもしれない国、日本。彼は、日本という
国に大きな興味を持ち始めていた。

(もしかしたら、私は歴史に大きく影響する人物になるかもしれない
な)

「皆、集まったな。これより事前会議を始める。」

不意に、彼の思考は号令によって、かき消された。

小さな会議室で行われているこの会議は、使節団として派遣される
外務局の5名と、軍務局の将軍ハンキの計6名である。軍務局の人間
がいる理由は、日本国の軍事力を見抜くためである。

この使節団の団長が説明を始める。

「今回の我々の一番の目的は、二ホン国がどのような国であるかを確
認し我が国とともに歩むことができるかどうかを、判断することであ
る。知つてのとおり、我が国の防空網が日本の鉄竜に、あつさり突
破された。今のところ、我が国にこれを防ぐすべはない。

二ホン国は、我が国に対し食料を要求し、我が国と国交を結びたい
との意思を示している。技術と防衛力を引き換えにだ。

ただ、どのような目的で我が国と国交を結ぼうとしているのか、真
意を調査する必要がある。」

皆が頷く。もし、覇権国家だったりしたら。もし、ロウリアのよう
な亜人に対して極端な差別意識をもっていたら。あの鉄竜や巨大船
を相手にしないといけなくなったら残念ながら、クワトイネに対応す
る力はない。だから皆、とても真剣である。

「二ホン国がどの程度の国なのかは不明だが、あの巨大船を見る限り
途轍もないほどの技術力を持っていると思われる。理解していると
は思うが、我が国の代表として毅然とした態度で接することも必要だ
が、相手を刺激しないように言動には十分配意すること。

出来るのならば、二ホン国に対して我々が優位に立てる部分を探し
てほしい。

それでは、皆配布した資料を見てほしい。」

新たに配布された資料に皆は目を通す。

説明が始まる。

「二ホン国側の説明によれば、今回は二ホン国側が、移動手段を提供してくれる。

出発は三日後の昼過ぎ、皆準備をしつかりしておくこと。

出発の二日後の夕方には二ホン国本土の西側に位置する「キユウシユウ」地方の都市「ナガサキ」市に上陸しそこで、三泊する。そこで二ホン国の安全に行動するための常識を教え込まれる。二ホン国の外務省によれば、二ホン国の常識を知らないといろいろと危険らしい。

上陸から五日後の昼12時くらいには、ナガサキ市を出発。リニアシンカンセンと呼ばれる交通手段で移動する。二ホン国首都トウキョウには、15時くらいには到着することだ。翌日日本政府との会談が行われる。」

・・・・・・？

おかしい、はつきりというなら時系列がおかしい。事前に目を通した資料によれば、日本の本土は我が国から、北東方向に約1000km以上の距離がある。船舶がたった二日で到着する距離ではない。さらに、ナガサキからトウキョウまでの距離も、1000kmを軽く超えている。それにもかかわらず、わずか三時間で到着するとは、一体どういうことだろうか。

マイハーク上空を、まるで雷のごとく飛び去って行った鉄竜ならば話は解るが、資料によれば、「リニアシンカンセン」という乗り物は、地上を走るものだということだ。

日本という国はどうやら、我々の基本常識が通用しない国のようだ。

会議は、終わった。

使節団の面々は、三日後の出発に備え荷造りを始めた。

三日後、マイハーク港

使節団の面々は、クワ・トイネ一番の港であるマイハーク港に集まっていた。

天気は快晴で、きれいな青空が広がり、少し涼しく心地よい。

そこに、一人のスーツを着た男性が来て、話し始める。

「お集りの使節団の皆様、私は皆様の今回の派遣を少しでも快適に過ごしていただくために派遣された、日本国外務省の田上です。何かご不便な点があれば、どうぞお申し付けください。」

日本とはどのような国なのか、大半の団員は期待を寄せていたがそんな中、一人だけ憂鬱な顔をした団員が一人いた。

「今から船旅か……。」

「ハンキ將軍、顔色が優れません、どうされましたか?」

「ヤゴウ殿か、いや、今から船旅だと思いと気が重くてな。船旅は良いものではないぞ。いつ転覆するかわからないし、船の中は暗く、湿気が多く、臭い。しかも、疫病にかかるものも出るし、食べ物、保存食の塩辛い肉や硬いパンしか食べられない。何よりも真水が、船の上ではとても貴重だ。」

今回は、船旅は短いと聞いているが、正直2日というのは短すぎる。外務局と二ホン国の間で、何らかのやり取りのミスがあつたとわしは思っているよ。

船としては、ありえない速度でいかないと無理じゃよ。」

「私も、時系列がいろいろとおかしいと思っています。ただ、鉄竜やあの巨大船を保有している二ホン国なのです。もしかすると我々の常識では図っていけないのかもしれませんが」

間もなく時間になる。

港から少し離れて停泊している、巨大な平べったい軍船の影から、それよりも巨大な白い船が現れる。

使節団全員に、大きな衝撃が走る。

でかい!しかも帆がない!!

極大に大きな白い船は、軍船の隣に停泊した。

田上が説明を始める。

「今回は、今到着した「飛鳥Ⅲ」に乗って、日本国に向かいます。本当は、この港に直接接岸したかったのですが、残念ながら港の水深が不足しているため、あそこに停船しました。皆様には、小舟に乗って

移っていただきます。」

やがて、飛鳥Ⅲという白い船から小舟が三隻現れ、これまた信じられない速度で港に向かって爆走してきた。その船にも、帆がなかった。

この巨大な白亜の船と爆走する小型船の登場は、使節団の面々のみならず、日本の派遣艦隊を見物しに来た野次馬にも大きな衝撃を与えた。

「……はっ！田上殿、田上殿」

余りの衝撃でフリーズしていた使節団のメンバーの内、いち早く現実に復帰したハンキが呼びかける。

「はい、何でしょうか？」

「以前から気になっていたのだが、貴国の軍船やあの白亜の船は、帆がないようだがどうやって動いているのじゃ？小舟に関してはまださか、第一文明圏の魔導動力船みたいなものか？」

「魔導動力船というのが、どのようなものか存じ上げませんが、皆さまが乗る船はディーゼル機関によって動いています。」

「でいーぜるきかん？」

「はい、いわゆるカラクリです。重油と呼ばれる液体を爆発させることによって、そのエネルギーを利用してスクリューと呼ばれる羽を回すことによって、推進しています。」

「うーむ、よくわからないがすごいもの。ん？我々の乗る船では？あの軍船は違うのか？」

ハンキは、田上の言葉に気づき、いぎなみを指さしそのことを聞く。

「ああ、いぎなみのことですね。あの艦は核融合炉という特殊なものを搭載しています。ディーゼル機関よりも強力なエネルギーを生み出すことができます。ただ、余りに特殊なので一部の軍艦にしか搭載されていません。」

「ふーむ、なるほどな。」

やがて、皆は小舟に分乗し、大型客船飛鳥Ⅲに向かった。

客船に乗船し、内部に入ると使節団は再び驚く。

明るい。光の妖精がいるのか、あるいは小さな太陽があるのだろうか

か。

「……この船、信じられんが鉄で出来ている、一体どうやって浮かんでいるのだ……。しかも中が明るく、広い。まるで宮殿だ。」
各々に割り当てられた部屋へ案内され、船と思えないほどの部屋に三度驚きつつも、一堂はくつろぎのひと時を過ごした。

その日のヤゴウの日記より

なんとという事だろうか、私は驚きを隠せない。ムーのグランドフリートを構成していたどの軍船より、大きい。二ホン国には、これよりも巨大な船が複数存在しているという。とても信じられない。

しかも、中はとても快適で明るく、温度が一定に保たれている。その快適さといえば、船旅を嫌っていたハンキ将軍が、テラスでカクテルという飲み物を楽しんでいたほどだ。

このような大きな船にも関わらず、海上を矢のような速度で進んでいく。

このようなものを作り出してしまう国、二ホン国とは、いったいどのような国なのか、とても楽しみである。

外務局の同期の中には、新興国の蛮国に違いない。あの大きな船は、どこからか奪ってきたのではないか、と言う者もいたが、いまのところ、言いたくはないし、認めたくないことだが、我々のほうが蛮族に映っているのではないだろうか。

もしかしたら、二ホン国は列強の、それも列強上位のミリシアルやムーに匹敵する力を持っているのかもしれない。

使節団を乗せた飛鳥Ⅲとそれを護衛する派遣艦隊は、順調に航行し長崎市に向かった。

二日後

「皆様、長崎市が見えてまいりました。長崎市は、九州地方有数の都市です。あそこに見えるが長崎港であり、長崎港からは、リムジンバスでホテルまで移動していただき、日本についての基礎知識を学んでいただきます。」

長崎港が見えてきた。自国最大のマイハーク港以上の港や長崎の街並みに使節団はとても驚く。

これで、地方都市なのかと。

「すごいな……。これで地方都市なのか。ん!? ハ、ハンキ將軍!! あれを見てください!」

「どうしました、ヤゴウ殿……。! な、なんだ、あれは!!」

ヤゴウが何かを見つけ、大きな声を上げそれを指さす。

ハンキもまた、指さした方向を見て驚く。

そこには、まるで城のような船が停泊していた。直前で別れた日本艦隊の巨大艦より、少し小さいがそれを感じないような威圧感があった。

「田上殿、あの巨大艦はいったいなんのですか?」

「あれは、戦艦武蔵です。いまから、80年前に建造された戦艦で長い間我が国の国防に、寄与しました。25年前に退役し、現在は建造されたこの長崎で博物館船として、保存、展示されています。」

その事実には、驚く。あの巨大な軍艦が80年も前に建造運用され、そしてすでに退役してしまったということに。これほどの力を持っていることに、日本に上陸する前に感じるようになった。

その後、船を降りリムジンバスに乗り、ホテルに移動する。

船の上で、田上から車と呼ばれるものが、内燃機関によって動いているということを知ることができた。道路を埋め尽くすほどの量があるとは、思っていなかった。

巨大な船、ワイバーンより早い鉄竜、天を衝くほどの高さの建造物など。

それらで理解する、日本の呆れるほどの豊かさを。

到着したホテルで、使節団は日本の基礎知識を学ぶ。具体的に言うと、信号システム、自動販売機、自動改札機に鉄道システムについて。それに、日本で犯罪になってしまうことを学んだ。

この国にあふれているものは、摩訶不思議なものばかりだが、すべて「科学」で構築されている。そして、仕組みさえ理解すれば、誰でも作ることができると言っている。

なるほど、信号と言うものがないと、あの車たちが好き勝手動いて、最終的に車は詰まって動かなくなってしまうだろう。と、ヤゴウは理

解し、このシステムを自国に導入できないかを真剣に考える。

ちなみに、ハンキ以下他の5名は、日本の技術に驚き疲れてしまっている。

「田上殿、田上殿。少し良いか？」

クワ・トイネのものは、比べることすらできないほど、座り心地の良い椅子に深く座ったハンキが話しかける。

「何でしょうか？ハンキ様。」

「このナガサキ市は、ずいぶん発展しているが、首都はもつと発展しているのかね？」

「はい、まず人口が比較になりません。なので、高層建築物もここより高いものが沢山あります。地下鉄も、網の目のように張り巡らせています。広い範囲で都心部が広がった結果ですね。ただ、街並みは地方都市のほうがきれいです。東京は、雑多な感じがすると、言われていますので。」

「うーむ、早く見てみたいですね。ああ、それと二ホン軍を見学することは可能かね。わしとしては、鉄竜とやらを見てみたいのだが。」

「防衛軍の見学ですね。分かりました、今確認を取りますね。」

田上が、すまーとふおんという光る板を取り出し、独り言を始める。通信用の道具だと聞いているが、あそこまで小さくできるものだろうか。

「ハンキ様、ちょうど明日から、海上防衛軍佐世保基地にて、基地祭が開催されます。一般市民向けの防衛軍と市民の交流会のようなものなのですが、それでよろしければ手配できますが。」

「おお、すまんおう。たのむ、たのむ。」

ハンキは、日本軍の見学の機会を得て、上機嫌だった。

「他に基地祭に行きたい方はおられますか？来賓席を手配しますが。」

「私も行きます。」

ヤゴウが手を上げ、田上がこのこととの連絡を取ったあとに、ハンキらは戦艦武蔵の見学を今日行いたいと、相談したが、

「戦艦の見学ですか、なら大丈夫ですよ。なぜなら、明日の基地祭には現役の戦艦が、公開される予定ですから。」

このことを聞き、ハンキとヤゴウは明日の基地祭に、期待を寄せた。
翌日

ハンキとヤゴウは、絶句していた。

(正直、高速道路で目を回しそうになったし、夜明け前に移動開始したから、眠かったがこれを見て眠気がぶっ飛んでしまったわい)

一般市民を軍事施設に入れて、軍と触れ合うなど、自分たちの常識では考えられなかったが、そのことが些細に感じられるほどの衝撃が、二人を襲った。

理由は、目の前に停泊している軍艦が、原因だった。

BBH-003 ながと

400m近い全長を持つ、文字ど通りの桁外れの巨大船だった。

「た、田上殿。この軍艦は一体何なのですか!？」

「この戦艦は、ふそう型三番艦ながとです。全長390mと日本の軍艦としては、二番目に大きく強力な戦艦です。御二人が見た、長崎で保存されている戦艦武蔵の代艦として建造された戦艦で現在も、重要な戦力として活動しています。」

「ち、ちなみに、二ホン国はこれを何隻保有しているのか？」

「ふそう型は10隻建造されて、全艦現役です。」

「10隻!!!」

この事実には、二人は驚愕し顔を見合わせる。このながと一隻だけで、クワトイネ海軍はおそらく蹂躪されるだろう。それが、10隻。途方もない、そして、圧倒的な実力の差。

二人はただただ、この国がとても平和的な国であることに、神に感謝した。

このあと、来賓席で鉄竜ことVTOLF-11のアクロバットパフォーマンスを見て驚き、その性能を聞いてまた大きな衝撃を受けることになった二人であった。

その日のハンキの日記より

街にあふれる建築物、高速道路という巨大な上空道路、そして鉄道と呼ばれる大規模流通システム。

これらの凄まじいまでの建造物やシステム群を作る二ホンという

国が恐ろしい。

しかも、ここナガサキ市は二ホン国の首都ではなく、一地方都市に過ぎないという事実。驚愕、いや言葉に言い表すことができない。

豊か過ぎる国二ホン、彼らはその強力な国力にふさわしい、凄まじいまでの軍事技術を有している。

二ホンは、島国の為海軍に力を入れている。今日見た軍艦ナガトは400m近い全長、20万トンを超える排水量、全てが規格外の存在だ。しかも、同型艦が10隻いるという。

鉄竜もすさまじい。マイハークに侵入したものと準同型機というそれは、音の速さの3倍の速さで飛ぶことができるという。行動可能半径は1000kmを優に超える、化け物、いや天空の覇者という名がふさわしいと感じる。彼らから見れば、我が国のワイバーンは、止まって見えるだろう。

案内役の田上に聴取したところ、鉄竜は海上攻撃や、陸上支援にも使用されるとのことだ。

彼らとは必ず友好関係を構築しなければならない。

彼らを、二ホン国を敵に回すということは、文明圏の列強国をすべて相手にすることより、恐ろしいことである。

彼らと敵対してはならない。絶対にだ。

ホテルの一室にて、

「なあ、ヤゴウ殿。」

「なんででしょうか。ハンキ殿。」

「貴公は、二ホン国をどう思う。」

「そうですね、一言で表すなら、豊かですね。我が国とは比較にならないほどに……。例えばホテルの中は、温度が一定に保たれている。これほどの建物を暖めるのに、どれほどのエネルギーがいるのか……。他にも捻るだけで、お湯が出る機械もある。トイレも非常に清潔に保たれている。

外に出ると、無人の自動販売機という販売機械があり、冷えた飲み物がいつでも手に入る。

夜間開いている店舗があり、いつでも上質な物が手に入る。

食品売り場では、常に新鮮な食料が手に入る。

夜も街灯によつてとても明るいので、街中なら松明やカンテラが無くても歩けるし、治安がとつともなく良い。

全ての生活レベルが、我が国と比べ、次元がまったく違う。悔しいが、我が国はこの国の足元にも及ばないと感じます。

そして、その国力に見合つた軍事力を持つ。

聞いた話では、我々を護衛していた平べつたい巨大艦は、航空母艦という、鉄竜を何十機も運用することが出来る軍艦だとのことでした。

圧倒的な力の差を見せつけられました。

二ホン国は、絶対に敵に回してはいけなと思います。

「やはり君も同じ思いか……。あの鉄竜の前には、今までのワイバーンの空中戦術は、役に立たないだろうと私も思う。いよいよ明日には二ホンの首都トウキョウに出発じゃな。まったく二ホンは心臓に悪いよ。」

「そうですか？ 私はとてもワクワクしていますよ。このような、夢物語に出てくるような国が突然現れ、しかも自分たち以外を蛮国と見下している文明圏の国々よりも高度な文明を持っている。そんな国が最初に接触した国が我が国とは……。

彼らに覇を唱える性質がなければ、これはとても幸運です。」

ヤゴウとハンキは、深夜まで日本について語り続けた。

翌日の昼過ぎ、ホテルエントランスにて

「田上殿、ここからトウキョウまで1000kmあるが、本当に今日中につくのですか。」

「はい、事故や災害の類がなければ、予定通りにつきます。」

「解りました。ありがとうございます。」

「いいえ」

田上は、満面の笑みを浮かべる。

使節団が、東京に向かひたためホテルを後にした直後、

キーーーーっつっドン!!!

物と物が大きくぶつかる音が起きた。ヤゴウたちはいったい何が起きたのだろうかと疑問は思う。

ヤゴウは外を見る。

頭から血を流して座り込んでいる女性が1名、その横に黄色に塗られた変な車が止まっている。

「ああ、またタクシーによる事故か。」

田上は、吐き捨てるように言う。

事故にあった女性は、力なくうなだれている。

「まずい！早く治療しなければ!!!」

「お待ちください、ヤゴウ殿、すぐに救急車が来ますので、大丈夫です。ヤゴウ殿！」

田上の制止を振り切り、ヤゴウは座り込んでいる女性に駆け寄る。

田上は、立場上外国の使節団にけが人の手当てをさせるわけにはいかなかった。

女性は、うなだれており頭に負った傷口からは、激しく出血していた。

「いかなな．．．： v m t a i b a , e o ; b , a ; w s o e 4 i g a m o i s e o」

ヤゴウが何か聞き取れない言葉で唱え始める。すると、彼の両手が淡い光を放ち、女性の頭の傷口がみるみる塞がっていった。

その一部始終を、田上や周りの人々が目撃した。

「や、ヤゴウどの。今のはいったいなんなのですか？」

「?回復魔法を使ったのですが、なにか?簡単なものを使っただけですよ。」

「魔法ですと!?!さすが異世界、魔法が存在しているのですか。」

「珍しいものではありませんよ、本当にどうしたのですか?」

ヤゴウは、田上の驚きや周囲の喧騒に戸惑うことになった。

リニア新幹線の中にて

「なんですと!!ニホン国には、魔法が存在しないですと!!」

「ええ、我が国があった元の世界では魔法と言うものは、おとぎ話の中の存在でした。」

「だとすれば、ニホン国は魔法なしでここまで発展したのですか。驚

きですな。」

使節団は、日本に対してイニシアチブを取ることのできる大きなことを発見できた。

日本に魔法技術が全くないのならば、我が国の魔法技術をよい条件で輸出できるだろう。

つまり、日本国内において魔法を使った治療や、魔法学校、魔法研究でいろいろとクワトイネ側に有利にすることができようだろう。

また、この事はクワ・トイネ公国を発展させるうえでも役立つだろう。

魔法を全く知らない日本が、科学のみでここまで発展できるのだから自国に取り入れれば、魔法と組み合わせることで国力向上を大きく期待できるだろう。

「田上殿、貴国の科学技術を我が国に輸出することは、可能だろうか？」

「我が国には最近、新世界技術流出防止法という法律が出来たので最新技術や中核技術は、不可能かと思えます。ただ、既に使われていない、もしくはとても古いものならば可能です。また、基本的なことはその辺にある本屋で売っている本に書かれています。ただ、翻訳作業が全く進んでいないのであなた方の文字に変換することは、とても難しいと思えます。」

この事を知り、ヤゴウはこの国の技術の基礎たる科学に関する本をなるべく多く持ち帰り、翻訳作業をして自国の発展に寄与することを、心に決めた。

東京についた翌日

第二回日桑会談が始まった。

「そ．．．総トン数年間3500万トン!？」

ヤゴウは、日本が要求してきた食料に驚く。

第一回会談の時、日本が食料を要求してきたのは知っていたが、ここまで膨大なものだとは思っていなかった。

「貴国は、とても農業が盛んであると聞いています。日本は転移前は複数の国から輸入していたので、一国ですべて賄えるとは思っていま

せんが、このうちどれほど可能か知りたいのです。」

日本から提供された資料を一通り読み終えたヤゴウが話し始める。「水産資源や、コーヒー豆と言うものなどよくわからないものなどは無理だと思います。」

ですが……、それ以外、3500万トン全て、我が国で賄えますよ。」

「!!それはほんとうですか!？」

「はい、ただわが国にはこれらを安定的に提供できるインフラがありません。」

「では、それを解決できれば、食糧輸出は可能なのですね?」

「カナタ首相や議会の承認が必要ですが、私見では可能だと考えています。」

日本側の参加者たちがざわめく。

当初の予定では、クワトイネの他に数か国と交易をおこない、食料を確保するつもりだったのだ。それがまさか、たった一国で解決できるとは夢にも思っていなかった。

実は、クワ・トイネは女神の祝福によって、食料自給率400%に匹敵している超農業国家なのだ。もし、この国が地球にあったら、間違いなくこの国をめぐる大戦争になるだろう。何しろ、種さえまけば勝手に成長するのだから。

そんな農業チート国家と、平和的に接触できた日本はとても幸運だろう。食糧危機を一気に解決できるのだから。

「外務省の前島です。クワ・トイネ公国がよろしければ、食料の大規模輸出と引き換えに港設備の増強とクワトイネ公国のインフラ、鉄道設備は我が国の政府開発援助より資金を出し、我が国が整備しますが、いかがでしょうか?」

!!!!
今度は、クワトイネ公国側がざわめく。ただ同然に手に入る食料を輸出するだけで、国が大きく潤い、さらに、日本が港と鉄道を整備してくれるという。

これ以上の好条件があるだろうか。

会議は良好な終了した。

その後、幾度の会議の結果第二回日桑会談の一か月後に、日本国とクワ・トイネ公国は正式に国交樹立した。

以下が、両国間の同意事項の一部である。

- ・クワ・トイネ公国は、日本に必要量の食料を輸出する。
 - ・日本はクワ・トイネ公国のマイハーク港の拡充、マイハークから穀倉地帯への交通インフラを、日本の資金により整備する。
 - ・日本、クワ・トイネ間の為替ルートの設定。
 - ・クワ・トイネ公国は、日本に魔導技術の提供と、他国に対しての仲介をする。代わりに日本は、クワ・トイネに、新世界技術流出防止法で許される限りの科学技術の提供と、インフラ整備を行う。
 - ・日桑軍事同盟の締結。
 - ・上記の同盟により、新世界技術流出防止法に違反しない兵器の提供をクワトイネ公国に行う。
 - などである。
- こうして、日本とクワ・トイネはとてつもなく良好な関係に至ることになった。
- そして、この出来事は世界に大きな影響を与えていくことになる。

日本とクワ・トイネの両国が、国交を樹立し極めて良好な関係に至った半年後。

クワ・トイネ最大の経済都市マイハークは、日本接触前と比較すると大きく発展していた。特に最も発展していたのは、マイハーク郊外に作られたマイハーク駅とマイハーク港、そしてその周辺地域である。

日本から輸出されたディーゼル機関車が、クワ・トイネの各地にある田園地帯から日本に輸出するための農作物を運んでくる。その農作物は、日本が整備した港に運ばれて船に積まれて日本に輸出される。日本への食料輸出は、クワ・トイネ公国に大きな富をもたらしていた。

都市インフラも、日本によって電気で明るく光る街灯、上下水道やガス管が整備され、クワ・トイネの人々はとても快適な生活を満喫していた。

それはクワ・トイネ公国の首都、クワ・トイネもまた発展していた。「1年前とは、比べられないほどの発展具合ですね。」

クワ・トイネ公国の首相カナタは、夜になっても明るく輝く首都の夜景を眺めていた。

日本による近代化は、この国を大きく発展させることは間違いないだろう。さらに、日本は我が国の軍事力を大きく強化してくれた。日本では、旧式化したという理由で格安で購入できたそれらを見たとき、日本の力を肌で知ることになった。文明圏のものよりはるかに強く、そして使いやすい自動小銃。ワイバーンの火炎弾以上の破壊力を持つ榴弾砲。極めつけは、60式と呼ばれる戦車とNF-1戦闘機である。戦車という兵器は、剣だろうが矢だろうが跳ね返す装甲と、城壁に大穴を一撃で開ける砲を装備する、正に陸戦の王者。戦闘機も古いものばかりだったが、ワイバーンよりもはるかに強力なものだった。どれもこれも、戦争の常識を変えるものばかり。この兵器を売ってくれた日本に対して、カナタはただただ感謝していた。そして後世

に日本とは敵対しないように伝える事を、心に決めた。

ロウリアとの国境線に近い都市ギム

国交を結んだ2週間後からこの町の郊外で、轟音と砂煙が引つ切り無しに発生していた。

日本防衛軍によるクワ・トイネ軍に対する訓練が行われているのである。

今日は日本国陸上防衛軍第七師団所属の戦車隊が、ギム防衛隊に属するクワ・トイネ戦車隊に指導を行っていた。また別の場所では、銃の射撃訓練が行われていた。ロウリア王国が戦争を仕掛けてきたら、真っ先に狙われるのはこの町なので、皆真剣に日本製の武器の扱い方を学んでいた。

そのギム防衛隊を指揮する団長のモイジや副官たちは、近代戦を学んでいた。

「ふう……。覚えることが多いな。」

モイジは、講義で学んだことを完璧に覚えるための復習をしていた。日本軍の指揮官である大内田から学ぶことは、今までの我が国の戦術とは全く違うもので覚えることがとても多かった。正直に言っても辛いだが彼はこの町とこの町に住む愛する家族の為に、誰よりも努力すると決めていた。

一息ついた彼は、再び机の教本に集中する。

窓の外の青空には、訓練を行っているクワ・トイネ飛行隊が描く飛行機雲が浮かんでいた。

ロウリア王国

ロウリア王国の首都である、城塞都市ジン・ハーク。

ロデニウス大陸一の人口密度の都市の中央にある、ハーク城では今、この国の行く末を決める御前会議が行われていた。

「ロウリア王、全ての準備が整いました。」

白銀の鎧に、身を包んだ30代の男が玉座に座る王に跪き、報告する。

彼の名前は、将軍パタジン。

「ふむ、クワ・トイネとクイラの二国を同時に敵に回して、勝てるか？」

王としての威厳を持つ、34代ロウリア王国大王、ハーク・ロウリア34世は若い將軍に尋ねる。

「一国は、農民の国であり、もう一国は不毛の国、どちらも亜人の比率の多い国です。わが精強なるロウリア軍の敵ではありません。必ず勝てます。」

「そうか……。しかし、ついにこのロデニウス大陸が我が国によって統一され、歴代の王たちの悲願だった亜人殲滅が実行されると思うと、私は嬉しいぞ。」

「大王様、大陸統一の暁には、あの約束も、お忘れなく。クツクツク」
真つ黒のローブを被った男が気味の悪い声で囁く。

「解っておるわ!!!」

王は、怒気をはらんだ声で、言い返す。

（ちつ、文明圏外の国だからと思つてバカにしおつて。ロデニウスを統一したら、お前たちの国があるフィルアデス大陸にも攻め込んでやるわ）

「將軍、今回の作戦の概要を説明せよ。」

「はっ！説明いたします。今回の動員戦力は50万人で、侵攻用の兵力は40万人です。残り10万人は本土防衛用です。」

クワ・トイネ侵攻計画第一段階は、国境に近い人口10万の都市ギムを強襲、制圧いたします。なお、兵站については、現地調達とします。

ギム制圧作戦と並行して、艦船4400隻の大艦隊でクワ・トイネ最大の経済都市、マイハークを制圧します。

我が国は陸海空全ての戦力が、クワ・トイネを凌駕しております。なお、クイラ王国については食料の輸出を止めるだけで、簡単に干上がるでしょう。」

「クワ・トイネの戦力は、5万人程度の戦力しかありません。即応戦力はもっと少ないでしょう。我が戦力をぶつけければ、いかなる小賢しい作戦も正面から叩き潰せるでしょう。6年間の準備が実を結ぶことでしょう。」

「そうか……。ふっふっふ。はっはっはっはあーっはっはっは!!!今宵は

我が人生で一番良い日だ!!余は、クワ・トイネ、クイラに対する戦争を許可する!!」

うおおおおおおおおおお—————

ハーク王城は喧噪に包まれた。

翌日には、侵攻部隊がジン・ハークから出発した。

だが、誰も気づかなかった。この進軍は最初から見張られていたことに。

ギム日本国陸上防衛隊基地司令部

「ということ、我が国の「おとりII」がロウリア軍の出撃を確認した。確認された兵力は40万人、ワイバーン500騎余りの大軍勢だ。そのうちの約3万が先行している。目標はおそらく、ここギムだ。我々は、日桑軍事同盟に基づきこれを迎撃する。何か質問はあるか。」

会議室に集められた陸上防衛軍幹部たちは、たとえロウリア王国がこの大陸一の人口だったとしてもその兵力に呆れ、モイジらクワ・トイネ側は、日本の情報収集能力に驚いた。日本の実力については理解したつもりだったが、我が国の強力な同盟国はまだ力を隠しているようだ。

モイジは、挙手をし発言をする。

「ワイバーンのほうは、我がクワ・トイネの航空隊でもなんとかならでしょう。問題は、陸上戦力への対応についてですが。」

ここで一区切りをつけ、大内田に向き合う。

そして、頭を下げる。

「陸上戦力については、大内田將軍に指揮を執ってもらいたいのです。」

この発言は、会議室に大きなざわめきを生む。

「モイジ殿、なぜそのようなことを。」

「私はまだ將軍から教わった、近代戦を完全に習得していません。私の作戦の不備で大事な部下を失うわけにはいかないのです。それに、あなた方は日本陸軍の精鋭中の精鋭と聞き及んでいます。確かに、同盟国とはいえ他国に軍の指揮を託すのはおかしいと、私自身思ってい

ます。ですが・・・」

「モイジ殿、あなたの気持ちは十分理解しました。だからこそ、今回の戦闘の指揮はあなたが執るべきです。指揮に不安があるのなら、私が補佐しましょう。クワ・トイネの地はクワ・トイネ軍が守るべきです。」

「大内田将軍・・・。解りました。」

こうして、指揮官をモイジ、その補佐を大内田が行うこととした。

その後、ギムの防衛についての作戦が練られた。

簡潔にまとめると

- ・ギムから数キロ離れた地点を戦場にする。
- ・戦車砲と榴弾砲、対地多弾頭ロケットなどで、攻撃する。
- ・接近されたときに備え塹壕と鉄条網を用意して、有利に迎撃できるようにする。

・陸戦を有利にするために、敵ワイバーンを撃墜し制空権を確保する。

- ・万が一に備えて、ギムの市民を避難させる。
- などである。

作戦目標はロウリア軍には何もさせずに、殲滅することが目的である。

日本とクワ・トイネは、ロウリア軍襲来に備える準備を始めた。

それから、二週間後。

クワ・トイネが日本と共に撃退の体制を整えていることなど露ほども知らず、

ロデニウス大陸統一を目指すべく進軍するロウリア王国軍は国境付近に陣を敷いた。

クワ・トイネ公国からは、何度も国境から兵を引くように魔法通信にて連絡があった。

もちろん、ロウリア軍は全てを無視する。もう戦争をすることは、決定しているのだ。

「明日、ギムを落とすぞ。」

討伐軍を預かる将軍パンドールは、クワ・トイネ攻略第一作戦とし

て計画されたギム攻略を明日行うことを決定した。投入される兵力は、歩兵だけでも2万人、ほかの兵科と合わせると合計約3万人。

これだけでも、簡単にギムを落とせるだろう。それだけでなく、ワイバーンが150騎いる。ワイバーンは、空の覇者であり、10騎で1万の兵を足止めできる。それが150騎。

負ける様子がない。

パンドールは満面の笑みを浮かべ、自分が指揮する部隊を見つめていた。

ワイバーンはとても高価な兵器である。ロウリア王国の国力であれば、200騎程が限界だろう。

しかし、今回は、このクワ・トイネ公国攻略に、500騎参加している。

噂では、フィルアデス大陸にある列強、パーパルディア皇国からの軍事物資の支援があったとされている。

いずれにせよ、先遣隊に150騎のワイバーン。この明らかに過剰な戦力に、パンドールは満足だった。

「パンドール様、ギムでの戦利品はいかがでしょうか？」

副将のアデムが話しかける。彼は、冷酷な騎士であり残虐な人間だった。その為、部下からは恐れられ上官からは気味が悪いと言われている男である。しかし、優秀な人物ではあった。

「アデム君、君に任せる。」

「了解しました。」

アデムは、將軍に一礼して天幕から出ようとした。

その時である。聞き慣れない音が聞こえてきた。

アデムが天幕から出ると、異形の何かが空にいた。ずんぐりとした胴体、胴体の上には何かが高速で回っていた。その物体から音声が発していた。

「こちらは日本国陸上防衛軍である!!!ロウリア軍に告ぐ、直ちに国境線付近から軍を引かれたし!!!」

二ホン国?聞いたことのない国だ。おそらくどこからか来た蛮族の国だろう。アデムはそう考える。

「直ちに撤退せよ!!!貴軍が、クワ・トイネ侵攻を実行するのならばこちらも然るべき対応を取る!!!」

「ふぎけるな!いやらしい亜人どもを殲滅できるまたとない機会なのだ。蛮国が一つ増えたところで我々は止まるものか!!」

アデムの怒声が聞こえたのかわからないが、謎の飛行物体はクワ・トイネ側に飛び去って行った。

「見ていろよ、蛮族どもめ。一人残らず殺してやる。」

アデムは、ギム攻略の暁にはギムの市民を一人残らず甚振って殺すことを決めた。

ギム日本国陸上防衛軍基地司令部

「ロウリア軍、撤退しません。」

「ふむ、分かった。全軍に戦闘準備を命令してくれ。」

「はい、了解しました。」

命令を受けた部下が退室するのを見届けたモイジは、目の前で遅めの昼飯を取る人物に向かい合う。

「これでよろしいでしょうか、大内田將軍。」

「モイジ殿、あなたが指揮官だ。私に余り頼らないで頂きたいですな。部下に示しが付かないでしょう。」

すみませんと、謝りモイジは目をつぶる。

出来ることはした。後は、全力で侵略者どもに挑むだけだ。

目の前にいる人のように、落ち着いて指揮ができるようにならなければならぬと思った。

翌日、早朝

整然と整列する軍勢。上空には、精鋭のワイバーン隊。

パンドールはただ、一言命令を下した。

「進撃を開始せよ。」

ロウリア軍は、ギムに向かって行進を開始した。

この事は無人偵察機によってすぐに、ギムに通報された。

「スクランブルだ!!全機発進急げ!!」

モイジが吠えるように命令を下す。

基地から、日本航空防衛軍のVTOLF-11とクワ・トイネ空軍

のNF-1戦闘機がスクランブル発進する。

クワ・トイネのパイロットの中には、日本の戦闘機を始めて見た竜騎士のマールパティマもいた。

彼は自分の新たな愛機に搭乗し、離陸準備をしながらここ数か月を振り返る。

日本と同盟を結んだ直後、日本から購入した戦闘機のパイロットになれと命令されたときは、とても驚いた。飛竜隊一目がよいことが理由だった。

ギムに着任し、日本軍の指導官に訓練でいやという程扱われた。新たな乗機の性能は凄まじく、軽く加速しただけでワイバーン以上の圧力が体にかかり、とても辛かった。何度も気絶しかけた。

やめたいという気持ちだが、積もっていった。あの瞬間までは。

あの時のことは、鮮明に覚えている。

訓練で飛んでいたとき、視界全てが一瞬だが雲に覆われたかと思うと音が突然聞こえなくなった。機体からの振動だけを感じる静寂。教官からの言葉が人生で一番の感動をくれた。

「おめでとう、君は音を超えた。君は、この大陸で最も速い人間になった。」

嬉しかった、ただ単純に。このために生きてきたと感じたほどだった。

そのあとの訓練もきつかったが、結局辞めずにここまで来た。

今日の戦いで戦果を挙げ、教官たちに恩を返す。そう決心した所で自分の離陸の番になった。

「ギム11，発進します!!!」

スロットを上げ、マールパティマは空に上がった。

日本とクワ・トイネの混合航空隊は、一端基地上空で合流して編隊を組んだあと、ロウリア軍飛竜隊に向かった。

ロウリア軍の竜騎士ムーラは、威風堂々と進軍する自軍を見下ろして、誇りに思った。

今まで誰も達成できなかった、ロデニウス大陸統一。その偉業を自国は必ず達成できるだろう。

そして、大きく発展するだろう。食料が豊富にとれるクワ・トイネと、鉱物資源の豊富なクイラの地が同時に手に入るのだ。発展しないほうがおかしいだろう。

そのように考えていた時、不意に魔導通信が入る。団長からだ。

「これより、敵の飛竜隊を食い破り敵の陣地に突撃する！クワ・トイネの野蛮人どもに我らの力を見せつけてやれ！ロウリア王国、万歳!!」
勝鬨を上げ、最高速度で向かう、ロウリア軍飛竜隊。ロウリア軍の誰もが、飛竜隊の大活躍を確信していた。

だが、次の瞬間。

飛竜隊団長搭乗騎やその周りにいたワイバーンが突然爆発し、木っ端みじんになった。

「……え？」

ムーラは、理解できなかった。

その間にも、仲間たちがどんどん爆発し死んでいく。
攻撃された、そう認識したとき彼はとっさに魔導通信機のスイッチを入れた。

「敵の攻撃だ!!全員さんk」

「上空から何か来るぞ!!」

この報告を受けたムーラは、上空から来た何かを探す。

それは、凄まじい速度で降下してきた。矢じりのような形、灰色に塗られた機体、後ろから炎を2本吐きながらそれはやってきた。光弾を高速でばらまきながら、ワイバーン隊とすれ違う。

ドーーーーーン!!!

衝撃波が襲う!!!彼らを襲ったのはクワトイネ空軍所属のNF―1戦闘機だった。

既に、半数近くがやられた。何も出来ずにだ。だが、ロウリア軍飛竜隊にさらなる恐怖が迫っていた。

「う、うわー————!!!奴が来たぞ!!!しかも、30騎もいるぞ!!!」

ムーラ達に、絶望が襲い掛かる。

ここで少し時を戻して、日本、クワ・トイネ側

混成飛行隊40機は翼下のパイロンに搭載された、空対空ミサイル

を各機二発ずつ発射した。

日本製の高性能なミサイルは、寸分狂わずにロウリア軍のワイバーン隊を襲った。飛行隊はミサイルを発射した後、速やかに高度を取る。敵ワイバーン隊上空7000mに達したとき、マールパティマは自分の隊長に向けて、無線を飛ばした。

「隊長、敵への突撃の一番槍は私が行ってもよろしいですか？」

「ギムニー、マールパティマか……。よし、行って来い！ただし、地面とキスはするなよ！」

「了解！いつけえー——!!!」

操縦桿を倒し、急降下する。

あつという間に敵に近づき、狙いを定め機関砲のトリガーを引く。対空目標に対して、絶大な破壊力を持つ2門の20mm機関砲が唸り上げる。射撃開始から数秒で、敵とクロスした。地面と接触しないように操縦桿を引き、急上昇する。

今の攻撃で、3騎は確実に落とした。高揚感に胸が躍ったが、すぐに、ここは戦場だと気を引き締める。

仲間たちや、日本空軍の方々も急降下攻撃を敢行したようだ。敵が次々に落ちていく。

マールパティマは、再び敵に向かった。

「は……。は……。速すぎる!!!」

「なんなんだ!!!」

ロウリア軍竜騎士団は、混乱の極みにあった。

精鋭の竜騎士たちが何も出来ずに、一方的に撃墜されて、空に散っていく。

反撃をしようにも、敵騎が速すぎて狙いが付かない。そもそも狙っている余裕がない。敵を狙っていたら、別の敵から攻撃を受けるからだ。

ムーラは、絶望感に襲われながらも必死に相棒を操り、低空を飛んでいた。どうやら敵は、あの高速性を生かした一撃離脱を心掛けているようだ。低空なら、生き残れるかもしれない。そう思った時、殺気……。いや死の予感を感じた。慌てて振り返ると、敵が低空を飛ん

で追ってきたのだ。そして、光弾をばらまいてきた。

やられる！と、思った瞬間、ムーラは浮遊感を感じた。自分の乗騎であるワイバーンが身をよじって、自分を振り落としたのである。ムーラのワイバーンは、光弾に貫かれ絶命した。

「あ、相棒——！！！」

竜騎士ムーラは、運よく沼に落ちて命拾いした。そしてこの戦いでロウリア側唯一生存した竜騎士となった。

のちに「ギム航空戦」と呼ばれる戦いで、ロウリア軍ギム攻略隊の航空戦力は壊滅することになった。

戦場は静まり返っていた。ギムへの進軍の足も止まっていた。

10騎で1万の兵を足止めできる、この大陸最強の戦力であるワイバーン150騎が赤子の手を捻るように殲滅された。

アデムは、わなわなと手を震わせていた。圧倒的な戦力のはずだった。ロウリアの常識ではギムなど簡単に制圧できるはずだった……なのに、このような屈辱を野蛮人どもから受けることになろうとは。彼は、上官であるパンドール將軍にギムへの突撃を上申しようとした。この時のアデムは完全に冷静さを失っていた。

だからこそ、アデムは気づかなかった……死神は自分たちにも刃を仕向けていたことを。

「敵部隊、完全に足が止まっています。」

「ああ、今がチャンスだ。多弾頭ロケットと自走砲でやる。照準合わせ急げ!!」

モイジの指令によって、各兵器の照準が足の止まっているロウリア軍に合わせられる。

「各砲の照準、全て完了しました。」

「よし………。撃て。」

地獄の釜の蓋が開いた。

ドーン!!!バラバラバラバードーン!!!!!!

ロケットと自走砲の砲弾が着弾したとき、ロウリア軍の3割が吹っ飛んだ。

「な、何が起きたんだ!!」

「噴火でも起きたのか!?!?」

パンドール、アデムらはただ茫然とその光景を眺めていた。

今まで戦ってきた戦友や、歴戦の猛者、優秀な将軍や魔導士たち。爆発が起きるたびに全てがあっけなく死んでいく。

「い、一体何を我々は相手にしているのだ。」

「クワ・トイネは、神龍を味方につけたというのか!?!?」

死神は彼等だけを逃してはくれなかった。

何かが空気を切る音を聞いたと感じた瞬間、今まで感じたことのない衝撃が襲った。

自分や隣にいたパンドールの体がバラバラになって飛んでいく姿、それがアデムの見た人生最後の記憶になった。

その後十分の間、日本とクワ・トイネの容赦のない攻撃が続きそれが終わった後、その強大な力によって地面には大穴がいくつも開き、ロウリア軍に立っている者は馬を含めて一人もいなかった。

ここに、ロウリア軍ギム攻略部隊は消滅した。

「敵部隊殲滅しました。」

「よし、戦闘態勢を解除し、警戒態勢に移行。敵の生存者がいたら捕虜として捕らえろ。」

「了解しました。」

モイジは、戦闘の終了を宣言しロウリア兵の生き残りを探索するよう命令した。

外では、建物が震えるような大きな歓声が起きていた。絶望的な戦力差をひっくり返したから、当たり前前だ。

しかしモイジは、高揚感を感じなかった。数倍以上いた敵を、被害なく撃破したのだ。寧ろ、自分たちの得た力に恐怖すら感じていた。

「これが、二ホン国の力・・・異世界の戦闘とは、なんとも恐ろしいものだ。」

モイジは、自分たちが得た力を自覚し、そしてこの力を悪用しないことを後世に伝えていくことを決めた。

モイジはその後、クワトイネ公国陸軍の近代化に大きく貢献し歴史

に名を遺す人物となった。

ロウリア王国編―02

クワ・トイネ公国　マイハーク港

日桑連合陸軍が、ギム郊外でロウリア軍を撃破する少し前。

日本から、ロウリア王国軍を監視するおとりⅡから大艦隊が接近しているとの報告を受けたクワ・トイネ公国海軍本部では、クワ・トイネ第二艦隊の提督を務めるパンカーレが出撃の準備をさせていた。第二艦隊には、およそ50隻の艦船が所属している。

「壮観な風景だな。」

パンカーレは、海を眺めながら囁く。

「しかし、敵は4000隻を超える大艦隊、彼らは何人生き残ることができるだろうか。クワ・トイネ級かマイハーク級、いやせめてエージエイ級が在れば有利に戦えていたんだが。」

パンカーレは頭を抱える、もし侵攻が1年遅ければ日本の新型艦が手に入るといふのと。

実は海軍は、陸軍、空軍と違い近代化が進んでいなかった。日本から手に入れた重機関銃を数丁取り付けた艦船はまだマシな方で、何もしていない艦船のほうが圧倒的に多かった。日本はクワ・トイネ公国の為に現在戦艦1隻と大型巡洋艦を2隻、駆逐艦を多数、急ピッチで建造しているというがどんなに急いでも戦力化するまで半年はかかるという。絶望的だった。圧倒的な敵の物量を前にどうしようもない気持ちがかみ上げてくる。

「提督、海軍本部から、魔伝が届いています。」

側近であり、若き幹部、ブルーアイが報告する。何事だろうか。

「読め。」

「はっ！本日夕刻、二ホン国の艦隊が援軍として、マイハーク沖合いに到着することです。彼らは、我が軍より先にロウリア艦隊に攻撃を行うとのこと。なので、観戦武官一名を彼らの旗艦に搭乗させるようにとの本部からの命令です。」

「ふむ、二ホン艦隊の編成内容は解るか？」

「はっ、二ホン艦隊の構成は旗艦を務める戦艦イズモの他、戦艦デワ、

空母セイリユウ、ホウシヨウ、護衛艦20隻余りとのことでした。」

「おお！噂の二ホンの戦艦が出てくるのか、しかも二隻も！間違いではないのだな。」

「間違いではありません。」

「とても有難いことだ。しかし、観戦武官か。二ホンの戦艦の性能は、圧倒的だと聞いているが、それでも危険であることには変わりない。誰を向かわるか……。」

沈黙が流れる。

むろん誰も死にたくはない、しかし日本の戦艦の実力をこの目で見たいとも考えていた。

「提督、私が行きます。」

ブルーアイが沈黙を破り、発言する。

「しかし、危険だぞ。」

「私は剣術では同期でNO1です。一番生存率が高いのは私です。それに、空軍に卸されたNF-1戦闘機を私は見てきました。あのワイバーン以上の性能を持つ機体を作ってしまう二ホン国です。それに私は直に見てみたいのです。二ホンの海軍の力を。」

「分かった。ブルーアイ、頼んだぞ。」

「はっ！」

その日の夕刻

ブルーアイやパンカーレ、水兵達はマイハーク沖に停泊する大型船に目を向けていた

日本と初接触した際、日本が300m以上の艦を保有しているとの報告は受けていたし、実際に見たこともあるのだが、やはりその規格外の大きさは目を見張るものである。

やがて、一際大きな軍艦から、ヘリコプターという乗り物が飛んできた。

ブルーアイは、以前空軍に導入されていた機体を見たことがある。初めて見たときは、どの様に飛ぶのか見当がつかなかった。機体の上にあるプロペラという回転する翼を使って垂直に飛び上がったときは、度肝を抜かれたものである。

飛んできた機体をよく観察すると、自国が購入したものより精練されたフォルムをしていた。

着陸したヘリに乗り、沖合いの日本艦隊に向かった。

フワフワのシートに座り、ほとんど揺れずにヘリコプターは進んだ。ワイバーンよりも遅いが、遙かに快適で、人が大量に運べる。しかも垂直離着陸が出来る。確かに便利なものだと、ブルーアイは感じた。

やがて、戦艦が見えてくる。

その大きさに、改めて驚愕する。

(理解していたつもりだが、やはりでかい！しかもなんだあの大きな砲は!?我が第二艦隊くらいなら、一撃で吹き飛ばすことが出来るのではないか?それが二隻もあるとは。)

彼は、ここ数か月で新たに身に着けた知識をもとに日本の力を理解しようとしていた。

やがて、BBH-008 はずもの艦尾ヘリ甲板に降り立つ。

降り立った彼は、防衛軍人に言われるがまま、艦内に入っていた。

中は電灯のお陰で、とても明るかった。

ブルーアイは艦内を進み、艦橋へと向かっていった。

そこには、この戦艦の艦長がいた。

「初めまして。私はこのいずもの艦長の山本です。」

「クワ・トイネ公国第二艦隊から来た、観戦武官のブルーアイです。この度は、援軍感謝します。」

「早速ですが、我々は、ロウリア軍の船団の位置をすでに把握しており、ここより西側500kmの位置に彼らはおります。船足は5ノット程度と非常に遅くありますが、こちらに向かってきております。我々は明日の朝出港し、ロウリア軍に引き返すように警告を発し、従わなければ全て排除する予定なので、明日までは、ごゆつくりとおくつろぎください。」

「分かりました。ですが、本当に大丈夫なのですか?相手は、4000隻越えの大艦隊なので。70隻で相手に出来るものではないと思います。」

「大丈夫です。我らには秘策があります。それと、本作戦は我が艦隊のみで行いますので、クワ・トイネ艦隊の随伴は必要ありません。むしろ、ブルーアイ殿の身の安全は保障します。ご安心して、仕事をなさって下さい。」

ブルーアイは驚く。彼らは、24隻の艦艇のみで4000隻以上の敵大艦隊に挑むつもりなのだ。

ブルーアイは、不安に思ったが、日本艦隊の戦いを見るのを、少し楽しみにしていた。

翌日早朝

日本艦隊は、マイハーク港を出港した。

ブルーアイは、いずもの第一艦橋にて驚愕する。

(速い！我が軍の軍船の最大速力を遥かに凌駕している。なるほど、これでは合同作戦は取れないな。それに他艦との距離が離れている。輪形陣というものかな？二ホンの本は読んだが、ここまで離れて行動するとは……。やはり、二ホンはすごい国だな。)

艦隊は約20ノットで西に向かう。出港から、数時間後ロウリア艦隊をリーダー上にて補足したとの報告が入った。

「よし、ヘリを飛ばして警告をしろ。全艦、最大船速。いずもとでわを前に出すぞ！」

交戦に備えて、日本艦隊は陣形を変えた。

そして、最大速力でロウリア艦隊に向かった。

ロウリア王国クワ・トイネ公国討伐艦隊 指揮官 シャークン

「いい景色だ。美しい。」

大海原を真っ白の帆に風をいっぱいを受けて、進む美しい帆船たち。その数4400隻、大量の水夫と、揚陸軍を乗せて、彼らは一路クワ・トイネ公国最大の経済都市、マイハークに向かっていった。

見渡す限り船ばかりである。

海が見えない。そう表現したほうが正しいのかもしれない。

パーパルディア皇国からの軍事支援と、6年という年月をかけて準備されたこの大艦隊。この大艦隊を撃破する方法は、ロデニウス大陸には無い。もしかしたら、文明圏の国やパーパルディア皇国でさえ相

手取ることが出来るかもしれない。

野心が頭をよぎるが、パーパルディア皇国には、戦列艦という、船ごと破壊できる強力な兵器を搭載した軍船が存在しているという。そのことを思い出し、野心の炎を打ち消す。第三文明圏最大最強の列強国であるパーパルディア皇国に挑むのは、やはり危険が大きい。

「提督！東から何か飛んできますか?!」

マスト上にいる見張りの水兵からの報告で、シャークンは思考の海から現実には引き戻される。

東方向に目を凝らすと、確かに何か飛んてくる。

クワ・トイネ公国の飛竜と最初は考えていたが、それは全く違うものだった。

虫のような形をした無機質な物体が、バタバタバタ、と異様な音をたて、こちらに飛んでくる。見たことの無い物体が飛んでくる様は異様な光景であり、わずかに恐怖の心がシャークンに芽生える。

「こちらは日本国海上防衛軍である。ロウリア艦隊に通達する。貴艦隊は、クワ・トイネ公国の領海に侵入している。直ちに引き返せ。繰り返す、直ちに引き返せ。」

白い体に赤い丸が入ったそれには、人が乗っていた。そして自分たちに引き返すように、警告をしている。

バタバタバタ、と音を立てながら船団の上空を周回するそれに向かって、水兵がバリスタや弓を使って矢を射る。しかし、当たらなかつた。暫くの間、上空で警告を発し続けたそれは、やがて東の空へと消え去っていった。

「ん？提督、小島が二つ見えます。」

「馬鹿な、この辺に島はないぞ。貴様の目は節穴か？」

「しかし、そこにあ……!!島が動いている!?!」

「何!!」

再度、東の方向に目を凝らすと、確かに二つの小島があり、動いていた。

まさか、船か!?

「あれは、敵船だ!!距離は!?!」

シャークンはすぐさま、対象との距離を測るように命令を出す。命令を受けた熟練の水兵が、計算して距離を求める。その導き出した値をみて、水兵は顔を青くする。

「嘘だろ。こんなことがあるなんて……。」

「どうした!?何があつた!?!」

「提督!敵艦との距離は、10km以上離れています!」

「馬鹿な!もつと近いはずだぞ!」

間違いありません、と水兵は返してきた。

シャークンらは、驚愕する。この事実から導き出されること、それは、相手が桁外れに大きいということだ。

そうしている間にも、小島と見間違えるほどの大きさの敵艦は凄まじい速度で接近してきた。

その姿に、またも驚愕することになる。

(なんだ、あの大きさは!今まで見たこともないぞ。しかも甲板に備えられているあれは、まさか魔導砲か!?まるで、ムーの軍艦ではないか!)

シャークンが驚愕している間に、巨大船は3kmの距離を保ちながら、平行に走り始めた。

「これが最終警告である!直ちに引き返せ!さもなければ、発砲する!直ちに引き返せ!さもなければ、発砲する!これが最終警告である!」

いくら船が島のように大きいとはいえ、たったの二隻。こちらは4400隻の大船団だ、数の差で何とかなるだろう。

そう考えたシャークンは、攻撃を命じた。

命令を受けた帆船は、右に旋回し敵艦との距離を詰める。

距離が200mを切ったところで、帆船から一斉に火矢が、敵船を襲う。放たれた矢は、届かないものがほとんどだったが、運良く届いたものもあつた。が、全て弾かれた。

「矢を弾いた!奴は、金属をその身に纏っているというのか!」

矢を放った帆船の船長が驚く。彼の常識では、金属でできた船など存在しないと考えていたからだ。

敵船の、舷側に並べられた何かがこちらを向いた。

(何をしようとしている?)

シャークンが敵の行動に疑問を抱いた時、敵船の舷側がパツパツと光る。

次の瞬間、バリバリバリ、と轟音が響く。

そして、敵船と並行に走っていた帆船が光弾によって、あつという間にハチの巣になり大爆発を起こした。爆散した帆船の部品や、人間だった物があたりに撒き散らされる。

いずもとでの舷側に装備された、パルスレーザーと近接防御火器が火を噴いたのだ。

一分足らずで、二隻と並行に走っていた帆船は全滅した。

「!!なんだ!!あの威力はーそれに連射をしただどー!」

経験したことのない攻撃に、それを見ていた船団全員が驚愕をする。

次は自分たちの番ではないかと、恐怖に体を震わせるものもいた。

「まずい!!このままでは、手も足も出せずに全滅する。通信士!今すぐにワイバーン部隊に上空支援を要請しろ!!敵主力船団と交戦中とな。」

いずも艦橋

「これで、驚いて引き上げてくれると良いのですが・・・、艦長はどう思われます?」

戦艦いずもの副長の海原は、無用の殺傷をしたくはなかった。こちらの実力を見せて、勝てないと理解させ撤退させる。平和ボケと言われても仕方がないが、彼は敵が帰ってくれることを願った。

だが、艦長の山本は違った。

「驚いているようだが、撤退はしないだろう。まだ、敵には切り札の航空戦力が残っている。」

「あつ!!ワイバーンのことですか!?!」

「そうだ。陸さんの話によると150騎は撃墜確実らしいが、おとりIIで確認されたワイバーンの総数は、500騎とのことだ。まだ敵には、350騎は残っている。全部とまではいかななくても、200騎は出してくると、私は考えている。」

「なるほど……理解しました。」

海原は、山本の考えに納得し対空警戒を厳にするように命令を出した。

「ふ……。あれほどの威力の魔導、そう連発できぬようだな……。」
シャークンは、いずもとでわが更なる攻撃をしてこないため、このように判断していた。

「艦隊の速度を落とせ。ワイバーン隊の航空攻撃と同時に、一気に接近して畳みかけるぞ。」

ロウリア王国　ワイバーン本陣

今回のクワ・トイネ公国侵攻作戦の為に用意されたワイバーンの内、350騎が配備されているこの基地に、ロウリア艦隊からの魔伝が入ってきた。

「司令、シャークン様が指揮される討伐艦隊から魔伝が入りました。敵の主力と思われる船と現在交戦中、敵は島のように巨大であり、苦戦中。航空支援を要請する。」

「ほう、蛮族どもの主力か……。よろしい。350騎全騎を差し向ける。」

「し。しかし、司令。全てのワイバーンを差し向けてしまうと、本隊からワイバーンが全ていなくなってしまう。先遣隊とも連絡が取れませんし、ここはもつと慎重に判断されたほうが宜しいのでは？」

「聞こえなかったのか？全騎だ。敵の主力なら、大戦果だ。戦力の逐次投入はすべきではない。」

「……了解しました。」

基地司令の命令を受けて、ワイバーン隊が次々と飛び立ち、日本艦隊に向かった。

このワイバーンの大編隊は、いずも、でわのレーダーにて既に探知していた。

「敵の陣地からワイバーン隊が出撃しました。総数350騎です。」

「まさか全てのワイバーンを出してくるとは……。艦長、敵はまだ諦

めていないようですね。」

「さすがにすべて出してくるとは、思っていなかったがね。とにかく中途半端な攻撃をしては、こちらが危険だ。全力でやるぞ。主砲、対空殲滅弾装填！対空戦闘用意！」

「了解！主砲、対空殲滅弾装填。目標、敵ワイバーン大編隊！！砲術長頼むぞ！！」

「はっ！！一撃で決めて見せますー！」

いずもの象徴である61cm砲に砲弾が装填され、ロウリア王国ワイバーン隊の飛来する方向に指向する。

でもまた、主砲を敵に向ける。いずもより口径が小さいお陰で、いずもより早く射撃準備が完了する。

「でわより通信。我、射撃準備完了とのことです。」

「早いな、でわの奴ら張り切っているな。」

「何しろ現役復帰後の初の任務で、いきなり主砲を撃てるのです。張り切ってしまうのは、仕方のないことでしょう。」

「そうだな……。でわに返信。敵の戦意を削ぐ為に目視圏内で発砲する。本艦との同時射撃を求む。」

「了解しました。」

先程、大きな砲を上に向けたが、それっきり敵艦は沈黙を守っている。

もうすぐワイバーン隊が到着するという。300騎以上のワイバーンと船団による同時攻撃。必ず、あの巨大船を葬ることが出来るだろうと、シャークンは確信していたが、彼の心の隅には嫌な予感が漂っていた。その、不安をかき消すようにシャークンは、彼の経験に基づく最良の選択を命じる。

「そろそろ、ワイバーン部隊がこの海域に到達する。全軍突撃せよ。」

シャークンの命令を受けた船団が、最大速力で敵艦に突撃を開始した。

ワイバーン隊も、自分たちの上空を通過し、敵艦に突っ込んでいく。

「敵ワイバーン隊接近、距離約3km。」

「誤差修正完了、いつでも撃てます！」

「総員衝撃に備え！」

「ブルーアイさん！耳を固く閉じて、口を大きく開けてください！」
「わ、分かりました！」

海原の指示に、ブルーアイは素直に従って、耳に指を入れ口を顎が外れるくらい大きく開けた。

それを確認した艦長の山本は、命令を下す。

「主砲、一斉射。攻撃始め！！」

「全主砲、てっええー——！！」

いずもの61cm砲と、でわの51cm砲が轟音と共に、火を噴いた。

「何だ、敵が爆発したのか？」

シャークンは、二隻の戦艦の主砲発砲を最初、敵が勝手に自滅したのかと勘違いした。それは、ほかの水兵も同じで、中には頬を緩める者もいた。頬を緩めたものはこの海戦に、勝ったと考えていたのだろう。

直後、空に幾つもの太陽が現れるまでは。

ワイバーン隊は、自国の大船団の前に立ち塞がっている巨大な二隻の船に驚愕していた。

「何なんだあれは!？」

「船なのか？大きすぎる!!」

「クワ・トイネの連中、いったいどこで手に入れたんだ!」

シャークンの要請を受けてきた竜騎士隊は、目の前に現れたいずもとでわの規格外の大きさに恐れおののくが、隊長騎の命令を受けると心を落ち着かせ、二隻に向かっていく。

「恐れるな！確かに規格外の大きさだが、たった二隻、数で襲えば恐れるに足らず。全騎突撃!!ロウリア王国、バンザイ——!!!」

竜騎士隊は、いずもとでわに向かって突っ込んでいく。

だが、敵艦が爆発したかのように見えた瞬間、彼らは経験したことのない光と熱、衝撃を感じた。それが、彼らの最後の記憶となった。

「な、何が起きたというのだ……。」

シャークンは呆然とする。敵が爆発したと思ったら、突然自分たちの上空で巨大な火球がいくつも発生した。今まで体験したことのない光と熱波、衝撃、そして轟音。それが収まった時、空を飛んでいたはずの350騎のワイバーン隊は、跡形もなくなっていた。ただ、燃えカスのようなものが海に落ちてくるのみである。

この時、いずもとでわの主砲から発射された砲弾は「99式対空殲滅弾」というものだった。砲弾に仕込まれた燃料気化弾頭の起爆によって発生した高熱は、3万度に達すると言われている。ワイバーン隊は、文字通りに焼き尽くされたのである。

「りゅ……竜騎士隊。全滅、いや消滅しました……。」

その事実には、誰もが信じられずに、声を出すこともできない。沈黙が彼らを支配する。一撃、たった一撃で空前絶後の350騎のワイバーン大編隊が、一騎も残らずに全滅した。シャークンは、海面に漂う撃沈された船の破片や、ワイバーン隊だった物が漂流しているのを見て、戦慄、いや、恐怖以上の何かを感じていた。

「我々は、一体何と戦っているのだ……。」

海将シャークンは、悲壮な心境でつぶやく。

なんと表現していいのか解らない。

しかし、悲劇は自分たちを見逃してくれなかった。

「う……うわー……また、攻撃してきたぞ!!」

いずもとでわの舷側が、パツパツと光り、爆音が轟く。

竜騎士隊への対応の為、中止していたロウリア艦隊への攻撃が再開したのだ。

今度はパルスレーザーと近接防御火器だけでなく、127mm単装速射砲や、副砲も発砲を開始した。

まだ、4000隻近く残っていた艦隊が、信じられない速度であったという間に数を減らしていく。

「化け物、いや悪魔だ……。奴は、海の悪魔に違いない……。」

「畜生!! あんなのに勝てる訳がねえ!! くそつたれー!!」

僅かな時間のうちに、味方の船は1200隻のみになっていた。

「……もう、ダメか。」

シャークンは絶望していた。どうやっても、あの二隻の悪魔に勝てる方法が浮かばない。

このままでは、部下の命をいたずらに失うだけである。しかし、降参して捕虜になった場合、自分たちの国を滅ぼそうとしたロウリア人を、彼らが許すわけが無い。

ロウリア艦隊に残された道は、撤退のみであった。

ロデニウス史上最大の船団の3分の2以上を失つての大敗北、国に帰ったら、確実に死刑になるだろうし、自国の歴史書にも、無能の將軍として名が残るだろう。

しかし、部下をこれ以上死なすわけにはいかない。

彼は決断し、命令を下す。

「通信士、魔法通信で全軍に通達。「全軍撤退せよ、繰り返す、全軍撤退せよ。」と。」

魔法通信が各艦に流れ、各々回頭をして、撤退を開始する。

シャークンの乗る旗艦も、撤退するために回頭を始めた時、でわから発射された127mmの砲弾が直撃をした。

船に大穴が空き、浸水が発生する。シャークンは、着弾の衝撃で海に投げ出された。

海上に浮かびながら見た光景、彼の乗っていた船は、真つ二つに割れ、沈んでいくところだった。

「艦長、敵は撤退を始めました。追撃しますか？」

「いや、追撃はしない。完全に戦意がなくなつたようだからな。それよりも、海に浮かんでいる敵兵の救助のほうが重要だ。生存者を探し出し、救助せよ。」

ここに、ロデニウスの歴史に大きく名を遺す「ロデニウス沖大海戦」が終結した。

いずれもの第一艦橋で、この海戦を観戦していたブルーアイは、この海戦で日本の力の一端を感じた。

特にそれを感じたのは、ワイバーン大編隊迎撃の時だった。

いずれもの主砲発射時の爆音と衝撃は、今まで体験したことのないも

のだった。そして、敵ワイバーンが光に包まれた後、完全に消滅していたことに、驚愕した。ロデニウス最強の戦力をいとも簡単に、殲滅してしまう日本に、友軍だというのに恐怖を感じてしまった程だった。

ブルーアイは、この後パンカーレにこの事をどの様に報告すればいいのか、大いに悩むことになる。

敗走するロウリア艦隊の一隻の部屋の中で、パーパルディア皇国から派遣された、観戦武官ヴァルハルは、震えていた。彼の乗る船は船団の最後尾にいたことで、運よく撃沈されなかった。

しかし、彼の見た光景は大きな恐怖をもたらしていた。震えを取ろうと、何度も酒を飲んだが思い出すたびに震えが、ぶり返してきた。

彼の任務は、この戦争でロウリアの大艦隊が、どの様に戦いクワ・トイネ公国を滅ぼすかを記録することだった。蛮族にふさわしいバリスタと、船員による切り込みといった原始的戦法でこれだけの数をそろえたらどうなるのか、個人的興味もあり、彼はこの任務を楽しみにしていた。

しかし、この船団の前に立ち塞がる様に現れた船は、彼が持つパーパルディア皇国の常識を遥かに超えたものだった。

島のように大きい二隻の敵船は、「風神の涙」はおろか、帆すら無いのに圧倒的に速かった。

そして、甲板に備え付けられた巨大な砲に彼は驚愕する。

なぜ、文明圏外のロデニウス大陸に、自国のものより巨大な大砲があつたのには驚いたが、数門しか積んでいないことに疑問を覚える。

彼の常識では、大砲とはそう当たらないものだった。なかなか当たらないから、「下手な鉄砲も数撃ちや当たる」の理論で作られた、100門級戦列艦が存在するのだ。

しかし、彼らの船は3km離れているのにも関わらず、一発で当ててきた。一撃で船が撃沈されていく。

しかも口径の小さな砲は、連射が出来るらしく船を一秒足らずで、穴だらけにしてしまった。

さらに驚くべきは、ワイバーン隊を一撃で消し飛ばしてしまったことである。

我がパーパルディア皇国なら、艦隊に随伴させている竜母から、ワイバーンを発進させて対抗する。

我が国の主力のワイバーンロードは、蛮地のワイバーンより性能が遙かに良いため、同数なら必ず勝つことが出来ると言われている。

そもそも、大砲は空を飛ぶものに当たらない。それが、常識だった。

しかし、敵は砲弾から巨大な火球を発生させて、ワイバーンを吹き飛ばしてしまった。

とても、人間の力とは言えないナニかとしか、ヴアルハルには理解できなかった。

彼らの存在を知らずに、事を進めると、近い未来パーパルディア皇国をも脅かすかもしれない。ヴアルハルは、そう確信した。

ヴアルハルは、部屋に置かれた魔伝に向かうと、見たまま、ありのままを本国に報告した。

ロウリア王国編―03

ロウリア王国　ワイバーン本陣

ロウリア艦隊からの支援要請を受けて、この本陣を飛び立った350騎は3時間が経つても、全く帰ってこなかった。

司令部に重苦しい沈黙が流れる。

なぜ全く通信がないのか？最後の通信は、「敵艦を発見、これより攻撃する。」だった。それから、全く音沙汰がない。司令部は焦燥に包まれていた。

「ワイバーン隊は、何故帰ってこないのだ？」

顔を蒼くする基地司令の問いに、答えることが出来る者はいない。(まさか、全滅したのか？馬鹿な、そんなことがあり得るはずがない。)

ロデニウス大陸の歴史上最強の生物とされるワイバーン。馬より速く飛ぶことができ、口から発射することのできる導力火炎弾は、あらゆるものを焼き尽くすことが出来る。しかし、とても貴重な種であり、数を揃えるのは、とても難しい。

ロウリア王国の揃えた500騎という数は、ロデニウス統一を条件に、第三文明圏最強のパーパルディア皇国からの援助と6年の年月をかけて、ようやく用意することが出来たものだった。

圧倒的な大戦力であり、確実にロデニウス大陸を統一できるはずだった。

そして、敵の主力艦発見の報を受けて、飛び立っていった精鋭の竜騎士たちの駆るワイバーン350騎は、歴史に残る大戦果を挙げて、この本陣に凱旋してくるはずだった。

しかし、現実は一騎たりとも帰還してこないし、通信も全く音沙汰がない。

考えたくはないが、ワイバーン隊は、敵に一騎残らず殲滅された可能性が高い。

常識的に考えて、敵が大船団だったとしても、歴史に残るレベルの大戦力が全滅するとはとても考えることが出来ない。まさか、敵は神龍でも味方に付けたとでも言うのだろうか。ロウリア王になんて報

告すればいいか、彼には分らなかつた。

それに彼には、もう一つ懸念事項があつた。それは、先遣隊とも全く連絡が取れないということだ。クワ・トイネ公国の予想外の反撃に苦戦しているのかと、最初は考えていたが、攻略予定日を1週間も過ぎて一切の連絡がない。何度か、先遣隊に呼び掛けてみたものの一切の反応がなかつた。一体何が起きているのか、彼には解らなかつた。

その時、一人の兵が司令部に飛び込んできた。ノックすらしていないので、相当慌てているようだ。

「何事だ!!」

「はっ!先程、この本陣に先遣隊の一部が撤退してきました!!臨時の指揮官によると先遣隊は、ギム郊外で殲滅されたことです!!それと、先遣隊を指揮されていたパンドール將軍は戦死されたことです!!」

「な、なに——!!では、先遣隊のワイバーン隊はどうなった!？」

「すべて、撃墜されたとのことです・・・。」

「そ・・・、そんな馬鹿な・・・。」

基地司令は、大きな絶望に打ちひしがれた。

クワ・トイネ公国 政治部会

「・・・以上が、ロデニウス沖大海戦の、戦果報告になります。」

参考人として招致された観戦武官ブルーアイが、口頭での報告を終えて着席する。彼の隣には、ギムを守り切ったモイジの姿もあつた。

政治部会の各々の手元には、ロデニウス沖大海戦とギム攻防戦の戦果が記載された印刷物が配布されている。政治部会の面々に沈黙が流れる。とても信じられないことが記載されていたからだつた。

やがて、沈黙を破り一人が口を開く。

「では、何かね?二ホン艦隊は敵艦隊4400隻の内、3分の2以上の敵船を撃沈し、さらに350騎のワイバーンまでも、無傷で撃破した。しかも、たった二隻の船で。まるで、御伽噺だ。ギムの話もだ。3万以上の敵兵に、150騎のワイバーンを、我が軍と共に、一切の被害なく撃退したと・・・。とても、信じられない。この政治部会で、観

戦武官のブルーアイ殿や、ギムで実際に戦ったモイジ殿がわざわざ嘘をつくとは、とても思えないが、あまりにも現実離れしていて、我々は素直に信じる事が出来ないのだよ。」

誰もが同じ思いだった。中には、頷いている者もいる。二人でさえ、信じる事が出来ない大戦果だった。

「二万に満たない部隊で、この戦果を挙げることが出来るとはとても信じられませんぞ。外務卿！本当に彼らは防衛用の戦力しか持っていないのですか？」

この事を信じ切れない者から、野次が飛ぶ。

本来なら、勝てるはずのないロウリアの大軍勢の侵攻を防ぎ、国の危機が去ったので喜ぶべきことなのだが、常識外れの大戦果に政治部会には、ある種の恐怖が宿っていた。

喧騒に包まれる政治部会を、片手で制した首相カナタが発言する。

「いずれにせよ、今回のロウリア王国による我が国への侵攻は、防ぐことが出来た。まだ、敵の戦力は残っているがここまで一方的にやられたら、警戒してしばらくの間は、再侵攻してこないだろう。しかし、この報告書を読む限り敵は、二ホン製の武器に手も足も出なかったと書かれている。国力から、二ホンは桁外れの性能の兵器を使っていると考えていたが、ここまでのものとは思っていませんでした。君は、このことについてどう思う、軍務卿？」

「正直に申し上げると、二ホン製の兵器は驚異的な性能を持っているというしか、言いようがありません。例えば、我が国が輸入したNF—01戦闘機は、かの古の魔法帝国の天の浮舟、そのものです。神話で語られるような兵器が、二ホン国ではすでに旧式化していて、使用されていないということは驚愕に値します。」

政治部会に、大きなどよめきが起きる。

つまり日本は、この世界の誰もが恐れるラヴァーナル帝国よりも、強力な兵器を保有しているということだ。少なくとも、ミリシアルやムー以上の実力があることは確実だ。

騒めきが小さくなるのを見極めて、軍務卿は新たな資料を配布し、話を再開する。

「これからの事ですが、二ホン側から提案がありました。手元の資料を確認してください。」

日本から輸入した上質な紙に書かれた文章を見て、全員が驚愕する。

「ロ・・・、ロウリア王国首都攻撃計画!?!」

「二ホン国は我が国の基地から発進した航空機と、ギムから進軍した陸軍で、ロウリア王国の首都を強襲攻撃し、ロウリア王のハーク・ロウリア34世の身柄を確保したいとのことだ。併せて侵攻軍を攻撃したいとの事です。」

ザワザワザワ・・・、と会議場は騒めき立つ。

「別に良いのではないのか？我々には得しかないぞ。」

「いや、ロウリアと我が国の戦争において、敵国の首都に他国の軍が侵攻し、攻撃するのは・・・。」

「二ホンは我が国と結んだ、集団的自衛権の行使という形で、この戦争に参加してきた。問題はないだろう。」

「いくら二ホン国といえど、敵首都への攻撃・・・。うまくいくとは私には思えないが・・・。」

「しかし、計画通りにいけば戦争の早期終結につながる・・・。最も被害が少ない方法だ。それにあの二ホン国だ。うまくいくだろう。」

議論を重ねた結果、クワ・トイネ政治部会は全会一致で、日本軍によるロウリア王国に対する、陸、海、空の戦闘行動を許可する事になった。

ロウリア王国 首都 ジン・ハーク ハーク城

ロウリア王国を治める大王、ハーク・ロウリア34世は、机に置かれた二つの報告書を前に、震えていた。

一つ目は、クワ・トイネ公国の町ギムの攻略失敗についてだった。ワイバーン150騎と、3万の軍勢が僅かの兵を遺して全滅してしまった。しかも、敵には全く被害を与えることが出来なかったとの事だ。

生き残りの兵によると、

「幾つもの、爆裂の魔法で味方の軍勢が吹き飛ばされた。」
「翼を羽ばたかせずに飛ぶ、鉄竜に味方ワイバーンが一方的に蹂躪された。」

「クワ・トイネ公国の他に、二ホン国という国が参戦していた。」
などだった。

報告には荒唐無稽な部分が多く、信じることが出来ないが3万の軍勢が全滅したのもまた事実だった。
頭を抱えるしかない。

もう一つの報告書は、ロデニウス沖大海戦に関するものだった。こちらもまた、二ホン国という国の城のように巨大な軍船が二隻現れ、3200隻が撃沈され上空支援のために向かった350騎のワイバーンが全て撃墜されたとの事だ。こちらもまた、報告には荒唐無稽な部分が多かった。

「敵艦が爆発したと思ったら、空に太陽のような巨大な火球がいくつも現れ、それが消えたらワイバーン隊が消滅していた。」

「敵艦から、光弾がいくつも発射されて、味方がハチの巣になって撃沈された。」

「敵艦は鋼鉄製のようで、まるでムーの軍艦のような見た目だった。」
と、報告書には書かれていた。

正直に言えば、全く意味が解らない。どうやって、ワイバーン隊を殲滅したのか？どうやって、敵は船を撃沈する魔導を連続で打ち出したか？

疑問が尽きない。まさか神話に登場する古の魔法帝国でも復活したのだろうか？彼は、自国が何を相手に戦っているのかが解らなかつた。

ロウリア王国は、昔から人口がとにかく多いが、人的な質が悪いという問題があった。

しかし、列強であるパーパルディア皇国の助けを借りて、ロデニウス攻略のためにそこその数で、圧倒的な数を6年かけて揃えることが出来た。

しかし、敵には自分たちの兵器が通用しない可能性が高い。

数がものを言う陸戦で何とかするしかないが、果たして通用するだろうか。

王は、その日遅くまで頭を悩ませていた。

第三文明圏 列強国 パーパルディア皇国

光の精霊の力を閉じ込めたガラス玉が、オレンジ色にほのかに輝き、薄暗い部屋に二つの影を映し出す。

二人の男達は、国の行く末に関わる話をしていった。

「……………二ホン国？聞いたことのない国だが……………」

「調べたところ二ホン国は、ロデニウス大陸の北東方向にある島国です。」

「いや、それは理解したが、今までこのような国があったか？大体、ロデニウス大陸から1000kmほど離れた場所にある国なら、我々がなぜ今まで一度もこの国のことを認識をすることが出来なかった？そのことについての理由を考えることが、私には出来ない。」

「あの付近の海域は、海流や風が大変乱れておりますので、船の難所となっております。なるべくこの海域に近寄らないようにしていたので、発見に至らなかったのではないのでしょうか？」

「ふむ……………しかし、文明圏から離れた蛮地であり、海戦の方法も、敵艦に乗り込み戦うという野蛮なロウリア王国とはいえ、たった2隻に3000隻以上撃沈されるとは、いささか現実離れではないかね？」

「報告書によれば、ムーの軍艦のような見た目をしていて、と記されていますが蛮族にはあり得ないことです。きっと、観戦武官も、長い蛮地生活による心労で精神異常をきたしてしまったのかもしれない。今度交代して、静養させてやりましょう。」

「しかし閣下、我々の100門級戦列艦フィシヤヌス級が仮に、ロウリア艦隊と戦ったら、相手から沈められる事は、まずありえませんが。一撃で船を破壊することが出来る射程2kmの大砲の弾が続く限り、ロウリア艦隊の艦船を、一方的に撃沈できます。いずれにせよ、第三文明圏で我が国は最強の国です。二ホンが何隻の船でロウリア艦隊を撃退したのかは、解りませんが、二ホン国も大砲を作ることが出来る技

術水準があると判断するべきなのでしょう。」

「蛮族の分際で、大砲か……。今までロデニウス大陸や周辺国に接してきて来なかったのは、ようやく大砲を作れる技術に達したのかもしれないな。」

「ところで、この戦争でロウリアがまさか負けることはあるまいな？もし、ロウリアが負ければ、我々第三外務局による資源獲得の為の国家戦略に、大きな支障が出るぞ。」

「陸戦は、数が物を言います。ロウリア王国は人口だけは、列強国並みなので大砲を持ち始めたレベルの国を前にして、大敗することはまずありませんまい。」

「兎に角、今回の海戦の報告は荒唐無稽だ。真偽を確かめるまでは、陛下に報告はしない。解ったな？」

「了解いたしました。」

今回の一件に関わったパーパルディア皇国第三外務局と国家戦略局に所属する面々は、観戦武官の交代と真偽の確認を行うことにした。ただ、真偽の確認はあまり積極的に行われなかった。理由としては、

・ 日本を、大砲を持ち始めたばかりの国だと認識していたこと。

・ 列強のパーパルディア皇国が、僻地の蛮族の国に負けるはずがない。

と、考えていたからだだった。

しかし、それが大きな間違いだったことに彼らが気づくには、かなりの時間をかけることになった。そして、この事に気づいた時にはすべてが手遅れの状況になっていた。

クワ・トイネ公国 ギム郊外の日本国陸上防衛隊基地

ドツドツド……と暖機運転して出撃の時を待つ、日本国ロウリア王国王都攻撃隊。

攻撃隊の主力たる15式戦車は、2015年に正式採用されたばかりの新型だった。時速90キロの最高速度と、500kmを超える行動可能範囲を持つが、最も特徴的なのは主砲だろう。主砲には155mmの滑腔砲を二門装備している。この戦車は日本初の、連装砲を装備し

た戦車だった。そして、データリンクと自動化を徹底したために、乗員は二名で済むという破格の性能を持っていた。今回の作戦では、この戦車が80両参加することになっている。

12式陸上指揮車の車内で、この作戦をの指揮を執ることになった大内田が、作戦開始の時を待っていた。

「師団長、本部から通信です。「ロデニウスに日が昇る」です。」
「よし、分かった。全車進軍を開始せよ！目標敵陣地！」

15式を先頭に、攻撃隊は基地を後にした。

クワ・トイネ公国ギム防衛隊の面々は、この戦争を終わらせるために、敵地へと赴く日本軍に対して、直立不動で敬礼をした。

数日後、ロウリア王国 ワイバーン本陣

ギム郊外の戦いと、ロデニウス沖大海戦での大敗北を受けてこの基地にやってきたロウリア三大将軍の一人、スマークはこの基地の強化を命令していた。二つの戦いによって、大きな損害を受けたロウリア軍だが、まだこの基地には10万人の兵力があった。この戦力ならば、たとえ圧倒的な質を持つ二ホン国が来ようと、量によって互角に戦うことが出来るだろう。スマークはそう考えていた。

上空には、付近の基地からかき集めてきたワイバーンが20騎、空を力強く飛ばしていた。スマークは、基地上空で哨戒飛行をしているワイバーン隊を見てつぶやく。

「ふむ、見事なものだな。ワイバーンと、10万の戦力があればそう簡単に負けることはないだろう。」

その時だった。

ワイバーン達が爆発を起こして、バラバラに寸断された。

「なっ何だ!?何が起こったあー！」

スマークが叫んでいる間にも、光弾が超高速で次々と飛行して来て、避けようとするワイバーン達に喰らい付き、その身をバラバラにしていく。あっという間に、ワイバーン隊は全滅することになった。

「あああああああ!!!」

「バカな・・・そんなバカなあー！」

基地内からは様々な声が聞こえてくる。

基地上空を「それ」は凄まじい速度で通り過ぎた。矢じりのような形、灰色に塗られた機体、後ろから炎を2本吐きながらそれは通り過ぎた。

ドーーーーーン!!!!!!

衝撃波が彼らを襲う。

ロウリア王国ワイバーン隊を殲滅したのは、マツハ2という猛烈な速度で基地上空をフライパスしたVTOLF-11だった。

「な、なんて速さだ……。」

スマークに、今まで経験したことのない恐怖が彼に襲ってきた。

しかし、恐怖は彼らに時間を与えてくれなかった。

クワ・トイネ公国方面を監視していた、見張り兵から悲鳴のような報告が飛んでくる。

「な、何だ!? あれは!? 將軍、見たことない化け物がこちらに來ます!! 数、凡そ70!!」

「何だと……。すぐに迎撃せよ。バリスタと攻城兵器も使用して応戦するのだ。急げ!!」

スマークの出した指令に従って、本陣の兵たちは迎撃の準備を急ぐ。

数分後

「敵が来るぞ! 気を引き締めろ!」

馬に跨ったロウリア軍の現場指揮官の発した叫びに、ロウリア軍の緊張がより一層高まる。

クワ・トイネ公国の方角から來た謎の敵は、見たことのないものだった。

二本の巨大な角を前に突き出し、幾つもの足で土煙を上げながら走るその物体に、彼らは驚愕する。

「あれは……。生き物なのか?」

土煙を上げて走る15式戦車を見て、ロウリア軍の兵たちは恐怖に襲われるが、現場指揮官の号令で我に返る。

「臆するな!! この世に倒せぬもの等存在しない!! 必ず倒せる! 歩兵隊、騎兵隊、敵に突撃せよ!!」

「弓隊、矢を放て!!」

弓隊が矢を放ち、歩兵や騎兵が15式戦車の部隊に向かって突撃を始める。

しかし、放たれた矢が届く前に、戦車の砲口が光る。

ズドオーン!

主砲から放たれた155mmの砲弾は、寸分狂わずに着弾しロウリア兵を吹き飛ばす。

前世界において各国の軍関係者から、「世界最強の戦車砲」「これを防ぐことが出来る戦車は存在しない」とまで言われた155mm砲は、歩兵や騎兵隊相手には過剰ともいえる破壊力を生み出した。次々に、ロウリア軍は爆発によって吹き飛んでいく。

ロウリア軍を殲滅するために主砲をマシンガンの様に発射する15式。その発射間隔は2.5秒に一発という驚異的なものだった。

15式の主砲装填にかかる時間は、約5秒である。

では、どの様に2.5秒間隔で発砲しているかというと、二門の主砲を交互に撃っているのである。

歩兵隊や騎兵隊、さらに彼らから離れたところにいた弓隊も、雨あられのように飛んでくる砲弾によって消し飛ばされていく。この光景に、ロウリア軍の心が折れ、士気が落ちる。

もちろん、日本一の練度を持つと言われている第七師団がこの隙を見逃すこともなく一気に、ロウリア軍ワイバーン本陣に接近し攻撃を畳み掛ける。むろん落とされまいと、ロウリア側も奮戦しバリスタを15式に向けて放つが全て複合装甲に弾かれた。

「スマーク様! 奴には、バリスタですら全く歯が立ちません!!」

「陣地内に敵歩兵が侵入しました!! 戦線が維持できません!!」

スマークや士官たちは、次々と入ってくる報告に絶望と恐怖を感じていた。

数はこちらが圧倒的に優勢だったはずなのに、戦いが始まってみれば敵の新兵器と思われる物に、全く歯が立たない。敵の攻撃は、こちらを容易く蹂躪できるほどに強力だった上に、当たればワイバーンに

さえ致命傷を与えることが出来るバリスタですら、敵には全く効かなかった。

「もはやこれまでか……。通信士、王都に魔伝を打て。「敵が王国に侵入した。敵の攻撃によって、我が基地は壊滅した」と。」

ドーン!!ババババ!!

轟音が響く中、スマークは通信士に最後の命令を下した。

通信士がスマークの指示した魔導通信を発した直後、ワイバーン本陣司令部に155mm砲弾が着弾した。

スマークは、自分の体が燃えながら千切れていく光景を最後に、意識を永遠に手放した。

ここに、ロウリア王国のクワ・トイネ公国攻略のために作られたこの基地は、地図上から姿を消すことになった。

ロウリア王国編―04

クワ・トイネ公国　マイハーク港

ロデニウス沖大海戦の後、海上に漂流するロウリア兵を救助してこの港に帰還した日本艦隊。

艦隊旗艦戦艦いずもに収容されたロウリア艦隊の指揮官シャークンは、この前代未聞な巨大艦に驚愕していた。海戦での圧倒的な戦闘力に加えて、自国の船とは比べることが出来ないほどの快適さ。彼は、日本がこの強力な船を、一体どうやって列強から購入したか強い疑問に駆られ、部下たちの手当てをする日本兵に質問してみた。この船はどこから輸入したのかと。

すると、驚きの答えが返ってきた。

「輸入？いいえ、本艦は我が国で建造されましたよ。」

信じられなかった。自国は無論建造できないし、列強であるパーパルディア皇国ですらこのような巨大艦の建造は困難だろう。それを、日本は自分の力のみで建造したという。シャークンは、この事に唯々驚くことしかできなかった。

いずも艦橋

「それで、防衛省は何と言っている？」

「はっ、救助したロウリア兵を明日一四〇〇に到着する予定の強襲揚陸艦はしだてに移乗させたのち、ロウリア王国の首都近郊に位置する港を攻撃、その後陸上防衛軍の作戦を支援せよ、との事です。」

「やれやれ、全く人使いが荒いな。」

そうですね、と副長の海原は上司の愚痴に相槌を打つ。

二日後、シャークンらロウリア艦隊の捕虜をはしだてに移乗させて、準備を整えた日本艦隊はマイハーク港を出港し、ロウリア王国へと出撃していった。

ロウリア王国　王都ジン・ハーク　ハーク城

この城一番の大きさを誇る大会議室で、作戦会議が開かれていた。「パタジンよ、現在の敵の位置はどうなっている？」

玉座に座るロウリア王国大王ハーク・ロウリア34世からの質問

に、ロウリア軍総司令官パタジンが席から立ち上がり、その問いに答える。

「はっ！クワ・トイネ公国から我が国に侵入してきた敵軍は、スマーク將軍率いるクワ・トイネ公国侵攻用に用意したワイバーン本陣を陥落させた後、工業都市ビーズルに向かっていると思われます。しかし、彼らの数は1万にも満たないという報告が上がっております。現在、ビーズル郊外にミニネル將軍指揮する五万の兵力を展開しています。我が国三大將軍の一人であるミニネル將軍ならば、必ず殲滅することが出来るでしょう。」

「うむ。スマークの件は、いきなりの奇襲で十分な準備が出来ずに敗北し、結果として国境を突破されてしまった。だが、二度と国境突破などさせるな。くれぐれも頼んだぞ、パタジン！」

「ははっ！肝に銘じます！必ずやこの国を守ります！」

これで、なんとかなるはずだ。

玉座に深く座りなおしたハーク・ロウリア34世は、そのように考えていた。

ワイバーン本陣陥落から数日後、ロウリア王国王都北側港

別名ジン・ハーク港ともいわれている港の一角にあるロウリア海軍本部の一室の窓際で、海将ホエイルは、頭を悩ませていた。

目前には、1200隻の軍船が整然と並んでいた。その姿は、常々艦隊を指揮している彼からしても、ため息が出るほど壮観で美しいものだった。どのような敵が相手でも勝てると思っていた。あの時までは。

(あの海戦、あれは戦いではない、あれは虐殺だ。)

彼は、ロデニウス沖大海戦を思い出していた。

自分たちの攻撃可能範囲外から、一方的に撃破される屈辱と恐怖。まるで、鍛えられた武人と生まれて間もない赤子を比べるような実力差がそこにはあった。

「どうすれば、あの海の化け物どもに勝つことが出来る・・・？」

彼は、どの様に敵を迎え撃つか考えを巡らせていたが、ふと彼はあの空気を感じ取り、頭を上げた。

いやな予感がする。そしてこの空気は、つい最近感じたことのあるものだった。

次の瞬間、目の前に停泊していた軍船が猛烈な爆音をあげて爆発した。爆発した軍船の木片や部品が、港に降り注ぐ。

たった一度の攻撃で、軍船を破壊することのできる存在。ホエイルは、そのようなことが出来る存在は一つしか知らなかった。急ぎ部屋にある、魔導通信機に向かい命令を下す。

「総員戦闘配置！敵はニホン国だ！！王都のワイバーン隊にも連絡を入れる！！」

軍船の水兵達は、命令を受けて出港の準備を急いで進めるが、その間にも爆音が轟き、船が爆発していく。

「くそー！ニホン国め！！一体いつの間に侵攻して来たのだ！！」

ホエイルは、旗艦に向かって走りながら叫ぶ。

その直上では、ミサイルによる攻撃を終え、爆弾と機銃による攻撃に移行したVTOLF-11型戦闘機とNF-5型戦闘機が、轟音を響かせながら港の空を旋回していた。攻撃は極めて正確で、次々に口ウリア軍船を撃沈していく。

ジン・ハーク郊外　ワイバーン基地

「ジン・ハーク港海軍本部からの緊急連絡！！ニホン国と思われる敵勢力と交戦中！竜騎士隊、全騎発進せよ！！繰り返す、全騎発進せよ！！」

ホエイルの下した命令によって発信された緊急通信を受けて、竜騎士たちは迅速に仕度を整えて愛騎であるワイバーンに向かう。

この基地に配属されたばかりの新人竜騎士ターナケインも、昼休憩を切り上げて出撃準備を行っていた。短剣を腰につけ、落騎防止用の安全ベルトを全身に装着して、革製の兜をかぶる。

出撃準備を整えた彼は、竜舎に走って向かい自分の愛騎に歩み寄る。

クウン、クウンとワイバーンはターナケインに甘えた。

そんな自分の相棒に手を出して、頭を撫でた彼は、手綱をかける。

「今日も頼むぜ、相棒。」

鞍を取り付けた彼はそれに跨り、滑走路に向かう。

滑走路を見ると、ターナケインの先輩たちはすでに仕度を終え、順番に地面を蹴って空へと舞い上がっているところだった。

「おっと、出遅れてしまったか。」

ターナケインは、滑走路が空くのを待ってから、滑走路に侵入した。「よし、いけ!!」

ターナケインの合図とともに、彼を乗せたワイバーンは走り始める。やがて、離陸可能な速度に達すると竜は空へと舞い上がっていった。

ロウリア王国軍の花形である彼らは、自国を奇襲してきた不屈き者を倒すために、一路敵のもとへと向かっていった。

ロウリア王国 ジン・ハーク沖

ロウリア王国から100kmほど沖合いの海域には、空母せいりゆうと空母ほうしようを中心とした輪形陣を敷いている日本艦隊の姿があった。

ジン・ハーク港の破壊と、港にいる敵艦隊撃破の為に艦載機を飛ばし、この海域で待機していた日本艦隊のレーダーに、新たな敵の姿が浮かび上がっていた。

「ロウリア王国王都郊外の基地より、飛行物体が出現しました。数凡そ、120騎。時速約200キロで港に向かっています。」

「恐らく、王都防衛用のワイバーン隊だな。しかし、500騎以上撃破したというのに、まだこれだけの数が残っていたとはな……。兎に角、作戦の大きな障害の一つであるのは間違いない。航空隊にワイバーン隊が接近していることを伝えろ。迎撃は、上空で待機しているUAVF-11に行わせろ。一騎たりとも逃がすな。」

せいりゆうの艦長から出された命令は、日本海上防衛軍の誇るゲータリンクによって迅速に航空隊に通達された。

そして、敵ワイバーン隊の撃滅という命令を受けた自立型無人戦闘機UAVF-11は、速やかにロウリア王国最後のワイバーン隊へと向かっていった。

ロウリア王国 ジン・ハーク上空

100騎を超える竜騎士団は、周囲を警戒しながらジン・ハーク港

に向かっていた。その姿は壮観で、王都に住む人々はその姿を一目見ようと皆空に目を向けていた。

新人竜騎士ターナケインも、先輩たちと共に目を凝らしていた。「ん？」

「どうした、新人？」

「いえ、何か光ったような気がしたのですが……。」

次の瞬間、先頭を飛んでいたワイバーン10騎が爆発し、空に散っていった。

「なっ!!」

ターナケインや他の竜騎士たちが驚愕している間にも、次々にワイバーンや竜騎士達は次々にバラバラになって地上へと落ちていく。

「お、おい！どうした相棒！」

突然、ターナケインの跨るワイバーンが急降下を始めた。彼は新人でありながら、竜と一体化した見事な空中機動が出来たが、ワイバーンが急な行動を起こした場合の対処は、まだ未熟であった。

「くっ、空の王者であるお前が恐れを抱いているというのか!？」

ターナケインの叱責を受けてもなお、彼のワイバーンは急降下を辞めずに、遂に地上に勝手に着陸してしまった。その着陸の衝撃は凄まじくターナケインの握っていた命綱が千切れてしまう程だった。

「ぐえ!!……イタタ。畜生、相棒一体どうしたんだ?」

自分を振り落とす勢いで着陸した相棒に対して悪態をつきつつ歩み寄ると、ワイバーンは空を見上げながら丸くなり怯えていた。

ターナケインも上空を見上げてみると、そこには凄惨な光景が広がっていた。

「な……何!!」

彼らの目の前には、何らかの攻撃を受けて次々に爆発四散していく仲間たちの姿だった。100騎以上いたワイバーン達は、その数をあっという間に減らしていった。

この悲惨な光景は、王都の一般市民達も目撃していた。自分達が最も信じる事が出来る戦力が自分達の目の前で、次々と撃破されることに誰もが自分の目を疑っていた。

爆発四散したワイバーンやヒトだった物が、そんな彼らの頭上に降り注いできた。

「うわああああ!!なんだ、なんだ!」

「いやああああ!!」

降り注ぐ血を頭から浴び、阿鼻叫喚の声を上げる商人達や、大きな悲鳴を上げる女性達。

王都全土に、大きな混乱が発生しこの事態に王都の守備隊が気づくまで時間はかからなかった。

ジン・ハーク港

「な、それは本当か!」

「はい、王都ワイバーン隊は敵の攻撃を受けて壊滅したとの事です。衝撃的な報告を受けたホエイルは、膝から崩れ落ちてしまった。

この戦争で、我がロウリア王国は歴史に残る程の大損害を、短時間で受けてしまった。

空中戦力は全滅し、海軍と陸軍も半数を失った。

しかも、まだ敵には有効な打撃を与える事すら出来ていない。

どうすれば、敵に対抗することが出来るかホエイルが思考する間もなく、悲劇が彼らを襲ってきた。

「ホエイル海将!敵が、二ホン軍が来ました!!あの巨大艦もいます!!」

「つ、遂に奴が来たのか!?!」

沖合いに目を向けると、ロデニウス沖でロウリア艦隊を蹂躪した巨大な軍艦が二隻向かってきていた。

ワイバーン隊の壊滅、そして自分たちを一方的に撃破した巨大艦が向かってきた事で、ロウリア軍の士気はガタ落ちとなった。それは、ホエイルも同じであった。

どうすればいいのか、彼には思いつかなかった。

ホエイルが呆然としているとき、二隻の巨大艦が爆炎に包まれた。

巨大な風切り音が港に響き始め、心が折れた水兵達は破壊から逃げ出そうと走り始める。

「い、一体どうすればいいのだ……。」

これが、ホエイルの最後の言葉になった。

から一キロの地点まで接近していた。

「やれやれ、作戦が必要とはいえここまで敵拠点まで接近しなければならぬのは、かなりのストレスだな。」

「はい、現代戦ではまず有り得ない事ですからね。」

12式陸上指揮車に乗っていた大内田は、指揮車から降車して敵首都を観察していた。

「さてと、敵さんの注意をこちらに引き付けんとな。あの塔を攻撃してみるか。」

「ですが、15式の砲撃では市街地に砲弾が着弾する可能性があります。ここは、自走砲に砲撃してもらって、あの塔を破壊してもらいましょう。曲射で撃てば塔だけをピンポイントで破壊することが出来るでしょう。」

「いくら敵国の民とはいえ、民間人に犠牲者を出すわけにはいかないか……。よし、自走砲隊に砲撃を指示。我々は、このままギリギリまで接近するぞ。」

自走砲は、停車して砲撃の準備を整える。

その他は、敵に気付かれない様にライトを消して、静かに敵首都との距離を詰めていく。

「師団長、自走砲隊から連絡。砲撃の準備が完了したとの事です。」

「よし、全車停止せよ。」

15式戦車や兵員輸送車は、その場に停止した。

「師団長、攻撃準備完了しました。」

「よし、攻撃を開始せよ。」

自走砲が爆音とともに砲弾を吐き出した。

そして、飛び出していった砲弾は、敵の監視塔へと向かっていった。

日本の攻略隊の最初の攻撃目標となった城壁に等間隔に生えている監視塔では、当直のロウリア兵が見張りの任についていた。

「どうだ、何か見えるか？」

「いいや、霧が深くて1キロ先も見えないよ……………ん？」

「どうした、何か見つけたのか？」

「いや、何か光ったような気がするんだが……………」

見張り兵の一人が望遠鏡でその方向を見ようとしたとき、何かが風を切る音が聞こえてきた。

「なんだ？」

誰かが呟く。

次の瞬間、彼らのいる監視塔は自走砲の砲弾によって、彼らもろとも吹き飛ばされることになった。

自室で仮眠をしていたパタジンは、突然の爆発音に目を覚ましベットから飛び起きた。

「なんだ、この轟音は?!」

自室の窓から音のした方向を見ると、監視塔の一つが消えており代わりに見たことのないほどの爆炎が上がっていた。彼は慌てて自分の望遠鏡を手に取り外壁の外を覗き込んでみると、見たことのない物体が多数、壁外に展開していた。

パタジンは、直感的に敵の正体を察していた。

「まさか、二ホン軍か!? 馬鹿な、奴らはビーズルを迂回して広い荒野を進軍してきたというのか!?!」

日本の予想外の行動に驚くパタジンだったが、すぐさま気を取り直し身だしなみを整えながら軍の指揮所に向かう。指揮所では、軍の幹部たちが青ざめていた。

「諸君、現在の状況は?!」

「はっ、将軍。敵の魔導兵器で監視塔が破壊されました。現在のところ、南門付近に敵軍が展開しています。」

「直ちに騎兵隊に迎撃を命ぜよ! 王都防衛隊の各部隊も、南門に集結させよ。」

「それが、先程から魔導通信機が不調でして各部隊との連絡がうまくいっていないのであります。」

「何だと! 故障ではないのか?」

「いえ、すべての魔導通信機が一斉に故障するのは、とてもあり得ないです。おそらく、敵が何かしらの工作を行っていると思われる。」

「ならば、伝令を出せ! それと騎兵隊には迎撃の他に、敵の実力を探るように伝えよ!」

「はっ！」

パタジンの命令は伝令兵によって、各部隊に通達された。

既に準備を整えていた騎兵隊は、強襲偵察を兼ねた迎撃をするために南門から出撃していった。

無論、この騎兵隊の出撃は日本側に察知されていた。

「大内田師団長！敵騎兵隊がこちらに接近してきます。数、約400！」

「敵騎兵隊を迎撃する！各車、機銃で迎撃せよ！」

命令を受けた戦車隊は、主砲同軸機銃と、砲塔上部の機銃を敵に向けて攻撃を開始した。

圧倒的な銃弾の嵐が、勇敢なロウリア騎兵隊を襲った。彼らの鎧は、銃弾を受け止めることが出来ず、次々とロウリア兵は倒れていった。

半数近くが倒れた時、ロウリア騎兵隊は城壁の中へと撤退していった。

「敵騎兵隊、後退していきますー！」

「攻撃やめ！警戒態勢は現時点で維持。」

予想外の攻撃を受けたロウリア騎兵隊は、過半数の兵隊を失ったが城壁の奥に撤退することに成功した。

大怪我を負いつつも生還した騎兵隊長は、よろめきながらパタジンの元へと向かい彼に報告を行った。

「しよ、将軍……。敵は、少数ですが礫のような光弾を見たことのないような速度で放ってきました……。我が騎兵隊は……。過半数がやられました……。」

「そうか、ご苦労だった……。直ちに手当てを受けるのだ。」

この言葉を聞いた騎兵隊長は、その場に崩れるように気絶した。そんな彼を運び出した後、パタジンは次の策を講じる。

「敵の攻撃方法は分かった……。光弾の貫徹能力が高いのならば防衛力重視の重装歩兵をぶつけよう。そして敵の視線を引き付けて、他の部隊に攻撃を加えさせよう。」

今度は、分厚い鋼鉄製の鎧と頑丈な盾で武装した重装歩兵と歩兵隊

に攻撃を命じた。

「我が国を守るために、この命を捧げよ！全員突撃——！！」

南門から姿を現し、大声を上げて突撃をしてきた重装歩兵たちに、大内田の命令で再び攻撃が加えられた。

「グアバー！」

「ギャツ！」

だが、彼らの鋼鉄製の鎧は日本の銃弾を受け止めることが出来ず、次々と兵隊達は倒れていく。

しかし、そんな彼らに一筋の希望の光が現れた。

「おお、見よ！敵の光弾をもつともしない者が現れたぞ！！」

一人、ただ一人だけ日本の攻撃に耐えている重装歩兵がいた。

彼の持つ盾は、ロウリア軍で正式採用されている物とは違うものだったが、その盾は光弾を次々と弾いていた。

「勇者だ……。我が軍に勇者が現れたぞ……。」

「うおおおお！！勇者に続け！！突撃、突撃——！！」

その重装歩兵を目撃したロウリア軍は士気が爆発的に上がり、左右から日本軍に突撃を仕掛けてくる。

その光景は、大内田ら幹部も目撃していた。

「冗談だろ、12.7mmを弾くとは……。それに、敵がああ盾の騎士に鼓舞されたな……。直ちにヘリ部隊に支援を要請しろ！それと、ああ盾は出来れば回収するようにしてくれ。」

大内田はジン・ハーク港の沖合で待機している空母せいりゅうと空母ほうしように待機しているヘリ部隊に上空支援を要請した。すぐさま、8式対地戦闘ヘリ「はちどり」20機が現場へと急行する。

このヘリ部隊の存在は、最初気づかれることはなかったが現場まで残り10kmの地点で偶然にもロウリア軍がこの部隊のことに気付いた。

「司令官、ジン・ハーク港の方角から敵飛行物体がこちらに向かって来てますー！」

「なんだと？それで、迎撃は可能か？」

「ダメです。我々にはもうワイバーンは一騎も残っていません。迎撃

は不可能かと。」

「くそ！ワイバーンが後10騎でもあれば迎撃できるのだが……。」

この破壊された基地に急遽作られた臨時の防空司令部では、誰もが何も出来ないことに誰もが意気消沈するが、その時この仮の指揮所に一人の竜騎士が兜を脇に抱えてやってきた。

「司令官、私に行かせてください！」

「君は？」

「第二竜騎士隊所属のターナケインです。私に任せてください。」

「任せてくださいと言われても、敵の飛行物体は20騎もいるぞ。勝算はあるのか？」

「大丈夫です。敵はおそらく我々の航空戦力が壊滅していると考えていると思います。その油断に付け込み奇襲を仕掛けます。そうすれば、敵も警戒して撤退できると私は考えています。」

「ふむ……。分かった。君の案に任せる、やってみてくれ！」

「はっ！」

司令官から許可を取ったターナケインは、愛騎に跨り出撃していった。

彼は前回の航空戦の経験から、ミサイル攻撃を警戒しながら低空飛行で日本のヘリ部隊へと向かっていった。

そして、遂に日本ヘリ部隊を目視圏内に捕らえた。

「来た！やるぞ、相棒!!」

地面ストレスレで飛行していたターナケインは、自分のワイバーンを鼓舞しながらヘリ部隊の死角から一気に接近していった。

彼は、他のヘリからの攻撃を受けないようにするために、最後尾のヘリに目標を定めた。

愛騎は口内に炎を貯めて、導力火炎弾の発射態勢に入った。

「化け物め！墮ちろ!!」

彼の合図で、ワイバーンの口から導力火炎弾が放たれ、ヘリへと向かっていった。

「やったか!?!・・・何っ!?!」

ターナケインは、この攻撃は当たると確信していた。

だが、そのへりは攻撃が当たる寸前で機体を旋回して攻撃を躲した。

ターナケインからの攻撃を受けた「はちどり」を操縦する大塚1尉と伊藤2曹は、突然の奇襲に冷や汗をかいていた。

「危なかったな……。お前が機関砲の動作チェックをしていなかったら、間違いなく喰らっていたな。」

「ええ、偶然とは言え、肝が冷えましたよ……。」

伊藤の言う通りターナケインの攻撃を避けることが出来たのは、伊藤が機関砲とガンカメラの同期テストをしていたら、偶然こちらへ向かって急上昇をしてきたターナケインの姿を見つけ、咄嗟に操縦桿を操作したからである。

「しかし、敵のワイバーンは全て撃墜したはずだろ？一体どこに隠れていたんだ？兎に角、あれを喰らったらこちらも危ないな……。」

「そうだな……。隊長、こちら18番機。奴は自分達が引き止めます。行ってください。」

「こちら、一番機。単独は危険だ！複数で掛ければ確実に落とせるぞ。」

「隊長、陸さんの応援には一機でも多いほうが良いと思います。隊長達は先に行ってください。」

「……………すまない。頼んだぞ。」

「了解!!」

大塚は操縦桿を操作して機体を部隊から離れると、ターナケインの注意を引き付ける様に飛行を始める。

「さあーと、勇敢な竜騎士殿。お前の相手は俺たちだ！」

ロウリア王国編―05

ロウリア王国王都ジン・ハーク郊外で突発的に始まった、はちどりとワイバーンの空中戦。

「くそ！前回の奴と比べると遅いが、その分変な動きをしやがる！」
ワイバーンを操り、攻撃タイミングを見計らっているターナケインは、はちどりの不規則な動きに動揺を隠せないでいた。

「お？奴さん、かなり良い腕をしているな。」

一方、巧みにはちどりを操る大塚もターナケインの腕前に、唯々感心する。

「前に演習を行ったクワ・トイネ公国の竜騎士と比べたら、粗削りとはいえ動きに迷いが無いですし、かなり積極的に攻撃を行っているように感じます。」

「恐らく、軍役に就いたばかりの若い奴なのだろう。だが、それにしては腕がいい。これは、一筋縄ではいかんな。」

油断すれば、此方が食われると判断した大塚は、被害を少なくするために出来るだけ本隊から離れるように飛行する。

「待て！化け物め！」

ターナケインは、本隊には目もくれずに目前にいる、大塚のはちどりを執拗に追いかけてくる。

「喰らえ!!」

大塚のはちどりに対して、ターナケインは再び導力火炎弾を放つが、はちどりは寸手に避ける。

「クソ！ちょこまかと！」

ターナケインは、はちどりの軌道に悪態をつくが、すぐに思考を切り替え愛騎を操縦して攻撃のタイミングを窺う。

「よしよし、奴もちゃんと着いてきているな。」

大塚も、機体に搭載されている空対空レーダーでターナケインが着いてきているのを確認しつつ、伊藤に話しかける。

「奴を本隊から十分離すことが出来た。そろそろ仕留めるぞ。伊藤、ガトリングガン用意!!」

「了解!!目にももの見せてやります!」

伊藤は安全装置を解除し、30mmガトリングガンのトリガーに指をかける。

「準備完了!!いつでもどうぞ!!」

「よし、三つ数えたら行くぞ!伊藤!」

「了解!」

大塚は三秒を数えて、機体を一気にターンさせて機首を後ろに向けて、ターナケインに相對する。

「何っ!?こんな機動が出来るなんて!」

ターナケインは、突然後ろを向いたはちどりの動きに驚愕する。

「伊藤、撃て!引導を渡してやれ!!」

「了解、ガトリング撃ちます!!」

伊藤が引き金を引き、ガトリング砲が唸りを上げて30mmの砲弾を吐き出す。

だが、ターナケインははちどりが急旋回した時、咄嗟に急降下を始めていたために間髪を容れず出来た。

しかし、全ての砲弾を躲すことは出来ず相棒のワイバーンの翼に何か被弾し、翼に大穴が開くことになった。

「くそ、相棒の翼に穴が!!おのれ、この借りは絶対に返すぞ!!」

「なんて奴だ!!あの距離で躲すとは!!」

ターナケインは、相棒に傷を負わせた敵に憤慨し、伊藤と大塚は必中の攻撃を躲した竜騎士に舌をまいた。

奇跡的に躲すことが出来たとはいえ、翼に大穴が空く致命傷を受けてしまったターナケインのワイバーン。彼は、そんな自分の相棒に激励をする。

「相棒、辛いだろうが耐えるんだ!先輩たちの無念を晴らすためにも頑張るんだ!まだ、この戦いの勝機を得る可能性はまだ十分にあるぞ!」

自分が最も信頼するターナケインの激励に応える様に、ワイバーンは態勢を立て直し次の攻撃の準備に備える。

その間に、はちどりは致命傷を躲した敵の飛竜の背後に周り追撃を

開始する。

ターナケインは敵からの攻撃を喰らわない様に、ジグザグに飛びながら反撃の機会を窺う。

そして、自分と敵が南の方角を向いた次の瞬間、彼は手綱を思い切り引き、太陽に向けて勢いよく上昇させた。

反射的に、ターナケインの動きを目で追った二人は太陽の強力な光に目を眩ませてしまった。

「しまった、逆光だ！嵌められた！」

「クソ！まさか、負傷したワイバーンであのような動きをするとは!?!」
目が眩んだことで動きが緩慢になった、そのわずかな隙を見逃さず、ターナケインはちどりの後方100mに取りついた。

「空の王を舐めるなよ!!ニホンの化け物め!!」

至近距離から発射された最大出力の導力火炎弾は、ちどりの驚異的な機動力を以てしても回避することは出来ず、吸い込まれるように機体に命中した。

「やった……、やったぞー——!!」

ターナケインは、敵の撃墜を確信して歓喜の声を上げた。自分の愛騎もまた嬉しそうな雄叫びを上げるが、煙の中に影がまだあることに気付くと絶望が彼らを襲った。

「嘘だろ、最大火力で発射したんだぞ……。何で、何で効いていないんだよ!?!」

その叫びに、まるで裏で合わせたかの様に煙の中から全く弱った様子の子の無いはちどりが姿を現した。

「うてる手はすべて打った……。なのに倒せないなんて、一体どうすればいいんだ……。」

全ての力を出しても勝てない相手に、ターナケインが唯々絶望しているとはちどりの機首が光った。

ブオオオオオ、つという轟音と共に30mm弾が発射され、ターナケインを襲った。

力尽きたワイバーンが、墜落していくのを見ながら大塚は一息ついていた。

「危なかつたな……。はちどりの特殊耐熱塗装と重装甲に助けられたな……。伊藤、武装の被害状況は？」

「ガンは使えますが、他の武装は緊急停止装置が作動した為に使用できません。」

「そうか、こちらでも第一エンジンがオーバーヒート寸前だ。仕方ない、帰投しよう。」

「了解、空母せいりゆうに帰投します。」

ターナケインを退けたはちどりは、本隊に合流することを諦め空母に帰還した。

「18番機より連絡。敵騎撃墜するも、こちらも損傷して空母せいりゆうに帰投するとの事です。」

「了解した。あの二人が被弾するとはな……。相手も凄腕だったという事か……。我々はこのまま陸さんの援護に向かうぞ。」
「了解しました。」

ジン・ハーク南門付近

日本のジン・ハーク攻略部隊とロウリア王都防衛隊の戦いは、膠着状態へと陥っていた。

15式戦車からの機銃攻撃を物ともせず、じりじりと前進する一人の英雄に鼓舞されたロウリア軍の士気は高く、恐れを知らずに攻撃を加えたことで奇跡ともいえるこの状態を生み出していた。

しかし、沖合に停泊している空母から発進したヘリ部隊が到着したことで戦況は激変する。

ロウリア軍の士気向上の一番の要因である、攻撃を耐え続けていた重装歩兵が、はちどりから発射された対地ロケット弾の爆発を受けて吹き飛ばされた。

自軍に現れた英雄があつという間に、そしてあつてなく倒されるのを目撃したロウリア軍の士気は、一気にどん底まで落ちることになる。

この機を百戦錬磨の日本軍が見逃すはずがなく、大内田はすぐさま

反撃を命ずる。

市街地に被害が出ない様に気を付けつつ、戦車砲や機銃、さらには上空からロケット弾による猛攻を加える。この攻撃によって、ロウリア軍はズタズタとなり、唯々蹂躪されていった。

結果としてこの「南門の戦い」によつて、ロウリア軍は王都防衛隊の約7割を失うことになり日本に対してまともな対抗策を打てなくなってしまうた。

その日の夜

大内田は、指揮車の中で敵の王都の南門の現在の様子を確認していた。

ロウリア軍は、残された戦力のほぼ全てを南門にと集結させていた。木材などで簡易的なバリゲートを築き、こちらの攻撃に備えているようだった。

彼は、車内の通信機を手取る。

「よし、こちらの想定通りだな。作戦の最終段階に入る。戦車隊、あのバリケードを派手に吹き飛ばせ！ロウリア軍の意識を我々に集中させるのだ！」

待機していた戦車の内の一両が前進し、その主砲を敵のバリケードに向け発砲する。

155mmの砲弾は正確に目標へと飛翔し、バリケードを文字通り吹き飛ばす。

軽食を取っていたパタジンは、この爆発音に驚き南門へと意識を向ける。ここからでも見えるほどの爆炎に、敵が再び攻撃してきたことを察する。

「二ホン軍め、今夜中に決着をつけるつもりか!?直ちに応戦しろ!敵を一人も、王都に入れるな!」

パタジンは、残存戦力に敵を迎え撃つよう命令を下すと、魔導通信を使って城内警備の任に就いている近衛隊長ランドに連絡を入れる。

「ランド、パタジンだ。聞こえるか?」

何度か呼び掛けてみるが、雑音ばかりで全くランドの声が聞こえない。

短距離の通信すら妨害されて役に立たないことに、パタジンは憤慨するもすぐに近くにいる伝令兵に命令をする。

「ちっ、近距離すらダメか……。伝令兵！」

「はっ！」

「近衛隊長ランドに、何としてもハーク・ロウリア34世陛下をお守りするように伝えろ！」

「了解！」

伝令兵に命令を下したパタジンは、兜を被ると戦闘の指揮を自ら行うために前線である南門へと向かった。

ロウリア軍が南門へと意識を向けている中、ジン・ハークの北側から闇に紛れながら飛行する十数機のヘリ部隊があった。夜間迷彩が施された電動ヘリ「フクロウ」のみで構成されたこのヘリ部隊こそ、本作戦最重要事項であるロウリア王を捕縛するための部隊であった。

南門への攻撃は、この部隊の存在を敵に察知されなかったための陽動であった。事実、敵の意識は南門の外にいる戦車隊に向けられていて、この部隊に気付いたものはいなかった。

「作戦通り、敵は陸さんに釘付けになっているな。有難いな。」

「ええ、囷となっている彼らには、感謝の気持ちしかありません。」

この作戦成功の為、命を懸けて戦っている陸上部隊に特殊作戦群の面々は感謝しつつ、降下予定地点の状況を暗視スコープや赤外線装置などを使って確認する。

「隊長、間もなく降下地点です！予定地点に敵影なし！」

「よし、敵地に突入するぞ！各員、降下用意！」

機内に居た特殊部隊の隊員達は、次々と席から立ち上がり降下の最終準備を始める。

装備の確認を手早く行っている間に、ブザーが短く鳴り機体後方のランプドアが開いた。

開いたドアから、外からの少し肌寒い外気と風が機体内部へと入ってきた。

「よし、準備は出来たな？作戦を開始する！降下する！」

特殊作戦群の隊員達は、フクロウが降下予定地点のハーク城中庭上

空で静かにホバリングを開始すると、ロープを素早く垂らすて次々とラペリング降下で中庭へと降り立っていった。

「こちらランサー1、降下地点クリアー！これより内部に突入する！」
数機の電動ヘリ「フクロウ」から降下した特殊部隊は、事前に極秘に入手した地図を元に中庭から城内へ続く裏門の確保を開始した。

裏門に近づくと一人の隊員が静かに扉を少し開けると、もう一人の隊員が内部に手榴弾を投げ入れた。

中にいた警備兵は突然爆発した何かに驚く間もなく、突入して来た特殊部隊によってあつという間に制圧されてしまった。

「突入口確保を完了しました！」

「よし、このまま侵入するぞ！警察部隊も降下してきてください！」

「了解しました！これから降下します！」

後方で待機していたロウリア王逮捕を担当する警視庁特殊部隊SAT部隊が、中庭へとラペリング降下で中庭へと降り立ち、先に降りていた特殊作戦部隊へと合流を急いだ。

その間に特殊作戦部隊は、三つの小隊に分けられた上で次々と城内を制圧していった。

「こちら第二小隊、二階制圧しました！」

「第三小隊、詰め所を制圧しました！これより、一階の制圧を開始します。」

次々と小隊がハーク城を制圧していく報告を、無線で聞きながら第一小隊はSATと共に三階へと向かって行く。

三階に到着して少し進むと、とりわけ派手な大扉が目前に現れた。「情報によれば、この先が玉座の間のはずだ……。こちら第一小隊、玉座の間に突入する。」

豪華な装飾が施された大扉を、ショットガンを装備した隊員が扉の鍵を破壊して扉を開ける。

玉座の間は、ろうそくの僅かな光のみで照らされていてとても薄暗かった。その為、隊員隊はナイトビジョンを装着して玉座の間へと侵入していった。

「さすがに広いな。気を付けろ、伏兵が潜んでいるのかもしれない」

い……。」

中に入り注意深く進んでいくと、目の前には玉座の間を見下ろすことが出来る様に高い位置に設けられた玉座へと続く階段があった。さらに警戒を強めながら、その階段に向かって行く。

そのとき、誰かが柱の影から出て来た。

「はっ。」

銃を構えたその先に居たのは、この場には不釣り合いの二人のメイドだった。

まるで、誰かに無理やりここに連れてこられたかのように、怯えた表情で震えていた。

特殊部隊の一人が、素早く捕縛用のテザーガンに持ち替えてメイドの二人を電気ショックによって気絶させた。

「ほう……、やはり民間人は殺さぬか。」

そこへ、もう一人の人間が薄い笑いを浮かべながら柱の裏から現れた。

「私は、近衛隊隊長のランドという。二ホン軍よ、今までの戦いを注意深く観察するとある一つの共通事項があることに、私は気付いた。それは、お前達は民間人に被害が及ぶ事を、極力避けていることだ。お前達は、お前達の騎士道精神か、何らかの法や教えで民間人への被害を禁止していると見た……。」

ランドの的確な状況の把握に、特殊作戦群の隊員達は、内心大きく驚いた。

ランドに銃を突きつけながら、第一小隊の小隊長であるランサー1が反応する。

ランドに見えない様に発砲準備の手合図をしながら。

「ほう、どうやら貴公はかなりの策士と見える……。この暗さと二人のメイド、そしてあなた自身が気を引く囪となる……。実に見事な時間稼ぎだ……。総員、撃て!!」

第一小隊の隊員達は、小隊長の命令を受けて暗闇へと銃を向け発砲する。

「ギャアアア！」

「グフッ！」

暗闇に隠れ、ロウリア王を守る最後の砦である近衛隊の伏兵達は、特殊作戦群の突然の射撃になすすべなく倒れていく。

「撃ち方やめー！」

射撃が終わるとそこには、頭や心臓を撃ち抜かれ物言わぬ屍となつた伏兵隊の姿があつた。

ランドは、こちらの手が読まれていた事に愕然とし項垂れるしかなくあつた。

「何故だ……。何故、こちらの手が読めた……。」

「暗闇に紛れての奇襲、戦いの常識だからな……。この抵抗、間違はなくロウリア王はこの先に居るな。警察の方々、ここは我々が押さえしておくので、確保をお願いします。」

特殊作戦群が近衛隊で唯一生き残つた隊長ランドを拘束している間に、SATは玉座の裏にある扉を開けて奥の部屋へと突入した。

王の居室に相応しい豪華な部屋の奥にある椅子に、一人の男が彼らを待つていたかのように、どつしりと座つていた。その顔には、恐れ表情はなかつた。

SAT隊長は、メットのバイザーを上げて懐の写真を取り出して身元を確認する。

「ロウリア王国国王、ハーク・ロウリアさんですか？」

「ああ、そうだ。我がロウリア王国国王、ハーク・ロウリア34世だ。」
「そうですか。では、あなたをクワ・トイネ公国及びクイラ王国へ侵攻行為の首謀者として、身柄を拘束させていただきます。」

「この戦の勝者は、お前達だ。好きにするがいい。私の覚悟は出来ている。」

「では、あなたを逮捕します。」

王の両手に手錠が掛けられ、ハーク・ロウリア34世は遂に日本の手に落ちた。

「よし、目標確保に成功した。撤収するぞ。急げ！」

ロウリア王国最高権力者の身柄を確保した特殊作戦群とSATは、素早くハーク城から離脱していった。

「師団長、突入部隊より入電しました！」

「何と言っている？」

「はっ、「アマノイワトヒラク」です。」

「よし、作戦目的完遂だ。総員後退せよ！」

大内田は、作戦成功の報告を聞き、すぐさま部隊に後退を命じた。囿の役目を無事に果たした陸上部隊は、迅速に南門から離脱していった。

この日の朝、ハークロウリア34世の姿がハーク城のどこにもないことに大混乱に陥っていたロウリア軍に、日本陸上防衛軍からロウリア王の身柄を拘束したことを伝えられた。

臨時の最高責任者になったパタジンは、これ以上の戦闘は犠牲者を生むばかりで無用でしかないと判断し、日本陸上防衛軍に対して、民の身の安全を保障することを条件に降伏した。

こうして、後に歴史書に「ロデニウス大陸戦争」と記載されるこの戦いは、この世界では常識外れの速度で日本、クワ・トイネ公国連合軍の勝利で終わった。

敗戦国となったロウリア王国だが、被害が軍のみだった事と日本からの復興支援が行われたことによってこちらもまた、この世界の常識外れの速度で復興、発展をしていった。

数年後には、新生ロウリア王国は世界から「準列強国」と呼ばれるほどの国力を得ることになるが、これはまた別のお話である。

これは、日本とクワ・トイネ公国が同盟を結んだ直後の事である。

日本 東京都新宿区 防衛省

「総理官邸からの連絡で、我が国とクワ・トイネ公国との間に、無事に国交が樹立された。クワ・トイネ公国は我が国に対して、食料の輸出と引き換えに技術輸出と軍事力の強化を求めて来たとの事だ。この会議は、クワ・トイネ公国へ輸出する兵器の選定を行う。様々な意見が出ることを期待する。私からは、以上だ。」

防衛大臣である巖田は、会議室に集まった職員に対して宣言すると、椅子に深く腰かけた。

早速、一人の若い職員が手を上げ発言をする。

「クワ・トイネ公国へ輸出する陸上兵器に関してですが、私は「60式戦車」を提案します。あの戦車は、我が国では完全に退役した旧式であり、法律に記載されている「重要技術」や「最新技術」も使用されていません。更に、状態が非常に良好なものが200両以上あります。迅速な配備が可能と、私は提案します。」

「私は反対だ。60式戦車の主砲の貫徹力は現在でも十分通用するレベルだぞ。中世国家には、威力過剰なのではないではないか？」

「確かに威力過剰の可能性があるが、我が国に残っている最も古い稼働可能な戦車は60式だけだ。まさか、初代「貫徹お化け」こと99式戦車を再生産するわけにはいくまい？しかも、クワ・トイネ公国は隣国ロウリア王国にいつ攻められるか分からない状態だ。多少は目をつぶり、今すぐ近代化すべきでは？」

「過度な近代化は、悪影響になるのではないか？そもそも……。」

新たな世界の新たな友人の為の会議は、様々な意見が出され夜遅くまで活発に議論が行われた。

会議二日目の正午までには、「陸上兵器及びヘリコプターは、最新の物でも1960年までに採用された物までとすること」が、賛成多数の多数決で決まった。

陸が決まったら次は、空であった。

こちらは、意見が二分することになった。

「私は、NF―01型戦闘機を輸出することを、提案いたします。」
「待て待て待て！NF―01型は、超音速戦闘機だぞ！いくら旧式とはいえ基礎的な技術は、現用の機体と同じ物だ！私は断固反対だ！せめて、NF―0型にすべきだ！」

「いや、NF―0型こそ現実的では無いだろう！NF―0型の飛行可能な機体は20機程度しかないんだぞ！軍の任務に耐えられる物は、片手の数も残っていないだろう。再生産体制を整えるまで、桁外れの時間と金が掛かる！それよりは、僅かでも生産ラインの残っているNF―01型を輸出すべきだ！」

など、会議室は「NF―01型を輸出すべき」と主張する派閥と「NF―0型を輸出すべき」と主張する派閥に分かれて、陸上兵器の選定以上に白熱する事になった。

この議題は、会議三日目になってもなかなか決まらずに四日目までもつれ込む事となった。

最終的に、生産ラインの問題や現在の兵器規格に合わないことが理由となってNF―0型は候補から外れ、NF―01型をクワ・トイネ公国仕様に改修したのちに輸出することに決まった。

会議は最後の議題である海上兵器の選定に移ったが、これまでに以上に難航することになった。

その理由は、凄く単純なものであった。

「輸出できる艦がないか……。」

「はい、現在モスボール保管されていた艦艇は、ほぼ全ての艦が現役への復帰が決まっています。決まっていないのは、一部の大型艦のみですが……。」

「きい型やひりゅう型を輸出することは出来んしな……。いくら古いとはいえ、戦闘能力が別格に強力すぎる。」

「たとえ輸出できたとしても、補助艦艇が一切ない主力艦などいいのだ。だが、我が国は補助艦艇に余裕がない状態だ。つまり……。」

「新規に建造するしかないですね。問題は、艦の設計図も一から作る

ことになることです。相当の時間と金が掛かる事が確定しています。設計図さえあれば、大幅に時間を短縮できるのですが。」

「ああ、どこかに設計図でも転がっていないもんですかね・・・。」

「出来るれば、建造されることのなかった未完成艦が良いな。面倒事が無くて助かる。」

「ん？未完成艦？・・・あ、ああああ!!!」

「未完成艦」という言葉を聞き、何かを思い出したように大声を出す一人の職員。

あまりに声が大きく突然に発したので、巖田を始め全員が驚き、その職員に目を向ける。

「どうした？何か思い出したのか？」

「大臣！未完成艦の設計図はありますよ！幻に終わった「35年度艦隊増備計画」の物が!!」

「そうか、あれか!?確かにあの計画は来るべき第二次世界大戦に備えて、戦艦や空母、巡洋艦、駆逐艦など、全ての艦種の更新を計画していたな！」

「それに加えて、航空戦艦や航空巡洋艦、更に大型巡洋艦の建造も計画されてきました。戦争の早期終結や、当時の仮想敵国であるドイツが海軍をあまり復興させなかったので、結局一隻も建造されませんでした。設計だけは全て完了していたはずですよ。」

「しかし、半世紀以上前の設計図だぞ。まだ、残っているのか？」

「それについては安心してください。防衛省の地下の資料室に保管されています。」

一人の職員がパソコンを使ってデータベースにアクセスし、「35年度艦隊増備計画」の設計図が、資料室に全て保管されていることを確認した。

「よし、クワ・トイネ公国への輸出艦は「35年度艦隊増備計画」の物を現代仕様に改良して建造する。これに、反対する者はいるか？」

この意見に反対する者はいなかった。

こうして、異世界兵器輸出国議は無事に終わり、兵器輸出に向けて各々の職員はそれぞれ行動を開始した。

会議が終わった日の夜 首相官邸

「……という事で、クワ・トイネ公国への兵器輸出は説明した物を輸出することに決定しました。」

日本国総理大臣である武田は、巖田から会議で決定した事の報告を受けていた。

「なるほど理解した。しかし、あの幻の計画を再利用することになるとはな。先人達に感謝しなければならないな。」

「その通りですな。ただ、現在の仕様に設計変更を行う為、海上戦力の輸出は暫く時間が掛かりそうです。陸空については、半年以内に輸出できます。」

「この件については、専門家である君達防衛省に一任するよ。ところで、他に報告することはないのかね？」

「……総理、人払いをしてください。例の計画の進捗状況についての報告があります。」

「分かった。少し、待ってくれ。」

武田は、SPを含めた人員を部屋の外に待機する様に命令を出して、人払いをした。

「この部屋にいるのは、私だけだ。報告をしてくれ。」

「はい。」「Project A」と「Project T」は一号機が完成し、現在稼働試験を行っております。早ければ来年には、実戦配備が出来ると予測されています。」「Project S」、」「Project N」は試作機の製造が開始されました。こちらは、2年から3年程掛かると見込まれています。」

「おお!?あの二つのプロジェクトが遂に実を結ぶというのか!」

「はい、我々の長年の努力が遂に形になることとなります。これで、我が国の防衛力は飛躍的に向上することになります。出来れば、抑止力として運用したいのですが……。」

「前世界なら可能だったと思うが、現世界は覇を唱える国がとても多い。確実に戦力として運用することになるだろう。無論、その様なことにならない様に、最大限努力するがね。」

「Project S」、「Project N」の両プロジェクトも、出来るだけ早く完了する様に全力を出します。」

「頼むぞ、いつまでも我が国の防衛を天照型に頼り続ける訳にはいかない。」

「はっ、ではこれで失礼します。」

電話が終わると、武田は別室で待機していた職員を呼び戻して仕事を再開した。

後日、日本国はクワ・トイネ公国への兵器輸出と軍事指導を開始した。

パー・パルディア皇国編―01

日本国がハーク・ロウリア34世を逮捕した事で終結した「ロデニウス大陸戦争」。

この戦争に勝利した日本はロウリア王国臨時政府と条約を結ぶと、直ちにロウリア王国への支援を開始した。

それと同時に、ロウリア王国に戦力を提供した存在の調査が行われた。

クワ・トイネ公国から、

「ロウリア王国の国力で、あの規模のワイバーンと艦船を用意できるわけが無い。」

という、情報が提供されたからだ。

ロウリア王国臨時最高責任者であるパタジンや捕虜となった海将シャークン、そしてロウリア王国国王ハーク・ロウリア34世への聞き取り調査を行った。

日本の実力を知った彼らは、その力が愛する祖国へと再び向けられない様にするために、何があつたのかを素直に話した。その為、短期間で事実が発覚した。

「第三文明圏列強国であるパー・パルディア皇国が絡んでいるだど？それは本当か？」

「はい、聞き取り調査を行った全員がそう答えていました。列強国が関与していたと仮定すれば、今回の一件、全て辻褃が合います。」

「そうか……。聞けば、この世界の列強国はプライドがとても高いと言う。我が国の事を知れば、確実に服従を強いるだろうな。」

「その通りです、総理。事実、覇権国家であるパー・パルディア皇国は、ロウリア王国がロデニウス大陸統一の後、奴隷や資源を寄こす様にと命令していたとの事です。」

今までに得た情報から想像する事が出来る、パー・パルディア皇国の危険な思想。

武田は、暫く思考したのち決断する。

「うむ……。よし、パー・パルディア皇国を仮想敵と認定する。巖田君、

直ちにパーパルディア皇国対策を始めてくれ。」

「はっ！」

「それと、吉田君（外務大臣）。」

「はい。」

「これから外交を行う予定の国の選定はどうなっている？」

「外交を行う予定の国は、現在三ヶ国です。第三文明圏の文明国アルタラス王国と文明圏外国フェン王国、そして第二文明圏の列強国ムーです。それぞれの使節団には海賊対策と我が国の力を示す為に、海上防衛軍の護衛が付きます。」

「分かった。だが、あまり相手を威圧しない様に心掛けてくれ。」

分かりました、と外務大臣が答える。

その後も会議は夜遅くまで続いた。

西暦2018年7月、第二文明圏列強ムーに向かう使節団を乗せた戦艦えちごを旗艦とする第九艦隊が呉から、第九艦隊出港から一か月後の8月、アルタラス王国とフェン王国に向かう使節団を乗せた戦艦さつまを旗艦とする第七艦隊が横浜から出港していった。

パーパルディア皇国 皇都エストシラント

ファイルアデス大陸で最も？栄しているパーパルディア皇国の皇都エストシラント。

この都のとある酒場に昼間から酒を飲んでいる男が一人いた。

男の名前はヴァルハル。

ロウリア王国に観戦武官として派遣されていた彼は、戦争が終わる前にロウリア王国から呼び戻され休養を言い渡されていた。

（くそ、頭が固い奴らめ。俺が見てきた事を「精神疾患による幻覚」だと決めつけやがって。くそつたれ、くそつたれ・・・。）

自分の報告を全く信じない上層部に腹を立てていたヴァルハルは、何度も酒を浴びる様に飲んでた。

その時、一人の男が酒場に入ってきた。

「おいおい、ヴァルハル。お前、昼間つからどんだけ飲んでるんだ。」

「うん？ああ、クロムか。」

酒場に入ってきて、ヴァルハルの隣の席に座ったのは彼の親友であるクロムだった。

クロムは、酒場の店主に幾つか料理を注文するとヴァルハルに何かあったのかを聞いてきた。

「それで何かあったんだ？国家戦略局の若きエリートであるお前がやけ酒なんて。」

「聞いてくれ、クロム。ロウリア王国がクワ・トイネ公国に戦争を仕掛けたのを知っているか？」

「ああ、ロウリア王国がクワ・トイネ公国に敗北したと聞いていたが、そこで何かあったのか？」

「さすが、第三外務局のエリートだな。今回の戦争は、我が国の支援を受けたロウリア王国の勝利に終わると誰もが考えていた。無論、俺もだ。」

「ん？我が国の支援を受けていたのに負けたのか？クワ・トイネ公国が何か新戦術を繰り出してきたのか？」

「それだったら、まだ良かったのだがな。クワ・トイネ公国には支援国がいたのだ。その国の名前は「二ホン国」。」

「二ホン国？聞いた事が無いな、第三文明圏外の新興国か？」

「二ホン国は、唯の新興国では無い。ロデニウス沖での戦いで二ホン国が出してきた軍艦は二隻。その二隻は、我が国の戦列艦より遥かに巨大で、しかも回転砲塔を装備していたのだ。」

ヴァルハルの爆弾発言に、クロムは飲んでいた飲み物を思わず吹き出しそうになった。

「回転砲塔だ?!我が国でもまだ開発中の代物だぞ！なぜ、文明圏外の国が持っているのだ!?!」

「回転砲塔の技術を持っているだけでも驚きだが、他にも信じれない事が起こった。奴らは300騎以上のワイバーンを、たった一斉射で殲滅してしまったのだ。」

「何だと…。一体何をしたんだ、二ホン国は。」

「俺は海戦で見た事をありのまま報告した。そしたら、突然休暇を言

い渡されたんだ。理由を聞いたら、俺が精神疾患を患っているからだとき。」

これが飲まずにいられるか!と呟くと、ヴァルハルは再び酒をおった。

そのことを聞いたクロムは、思考にふけた。

(回転砲塔を備えた我が国の戦列艦以上の巨体の軍艦や、300騎以上のワイバーンを撃破した原理不明の攻撃……。二ホン国か、唯の国ではないな。まさか二ホン国は、我が国以上の実力を持っている国という事か!?侮れば、我が国が滅びることになるぞ!!)

クロムは、この国に大きな危機が迫っていると判断した。

クロムは隣でやけ酒を飲んでいる親友の肩に手を置くと、あることを頼んだ。

「ヴァルハルよ、少し頼みがある。休暇を利用して、二ホン国の事を調べてほしい。」

「ヒック、クロム。お前はおれのことを信じてくれるというのか?」「お前が公務で嘘をつくとは思えない。そして、今回の事が事実ならば我が国は建国以来の最大の危機を迎えていることになる。そして俺は、あまり自由に動けない。自由に動くことが出来るお前にしか出来ない事だ。」

「・・・分かった。親友の頼みとなれば断れないからな。」
「頼むぞ。」

クロムは、ヴァルハルに二ホン国についての調査を依頼すると、酒場を出て職場である第三外務局に戻っていった。

自室の机に戻り仕事を再開して暫くすると、部下の職員が彼の元に来た。

「何だ?」

「クロム様、カイオス様がお呼びです。」

「カイオス様が?分かった、すぐに行く。」

クロムは書類仕事を一端切り上げ、第三外務局のトップであるカイオスの元へと向かった。

局長室の前で身嗜みを整えたクロムは、扉を軽くノックする。

「カイオス様、クロムです。」

「入りたまえ。」

部屋に入ると、山の様に積み重ねられている書類に目を通している眼鏡をかけた男がいた。

この男こそ、クロムがこの世で最も信頼する人であるカイオスだった。

「カイオス様、何か御用でしょうか。」

「ああ、クロム。君にしか出来ない重要な任務を与える。至急、アルタラス王国に向かってほしい。」

「アルタラス王国にですか……。何かあつたのですか？」

クロムが派遣の理由を聞くと、カイオスは眼鏡をはずし疲れた表情をしながら答えた。

「聞いて呆れないでくれよ。アルタラス王国に派遣されている馬鹿共がやらかしおった。」

「またですか!?!いくら国力が我が国に大きく劣るとはいえ、相手はれっきとした独立国です。敬意を持って対応しなければならぬという事に何故現場の人間、いや、我が国の大多数の人間はその事実を理解出来ないのでしょうか。」

「それは我が国の力を過信し、相手の国を「蛮族」と決めつけて、大きく侮っているからだ。全く、我が国の列強としての地位も安泰であるという保証もないのにな。兎に角、アルタラス王国は我が国に良質な魔石を輸出してくれる国だ。私の代わりに頭を下げに来てくれぬか?。」

「はあ、分かりました。すぐにアルタラス王国に向かいます。」

「頼んだぞ。」

任務を受けたクロムは、すぐに身支度を整える為に部屋を退出しようとしたが、ふとあることを思い出した。

「そういうえば、カイオス様。カイオス様は、「二ホン国」という国を御存じでしょうか?。」

「二ホン国?聞いた事が無い国名だな。最近誕生したばかりの新興国か?それがどうした?。」

「実は、私の親友から聞いた事なのですが……」

クロムは、ヴァルハルから聞いたロデニウス大陸での出来事をカイオスにすべて話した。

最初は軽く聞いていたカイオスだったが、話を聞いているうちに表情はだんだんと厳しくなっていた。

クロムの話が終わる頃には、カイオスは頭を抱えて大きなため息をついていた。

「……話は以上です。」

「おいおい、何だその二ホン国という国は……。回轉砲塔を備えた島のように巨大な軍艦や、ワイバーンの大編隊を一撃で消し飛ばす攻撃だど……。しかも、この件に関わった戦略局や第三外務局の一部の連中はこの事を虚偽の報告として片付けただど？この話が事実ならば、二ホン国はミリシアルやムー以上の力を持っている事になるぞ。」

「はい、おっしゃる通りです。このままでは……。」

自国の力を過信し、極めて重要な情報を虚偽と決めつけた大馬鹿共に呆れ、大きなため息を出すクロム。

ブツブツと、何かを呟きながら暫く考え事をしていたカイオスは、目の前にいる最も優秀な部下に改めて話しかける。

「……クロム、追加の任務だ。二ホン国の情報を出来るだけ集めてくれ。その情報は私の元に直接届けてほしい。」

「了解しました。カイオス様にご納得できる二ホン国の情報を集めてきます。では、失礼します。」

「うむ。気を付けてな。」

日本の事を調べる任務を追加で受けたクロムは、局長室から退室するとアルタラス王国に向かう準備をする為に足早に自分の部屋へと戻っていった。

一方、一人になったカイオスは、椅子から立ち上がると窓際へと歩いて行った。

「この国は腐っている……。どうかしなければな……」

美しい街並みを有する皇都エストシラントを眺めながら、カイオスはパーパルディア皇国を変える為の行動を開始することを決意する。

第二文明圏 ムー大陸沖合い

どこまでも続くような大空の下、一機の複葉機が飛んでいた。

世界第二位の実力を持つ国、ムーが世界に誇る戦闘機マリンである。

600馬力のエンジンとムー最先端の航空力学を取り込んだ機体が発揮する、時速380キロという高速性とワイバーン以上の機動性は世界の国々に強い衝撃を与えた。

特にワイバーン以上の機動性は世界の国々に強い衝撃を与えた。

ムー海軍の空母ラ・コスタ所属のパイロットのランドが操るのは、ラ・コスタ級で運用する事を前提に改良された艦載機仕様のシーマリンである。

ランドが飛んでいるムー大陸東側の海域は、ムーとの国交を結ぶために訪れる船団や商人を乗せた貨客船が多く来航する海域である。その為、この海域の哨戒任務は重要かつとても多忙な任務なのだ。戦闘艦好きであるランドは、なかなか見ることが出来ない他国の戦闘艦を見ることが出来るこの仕事を天職とさえ考えていた。

今日は、どこの国の船を見ることが出来るだろうかと考えていたらランドの目に、幾つもの航跡が飛び込んできた。

「こちら哨戒部隊ランド少尉、中型艦二隻小型艦複数で構成された船団を発見。これより、国籍を確認します。」

ムーの誇る無線通信機に、船団発見の報告を入れたランドはその船団へと向かう。

最初は何の疑問を持たずに、船団に向かっていったランドだったが途中で違和感に気付く。

(ん？なんだ、この違和感は・・・)

その違和感の答えは、船団の全体がよく見える位置に来た所で発覚する。

「な、なんじゃこりゃー——!!」

思わず大声を上げるランド。

彼の目前には、とても信じることが出来ない光景が広がっていた。

中型艦と考えていた二隻の船は、一隻が戦艦、もう一隻が空母であつたが問題はその大きさであつた。

ムー最大の戦艦ラ・カサミより遙かに巨大な船体を持つ二隻の艦。どちらの艦もラ・カサミの三倍以上の巨体であつた。

また、ランドが小型艦と考えていた艦船も、ムーで運用されているあらゆる軍艦より巨大で洗礼された船型をしていた。

数秒間、呆然としていたランドだったがすぐに我に返り無線機に報告を入れる。

「こちら、ランド！発見した船団は、超大型戦艦一隻、超大型空母一隻を含む大艦隊！艦隊を構成している艦は、全て我が国の海軍艦艇より巨大である！超大型艦の全長は、300mを優に超えている！応援を求む！」

「こちら、ラ・コスタ。少尉、300m越えの艦艇とは本当の事ですか？」

「ああ、本当だ！早く応援を寄こしてくれ！」

ラ・コスタの船員達は、最初は誤報だと考えていたがランドの物言えぬ激しい剣幕に事実であると判断する。

空母ラ・コスタは、周りで護衛していた巡洋艦や駆逐艦と共に謎の船団へと舵を切る。

「こちら、ラ・コスタ。現在、我が艦隊が向かっています。少尉、未確認艦隊にコンタクトは取れますか？」

ランドは直ぐにコックピット備え付けの強力なライトを取り出し、スイッチを押し込むがライトは光らなかつた。開発されたばかりのライトは、壊れてしまったようだ。

ランドは、役立たずのライトに舌打ちしつつ無線を入れる。

「こちら、ランド。ライト故障により使用不能。コンタクトをとるために、謎の艦隊の空母に着艦する。」

「なっ！危険です、ランド少尉！もし、攻撃されたらどうするのですか！？」

「仮に、この艦隊が我が国に攻撃するつもりならば、このまま航行させている方が危険だ！そうすれば、レイフォールの二の舞になってしまう

！私が着艦後、30分以内に無線が繋がらなければ、直ちにあの艦隊に攻撃をしてくれ！」

「……少尉、了解しました。死なないでくださいよ。」

無線を切ると、ランドはスロットを上げて謎の艦隊の後方へと向かう。

高度を下げていくと、艦隊を構成している艦の大きさがよくわかる。

そして、ムーの艦艇では必ず発生するものが無いことに気付く。

（ん？排煙が無い!?どうやって、航行しているんだ!?）

よく見るとほとんどの艦船が煙突と思われる構造物が無かった。

どの様な機関を搭載しているのか、ランドは疑問に思いつつも超大型空母へと接近していく。

未確認艦隊の中央を航行する超大型空母は、従来の飛行甲板に斜めになった甲板を加えた見たことのない甲板構造をしていた。

（飛行甲板の一部が斜めになっている……。何故、このような構造を……。まさか、発艦と着艦で使い分けているのか!?いや、それにしては発艦距離が短い。どの様に、発艦するんだ?）

一度、空母の上空を通過すると乗員と思われる人がこちらに手を振っていた。

（どうやら、こちらに敵意はないようだな……。）

空母に着艦する為の旋回をしつつ、ランドは超大型空母の乗組員の様子からこの船団がムーに対して敵対意識を持っていない事を確信した。

空母の後方に着くと、マリンを操って着艦姿勢に入る。超大型空母の甲板では、作業員が大慌て艦内へと退避をしていた。

「そりゃそうか、連絡もなくいきなり着艦しようとしたら、誰だつてビックリするしな。」

甲板の様子を見ながらつぶやくと、ランドは最終着艦姿勢になる。すると、艦尾に備え付けられた装置が光り始める。

（着艦誘導装置だと……。我が国でも開発中の物を実用化しているというのか。一体この艦隊は、どこの国の艦隊なんだ?）

ムーで開発中のランプ式着艦誘導装置に驚きつつも、ランドはエンジンスロットルを上げる。これは、着艦に失敗した時、すぐに上昇する為だ。この動作をしないで着艦に失敗すると、海に墜落することになってしまう。それは、絶対に避けなければいけない事だった。

ムー最新鋭の星形9気筒600馬力のエンジンが唸りを上げる。このシーマリンには、空母着艦用のフックが備え付けられていたが、この広い飛行甲板ならばそれを使用する事無く止まることが出来そうだった。

前輪が甲板に接した後、後輪をすぐに接地させてブレーキを目一杯かける。

ランドの操縦するシーマリンは20mほど滑走した後、無事に停止した。

「ふう……、何とか無事に着艦できたな……。」

無事に降りることが出来たことに安堵しつつ、ゴーグルを上げて、シーマリンから降機する。

その間に、艦橋から青い服に何かを羽織った者達がこちらに駆け寄って来た。

万が一に備えて、ランドは腰のポーチのリボルバーのグリップを握る。

だが、彼に掛けられた言葉は彼を安心させる言葉であった。

「失礼します、ムー国の方ですか？」

「え？ええ、その通りです。私はムー国海軍第二艦隊空母ラ・コスタ所属のランド少尉です。」

「そうですか！私は、日本国海上防衛軍第九艦隊所属空母かいようの副長寺田です。」

「二ホン国？聞いた事のない国名ですが、我が国に何用でしょうか？」
「我が国は貴国との国交を結ぶために、遙々第三文明圏からやってきました。」

「なるほど……。貴艦隊は間もなく我が国の領海に入ります。国交開設が目的ならば、此方に向かって来ている第二艦隊に通信を入れるが……。」

「はい、是非お願いします！」

「分かりました。少し、お待ちください。」

すぐにランドはシーマリンの無線機で艦隊の所属は二ホン国という国である事、彼らに敵意が無い事、そして国交を結ぶことを望んでいる事を伝えた。

パーパルディア皇国編―02

第二文明圏 ムー大陸沖合い

ムーと国交を結ぶために、日本から遙々航行して来た日本国海上防衛軍第九艦隊はムー国海軍第二艦隊による臨検を受けていた。

第九艦隊の旗艦を務める戦艦えちごでは、臨検の為にムーの巡洋艦から移乗して来たムー軍人たちが、えちごの規格外の主砲を目の前に固まっていた。

「・・・おい、この主砲。口径何センチだ？」

「少なくとも、ラ・カサミの主砲よりデカいのは確定です・・・。」

彼らは、一年前に行われていたラ・カサミの就役記念式典を思い出していた。

ムー最新にして最大最強の戦艦ラ・カサミ。

従来艦を凌駕する18ノットの高速性と二基の30cm連装主砲を備えたその勇ましい姿は、彼らに誇りを与えた。我が国は、とんでもない戦艦を生み出したのかと。

しかし、このエチゴという戦艦を見た時、彼らの誇りは跡形もなく消し飛んでしまった。

この化け物戦艦と比べると、ラ・カサミは玩具同然だろう。

ラ・カサミの物より巨大な主砲を、ラ・カサミの三倍の12門も搭載している異国の巨大戦艦。

現在就役している全てのムー戦艦をぶつけても、この巨大艦を沈めることが出来ないだろう。

彼らは、日本とムーの間にある実力差を実感していた。

一方、ランドが着艦した空母かいようの艦橋では、えちごに並走するムーの巡洋艦を眺めながらかいよう艦長である多々良が副長である寺田と話をしていた。

「で、どうだった？この世界で唯一の科学文明国家の軍人は？」

「はっ！率直に言うと、我々の世界の軍人と大差はありませんでした。列強である事を理由に過度に我々を威圧している様子もありませんでした。」

「クワ・トイネ公国やロウリア王国は、ムーはこの世界の列強国の中では珍しく穏やかな国であると言っていたそうだが、その通りだったという事か。」

「はい、とても平和的に国交を結ぶことが出来そうです。．．．ところで、あれどうします?」

寺田は、かいようなの飛行甲板の一点を指さす。

指さした先には異国の航空機に興味を持った甲板要員や整備兵が、シーマリンの周りに集まっていた。

ちなみにこのシーマリンを操って来たランドは、臨検に時間が掛かっている事(えちご)でムー軍人たちが固まっているのが原因)と、昼食をとっていない事を聞いた寺田の計らいで艦内の士官食堂に案内され、かいよう自慢のオムライスを「美味しい!!」と称賛しながら食べていた。

「ランド少尉の複葉機、確か、．．．マリンだったか?どうやって、この艦から発艦するつもりだ?」

「カタパルトで発艦させるわけにはいきませんしね．．．。」

「ジェット機用のリニアカタパルトを羽布張りの複葉機が使ったら、下手したら加速した瞬間にバラバラになるぞ。」

「ですよね．．．。どうしましょう．．．。」

二人はそのことについてとても不安に感じていたが、一人の艦橋要員の言葉がその不安をかき消してくれた。

「あの、艦長、副長。多分、発艦できますよ。」

「ん?何故だ?」

「いやだって、複葉機を運用していた我が国初の空母に、カタパルトなんて代物、付いていませんでしたよ。」

「あつ」

当たり前前のことを思い出すのと同時に、何故そのことに気付かなかったのだろうと思いつながら二人は頭をかいた。

その後、えちご艦内での会談の結果、日本海上防衛軍第九艦隊はムー国海軍第二艦隊の先導の下、ムー屈指の港湾都市マイカルへと向かって行った。

翌日 ムー マイカル郊外

ムー国軍情報分析課に所属する技術士官マイラスは、売店で買った新聞を読みながらタクシーに揺られていた。目的地はマイカルの郊外にある軍民共用のアイナンク空港である。

なぜ、彼が空港に向かっているかと言うと、外務局からの急な呼び出しがあったからだ。

お門違いである外務局からの急な呼び出しとは、何だろうかとは彼は疑問に思っていた。

彼としては、情報分析課である危険な国の事を調べたかった。

その国とは、「グラ・バルカス帝国」。列強であるレイフォルを僅か数日で滅ぼしてしまった、謎の多い国である。レイフォルから逃げて来た人の話によると

「城のように桁外れに巨大な艦に首都が破壊された。」

「ワイバーンより高速な飛行機械を運用していた。」
などを話していた。

この事を聞いたマイラスは、グラ・バルカス帝国は機械文明でありなおかつ桁外れの技術を持っていることを確信していた。つい先週届いたある物が、その考察を後押ししていた。

それは、レイフォルで撮られた一枚の魔写だった。

そこに写っていたのは、ラ・カサミより遥かに巨大な一隻の戦艦であった。

魔写の裏にはメモが書かれており、「グレードアトラスター」と書かれていた。おそらく、この戦艦の名前だろう。

マイラスが、グラ・バルカス帝国と彼の国が保有するグレードアトラスターに危機感を感じているの他所に、タクシーは空港に到着した。

タクシーから降りて、空港内の建物のある一室に入ると上官の軍人の他に、外務局所属の局員がいた。

「おお、待っていたよ。早速だが、君にはとある国の実力を見定めてほしいのだよ。」

「とある国？グラ・バルカス帝国ですか？」

「いや、二ホン国という第三文明圏の新興国だ。聞いた事はあるかね？」

「はい、ロウリア王国と戦争になるも僅かな時間で勝利し、周辺国に実力を示した国だと聞いております。」

「さすが、我が軍一の技術士官だな。話が早くて助かる。実は昨日、その噂の二ホン国の艦隊が昨日東海域に現れた。」

「問題は、その艦隊を構成している軍艦です。臨検に当たった第二艦隊によると350m越えの戦艦と空母が一隻ずついたとの事です。」

「これがその写真だ。と、マイラスの上官が複数の写真を机の上に並べる。」

マイラスはその写真を見ると、自分の目を疑いそうになった。

（デカい!!グレードアトラスターも巨大だったが、二ホンの戦艦も桁外れにデカい!）

「マイラス君、この写真を見て君はどう思う？」

「正直に言つて、驚異的としか言えません。何のための機器か分からない物もありますが、我が国のラ・カサミ以上の戦艦であると断言できます。」

「さすがの見解だな。更に話がある。我々の技術優位を彼らに見せる為に、ここアインナク空港を会談場所にしたら、彼らは飛行許可を願ひ出して来た。」

「当初、外務局では外交官がワイバーンで飛んで来るのか、なんて現場主義な国かと話題になった。ところがだ……。」

「飛行許可を出した所、二ホン国は飛行機械を使用して飛んで来る様なのです。」

「なんですと!!それで、彼らはいつ到着するのですか？」

「間もなく到着する予定だ。ではマイラス君、最初に言った通り彼らの実力を見極めてほしい。」

日本国の外交官を出迎える為に部屋を出た一行は、建物の外に出た。

マイラスがふと滑走路に目を向けると、日本の飛行機械の先導の為

だろうか？複数のマリンが離陸していった。

その後、一向は駐機場の一角に設けられた無線室で日本の飛行機械を待っていた。

暫くすると、無線機から通信が入ってくる。ただ、その内容は彼らを大きく驚かせるものであった。

「二ホン国の飛行機械を目視で確．．．?!?速い!!マリンより速い!!しかも、マリンよりでかい!!」

「なんだと!?!落ち着いて報告せよ!」

「し、失礼しました。輸送型と思われる飛行機械は時速560km程の速度で飛行しています!護衛として随行して来た戦闘機は、測り知れない速度です!」

「そ、そんな馬鹿な．．．。」

ムー自慢のマリンより大型であるのに関わらず、マリンより速く飛行する二ホン国の飛行機械。

しかも、それは輸送機と思われる飛行機械であり戦闘機は速度を測る事すら出来ないという。

(そりやそうか、我が国以上の戦艦を持っているのだから、飛行機械の技術も我が国以上に発展しているのは当たり前前の事か。)

マイラスが一人納得している間に、二ホンの使節団を乗せた飛行機械がアイナク空港の上空に到達した。

マリン以上の速度で飛行できる事だけでも、彼らはとても驚いていたがさらに彼らの度肝を抜く事が起きた。

二ホン国の使節団が乗っていると思われる飛行機械の主翼の先端に取り付けられたレシプロエンジン(本当はターボプロップエンジン)が90度回転して、地面に対して垂直になると、そのままゆっくりと降下して着陸した。

更には、空港の上空で旋回飛行していた二ホンの戦闘機も、空中で一端停止すると輸送機と同じように垂直に降下、着陸して来た。

マイラスは自分の目を疑ってしまった。何しろ、航空機が垂直に着陸することが出来るなど、彼の常識では考えることが出来なかったからだ。

(馬鹿な……。垂直着陸なんて代物、空想上の存在だぞ！我が国は疎かミリシアルでも、不可能だろう。二ホン国……。なんて国だ！) 日本の実力を目の前の航空機の性能から理解したマイラスが言葉を失っている、最初に着陸した機体側面の扉が開き、中から人が二人、降りて来た。

辺りを見渡した後、二人はこちらに向かって来た。

「は、初めまして。私は会談までの間案内を務めるマイラスです。」

「初めまして、日本国外務省の御園です。」

「同じく、佐伯です。」

握手を交わした後、一向は空港の外に止められている車に向かう為に歩き出す。

マイラスが、御園と佐伯にこの空港について説明する。

「このアインク空港は、我が国初の軍民一体型の空港として計画、建設されました。現在、滑走路は二本整備されており、追加するための用地も確保されています。」

マイラスが話していると、外へと通じる道の脇にピカピカに磨き上げられた一機の航空機が駐機されていた。ムーの最新鋭機マリンである。

(二ホン国の方々に見せる為に、わざわざこの場所に駐機させたな。)

マイラスはそう思いつつ、二人にマリンを紹介する。

「この機体は我が国最新鋭の戦闘機マリンです。この機体の特徴はワイバーンと比べようが無い高い飛行性能と、プロペラと機銃を同調させた新型射撃装置を搭載している事です。」

(さあ、二ホン国の大使殿はどのような反応をする?)

「おお、かいような甲板で一度見ましたが、やはり美しいレトロな機体ですな。」

「見てください！星型エンジンなんて、僕始めて見ましたよ！ロマンだなく。」

御園と佐伯の反応から、マイラスは日本では旧式機に当たる機体ではないかと考える。

そして疑問を解決する為に、二人に質問する。

「そういえば、貴国の戦闘機にはプロペラが付いていませんでしたが、どの様に推進力を得ているのですか？」

マイラスの問いに答えたのは、ミリタリーオタクである佐伯だった。

「我々を護衛して来たのは、VTOLF-11という戦闘機です。動力はジェットエンジンです。レシプロエンジンを備えたプロペラ機より遥かに高速で飛行できます。」

「それは凄いですね……。技術屋である私としては、旧型のエンジンでも手に入れて分解してみたいものですね。」

「一般的な原理や設計図なら、我が国と国交を結ぶことで我が国の書店で入手することが出来ます。また、我が国と同盟を結べば、古いですがジェット戦闘機を輸出することが出来ます。」

「ほ、本当ですか!？」

佐伯の言葉に、驚愕するマイラス。

もし、二ホン国と我が国が国交を結び同盟関係になれば、我が国がまだ持っていない最新技術を手にすることが出来るかも知れないのだ。

マイラスは、上層部に二ホン国と同盟を結ぶ事を上申することを心の中で決めた。

その後、マイラスと日本の使者はムー政府が用意したホテルに向かう為に、ムー製の自動車に乗る。

ムーとミリシアル以外の国の人間は、この技術の結晶である自動車に大きな衝撃を受けるのだが、御園と佐伯は当たり前のように車に乗車した。

特に驚いた様子の無い二人に、再びマイラスは尋ねる。

「二ホン国にも、自動車が存在するのですか？」

「はい、少し前のデータですが、我が国には乗用車が1億8000万台以上走っています。」

「そ、そんな数の車が走っていると、道が車で埋まってしまうませんか？」

「我が国は、世界一を自負する信号システムが存在していますので、よ

ほどの事が無い限り大丈夫だと思います。」

「は、ハハッ……。」

マイラスは彼の、いや、ムーの常識外の事ばかりの話に、短時間のうちに精神的に疲れ果ててしまった。

その後、無事に日本の外交官をホテルに届けた後は、上官への報告を簡潔に済ませると自宅に直帰してベットに潜ってしまったマイラスであった。

翌日 マイカル市内 ムー国立歴史博物館

御園と佐伯は、マイラスの案内でムーの博物館へと足を運んでいった。展示物について、簡潔に二人に説明をする。

「では、我々ムーの歴史を手短に説明いたします。まず、各国の方々に御伽噺と呼ばれ中々信じてもらえませんが、我々の先祖は、この星の住人ではありませんでした。」

「はい!!?」

二人の使者は驚きのあまりポカーンとした顔をしている。

まさかこの世界に、自国と同じように転移してきた国があるとは思っていなかったからだ。

始めて日本の使者が驚きの表情をしたので、マイラスはしてやったりと思いつつ、説明を続ける。

「遙か古代の時代、前世界では我が国ムーとアトランティスと呼ばれる国が鎬を削っていました。」

ですが時は一万二千年前、「大陸大転移」と呼ばれる前代未聞の大厄災が発生し、ムー大陸はこの世界に転移してきました。これは、当時に書かれたと思われる幾つもの資料に残されています。これは、残されている資料を元に製作された前世界の惑星です。」

マイラスは、展示されている惑星儀を取り出す。二人は、何度も見た事がある地理配置に驚愕する。

「ここ、ここ、これは地球だ!!!」

「はっっ。」

日本国の使者をさらに驚かせようと思った矢先、彼らは前世界の惑星儀を指さしながら興奮している。

そんなマイラスの疑問を他所に、二人は惑星儀、いや地球儀を指さしながら見つめている。

「むむ!? 南極大陸が赤道付近にありますよ! これ以外は、特に変わったところがありませんが……。」

「いや、地軸の位置も少し違うようだ。だが、これは紛れもなく地球だ。」

「マイラスさん、何故南極大陸が赤道直下の位置に?」

「ナンキョク大陸? 御二人が指されている大陸は、「アトランティス大陸」ですよ?」

「アトランティスだど!!?」

「ええ、そうです。ちなみに……。」

南極大陸が伝説のアトランティスであったことに驚愕する二人に、マイラスは地球儀のとある一角を指さす。

指差した地点には、大陸の横にある四つの大きな島が存在していた。

「この島には、ヤムートと呼ばれる国があつたそうです。前世界では、我が国一の友好国だったそうです。我が国無き今、どうなっているのか分かりませんが……。」

「ちよつとよろしいですか、マイラス殿?」

マイラスの説明に、御園が割って入ってくる。

「どうしましたか?」

「ええ、我が国を説明するのに、最も良い方法が出来ました。」

「はい? どういう事ですか?」

御園の発言に、マイラスは首を傾げる。

御園は、バックから何かを取り出しながら話し続ける。

「我が国、日本国も別世界から転移して来た転移国家です。この「ヤムート」と呼ばれる島国が、我が国であることは間違いありません。そして……。」

御園はバックから、日本の事を説明する為に用意していた地図を取り出すと、地図を開く。

「これが現在のヤムート列島、「日本列島」です。そして、これが我々

が転移する前に居た世界の地図です。」

日本地図、そしてメルカトル図法を使用した精巧な世界地図がマイラスに見せられる。その世界地図を見て、マイラスは度肝を抜かれる。確かに、ムー大陸が嘗てあった世界のムー大陸のない世界の地図がそこにあつた。

御園が、地図の極点にある大陸を指さしながら言葉を続ける。

「我々の元居た世界では、「太古の昔、高度な文明を持っていたが突如として海に沈んでしまった大陸国家があつた」と言う、伝説が残っています。その名は、「ムー」と「アトランティス」。前世界では、一部の考古学者が探していた伝説の大陸です。・・・あなたが、アトランティスと呼んだ大陸は、極点の大陸となり「南極大陸」と、我々は呼んでいます。おそらく、ムー大陸の転移時に地軸がずれたのでしよう。」

「ははは・・・まさかの歴史的発見ですね。この事が事実ならば、かつての友好国同士の時空を超えた再会という事になりますね。後で、上層部に報告しておきます。」

その後、マイラスはムー大陸がこの世界に転移してきた後の歴史を、簡単に伝えた。

一通りの説明が終わり、博物館を出た一向は海軍基地へと向かった。

なぜ、一行が海軍基地に向かっているのかというと、ムー国海軍第二艦隊の先導の下、日本国海上防衛軍第九艦隊がこの港に向かって来ているのだ。

互いの戦艦の説明を行う事を事前に決めていたとはいえ、マイラスは不安を覚えていた。

第二艦隊から送られてきた日本の巨大戦艦の報告を思い出す。あの戦艦は、ラ・カサミの何倍も巨大な船体を持つ戦艦だ。これから説明するのが、不安でしかなかった。

マイカル海軍基地の一角には、ムー国海軍自慢の最新鋭戦艦ラ・カサミ級一番艦ラ・カサミが停泊していた。

「御園さん！見てください！！戦艦ですよ、戦艦！！やはり戦艦は、男の口

マンですよね!!」

「佐伯君、ちよつとはしやぎすぎですよ。しかし、横須賀にある記念艦三笠に瓜二つですね。」

記念艦ミカサ・・・?もしかして、日本にもラ・カサミに似た戦艦があるというのか!?

マイラスは、日本の戦艦を知らないフリをして、御園に質問する。「日本国にも、戦艦が存在しているのですか?」

「あ、はい。我が国には現在「天照型戦艦」三隻、「ふそう型戦艦」十隻、「とさ型戦艦」四隻が現役で稼働しています。また、「大和型戦艦」が二隻練習艦として、そして現役復帰工事を行っている「きい型戦艦」が六隻存在しています。」

事前情報の通り、日本は戦艦を保有しているようだ。しかも、練習艦や予備役艦も含めると合計二十五隻も存在しているようだ。更に、情報を聞き出すために質問を続ける。

「貴国の戦艦の、主砲の口径は何センチですか?ちなみに、ラ・カサミの主砲の口径は30cmですが・・・。」

「大和型は46cm、きい型ととさ型は51cm、ふそう型は61cm、天照型は80cmですね。」

「は、80cm?!?!ラ・カサミの二倍以上の口径ですと!!」
マイラスは、日本の戦艦の主砲口径、特に天照型の主砲口径に驚愕していた。

「そ、そうですか・・・。どうやら、貴国は我が国以上の建造技術を持っているようですね・・・。ところで、先程日本の記念艦がラ・カサミと似ているとおっしゃっていましたが、日本国にも似た戦艦が存在しているのですか?」

「あ、はい。我が国には、三笠という戦艦が存在しています。今から一世紀程前に我が国が「大日本帝国」と呼ばれていた時代に我が国の連合艦隊の旗艦を務めていた戦艦です。その歴史的戦艦とあそこに停泊している戦艦はとてもそっくりなのです。ちなみにこれがその三笠です。」

御園が差し出して来た写真には、確かにラ・カサミと瓜二つの戦艦

が写っていた。

「ほう・・・一世紀も前の戦艦ですか・・・。」

マイラスは、思考を巡らす。

悔しい事だが、日本は自国より遥かに進んだ技術を持っているようだ。つまり、ムー以上に科学技術や機械工学を研究し、習得して来たという事だろう。

しかし、二ホン国の事を知ることが出来たのは悪い事ばかりではない。二ホンが一世紀前に保有していた戦艦ミカサは、ムーのラ・カサミと瓜二つの姿をしていた。つまり、技術を磨いていけば自分達も二ホンのフソウ型の様な巨大戦艦を建造することが出来るだろう。

桁外れな巨大艦や、垂直離着陸が出来る飛行機を作ることが出来る国。

しかも、第八帝国（グラ・バルカス帝国）の様に、他国を侵略するような事は無いだろう。

この国に対抗する為に、是非とも仲良くしておきたい。

ぼおおおー！！！！

マイラスは汽笛の音が港に響いた事で、思考の海から現実へと引き戻された。

湾の方向に目を向けると、ムーの巡洋艦二隻に先導されながら、一隻の超巨大戦艦が入港して来た。

「マイラス殿、あれが日本が世界に誇るふそう型戦艦九番艦えちごです。」

佐伯が入港して来た戦艦を紹介する。

港で働く民間人や軍人達は、ラ・カサミより遥かに巨大な戦艦が現れた事に、上へ下への大騒ぎとなった。

この出来事は、ムー国民に「二ホン国という第三文明圏の新興国が、ラ・カサミを上回る戦艦を持つ」という第一印象を与え、その事実は彼らに大きな驚きをもたらす事となった。

技術士官マイラスのムーの案内が終わった二日後、日本国とムーの会談がマイカルで始まる事となった。

ムーの外交官達は、人生で一番のプレッシャーを受けていた。

理由は、昨日読んだマイラスの報告書である。

その報告書には、とても受け入れることが出来ないことが書かれていた。

・二ホン国は、我が国を遙かに凌駕する科学技術がある。

・ムーにある工業製品の大半は、二ホン国にも存在しており、完成度は二ホン国製の物が高い。

・上記に加えて、二ホン国には我が国では研究中の物や空想上の物まで存在している。

などが、報告書には書かれていた。

信じたくはないが、報告書にはVTOLF-11やマイカル港に停泊する戦艦えちごの写真が載せられていた。

軍事にはあまり詳しくない彼等でも、日本が桁外れの実力を持つている事を理解する代物だった。

これだけでもとんでもない事なのだが、ある二つの情報が彼らにメガトン級の衝撃を与えた。

それは、

・二ホン国は転移国家であり、我が国がこの世界に転移する前に友好があった島国ヤムートである可能性が非常に高い。

・二ホン国の国力は我が国は疎か、ミリシアル帝国よりも上である。である。

もし、一つ目の情報が正しければ、一万二千年前に別れた同盟国と奇跡の再会となる。それは、とてもうれしい事だった。理由の一つに、外交をスムーズに行う事ができる可能性があるからだ。

ただ、問題は二つ目の情報だった。

この事が事実ならば、二ホン国はこの世界で誰もが認める世界最強の国神聖ミリシアル帝国より、格上の存在という事になる。

報告書には執筆者であるマイラスが、なぜこのような考えにたどり着いたかが書かれていた。

それによると、ミリシアルの戦闘型「天の浮舟」より高速で飛行する二ホンの輸送機や、音より早く飛行する垂直離着陸が出来る戦闘機、御園から聞いた二ホンの自動車の数、世界最大の戦艦であったミ

リシアルの「ミスリル級魔導戦艦」より巨大なふそう型の存在が、マ
イラスが二ホン国がミリシアルよりも格上の存在であると結論付け
た理由だった。

この報告書の内容は、ムーの首脳部を大混乱に陥れた。

ただ、二ホン国はグラ・バルカス帝国と比べると、とても穏やかな
国の様である。

更に国交を結べば、まだ見た事のない高技術を手に入れることが出
来るかもしれない。

ムー首脳部は、「拒否する理由はない」として日本と国交を結ぶ事を
決定する。

ただ、経験したことのない格上の相手との国交締結の為の会談に参
加することになった外交官達には、経験したことのないプレツシャー
を受けることにはなったが。

二日間の会談の結果、日本国とムーは国交を結ぶ事となった。

以下が、両国間の同意事項の一部である。

・ムー国は、日本国に、今世界の情報の提供と第二文明圏の国家に
対して、仲介を行う。代わりに日本国は、新世界技術流出防止法で許
される限りの科学技術の提供を行う。

・日本国、ムー国間の為替ルートの設定。

・日ム軍事同盟の締結。

・上記の同盟により、新世界技術流出防止法に違反しない兵器の提
供をムー国に行う。

・ムー国の技術者や学生、学者の留学を、日本国は許可する。代わ
りにムー国は、ムー国内での日本主導による港湾都市開発を許可す
る。

などである。

こうして、世界第二の列強国ムーと第三文明圏外の国日本は、国交
を結び、対等な同盟関係となった。

この一件は、ミリシアルを始め、世界中に衝撃を与える事となる。

一方日本では、ムーが地球から転移して来た国家であるという事実
が、日本中に衝撃を与えた。

ある新聞の一文が、日本人の心境のすべてを物語っている。
「我々は、独りぼっちではなかった。」

パーパルディア皇国編―03

時系列は、日本とムーが国交を結ぶ一週間前に戻る。
アルタラス王国沖合い

世界有数の魔石鉱山を有する国、アルタラス王国に向かっている日本海上防衛軍第七艦隊は、順調に航海を続けていた。

この艦隊の指揮を行っている戦艦さつまの一室では、間もなく接触することになる新たな国との初交流を前に、外交官達が事前の打ち合わせをしていた。

「〜との事です。何か質問はありますか？」

「二つだけ、確認しておきたい事があります。アルタラス王国がパーパルディア皇国に狙われる理由です。世界有数とはいえ、魔石鉱山があるだけで侵攻してくるのでしょうか？パーパルディア皇国国内には魔石を産出する鉱山が無いのでしょうか？」

「直接確認したわけではないので、確証出来ませんがパーパルディア皇国内にも魔石を産出する鉱山は複数存在していると思われる。ただ、彼の大国は戦争に次ぐ戦争で、資源不足が深刻化していると思われる。魔石は魔導兵器には、必要不可欠の存在です。そこで、足りない分をアルタラスの鉱山で賄うつもりでしょう。」

「それならばアルタラス王国政府との関係を強化し、その見返りに優先的に輸出してもらえれば良いのではないか？まさか、第三文明圏の全ての富を手にするつもりか？」

「そのままかだと思われませぬ。噂では、パーパルディア皇国皇族による世界統治を目指しているとの事です。」

その言葉を聞き、日本の外交官達は呆れ顔を浮かべる。

地球の歴史でも世界征服を目指していた為政者や国家は、少なからず存在していた。

ただ彼らは、結果として世界の半分も支配できずにその野望を打ち砕かれている。

様々な言語や文化、人種を一つにまとめるのは非常に難しいからだ。

ましてや、地球より遙かに巨大なこの世界の全てを支配するのは、現実的に見て不可能の事だろう。

そのうえ、パーパルディア皇国は第三文明圏最強であって、世界最強の国ではない。

格上の存在である、ミリシアルやムーとどの様に戦うつもりなのだろうか？

外交官達は、パーパルディア皇国の先見性のない馬鹿な野望についての考察を、一端切り上げてアルタラス王国の話に戻る。

「少し脱線してしまいました。アルタラス王国は、パーパルディア皇国からの侵攻の脅威を受けている国家です。間違はなく軍事同盟の締結を求められる事になるでしょう。我が国の目的は、反パーパルディア皇国勢力を纏め、彼の国の他国への侵攻を防止するのが目的です。ただ、あくまでも相手国の意思が最優先です。その事を頭に入れて、行動するようにしましょう。」

「そのことについては、承知しています。ただ、国交締結に際してアルタラス王国がどのような条件を出してくるのか、少し不安ですが……。」

「では、アルタラス王国が我が国に対して、要求することを想定してその対策を、これから練りましょう。」

日本の将来を担う若い外交官達は、アルタラス王国についての議論を交わした。

この議論は、アルタラス王国との初接触まで何度も行われることになる。

アルタラス王国 王都ル・ブリアス

アルタラス王国の王都であるル・ブリアスは、南国のように美しい透き通った海に面する港湾都市だ。

この街の小高い丘の上にある王城アテノール城の一室では、一人の老人が頭を悩ませていた。

この人物の名前は、ターラー14世。

美しき島国アルタラス王国の現国王である彼の悩みの種は、海を隔

てた隣国であり列強であるパーパルディア皇国の事である。

（くそ、パーパルディア皇国の奴らめ。我が国に理不尽な要求ばかりしおって……。彼奴らの狙いは、我が国を外交の場で無礼な態度を取らせ、それを開戦の口実にする算段じゃろう……。昔は、あちらの面子を立てれば、それなりの譲歩を引き出すことが出来たが、今の皇国は暴虐の怪物と化しあちこちで戦争を生み出しておる。）

ターラ14世は椅子から立ち上がり、部屋の中を行ったり来たりする。

この国は建国以来最大の、危機的状況化にある。

彼は何とかして、この危機を乗り越えたかったが残念な事に、この国には列強と一国で渡り合えるほどの実力はない。数日持てば、十分健闘したと言われるほどの国力や軍事力の違いがあった。

かと言って皇国に下れば、国民全員が奴隷のように扱われることになるだろう。

この国が生き残る唯一の方法は、他国からの軍事支援だけだったがそれも絶望的だった。

皇国以上の国は、世界に三ヶ国しか存在していないうえに、滅多な事で軍を派遣するようなことはしない。もし、派遣されたとしても遠すぎてたどり着いた頃には、この国は滅ぼされている事だろう。

しかし、ターラ14世には一筋の希望が、皇国を蹴散らしてくれるかもしれない国があった。

（二ホン国。あの噂の二ホン国が、我が国に味方してくれば彼の大國の脅威を退けることが出来るというのに！）

王室御用達の商人が彼に伝えた噂。

それは、「二ホン国という新興国の軍が、圧倒的物量のロウリア王国軍を一人の犠牲も出さずに撃破した。」

と言うものだった。

初めて聞いた時には、ターラ14世はその情報を出鱈目だと考えていたが、その考えは直ぐに払拭することになった。

その理由は複数の商人が、とても似た情報を次々に挙げてきた事だった。

そのうちの一人は、クワ・トイネ公国で手に入れた新聞や雑誌を献上して来たのだった。

色鮮やかな魔写を多用した文明圏共通の言語で書かれたその雑誌には、列強国の軍艦より遙かに巨大な艦が写っていた。

この雑誌を読み進める内に、彼はある一つの事実を理解する事になる。

「二ホン国は列強国以上の実力を、少なくともパールディア皇国以上の実力を持つ国である。」

（二ホン国と同盟を結ぶことが出来れば、この国を守ることが出来る。問題は、どうやって二ホン国に接触することだが……。）

日本にどの様に接触するか、ターラー4世は連日頭を悩ませることになる。

だが、その悩みは最高の形で解決することになる。

数日後

アルタラス王国の王都一の大通りを、一人の男がげっそりとした顔でフラフラと歩いていった。

その姿は、この世界の誰もが予想する列強国のエリートとは思えないものだった。

二日前にこの国に入国したパールディア皇国第三外務局のエリートであるクロムは心の中で「馬鹿野郎共」に怨嗟の声を上げていた。

（くそー何が「私は皇国の為にやるべき事をやっただけです。」だ！その有難迷惑な行動のせいで、俺はこの国の方々に頭を下げて回るハメになったんだぞ！一部の連中なんか、俺が本国から来たエリートであるのと知るや否や、取り繕う為だけに余計な行動をして、更に俺の負担が増えたじゃねーか！くそったれ！自分達の行動が、皇国の品位を落としていく事実がなぜ分からないんだ！）

脳内で自分やカイオスに恥をかかせた職員達をフルボッコにしなから、クロムは気晴らしのために港の方向へと歩いていく。

島国であるアルタラス王国の市場には、列強国であるパールディア皇国でもお目にかかれない鮮度抜群の水産物や新鮮なフルーツな

どが沢山売られている。

クロムにとつて異国の市場や港を一人で散策するのは、数少ないストレス解消の方法の一つだった。

港に隣接する市場の屋台で、海鮮魚の串焼きセットと数種類の果物から作ったミックスジュースを買うと、港を一望できる日当たりのよいベンチに腰掛ける。

クロムは、絶妙な焼き加減と塩加減の串焼きとさわやかな味の飲み物を堪能しながら、海の方角をぼんやりと眺める。

「いい眺めだ……。」

エメラルドのように光る海を見て、クロムは少しだけ気持ちが落ち着く。

しかし、自国がこの美しい国に魔の手を伸ばしている事を知っている彼は、この国の民に申し訳ない気持ちを抱く。

(ルディアス陛下は、一体何を考えておられる……。他国と協調し、共に？ 榮していく事こそ真の強国へと繋がる道だというのに……。まさか陛下は、現体制がとて脆いことに気付いていないのか!? どうすればいい……。誰か教えてくれ!!)

幼い頃から世界の様々な国を見て回って来たクロムには、今のパーパルディア皇国が大きな過ちを犯している事に、激しい嫌悪感を抱いていた。

そして、そんな皇国を変えることが出来ない自分の無力さに嫌気がさしていた。

そんな時だった。

ふと、沖合いに目を向けたクロムは違和感を感じた。

(ん?なんだ、あの影は? 島か? いや、あんなところに島はなかったはずだが……。?)

地平線に現れた不審な影。

彼は、暫くそれを眺めていたが、不意に違和感の正体に気付く。

「影が大きくなっている……。? 動いている!? まさか、船だというのか!」
クロムが驚愕している間にも、その影、いや船影はグングンと大きくなつていった。

港の方でも、この事に気付いたのだろう。

普段よりも騒ぎが大きくなり、港からはアルタラス王国の80門級戦列艦二隻があわただしく出港していくのが確認できた。

呆然としていたクロムだったが、ふと一大事が起きている事を認識すると大慌てでパーパルディア皇国大使館へと走り出していた。

(まずい、まずい！俺の勘が言っている、あれは放っておいてはいけないものだ！)

彼は大使館に大慌てで駆け込み、警備兵やすれ違った職員を気にも留めずに自分にあてがわれた部屋のドアを開く。そして、部屋に置かれたトランクの中から、望遠鏡と魔導式カメラ一式を取り出すと、再び港の方へと走り出した。

肩を大きく上下させながら食事をとっていた広場まで戻つてくると、先程まではぼんやりとしていた船影は、複数の船と分かる程にくつきりと見えるようになっていた。

まず望遠鏡を、謎の船に向けてじつくりと観察する。

飾り気のない灰色の船だったが、そんな些細な事よりも重要な事に彼は気付いた。

(帆を張っていない？・ミリシアルの魔導動力船かムーの機械動力船の様な船だろうか？しかし、あのような船は見た事が無い・・・ん？回転砲塔を備えているだど!?一体どこの国の船だ?)

特徴的な外見と知識から、ミリシアルやムーの船ではないと考えたクロムは、更に目を凝らしてどこの国の船でも必ず掲げているはずの国旗を探す。

(艦尾についているのが、国旗か・・・!?あ、あの旗は!!)

艦尾で翻っている国旗を見た瞬間、クロムは自分の顔から血が引いていくのを感じた。

彼は懐から手帳を取り出し、あるページを開く。そのページには、ヴァルハルから聞いた日本国の情報が書かれていた。その中には、日本国の軍船が掲げていた国旗と思われる旗が二つ書かれていた。

一つは、白地に赤い丸が描かれている物で、もう一つは一つ目の旗と同じく白地に赤い太陽が描かれた旗だった。そして、あの軍船が艦

尾に掲げていたのは後者の旗だった。

(な、なんてこった……。あれが、二ホン国の軍艦!!)

ヴァルハルの情報によれば、日本の海上戦力は皇国と比較にならないほどであるという。クロムは、この情報を無事に持ち帰ってきてくれた友に感謝しつつ、魔導式カメラを第七艦隊の先導艦、護衛艦たちかぜへと向けてシャッターを切る。

まず、どれほどの巨体か分かるようにアルタラス王国の戦列艦と一緒に映した後、細部が分かるように倍率を上げて、魔写を撮り続ける。10枚ほど撮った後、クロムは遅れて入港して来た日本の艦隊に目を向ける。

そこには、先に入港していた軍艦の二倍の大きさの艦が二隻存在していた。

「で、でかい。デカすぎる!!?!なんだあの二隻の船は?!ミリシアルの魔導戦艦以上の巨体だぞ!!」

第七艦隊旗艦戦艦さつまと空母ほうりゅうの規格外の船体に、思わず大声を出してしまうクロムだったが、頭を振って冷静さを取り戻すと、魔導式カメラで二隻の魔写を撮り始める。

(なんて、デカイ凶体なんだ……。回転砲塔も馬鹿みたいにデカい……。しかし、あの平べったい船はなんだ?あの巨体の船なのに、なぜ砲を積んでいないんだ?ん?何か積んでいるのか……。?)

一通り魔写を撮り終わると、望遠鏡を手に取り平べったい船を観察する。平べったい甲板に置かれた物を観察してみると、ソレは細長い矢のような体に白銀のように輝く翼を備えていた。

クロムは、謎の物体の正体に見開く。

(あ、あれはミリシアルの天の浮舟!?そ、そんな馬鹿な!!二ホン国はミリシアルの兵器を保有しているというのか!?)

慌てて、魔導写真機を平べったい船に向けて、魔写を撮り始める。撮りながら、クロムは内心とても焦っていた。

それは、日本がミリシアルと同レベルの国力を持っているかもしれないという考えに至っていたからだ。

この世界の誰もが認める世界最強の国、神聖ミリシアル帝国。

古の魔法帝国であるラヴァーナル帝国の遺産を解析することで、世界屈指の実力を持つことになった国で、その大国が保有している戦力の一つが「天の浮舟」である。

最大の特徴は、ムーの飛行機械の様なプロペラ機ではなく、魔光呪発式空気圧縮放射エンジンを使って飛行していることだ。

日本が保有する戦闘機とミリシアル帝国の天の浮舟の外見が似ている事が、彼の考えを後押ししていた。

クロムは、祖国に日本国の脅威を伝える為に魔写を撮り続ける。

ここで少し時は遡り、アルタラス王国海軍所属戦列艦が第七艦隊所属駆逐艦たちかぜに接触した時まで戻る。

アテノール城ではターラ14世や大臣達が、パールディア皇国対策会議を行っていた。

ただ、会議室の空気は良くなかった。

会議の状況を一言で言い表すのならば、「会議は踊る、されど進まず」である。つまり、進展なしという事である。

ターラ14世や大臣達は、パールディア皇国に対抗するには日本の助けが必要不可欠である事は理解していたものの、最大の問題は日本との接点が無い事であった。

日本が何処にあるのかも分からず、使節団を派遣することが出来ない上に、もし日本にたどり着くことが出来たとしても、果たして日本が自分達に救いの手を差し伸べてくれるかどうかも問題の一つであった。

自ら列強国に挑もうとする国はいないと、誰もが考えていたからだ。

パールディア皇国に屈するしかない、誰かが考え始めた時だった。会議場の扉が勢いよく開かれ、一人の兵士が入って来た。会議場まで大急ぎで走って来たのか、兵士は額に大粒の汗をかき、息を荒げていた。

「何事か!?陛下の御前だぞ!!」

「緊急事態であります!!港の沖合に、桁外れに巨大な船で構成された

船団が現れました！」

「なに!?どこの国の船団だ!?何用得来航したか分かるか?」

「はっ、国名は二ホン国。来航目的は我が国と国交を結ぶために、やって来たとの事です。」

「二ホン国だ?!?!」

来航した船団の所属する国家の名前を聞いた瞬間、ターラ14世や大臣達は驚きの声を上げ、何人かは席から勢いよく立ち上がった。

ターラ14世、いやこの場にいる全員の手が震えていた。なかには目頭に涙を浮かべている者もいた。

無理もなかった。この国が生き残る唯一の可能性が、日本と国交を結ぶ事。

その希望の国、日本が我々と国交を結ぶために向こうからやって来てくれたのだ。

暫くの沈黙の内、国王が口を開く。

「・・・分かった。直ぐに、二ホン国の使節団の皆様を、こちらにお迎えしてくれ。くれぐれも、二ホン国の皆様方を不快にさせない様に。」

「はっ!失礼します。」

最上級のもてなしをするように兵に通達させると、彼は大臣達の方を向く。

「皆、二ホン国との会談をすぐに行えるように準備してくれ。今回の会談には、わしも参加する。各々、全力を尽くす様に。特に、二ホン国との軍事同盟を何としてでも結ぶように努力してほしい。」

そういうと、ターラ14世は会議室を後にした。

自室に入り、扉を閉めると椅子に座り大きく息を吐いた。ただ、それはため息ではなく緊張から解放されたときにする安堵の呼吸だった。

「・・・神は、神は我らを見捨てていなかったという事か・・・。」

日本国海上防衛軍第七艦隊がアルタラス王国に到着してから数時間後、アテノール城の大会議室ではターラ14世や大臣が、日本の大使が到着するのを今か今かと待っていた。

一人の大臣は緊張を和らげるために、何度も水を飲んでいった。また、ある大臣は部下の職員と何度も書類の確認を行っていた。そしてついに、彼らが待ちわびていた時が来た。

「失礼します！ニホン国の使節団の方々をご案内しました！」

「通しなさい。」

会談に参加する全員が席から立ち、日本の大使を出迎える。

扉が開くと、アルタラス王国では見た事のない黒っぽい服を着た男性たちが複数人入って来た。そのうちの一人が、歩み出て挨拶をしてきた。

「初めまして、アルタラス王国の皆様方。私は日本国外務省の柳田と申します。どうぞ、よろしくお願ひします。」

「は、初めまして、私はアルタラス王国外務省のライルと申します。ニホン国の皆様、どうぞよろしくお願ひします。そして、此方の方が我が国の指導者である、ターラー14世陛下であります。」

「よろしく頼みますぞ。ニホン国の使者殿。」

「こ、国王陛下でありましたか!?これは、失礼しました！」

直立不動で謝罪をしている日本の外交官に、彼は気にしていないと言葉を掛けた。

使節団が席に座ると、国交開設と同盟締結に向けた会談が始まった。

日本側は、同盟締結に向けて幾つかの条件を提示した。
その内の条件の一部である。

- ・両国の通貨の為替ルートの設定。

- ・アルタラス王国領海内での海底資源の採掘権。

- ・上記の対価として、日本国による各都市のインフラ整備と新世界技術流出防止法に違反しない技術を提供する。

- ・アルタラス王国国内に、日本国防衛軍の基地の建設を許可する。ただし、アルタラス国民の生活に影響を及ばない範囲で建設する。

- ・上記の対価として、日本国はアルタラス王国防衛の義務を背負う。

- ・日本国、アルタラス王国と共同で科学技術と魔導技術の融合の為の研究を行う。

などである。

この条件を聞いたアルタラス王国の面々は、思わず顔を見合わせてしまった。

条件通りならば、二ホン国は海底資源の採掘権と、基地の建設を容認すればインフラの整備と技術提供、更にはこの国の防衛をしてくれると言うのだ。これがもし、パーパルディア皇国ならば属国にしたうえで毎年奴隷の献上を要求してくるはずだ。日本側からすれば少し厳しい条件だったのだが、アルタラス王国からすれば、とても破格の条件であった。

「・・・以上です。なにか、質問はありますか？」

「で、では一つだけ・・・。ヤナギダ殿、二ホン国はこの条件を守ってくれるのか？」

「はい、その通りです。我が国は、同盟国との条約は必ず守る事を国是としています。ご安心ください。」

「そうですか・・・。」

外務局の大臣、ライルの質問に柳田はしっかりと答える。

アルタラス王国国王ターラー14世は、事前に得た情報とこの会談での印象と条件で、日本の事を信用することにした。そして、後世に「アルタラス王国王家最大の英断を下した国王」として名が残る決断をした。

「では、今回はここまでにしましょう。次回以降、同盟締結に向けた話し合いを・・・」

「いや、その必要はない。日本国大使ヤナギダ殿、我が国はあなた方が提示した条件をすべて飲む。」

「えっ!？」

思いもよらない言葉に、この場にいる全員が固まる。それを他所に、ターラー14世は話を続ける。

「すべての条件を飲む。その代わりたった一つ、たった一つだけ貴国に頼みたい事がある。」

「な、何でございましょう。陛下。」

「今、この国は列強であるパーパルディア皇国による侵攻の危機に、瀕

している。いつ滅ぼされるか、分からない状況だ。もし、この国が滅ぼされれば我が国の国民は、奴隷として扱われ惨めな思いを味わうことになる。そんな我々の唯一の希望が大使殿の国、二ホン国なのだ。だから、頼む！」

一端言葉を切り上げ、席から立ち上がるターラー14世。

そして、

「我が国に、貴国の軍隊を迅速に派遣していただきたい！我が国を、国民を悪魔の手から救って頂きたい！この通りだ。頼む、我々を助けてくれ……。」

頭を日本国使節団に下げた。アルタラス王国の大臣や衛兵も、国王に続き、「お願いします！」と次々に頭を下げる。

「国王陛下、皆さん顔を上げてください。」

柳田は、アルタラス王国の面々が顔を上げるのを待ってから、話を続ける。

「皆様の要望である防衛軍の派遣についてですが、私にはこの事を決定する権限はありません。なので、本国に緊急連絡を行い、判断を仰ごうと思います。少しばかり、お時間を頂きますが宜しいですか？」

「分かった。ヤナギダ殿、よろしく頼みますぞ……。」

軍隊の派遣について、使節団が本国に確認を取るといいう事が決まり、最初の会談は無事に閉会した。

会談が終わった直後、使節団は総理官邸に緊急連絡を入れた。

緊急連絡から一時間後、総理官邸

連絡を受けた後、総理官邸に各大臣が緊急招集されて、緊急閣議が開催されることになった。

司会を務める職員が、話を始める。

「それでは、説明を始めます。本で行われたアルタラス王国との会談において、アルタラス王国国王ターラー14世から、我々の提示した条件を全て飲む代わりに防衛軍の即時派遣を要請してきました。どうやら我々の予想以上にパーパルディア皇国の脅威が迫っていたようです。」

「うむ、アルタラス王国に軍を派遣することは事前に決まっていた

事だが、即時派遣となると話は別だ。」

「総理、一つ提案があります。発言宜しいですか？」

「巖田君か、何か良い案があるのかね？」

「はい。アルタラス王国は島国であり、我が国と同じように周りを海に囲まれている国です。他国がこの国に侵攻する為には、海を渡り上陸しなければなりません。そこで、艦隊を派遣してアルタラス王国を防衛します。幸い、パーパルディア皇国海軍の主力は戦列艦とワイバーンなので、十分に対応することが出来ます。そして派遣する艦隊についてなのですが・・・、私は海上防衛軍第一艦隊の派遣を提案します。」

海上防衛軍第一艦隊、この言葉が出た瞬間、会議室は一気に静まり返った。

この案を提案した彼以外の皆が、驚きの表情で固まってしまった。数刻の沈黙の後、武田が口を開く。

「・・・海上防衛軍第一艦隊。彼女を、天照を出撃させると言うのか？」
前世界において、日本海上防衛軍の実力は世界一と言われていた。その理由は、圧倒的な練度と他の国の数十年先の技術で作られた軍艦を多数保有していた事である。そんな、日本自慢の艦隊の中でも別格の強さを持っていた艦隊が存在していた。

それが、第一艦隊、第二艦隊、第三艦隊である。この艦隊には、日本の守り神にして誇りである天照型が一隻ずつ配備されているのである。

桁外れの巨体に、圧倒的な量の武装と一度も破壊されたことのない装甲、そして破格の速度。「一日で大国を滅ぼすことが出来る」とまで言われた、この巨大艦は幾度となく日本や同盟国の「最後の希望」として活躍して来た。

この世界に転移した後、日本政府はこの超巨大艦を異界の国々に影響しない様に運用して来た。

巖田の提案は、この方針に逆行していた。しかも、日本政府内ではこの艦隊を戦争が起こりそうな国に派遣するという事は、「もし、戦争が始まったら同盟国防衛の為に日本が全力を以て対応する。」という

警告を与える事と同義であると認識していた。簡単に言うと、パーパルディア皇国と全面对決を行うと言っているようなものだった。

「艦隊派遣、これについては私も賛成だ。だがなぜ、海上防衛軍第一艦隊なのだ？他の艦隊でも良いのではないかね？」

「確かに、他の艦隊でもパーパルディア皇国を威圧することはできるでしょう。ただ、覇権主義を唱える中世クラスの国が、我が国の艦隊を見て脅威ととらえるかは分かりません。さらにこの世界には、ミリアル帝国やムーの様に大型の軍艦を、複数保有している国があります。我が国の艦隊を見て「文明圏外の国が、列強の国の船を少数購入して気を大きくしている。」と、捉えられる可能性があります。いえ、甘く見られる可能性もあります。何しろ、我が国の軍艦は大砲の数が一部を除き、少ないですからね。「高が、数門の大砲。襲るに足らず。」と攻めてくるかもしれません。そこで、規格外の巨体を持つ天照型を派遣することで、パーパルディア皇国を強く牽制します。それに万が一、パーパルディア皇国がアルタラス王国に戦争を仕掛けたとしても、天照型ならばどのような戦略をとつていたとしても対応することが出来ます。さらに、現在の海上防衛軍第一艦隊には戦艦と空母が二隻ずつ在籍しています。あらゆる状況に対応することが出来るでしょう……。これが、私が第一艦隊の派遣を提案した理由です。総理、どうかご決断を。」

話を聞き終わると、武田は目をつぶって考える。

確かに、彼の意見はアルタラス王国の危機を確実に取り除くことになるだろう。ただ、この案は友好国やまだ接触していない国々に、不信感を与えてしまうかも知れなかった。

数分の葛藤の後、彼は目を開くと座っている大臣達を見回しながら、言葉を紡ぐ。

「皆、落ち着いて聞いてほしい。巖田君の提案は、皆の考えている通りこの世界のありとあらゆる国に影響を与える事になるだろう。だが、思い出してほしい、我が国の信念を。今、圧倒的強者に脅され亡国の危機に陥っている国が、自らのプライドを投げ捨ててまで我々に救いの手を求めて来た。我が国とアルタラス王国、いや未来に生きる全て

の人々の為に、たとえ今非難されようとも最善の行動をしようではないか！私は、ここに海上防衛軍第一艦隊の派遣を容認します！」

「日本国海上防衛軍第一艦隊、アルタラス王国に派遣決定」

この歴史に残るニュースは、あつという間に日本全土へと広がっていった。

各テレビ局やラジオ局は、速報としてこのニュースを報道し、特番を組む用意を始めた。新聞社は号外を大量に印刷し、週刊誌を発行する会社は記事を大急ぎで書き始める。

この日本を揺るがす情報は、日本と親しい国々にも伝わっていく事となる。

ムー マイカル港

大使を乗せて来た戦艦えちごには、マイラスを筆頭に技術士官たちが見学を訪れていた。

彼らは、空想上の存在であった61cmの大口径砲を前に興奮を隠しきれない様子であった。そんな彼らを案内するえちごの艦長の下に、一人の水兵が大慌てでやって来た。

「どうした、そんなに慌てて？ムーのお客様が見学に来ているのだぞ？簡潔に頼む。」

「か、艦長、第一艦隊が！第一艦隊が出撃するとの入電が入りました！」

「な、何だと!?第一艦隊が出撃!?おい、本当か!？」

「は、はい！防衛省からの緊急入電なので確実です！」

「済まない、詳しく説明してくれ。何があった？」

マイラスは、そんな慌てている日本兵と艦長の様子を見ていた。

何処の国の言語にも当てはまらない言葉で話しているので、話の内容は詳しくは分からなかったが彼らの様子から、彼らの国ニホン国で何か一大事があったようだ。

好奇心から、マイラスは彼らに尋ねてみることにした。

「艦長殿、一体何があったのですか？軍機や機密に触れない事ならば、教えてほしいのですが？」

「ああ、マイラスさん。みつともないところを見せてしまって、申し訳ない。軍機に触れない事なので、何が起きたのか簡単に話させていただきます。あなたは、アルタラス王国を御存じですか？」

「ええ、存じております。確か、世界有数の魔石産出国で列強であるパーパルディア皇国の侵攻の危機にあっている国と聞いております。」

「実は、そのアルタラス王国に我が国の第一艦隊が、同盟国防衛の為に派遣されることになったのです。」

「そうなのですか?!しかし、それに何の問題があるのですか?」

「日本国海上防衛軍第一艦隊、地球において世界最強と謡われた艦隊です。何しろ、我が国最大にして最後の切り札、「大国を一隻で滅ぼすことが出来る」とまで言われた天照型一番艦天照が在籍しているのです。」

「アマテラス型!?確か、80cm砲を備えている艦と聞いていますがそんなにすごい艦なのですか!」

「ええ、何しろこのえちごが玩具の船に見えるほどの巨大な艦ですから。」

えちごより遥かに巨大、この言葉を聞いたマイラスは強い衝撃を受けていた。

この戦艦えちごは、ムーの誇る戦艦ラ・カサミより遥かに巨大な艦なのだ。そんな戦艦が、玩具の船に見えてしまう程に巨大だというアマテラスという戦艦が二ホンには存在しているのだ。

マイラスは、やはり二ホン国は世界に多大に影響を与える存在であると再認識し、二ホン国の情報を迅速に集め自国に有利になるように努めることに決めた。

クワ・トイネ公国 首都クワ・トイネ

日本の技術支援を受けて、大きく発展した国クワ・トイネ公国にもこの情報が、在日大使館を通じて届けられていた。

「噂に聞いていた、二ホン国の切り札。それが出撃することになるとは……。」

「それだけ、今回の一件を重要視しているという事でしょう。」

クワ・トイネ公国の首相カナタは、首相官邸の一室でこの一件についての報告を受けていた。

クワ・トイネ公国が天照型の存在を認知したのは、国交を開いてから一週間後の事である。クワ・トイネ公国から日本へと航行していた船団の近くをたまたま第三艦隊が航行していて、その時に彼らは日本最大の軍艦の姿を目にすることになる。

目撃したうちの一人は、

「海の神かと思った。それだけの雰囲気を出していた。」

と、話していた。ちなみに、航行している天照型を見るのは極めて稀な事であり、日本人からすごく羨ましがられたとも話していた。

兎も角、クワ・トイネ公国は日本の事を可能な限り調べた。そして、ある一つの事実に行き着く。

それは、「ニホン国のここ100年の発展は、アマテラス型と呼ばれる三隻の戦艦から得た技術でもたらされたものである。」という事だった。

（ニホン国の方々は、アマテラスの事を「我が国の礎であり、守り神である」と言っていました。確かに事実であるようですね。）

「・・・恐らくニホン国は、本気でパールディア皇国に対抗することになるでしょう。そこで、この国を発展させてくれた恩を少し返しましょう。彼らに、より多くの食料を提供するように調整してください。」

クワ・トイネ公国は自分達に迫っていた亡国の危機を救ってくれた、日本の助力になる為の行動を開始する。

アルタラス王国 王城アテノール城

ターラ14世の好意によって、城の一室で待機していた日本国使節団は本国からの連絡をソワソワとしながら待っていた。

「先輩、どうなると思います?」

「恐らく、艦隊を一つ派遣して様子見になると俺は踏んでいる。ただ・・・。」

「ただ?」

「ただ、あの大国が一つの艦隊を派遣した所で考えを改めるとは、とても思えない。実は、何人かのアルタラス王国人に話を聞いたのだが、彼ら曰、一部を除き傲慢な態度をとる奴らばかりと言う。おそらく、自国の力に酔っているのだろう。そんな国が艦隊一つで怖気着くとは、とても思えない。」

「はあく、なるほど……。とうか一部とはいえ、まともな考えを持つ人がパーパルディア皇国にも居るんですね。」

「ああ、しかもそのうちの一人は、今この国に滞在しているらしい。話を聞いた所、頭を地に着く勢いで下げて何度も謝罪をしていたそうだ。」

「どんな国にもまともな人は居るもんですね。」

そんな時、柳田の携帯電話が鳴った。

雑談を中断し、柳田は電話に出る。

「もしもし、柳田です。はい、はい。……はい!?それは本当ですか!?!?…はい、分かりました。直ぐにアルタラス側に伝えます。はい、では……。」

最初はごく普通に話していた柳田だったが、途中から驚きの声を何度も上げていた。何事かと、周りの外交官達の注目が集まる。

「先輩、何があったのですか?かなり、驚いている様子でしたが?」

「政府は艦隊を派遣することに決めた。……。……派遣されるのは、第一艦隊だ。」

「はい!?!?」

柳田の口から出た衝撃の事実。

艦隊のアルタラス王国派遣はここにいる誰もが予想していた事だったが、まさか日本最強の第一艦隊が派遣されてくるとは、夢にも思っていなかった事だった。

「と、兎に角、艦隊の派遣は決定された。アルタラス王国政府に報告するぞ。」

その後、最初の会談が行われた会議室にて日本政府の判断がアルタラス王国に伝えられた。

艦隊の派遣を聞いた時、ターラー14世は思わず目頭に涙を浮かべて

しまった。

パーパルディア王国の魔の手に、彼は長い間悩まされていた。列強が相手では、味方をしてくれる国もおらず、唯々絶望の中に彼はいた。そんな時に見つけた一筋の希望、それが日本国であり彼はこの国に最後の望みを賭けた。

そして彼は賭けに勝った。

日本国は即座に艦隊を、しかも彼の国最強の艦隊を派遣してくれるというのだ。

周りを見ると、大臣達も目に涙を浮かべていた。なかには、人目を憚らずに泣いている者もいた。

ターラ14世は涙をぬぐうと、席から立ち上がった。

「ヤナギタ殿、そしてニホン国の皆様。我が国に手を差し伸べてくれてありがとう。本当にありがとう。ワシや国民は貴国の御恩を、決して忘れない。ありがとう……。」

そして、最大限の感謝の気持ちを使節団に伝えた。

この後、正式に日本、アルタラス王国の両国は国交を結ぶと同時に各種同盟を締結した。

無事に仕事を終えた使節団は、引継ぎの為に何人かの人員を残すと第七艦隊と共にアルタラス王国を出国、フェン王国へと向かった。

日本 横須賀港

日本有数の港であり、軍港でもある横須賀港。

この港の一角に、報道陣やミリタリーオタク、見物人の大きな人だかりが出来ていた。

その視線の先には、複数の軍艦が停泊していた。その正体は、アルタラス王国に派遣されることが決定し、出撃準備を行っている日本国海上防衛軍第一艦隊である。

その中でひとときわ目立つ巨艦、天照の艦橋内では艦隊司令の佐々木と艦長の倉田が補給の指揮を執っていた。

「補給状況はどうだ？」

「はっ！燃料と弾薬類の補給はすでに完了し、残っているのは食料等の積み込みのみとなっています。現状のペースで進めば、明日の正午

には出撃可能となります。」

「了解した。安全第一で行動する様にしてほしい。」

倉田は乗組員にそう伝えようと、艦長席にどっかりと座った。

彼や第一艦隊の防衛軍人からすれば、異世界に転移して初の海外派遣は親善航海になるだろうと考えていたが、まさかの「同盟国防衛の為の派遣」である。

（この第一艦隊による同盟国防衛か……。覇権国家が多いと聞いていたが、まさかこんな早く出撃することになるとはな。この世界と比べると、地球はとも和平な世界だったのだな……。だが、同盟国の危機となれば、やるべきことは全力でやらせてもらおう！）

一方、第一艦隊司令である佐々木も指揮を取りながら考え事をしていた。

それは、この世界の事である。

この世界には誰もが恐れる、古の魔法帝国が存在していたと言われている。そしてその帝国はある日忽然と姿を消したというが、いつの日か復活するとも。

もし、地球ならば国連主導の下、各国が連携して対抗策を練り戦力を整えるはずだ。しかし、この世界でまともに対抗策を練っているのは、ミリシアル帝国やムー位で、そればかりか一部の国は自分達の利益の為だけに動いている。パーパルディア皇国は代表的な一例だろう。

その上、ミリシアルも世界最強の国としての「義務」を果たしているとはとても思えない。もし日本がミリシアルの立場ならば、自分の利益のみを優先している国に「世界存続の危機に自分勝手な行動をするな。」と警告を与えるだろうが、ミリシアルは一切そのような事をやっていない。それで、よく世界最強を自負できるものだ。

ムーについては仕方ない。何しろ、日本と同盟を結ぶまで永世中立国だったのだ。中立を唱っている以上、他国の争いごとに積極的に介入する事は出来なかったのだろう。

（自称世界最強の国か……。そんな国が天照を見たらどう思うだろうか？「文明圏外の国が持つのは危険だ！我々が管理、運用する!!」と

は、さすがに言わないだろうが、強い警戒心を生むことになるのは確実だな。……まあ、ミリシアルの事は接触した時に考えればよいか。今はパーパルディア皇国の事に集中する事にしよう。)

佐々木は考察を中断し、陣頭指揮を再開する。

翌日 正午

第一艦隊の補給作業は順調に進み、予定通りに終了し遂に出撃の時が来た。

佐々木は艦隊無線を入れると、第一艦隊に所属する全ての艦艇に向けて演説を行った。

「第一艦隊の諸君、艦隊司令の佐々木だ。我々は本日1300、アルタラス王国に出撃する。目的は、アルタラス王国の防衛、及びパーパルディア皇国に対する威圧行動である。

パーパルディア皇国、彼の国の野心の刃は、近い将来間違いなくアルタラス王国のみならず、我が国にも向けられることになるだろう。今回の艦隊派遣は、同盟国アルタラス王国の国民を守るだけではない。戦争を武力の威圧によって抑制し、我が国と我が国の同盟国の国民が戦火に巻き込まれない様にする為でもある！

我々は、平和を愛し、平和の為に戦う戦士である！

「平和」と「明日」を守る為に、私は諸君が己が力を最大限に発揮する事を期待する！

総員、出港準備に掛かれ!!」

午後一時になった次の瞬間、港に大音量の汽笛が響き渡った。

港の一角に集まっていた多くの人の耳にも、この爆音は届いていた。

テレビ局のカメラマンや新聞社の記者が、手にしたカメラを汽笛の音源へと向けると数日前から停泊していた第一艦隊の艦が次々に錨を上げ、もやいを解き、動き始めていた。

一人のレポーターが、動き始めた艦をバックに話し始める。

「テレビの前の皆さん、見えますか？私の後ろで、たった今第一艦隊が動き始めました！この世界に転移して初の第一艦隊の全力出撃です

!!つい先日国交を結んだアルタラス王国は、列強パーパルデア皇国の侵略の危機にあります。異世界の友を守る為に、「The World's Strongest Fleet of Hope and Mankind's Greatest Hope」と呼ばれた艦隊が出撃してきます!!」

「The World's Strongest Fleet of Hope and Mankind's Greatest Hope」、日本語に直訳すると「世界最強であり人類最大の希望の艦隊」である。

この言葉は第二次世界大戦時、とある国の指導者が口にした感謝の言葉である。ドイツ軍の猛攻で国土の90%を占領され、亡国の危機に陥っていたその国は希望を求めていた。その時、現れたのが極東からやって来た臨時編成艦を加えた日本海上防衛軍第一艦隊である。第二次世界大戦における連合軍の大反撃は、この艦隊が到着した時に始まった。

この異名は、反撃のきっかけを作った日本艦隊の偉業の戦果を称え、最大の感謝の気持ちを込めたものであった。

半世紀以上の時が経ち、再び亡国の危機に陥っている同盟国が現れた。

同盟国の危機を打ち払うために出撃していく彼等に、この異名はとてもふさわしいものであった。

第一艦隊を構成する二隻の戦艦、二隻の空母、30隻以上の護衛艦は予定通りに出港した。

港に残っていたのは、旗艦を務める超戦艦天照のみとなっていた。なぜ、天照が最後まで残っていたのかというと、世界最大の巨体を持つ天照型は味方の出港に大きな影響が出てしまう為、出港は最後になる事が決まっている。

「艦長、全艦無事に出港しました。残るは本艦だけです。」

「うむ、了解した。主機関出力70%、補機出力90%、天照出港準備!」

「了解!機関長、機関出港出力!各部署、チェック急げ!」

「武装管制システム、全て正常。異常なし！」

「全航行システム、異常なし！」

「各種レーダー、ソナー及びセンサー類、異常ありません！」

「艦隊間データリンクシステム、接続完了。異常なし！」

各部署から全ての機器が正常に稼働している事が報告されている間に、天照の機関がガスタービンや原子炉、核動力炉のどれとも違う機関音を上げ始める。

「全艦異常なし！全て正常に稼働中！機関出力、出港出力に到達。天照、発進できます！」

「微速前進0.5、天照発進せよ！」

「了解！微速前進0.5、天照発進します！」

艦尾水面下に備え付けられた量子推進器が、推力を発揮し500万トンを超える巨大な船体を動かし始める。

天照が動き始めると、軍港で勤務していた軍人が第一艦隊に向かって直立不動で敬礼をしていた。いや、艦隊を見送っていたのは、軍人だけではない。港で働く一般人や、港の外に集まっていた人達も帽子を取って頭を下げたり、手を合わせて彼らの安全を祈っていた。

ロウリア王国

王都ジン・ハークのとある日本系列の会社が経営しているホテルの一室で、パーパルディア皇国国家戦略局に努めているヴァルハルは、新聞紙を持ったまま固まっていた。

新聞の一面には大きな文字で、「ニホン国の最強戦艦アマテラス、アルタラス王国に出撃す!!」と書かれていた。彼は、震える手でこの大陸で手に入れた一冊の本を開く。

本の題名は、「決定版!!日本国防衛軍の兵器特集」である。

この本には、現在日本で運用されている全ての兵器が掲載されている物で、この本はロデニウス大陸の公用語で書かれたロデニウス版である。

ヴァルハルが震える手で開いたページには、カラフルなイラストや魔写を多用して天照型が分かりやすく説明されていた。

何度も本屋の列に並び、ようやく手にしたこの本に眼を通した時、

ヴアルハルは自分の目を疑ってしまった。なぜなら、彼の、いやこの世界の常識から遙かにかげ離れた事ばかりが書かれていたからである。

音より早く飛ぶことが出来る飛行機械、3000mを超える船体を持つ多数の軍艦、敵に向かって飛んで行く誘導弾など、夢や小説の中の物がいくつも掲載されていた。

そんな規格外の存在の中でも、一際存在感を放っている化け物があった。それが、天照型である。

1000mを超える巨大な船体、桁外れに巨大な砲、そしてパーパルディア皇国の戦列艦より速い航行速度。

はつきりと言ってしまえば、「もし、パーパルディア皇国がこの化け物と戦えば、間違いなくパーパルディア皇国が滅亡する事になってしまうだろう。」で、あった。

そんな巨大艦が、2000mを超える軍艦を複数引き連れてアルタラス王国に向かっている。

噂によると、上層部はアルタラス王国に近いうちに侵攻するとう。

そうなれば、間違いなくニホン国とパーパルディア皇国は戦争状態に突入することになるのは確実だろう。そして、その結果は日の目を見るより明らかだろう。

「・・・大変だ。今すぐ、本国に帰ってクロムやカイオス様にこの事を伝えなければ!!」

ヴアルハルは、パーパルディア皇国へと戻る為に宿を引き払う準備を急ぐ。

こうして、地球において世界最強と呼ばれた艦隊は、様々な国や人々に大きな影響を与えながら異世界の大海原へと出撃していった。

パーパルディア皇国編ー05

フェン王国 王都アモノキ

フェン王国とは、フィリアデス大陸の東に位置する勾玉を逆にしたような国土を持つ島国である。国民は、幼少期から剣術を学び、剣と共に人生を歩むことを国是としている。この世界の中でも生活レベルが低い方だが、誰もが礼儀正しい国民性であることも有名である。

そんな武士の国の王都アモノキを一望する様に聳え立つ、和風な外見を持つアモノキ城の会議室では、剣王シハンの口から重要な事が集まった重役達に告げられた。

「皆の物、覚悟して聞いてほしい。パーパルディア皇国と戦争になるかもしれない。」

王の言葉を聞いた全員の顔が、サツと蒼くなる。

第三文明圏の最強の国、列強パーパルディア皇国。

魔法技術もない、人口にも大きな差があるフェン王国では到底太刀打ちできない存在である。

なぜ、パーパルディア皇国が攻めてくるようなことになったのか？それは、剣王シハンがパーパルディア皇国の「提案」を蹴ったからである。

その「提案」とは、「フェン王国の南部、縦20km、横20kmの範囲をパーパルディア皇国に献上する。」である。パーパルディア皇国側としては、自分達は国土を手に入れ、フェン王国は自分達の技術によって準列強国になることが出来るという素晴らしいものであったが、シハンはこれを丁寧に断った。

提案が断られると、パーパルディア皇国は第二の提案、「同地を498年租借する。」を出したが、これも断った。

この一連の出来事を「列強の顔を潰された。」と感じたパーパルディア皇国は、フェン王国への懲罰艦隊の派遣を決定した。

簡単に言えば、大きな危機がこの国に迫っているのである。

「現在、隣国のガハラ神王国に援軍を要請している。それに各方面でも、この一件についての検討をしている。皆もパーパルディア皇国の

侵攻に備えてほしい。」

会議は進み、もうすぐ終わりになるタイミングで一人の兵士がやって来て、フェン王国剣豪の一人モトムに何かをささやいた。

聞き終わると、モトムの顔はとても驚いた表情で固まっていた。

「モトム、どうした？何があった？」

「・・・剣王様、二ホン国という国の船団が我が国の沖合に現れました。来航目的は我が国と国交を結ぶためという事です。」

「二ホン国？聞いた事が無い国だな、それがどうした？」

「その、二ホン国の船団が問題なのです。報告によると、パーパルディア皇国の戦列艦より遥かに巨大な艦のみで構成されていたとの事です。」

「はっ!?」

モトムの発言に、会議室に居た全員が自分の耳を疑った。

パーパルディア皇国の戦列艦、それは第三文明圏の中で最も巨大で最も強力な存在である。

その存在よりもはるかに巨大な船が存在している事など、彼らの常識ではありえない事であった。

「そ、それは本当か？」

「はい、間違いないとの事です。また、これは商人の間の噂なのですが、二ホン国の水軍は一騎当千の実力があると聞いております。」

「二ホン国か・・・、うまくやればパーパルディア皇国に対抗する策を得ることが出来るかも知れないな・・・。よし、直ちに二ホン国の使者を連れてまいれ！」

「御意！」

二時間後、アマノキ城

謁見の間に通された柳田達は、部屋の中を見回しながら会談の時間を待っていた。

「先輩、何か・・・こう、気がいつも以上に引き締まりますね。」

「ああ、しかしこの世界にまるで戦国時代か江戸時代を連想させる国が存在しているとは思っていませんでした・・・。」

彼らを感じた、フェン王国の第一印象は「武士の国」であった。普段はとても落ち着いている柳田でさえ、興奮して周りを見渡してしまう程、フェン王国はかつての日本に似た文化を持っていた。

「剣王様が入られます！」

声が上がると、柳田達は気を引き締め直して立ち上がり、開いた扉から室内に入って来た人物に一礼した。

「そなた達が二ホン国の使者殿か。」

柳田達は、声や動きから目の前にいる人物が唯物ではないことを感じていた。

それだけの覇気をシハンは身に纏っていた。

「はい。私は日本国外務省の柳田と申します。我々は、貴国との国交を開設及び各種条約を締結したいと思い、参りました。」

「ご挨拶として、幾つかの品を持ってきました。どうぞご覧ください。」

そう言うと、ジュラルミン製のアタッシュケースを開き、日本が世界に誇る「物」が次々に並べられていった。

美しい光沢をもつ布で織られた着物や、大粒の真珠で作られたネックレスなどが並び、シハンと側近らはそれらを驚きと興奮の目で見つめる。

シハンは、並べられた品々の内の一つ、日本刀を手に取り、美しい装飾が施された鞘から刀を引き抜く。

（何だ、この美しい剣は……。細く薄いが丈夫な刀身、手になじむ握り心地と重さ、そしてこの構えやすさ。この剣の前では、我が国のもの等粗品に等しい……。これほどの物を作ることが出来るようになるには、相当な時間と工夫の積み重ねが必要だ。……二ホン国、侮るべからず。）

日本刀を鞘に納めて、元の場所に置くとシハンは、柳田に向き直る。

「いいものを見させてもらった。これほどの物を作ることが出来る貴国に、僕は興味を涌いた。」

「では、国交の開設を前向きに検討して頂けるといふ事ですね？」
「うむ。」

シハンの言葉に、柳田は待つてましたとばかりに国交の開設と各種条約について書かれた資料を、カバンから取り出した。

ちなみに内容は、アルタラス王国に出したものとほぼ同じものである。

書類に目を通し、一通り内容を確認するとシハンはあることを確かめるために、柳田に質問をする。

「ヤナギダ殿、失礼ながら僕は貴国の事をよく知らない。この書類に書かれたことが全て本当ならば、我が国は凄まじい国力を持っている貴国と対等な関係になることが出来るという事になる。そのうえで、一つ聞きたい事がある。」

「何でしょうか、シハン様。」

「貴国の噂の一つに、「たった二隻の軍艦で、3000隻以上の艦を撃破した。」と言うものがある。この噂は、本当の事か？」

「おそらくその噂は、ロデニウス沖大海戦の事だと思います。我が国の戦艦いずもと戦艦でわが、ロウリア艦隊を撃滅した戦いです。」

「ほう、貴国では軍艦を「戦艦」と呼ぶのか。もしか、あの艦隊の中で一番目立っている軍船も、戦艦の内の一隻なのかね？」

シハンは、窓の外の湾に停泊している艦隊の中心を指さす。そこには、艦隊の旗艦を務める戦艦さつまが停泊していた。

「はい、その通りです。」

「僕は貴国の力を知りたい。そこで、提案が一つある。もう間もなく、我が国で軍祭が開かれる。そこで、貴国の戦艦と水軍の力を見せてほしい。」

この提案を聞いた日本使節団の面々は、驚愕の表情で固まってしまった。

国交も開いていないフェン王国が、日本の軍艦の力を見る為に軍祭に参加してほしいと頼んできたのだ。

柳田は、もし前世界ならば、即戦争状態になってしまう事だが異世界だから常識的な考えなのかと、考えていた。

(アルタラス王国に続き、フェン王国もか……。良好な関係に成りかけていたこの一件を、壊す訳にはいかない。仕方ない、また上に報告

するか・・・)。

柳田は、異世界だから武力を使った外交が一般的なのか？と、思いつつも本国にこの一件を報告し、判断を仰いだ。

この報告を受けた日本政府首脳は、再び緊急会議を行った。

会議の結果、日本政府はフェン王国の要請を受諾し、第七艦隊の軍祭への参加を許可する事に決定した。

アルタラス王国沖合い

日本とフェン王国の会談が行われていた頃、アルタラス王国の沖合い100kmの海域を航行しているパールディア皇国の船団がいた。この船団には、アルタラス王国政府から強制退去命令を受けてパールディア皇国への帰国の途に就いたアルタラス駐在の大使たちが乗っていた。

なぜ、彼らがアルタラス王国から追放されることになってしまったのか？

事の発端は、日本海上防衛軍第七艦隊がアルタラス王国に来航した日である。

あの日、港で魔導写真機の乾板(かんばん)と手帳のページをすべて使い切ったクロムは、すぐさま大使館へと戻り、緊急会議を開いた。

会議の場でクロムは、

「アルタラス王国が港に来航した艦隊を有する国、二ホン国と同盟を結ぶ可能性が非常に高い。皆々、慎重にパールディア皇国に最善となる行動をしてほしい。」

と、発言した。

彼は、日本の国力がパールディア皇国より遙かに上であることを、来航した第七艦隊から感じており、今までの姿勢でアルタラス王国に接すれば、遠くない未来パールディア皇国に破滅がやってくることを確信していた。その事態を避けるためには、アルタラス王国を怒らせるような行動は慎まなければならないと、考えていた。

彼の言葉は、この考えに基づいたものであった。

だが、残念な事に大半の職員はこのことを正しく理解できなかつ

た。

彼らの常識では、パーパルディア皇国は第三文明圏最強の国であり、ゆくゆくは世界を統一し支配する国である、という考えが一般的であった。

そんな考えを持っている職員達は、クロムの言葉の中の「パーパルディア皇国に最善となる行動」を曲解してしまったのである。

栄えある皇国が、アルタラス王国と名も知れぬ文明圏外の蛮族の国になめられている。

皇国の威厳を理解しないのならば、恭順しないのならば武力を以て滅ぼしてしまえ。

と、考えてしまったのである。

そして、日本とアルタラス王国が国交を開き同盟を結んだ、次の日遂に取り返しのつかないことをしてしまうのである。

駐アルタラス大使であるカストが、国王であるターラ14世を呼び出し、横暴な態度で以下のようなことを言ってしまったのである。

・パーパルディア皇国にシルウトラス鉱山を直ちに献上する事。

・ルミエス王女の奴隷化

で、ある。

完全にクロムの言葉に逆行した内容である。しかも、呆れる事にルミエス王女の一件はカストの私利私欲の為であった。

そのことを知ると、当然のごとくターラ14世は激怒した。そしてターラ14世はその場で、パーパルディア皇国と国交を断絶し、資産をすべて凍結する事、大使館職員の即時国外退去をカストに宣言した。

こうして、パーパルディア皇国の大使館職員はアルタラス王国から追い出される事になってしまったのである。

パーパルディア皇国の皇都、エストシラントに向かう船団の内の一隻、100門級戦列艦「レイモンド」の一室では、クロムがアルタラス王国で手に入れた日本国についての情報を纏め、レポートを作成していた。

(ミリシアルのミスリル級より巨大な機械動力で動く戦艦、天の浮舟

にいた外見の飛行機械とそれを運用する事の出来る軍艦……。ヴァルハルの言っていたことは、事実だったという事か。二ホン国、侮るべからず、か。しかし……。)

ふそう型やたけみかずち型、VTOL-1型について、自分が見た事を元に文章を書いていたが、ふとアルタラス王国での出来事を思い出していた。

(クソ！カストめ!!俺の努力をすべて台無しにしやがって!!しかも、自分の私利私欲の為だけに他国の王族を奴隷にしようとしただど!?ふざけるのも大概にしろ!他の連中もそうだ!なぜ、止めなかった!)

嫌な事を思い出し、机をバンバンと叩くクロム。

今回の一件を、パーパルディア皇国上層部はアルタラス王国に攻め入る絶好の機会と捉えるだろう。

しかし、彼はアルタラス王国に攻め入る事は、即パーパルディア皇国の終焉に繋がると考えていた。

(とりあえず、馬鹿共の事は一旦置いておこう。今は兎に角、この情報をカイオス様に正確にお伝えしなければならぬ!)

彼は頬を叩き、気持ちを落ち着かせると、レポート作成を再開する。

フエン王国 王都アマノキ

「何度見てもデカいな、二ホン国の軍艦は。まるで海に聳え立つ城のようだ。」

「城というよりは、動く島そのものだな。」

アマノキの港に停泊している、日本の軍艦を見てシハン達は率直な意見を吐く。

日本艦隊を見ているのは、シハンやフエン王国の民だけではない。

この国で開かれている軍祭に参加する為に来航している、様々な国の代表者や軍人達が日本艦隊を見ていた。

「マグレブ、二ホン国の戦艦をどう思う?」

「私は、過去に何度かパーパルディア皇国に赴き、奴らの戦列艦を見してきました。ですが、あれの前では玩具同然の代物です。」

「確かにな……。奴らが保有する最大の戦列艦でさえも、二ホン国の軍艦の前では、小舟同然だな。」

フェン王国の騎士長マグレブとシハンは、日本の戦艦とパーパルディア皇国の戦列艦をそう例えた。

戦艦さつま CIC

フェン王国や軍祭に参加している国の人々が、日本艦隊の異様に驚愕している一方で、日本艦隊側もある事実には驚愕していた。

「うむ、信じられないな。これは、本当か？」

「はい、間違いありません。」

「そうか……。しかし、まさか異世界に早期警戒機並みの電波を発することが出来る存在がいるとは……。」

フェン王国の隣国ガハラ神国からやって来て、今上空を飛行している「風竜」と呼ばれている生物から、レーダーの様な電波が照射されている。航空機に搭載されている物としては、地球で運用されていた物と比べてもかなり高出力なものであり、航空機には十分脅威となる代物である。

この世界において、文明圏外と呼ばれている地域でレーダーを持つ飛行物体が確認された。つまり、文明圏と呼ばれる地域にある国にはレーダーを量産し、運用している国があるかもしれない、という事である。

後に、今回の一件を受けた日本政府は、次世代戦闘機のステルス機能の排除案を撤回する事になる。

「艦長、フェン王国から「全ての準備が整った」との報告が入りました。」

「よし、いっちょ派手にやるぞ！ 教練対水上戦闘用意!!」

さつま艦長の号令を受けた乗組員は、各々の部署へと急ぐ。

号令を受けてから、わずか2分で全員が戦闘配置に就いていた。

「全主砲右砲戦、用意！ 弾種、演習弾！ 目標、右舷（みぎげん）の演習標的！」

「了解！ 弾種、演習弾！ 目標、右舷標的！ 主砲、砲撃よーい！」

射撃命令を受けた砲術長は、キーボードを叩き装填する砲弾を選択すると、標的艦に測距儀を向ける。

さつまの艦橋上部に取り付けられた二式20m測距儀が、標的艦の方向に旋回し砲撃に必要な情報を取得する。測距儀で取得した各種情報は、コンピューターで処理され最適化され、必要な値を算出する。算出された値は、主砲管制システムへと伝達され、自動で砲塔が目標へと向けられる。

「おお、あの巨砲が動いたぞ。」

「見ましたか、剣王様！あの巨大な砲が、あんなに速く動きまわりましたよ！」

シハン達は、さつまの巨大な主砲の動きを見ながら、これから起きる事に心を躍らせながら待っていた。

「全主砲、発射準備完了！退避ブザー、鳴らします！」

主砲の発射準備が整い、退避を告げるブザーが鳴り艦外にいる乗員が艦内に退避する。

「全乗員の退避を確認！」

「主砲一斉射、てえー！！！」

「主砲、てえー！！！」

砲術長が引き金を引いた瞬間、アマノキ全体に雷鳴が近くでなった時のような轟音が轟いた。

軍祭に参加していた軍人や軍祭を見学していた市民達は、思わず耳をふさぎ後ずさる。

中には、聞いた事のない轟音に腰を抜かしたり、椅子から転げ落ちる人もいた。

「うわあああ！！？」

「な、何事だ！！？」

爆音に驚愕している彼らに、更なる驚愕が襲い掛かる。

爆音が響いた直後、フェン王国が用意した標的艦の周りに、見た事のないほどの高さの水柱が12本立ち上がり、標的艦は水のカーテンの中へと消えていった。

30秒して水柱が収まると、先程までそこに存在していた筈の標的

艦は姿を消し、海面には細かく砕け散った木片だけが浮かんでいた。フエン王国の用意した標的艦は、文字通り木っ端みじんとなって轟沈したのであった。

「なんと……」

シハンは、目の前に広がる光景に言葉が出なかった。

「たった一撃で、船が跡形もなく破壊されるとは……」

「なんて威力の魔導砲だ。それを十二門も装備しているとは……」

「我が国の水軍が戦ったとしても、あの船の前では鎧袖一触、あっという間に全滅してしまうだろうな……」

フエン王国首脳部は、想像をはるかに超える日本の戦艦の実力に刮目する。

たった一撃で十隻以上の船を容易く撃破する事などパールディア皇国でも、出来ない芸当であることをここにいる誰もが否応が無く理解していた。

「すぐにでも、二ホン国と国交を開く準備に取り掛かることにしよう。無論、二ホン国が要求して来た案件も検討する事にしよう。」

「御意。しかし、二ホン国が覇権国家でなくて助かりましたな。正しく、剣神のお陰でありましょう。」

「そうだな、我が国はもうパールディア皇国の魔の手に怯える必要はない！はっはっはっ!!!」

日本と同盟を結べば、もうパールディア皇国を恐れなくてよい。この結論にたどり着いたシハンらは、笑みの表情を浮かべる。

だが、彼らは気付いていなかった。

列強の魔の手が刻一刻と、フエン王国に忍び寄っている事に……

パーパルディア皇国編―06

フエン王国沖

フエン王国を直指して航行しているパーパルディア皇国監察軍東洋艦隊の竜母から、パーパルディア皇国自慢のワイバーンロードが20騎ほど、出撃していた。

この艦隊の目的は、栄えある皇国の顔に泥を塗った、フエン王国に懲罰を行う事であった。

更に、現在フエン王国で行われている軍祭の場を襲撃する事で、軍祭に参加している文明圏外の国々に、パーパルディア皇国の力を見せつける事も目的の一つであった。

この東洋艦隊を指揮するポクトアールは、作戦の成功は確実にあると考えていた。

相手は、ワイバーンすら持たない弱小国。負けるはずがない、と確信していたのだ。

この考えはポクトアールだけでなく、この東洋艦隊の全員が抱いていた物だった。

まさか、水平線の彼方から全てを見通す事が出来る存在がいるなど、夢にも思っていなかったのである。

日本海上防衛軍第七艦隊 戦艦さつま

「なに？それは間違いなのだな？」

「はい、艦対空レーダーに感あり。西の方角より数、20。時速180ノットでこちらに向かってきています。あと、数分で本艦上空に達すると思われます。」

「フエン王国にはワイバーンは存在していないはずだ。という事は、この接近している飛行物体の所属は、例の問題児パーパルディア皇国か。」

「恐らく、そうかと思えます。」

「・・・全艦、対空戦闘用意。」

「戦闘配置ですか・・・。」

「これは私の独論なのだがね。もしかすると、パーパルディア皇国は

アルタラス王国の様にこの国にも非常識な要求をしたのかもしれない。そして、この国はその要求を断った。」

「まさか、たったその程度の事で実力行使を行おうとしていると言うのですか!?!」

「ああ、我々からしたら非常識な事だがここは異世界だ。我々の常識は、通用しないと考えた方が良い。」

「了解しました!総員、対空戦闘用意!繰り返す、対空戦闘用意!これは、訓練ではない!」

第七艦隊に所属する全ての軍艦の艦内に、戦闘配置を告げる警報が鳴り乗組員たちは、突然の警報に驚きつつも訓練通りにそれぞれの配置に就いた。

「全艦、対空戦闘用意!空母ほうりゅう、戦闘機発艦準備完了!順次発艦します!」

「いいか、まだ所属不明騎が敵とは断定できない!相手が攻撃して来た時のみ、攻撃を許可する!それまで、待機せよ!」

いざというときに備えて、攻撃態勢を整える日本艦隊。

そして、それは直ぐに役に立つことになる。

数分後、アマノキ上空

パーパルディア皇国監察軍所属のワイバーンロードが、遂にアマノキ上空に到達した。

この飛竜部隊の指揮官は周りを見渡し、攻撃目標を見定める。

アマノキに居るものの中で、決して攻撃してはいけないのは、ガハラ神国の風竜である。

ワイバーンはより上位な竜である風竜に、逆らうことが出来ない。事実、彼らが乗っているワイバーンロードは風竜に目を合わせようとしない。

「ガハラ風の風竜には、決して手を出すな!フェン王国王城と・・・あの巨大艦二隻に攻撃を加えろ!よし、行くぞ!!」

ワイバーンロード20騎は、二手に分かれ降下していく。

フェン王国王城を攻撃する部隊は、ある程度降下した所で竜は口を開け、口内に火炎弾を形成し始める。

「全騎、攻撃開始ー!!」

隊長の合図で、一斉に火炎弾が発射された。

戦艦さつま CIC

「所属不明騎二手に別れました！そのうちの一部隊が、フエン王国王城に攻撃しました！」

「なに!? くそ、やってくれたな！現時点をもって所属不明騎を敵と断定する！王城を攻撃した奴らは、上空待機している空母艦載機に相手をさせろ！もう片方は!?!」

「もう一方は、本艦隊に接近中!! 進路からして、攻撃目標は本艦とほりゆうです!!」

「艦隊全艦、対空戦闘を許可する!! 一騎も逃すな！確実に、全て叩き落せ!!」

さつまの艦長は、怒りに満ちた声で迎撃を命じる。

一方、日本艦隊を攻撃する為に降下していたワイバーン隊は、眼前に停泊しているさつまとほりゆうの巨体に驚愕していた。

「なんてデカさだ……。まるで、島そのものだ。」

「あのような巨大艦を蛮族が作ったというのか……?」

艦隊との距離が縮まり、細部までよく見えるようになったことで竜騎士達は、攻撃目標にしたさつまとほりゆうの大きさに恐怖を感じ始めていた。

「臆するな！あれは蛮族が力を誇示する為に作った、ただの張りぼての木偶の坊だ！我々の前では、敵ではない！攻撃用意！」

指揮官である竜騎士は、配下の竜騎士達を鼓舞し、攻撃を指示する。「敵ワイバーン、本艦に急降下、接近中！本艦への攻撃態勢に入ったものだと思われませう！」

「対空戦闘、目標右舷のワイバーン！パルスレーザー砲、近接防御火器、攻撃用意！」

「了解！目標右舷のワイバーン！パルスレーザー砲、近接防御火器、攻撃用意！」

パーパルディア皇国のワイバーン隊は、火炎弾を発射する体制にはいる。

さつまもまたワイバーンを迎え撃つために、対空性能の高い砲口火器の射撃準備を整える。

「喰らえ、蛮族！火炎弾発射!!!」

「対空戦闘、攻撃はじめ!!」

奇しくも、ワイバーンロード隊の火炎弾発射とさつまの対空射撃開始は同じタイミングであった。

火炎弾を放ったワイバーンロード隊は、すぐさま上昇しようとするが超音速で飛行するミサイルを撃ち落とすために作られた、日本自慢の防空システムが見逃すはずがない。

あつという間にハチの巣となって、海へと墜落していく。

「ぶはっー」

パーパルディア皇国の竜騎士レクマイアは、重い装備品を脱ぎ捨てて何とか海面に顔を出す。

彼はさつまの対空砲火の前につけなく撃墜されてしまったが、とても幸運な事に海面近くで攻撃を受けて墜落したおかげで、一命をとりとめることが出来た。

「隊長、みんな……。チクショウ、全員やられたのか！でも、奴にも致命傷が!?!」

自分達が操るワイバーンロードの導力火炎弾の一斉射を喰らって、無事な船は一隻もいなかった。彼の頭の中では、火に包まれている巨大艦の姿が浮かんでいた。

だが彼が、自分達が攻撃を加えた巨大艦の方を向いた瞬間、彼は絶望の表情を浮かべるようになった。

なぜなら、そこには攻撃前と何一つ変わらない、さつまの姿がそこにあっただからだ。

「嘘だろ、あれだけの攻撃を喰らってびくともしていないというのか……。」

自分達の攻撃を物ともしない巨大艦の姿に絶望している彼に、さらなる追い打ちが襲い掛かる。

自分の頭の上で、爆発音が複数木霊したことにふと気付いたレクマイアが、空を見上げるとそこには最悪の光景が広がっていた。

フエン王国王城を攻撃した仲間たちが、見た事のない形をした飛行物体に追い掛け回され一方的に攻撃され、爆散していたのだ。

「そんな、馬鹿な……。我々は第三文明圏で最強のはず……。悪い夢であつてくれ……。」

海面を漂いながら、レクマイアは目の前の光景を否定する言葉を呟き続ける。

さつま C I C

「全騎撃墜を確認！」

「被害知らせ！」

「第一、第二主砲周辺に十発被弾！火災が発生しましたが、自動消火装置が作動！すでに消し止められています！他に、被害はなし！」

「ふう〜、大した被害が出なくて良かったですな。フエン王国の城の一部が燃えてしまいましたが……。」

「いや、まだ安心するのは早い。あのワイバーン隊を放ったパーパルディアの本隊がまだ近海にいるはずだ。レーダー出力最大！奴らの本隊の位置を洗い出せ!!」

「はっ！」

日本艦隊が反撃の為の索敵を行っているのと同じ頃、シハンらフエン王国の面々は目の前で起きた戦いの結果に言葉を失っていた。

攻撃して来たワイバーンロードは、間違いなくパーパルディア皇国のものだろう。フエン王国がワイバーンロードを落とすためには、大部隊の犠牲が必要だろう。それは、何故か？

それは、唯々単純にワイバーンロードの鱗が弓矢を通さないほど、硬いからである。

文明圏外の国がワイバーンロードを落とすことが出来れば、その事はその国の誇りになる。

「我が国には、ワイバーンロードを落とすことが出来る軍事力がある。」と、世界に宣伝することが出来るのだ。

そんな驚異的な性能を持つ、天空の王者を日本艦隊はハエを叩き落とすかのように、あつという間に殲滅してしまった。自分には、大した

被害を被らずに、だ……。

「これは、天運だ……。なんとしても、二ホン国と同盟を結びパーパルディア皇国に対抗しなければ……。ふふふ、笑みが止まらんわい。」
シハンは笑いながら、ワイバーンの攻撃を受けて炎上している自分の城を眺めていた。

勿論、シハン達が見ていた日本艦隊とワイバーンロードの戦いは、軍祭に参加していた他の者も見ていた。

アマノキの上空を飛行していたガハラ神国の騎士スサノウと相棒の風竜は、日本の軍艦の対空戦闘力の高さ、日本の戦闘機に舌を巻いていた。

「すごいものだな……。あの巨大艦と鉄竜は。」

風竜は、念話で感嘆の声を上げる。

「そんなに凄い物なのか?」

「ああ、あの艦隊の全ての船から空飛ぶトカゲ共に、人間には不可視の光線を浴びせ、巨大船に装備された多数の砲が不可視の光が反射した方向を向き、トカゲどもの飛行する未来位置に向かって撃っている……。あの軍艦らは、見た目以上の技術力で造られたものだな。あの空飛ぶ鉄竜も見事なものだ。」

「お、お前がそこまで言うのか!?!」

「うむ、大きいだけではないようだ。古の魔法帝国の魔導戦艦以上の性能を有しているようだ。あの鉄竜も、少なくとも天の浮舟と対等に戦うことが出来るだろう。」

「へ、へえく。そんなに凄い存在なのか……。これは、報告書製作が大変になりそうだ……。」

フエン王国沖合い

「て、提督！ワイバーンロード隊からの通信が途絶しました!」

「何だ?!?!」

ポクトアールは、懲罰艦隊の旗艦の一室でワイバーンロード隊が消

息不明の報告を受けていた。

部屋を静寂が支配する。とても、有り得ない事であったからだ。

フェン王国には、ワイバーンロードを撃墜する戦力はないはず。つまり、フェン王国とは別のナニカがいるという事である。

「アマノキで一体、何があつた？」

「ガハラ風の風竜を攻撃してしまったのではないか？」

「ワイバーンロードを撃破できるのは、ミリシアルカムー位だ……。だが、どちらとも戦争状態にはない。だとすると、未知の勢力がいるのかも知れないな……。」

ポクトアールは、現状に嘆きたかつた。今すぐにでも、本国に帰投したかつた。だが、今回の一件は皇帝からの命令である。皇帝の命令は絶対であり、逆らう事は出来ない。

皇国監察軍東洋艦隊22隻は、フェン王国に確実に懲罰を加える為に風神の涙の出力を上げて、最大船速でフェン王国アマノキへと向かう。

ワイバーンロード襲撃から一時間後、アマノキ

「どういう事が、説明していただけますか？」

最初の会談の時とは、明らかに違う強い口調で柳田は質問する。

パーパルディア皇国の攻撃を受けた日本は、フェン王国に事情の説明を求めていた。

柳田が強い口調なのには、ある確信ともいえる考えが頭にあつたからである。

それは、「フェン王国がパーパルディア皇国との紛争に、日本を巻き込んだ。」と、いうものだった。

少なくとも、パーパルディア皇国は第三文明圏の中では、最強といえる存在である。

そんな存在に目を付けられ、亡国の危機に陥つたフェン王国。

そんな時に現れたのが、日本国である。

日本の国力、戦力を見抜いたフェン王国は日本を、パーパルディア皇国との争いに巻き込むことで存続する事を計画し、模索したのではないかと疑っているのだ。

「何の事ですか？」

「貴国は、すでにパーパルディア皇国と戦争状態にあるのではないのですか？そして貴国は、我が国を巻き込むために、あえてこの事を伝えなかった。違いますか？」

「……」

「我が国は、我が国と同盟国の民を守る為になら、躊躇なく武力を行使します。ですが、貴国とはまだ国交すら開いていない。率直に言います。たとえば、貴国がパーパルディア皇国に攻め込まれたとしても、我が国は動かないという事です。」

柳田の言葉を聞いて、フェン王国の面々は顔を蒼くする。

それに構わずに、柳田は話を続ける。

「我が国は、信用できる相手としか同盟を結びません。本当なら今すぐにも出国したいのですが、最後にもう一度だけチャンスを与えます。本当の事を包み隠さず、話してください。」

「わ、分かった。本当の事を話そう、ヤナギダ殿。」

柳田の怒涛の口撃に、遂にフェン王国側は観念して、事実を話し始める。

フェン王国の事情を一通り聞き終わった時、柳田達はフェン王国に対して「アルタラス王国の様に最初から、素直に全て話してくれ。」と思ひ、パーパルディア皇国に対しては「またか……。本当に先進国なのか？」と呆れてしまった。

「……と、いうわけです。我が国の争いごとに巻き込んでしまったのは、済まないと思っています。」

「お詫びとして、一つ大切な事を話しておきましょう。もしパーパルディア皇国が貴国の事を知れば、我が国以上の報復を受けることになりますぞ。」

「と、言うこと？」

「今から数年前、我が国と同じように懲罰攻撃を受けた国があった。その国は、奇襲攻撃でワイバーンロードの騎手を殺すことに成功した。だが、その後に待っていたのは非道ともいべき虐殺だった。王族は皆殺しにされ晒し首となり、民衆は皆奴隷となってしまった。」

「貴国は、そのパーパルディア皇国のワイバーンロード20騎を撃墜した。間違いない、報復攻撃が来ることになるでしょう。」

パーパルディア皇国の実情を聞き、驚きのあまり言葉が出ない日本使節団だったが、柳田が何とか言葉を発する。

「なるほど、ご忠告感謝します。ですが、ご安心ください。」

柳田の言葉に今度はフェン王国の面々が驚く。

「我が国は、先のロウリアとの戦争の直後から、パーパルディア皇国への対策を進めています。彼の国の軍事力や軍事拠点の把握、それを踏まえた戦略の構築を行っています。それに……。」

「それに？」

「はつきりと言いますが、我が国からしたらパーパルディア皇国は超弱小国なのです。やろうと思えば、一週間足らずで滅ぼす事が出来る程度の存在なのです。」

柳田の言葉に、シハンは生涯で一番の衝撃を受ける。

第三文明圏で最も豊かであり、誰もが恐れる国パーパルディア皇国を、柳田は、二ホン国は超弱小国と言い放つたのだ。シハンが家臣の方を見ると、誰も彼もが同じような表情で固まっていた。

「本当の事を話していただいたので、国交開設及び同盟の締結は行う方向で行きましょう。それと本国で決まった事は直ぐにお伝えする事を約束いたします。では、これにて失礼します。」

そう言うと、柳田ら日本使節団は椅子から立ち上がり、部屋を後にし始める。

最後に部屋を出ようとしていた柳田は、ふとある事を思い出し放心状態のシハンらに告げる。

「ああ一つだけ、言うのを忘れていました。貴国主催の国際行事に飛び入り参加した無粋な奴らについてですが、此方でしっかりと「お仕置き」をしておきますので、ご安心ください。では、今度こそ失礼します。」

柳田は、頭を下げたのち退出した。

部屋の中には、未だに放心状態のシハンらだけが取り残された。

同時刻、護衛艦しまかぜCIC

「艦長、敵艦隊への攻撃許可下りました。」

「よし、敵艦隊への艦砲射撃を実施する！いいか、撃沈してもいいが全滅だけはさせるなよ！」

「了解！対艦戦闘用意！目標、パールディア皇国艦隊戦列艦！」

此方へと向かっているパールディア皇国艦隊を捕捉した第七艦隊は、被害を抑える為に公海上で迎撃する事を決定し、護衛艦しまかぜとたちかぜの二隻を迎撃任務に充てた。

「主砲発射準備完了。」

「主砲、攻撃始め！」

「主砲、てえー！！」

しまかぜとたちかぜに備え付けられた12.7cm速射砲が、パールディア皇国の戦列艦へ向かって火を噴いた。

パールディア皇国 監察軍東洋艦隊

「て、提督！東から巨大艦が接近してきます！」

「何だと!?隻数は!?!」

「数、二隻！信じられないような速度でこちらに向かっています!!」

「狼狽えるな！砲戦準備！我らの力を奴らに思い知らせてやるのだ！」

接近してくる護衛艦に砲戦を仕掛ける為に、速度を上げ舷側に並べられた沢山の魔導砲を向ける為に、舵を切り始める。

すると、向かって来ていた二隻の船の船首が光った。

「提督、敵艦が発砲した模様！」

「この距離でか？何を考えているのだ？」

「威嚇でしょうか？」

パールディア皇国の常識では、あり得ないほどの距離で発砲した二隻の船の行動に、疑問を抱くポクトール達。

「とりあえず、回避行動をしておこう。面舵一杯！」

ポクトアールは当たるはずはないと考えつつも回避行動をするように命令する。

操舵手が舵を切り出した次の瞬間、艦隊の先頭を走っていた戦列艦二隻が突然爆発した。

「な、なんだー!!?!」

「いきなり爆発したぞ!!」

突然の出来事に驚き、混乱状態に陥る船員達。

恐怖と混沌が船の中に瞬く間に広がる中で、ポクトアールは何故味方の戦列艦が爆発したのかを考える。

「まさか、敵からの砲撃だということのか!? そんな、馬鹿な! 我が国の魔導砲の数倍の射程と破壊力、命中精度を有しているというのか!」

ポクトアールが考えている間にも、謎の船からの攻撃によつて味方の戦列艦は次々と爆沈していく。旧式の30門級戦列艦だろうが最新鋭の100門級戦列艦だろうが、関係なく一方的に撃沈されていく。

艦隊の半数近くを失った時、不意にポクトアールは出航前のある出来事を思い出していた。

(確か、出航前に第三外務局のカイオス様が激励に来てくださった時、何かを言われたような・・・? そうだ、「白地に太陽の様な紋様が描かれた旗を掲げた軍艦がいたら、決して攻撃しない様に。もしも、攻撃してしまった場合は、すぐに撤退する事。」とおっしゃっていたな・・・ま、まさか!?!?)

カイオスの言葉を思い出したポクトアールは、懐から折り畳み式の望遠鏡を取り出し、謎の敵艦へと向ける。

そして、敵艦のマストに翻っている旗を見た時、彼は望遠鏡を取り落としそうになった。

マストには、「白地に太陽の様な紋様が描かれた旗」が翻っていたのだった。

(ぞ、そんな!! カイオス様のおっしゃっていた「白地に太陽の様な紋様が描かれた旗」を掲げた軍艦に、敵対してしまうとは!?! しかし、何故敵対を?・・・まさか、アマノキでワイバーンロード隊が攻撃してし

まったのか!?なんてこった……。と、兎に角本国に帰らなければ！
「て、撤退だ！今すぐ撤退する!!」

「は、はいいい!!」

ポクトアールの撤退命令に、悲鳴のような返事を返す船員達。

転舵している間にも、しまかぜとたちかぜの攻撃を受け続ける東洋艦隊。

結局、無事にパールディア王国への帰途につくことが出来たのは、意図的に攻撃されなかった二隻のみであった。

パーパルディア皇国編―07

日本、東京

日本国内では、急速に反パーパルディア皇国という考えが浸透していった。

アルタラス王国への非常識かつ私欲にまみれた要求と、フエン王国でのパーパルディア皇国軍との戦闘が、この考えを後押ししていた。

特に日本国民が許せなかったのは、アルタラス王国王女ルミエスを奴隷にしようとしたことである。

日本とアルタラス王国の国交開設、及び同盟締結を宣言した会見で登場した彼女は、その美しさとスピーチから感じる事が出来る彼女の健気さ、そして何より日本人の心をつかんだのは、「手を差し伸べてくれてありがとう、日本の皆さん」と涙を浮かべながら発言したことがある。

そんな彼女と彼女が愛するアルタラス王国を害する、パーパルディア皇国を日本人が嫌悪することになるのは自然な事であっただろう。

ネット上では、「パーパルディア皇国を滅ぼせ」などの過激な意見が飛び交い始め、各種報道機関もパーパルディア皇国との戦争が近づいている事、避ける事が出来ない事を何度も報道し始めていた。

国内で反パ皇が叫ばれ始めている中、首相官邸ではこの世界に転移してから何十回目の緊急会議が開かれていた。

「・・・以上が、フエン王国での出来事の全てです。」

「そうか・・・。大変ご苦労だった。使節団と第七艦隊、第九艦隊の諸君には、ゆつくりと休んで英気を養ってほしいと伝えてほしい。さてと・・・。」

使節団からの報告書を受け取った武田は、使節団と護衛していた艦隊の軍人達にねぎらいの言葉を伝える様に言うと、会議室に集まっている官僚たちに視線を向ける。

「今回の外交で、無事にムーとアルタラス王国の間に国交を開くことが出来た。フエン王国との国交開設も間近だろう。ただ、同時に各国の抱える問題も浮き彫りとなった。今回は、その対策について練ろう

と思う。」

「今一番警戒しなければならぬのは、パーパルディア王国でしょう。アルタラス王国とフェン王国の両国に、理不尽かつ非常識な要求をし、要求が通らなかつた場合は武力を行使する、とても危険な国です。防衛省の見解では、本年中にどちらかの国、もしくは両国に武力侵攻をする可能性が高いと出ています。」

両国の防衛の為に、更なる軍事力の派遣が必要と私は提案します。」
防衛大臣である巖田の発言に続くように、外務大臣の吉田が発言する。

「アルタラス王国に常駐する部隊の更なる強化に関係する事ですが、アルタラス王国本土にあるムーが開港した空港の使用、及び改造許可が取れました。」

「おお！本当ですか!!」

「はい、ムーの大使は「アルタラス王国の許可を取れば、好きなようにしてよい。」と、発言していました。」

「それは、有難い。これで、パーパルディア王国の首都を爆撃することが出来るようになる。ムーには、何かお礼をしなければな。」

「吉田さん、この一件についてアルタラス側はなんと?」

「国民に害が無いのならば、遠慮なくやってよい。」と。」

「分かりました。早速、空港の改良工事を手配する事にしましょう。」

改良工事が終わり次第、航空戦力の拡張を行います。」

「航空戦力の強化は、これでいいとして他に強化すべき事は?」

「パーパルディア王国の軍の動きを、24時間監視する必要があるありません。早期警戒機を増やしませんか?」

「無理だ、これ以上は本土の警備が疎かになってしまう。何か、いい案はないか?」

アルタラス王国の航空戦力の強化が決定した所で、次の議題「パーパルディア王国の監視」に移る。

ただ、問題なのが早期警戒機の不足。もっと詳しく言うのならば、早期警戒機に乗って仕事をする事が出来る人員が不足していたのである。

地球ならば、同盟国各国がレーダーなどの索敵網を自前で用意し運用していたが、この異世界では地球程高度な警戒態勢を持っている国は存在していない。せいぜい、ワイバーンか艦船を使った見回り程度であった。

その為、それぞれの国の警戒網強化を日本が全てを負担する事になってしまい、前世界では十分に足りた早期警戒機が不足状態に陥ってしまうという事態が発生してしまったのである。

「人員育成には時間が掛かる。なんとか、他から回せないのですか?」「いや、ダメだ。もし、パールディア皇国との戦争状態になった場合、我が国の同盟国という理由でクワ・トイネ公国やクイラ王国、ロウリア王国が攻撃を受ける可能性が十分にある。数を減らすことはできない。」

「では、どうするのですか!?!アルタラス王国防衛には、航空機を使った警戒網の構築が必要不可欠なはずだ!」

「そのことについてですが、「特別な一機」を配備する事で解決することが出来ます。」

「巖田君、まさか「アークバード」を投入するということのか!?!」

アークバード、それは日本が「Project A」の下、長い月日をかけて開発した大気機動宇宙機である。

航空機と人工衛星の機能を併せ持つ、この巨人機の役割は「軌道上での敵国の監視、ミサイル等の迎撃、及び即座の反撃」等の、軍事的な物と「衛星軌道上の清掃プラットフォーム、宇宙空間での観測や実験を行う研究施設」等の、平和的な物の二つである。

この世界に転移した直後に完成した白き巨鳥は、計画に携わった多くの人々に見守られながら大空へと羽ばたいていった。

現在は、様々なテストを行いつつ飛行している白き巨鳥を、巖田はアルタラス王国警備の任に就かせるつもりなのである。

「正気ですか!?!巖田防衛大臣!?!」

「正気です。あの機体には艦船や早期警戒機に搭載されている物より、遥かに強力なレーダーや各種センサーが搭載されています。その上、数十カ月無着陸で飛行できる。早期警戒機としては、破格の性能

です。それに、あの機体は元々国土防衛の為に開発された物。同盟国防衛の為に戦力として、運用しても何ら問題はありません。」

「しかしアークバードは、まだテスト中です。それを！」

「ですが、早期警戒機の不足とアルタラス王国の警戒網強化の二つの問題を解消できるのは、アークバードだけです。これ以外の方法は無いのです。」

アークバードの実戦投入に、賛成、反対の意見が怒号を添えながら会議室を飛び交う。

十数分後、今まで沈黙を守って来た武田が、発言の為に手を挙げる。一瞬で静まり返る会議室。

誰もが、武田の言葉に耳を傾けていた。

「皆の意見、聞かせてもらった。そのうえで私が決断したことを話そう。厳田君の意見は、筋が通っていると私は判断した。よって、アークバードをパーパルディア皇国監視任務に就かせることを許可する。ただし、全ての性能確認テストが終わるまでアークバードの戦闘投入は、厳禁とする。皆、納得してくれたか？」

「・・・分かりました。総理がおっしゃるのなら、引き下がりました。ですが、厳田さん！くれぐれもアークバードを壊さない様に、大切に扱ってくださいよ！あれは、日本の新たな象徴なのですかね！」

「無論、その事は十分承知しております。あの美しき翼に傷一つたりとも、負わせないことをここに誓いましょう。」

「さて、アルタラス王国の一件はこれでよいとして……。次は、フェン王国か。」

アルタラス王国の話がひと段落したところで、次の議題フェン王国の話に移る。

ただ、アルタラス王国の時とは違い、官僚たちは余り乗り気ではない。

何しろ彼の国の策略で、紛争に巻き込まれたのかも知れないのだ。フェン王国の印象があまり良くないのは、必然の事だろう。

「ふくむ、どうしますかな？無難に一艦隊を派遣しておきますか？」

「ああ、その程度で大丈夫だろう。フェン王国での一件で、パーパル

ディア皇国の戦列艦の戦闘能力は大体判明した。一艦隊でも十分に対処できるだろう。それに、恐らくパーパルディア皇国は、公に反抗したアルタラス王国の方が目障りのはずだ。主戦力は、間違いなくアルタラス王国攻略に使うはずだ。となると、フェン王国には主力部隊をあまり割けないはずだ。」

「分かりました。その方向性で行きましょう」

極めて短時間でフェン王国の一件は粗雑に片付けられ、ここ一番の問題児の一件に取り掛かる。

「パーパルディア皇国ですか……。フェン王国での一件、抗議しますか?」

「抗議したら、逆ギレしてきませんか?悪い噂しか聞きませんよ、あの国。」

「してくるだろうな。何しろ、提案を断っただけで武力行使に出る国だからな。間違いなく、戦争を吹っ掛けられることになる。」

「下手したら、抗議の場で「属国になれ!貢物を毎年納めろ!」とか、言ってくるかもしれないですよ。で、断ったらその場で宣戦布告を受ける可能性も……。」

「十分にあり得るな。だが、戦争状態になれば遠慮なく攻撃することが出来る。相手から、非常識な要求を受けたうえで宣戦布告されれば、更に良い。なぜなら、大規模攻撃の口実を得ることが出来る。「我が国に住む、全ての国民の人命と財産を守る為」というこれ以上はない、口実がな。」

「兎に角、抗議の為の外交官の派遣は行う事にしましょう。」

会議の結果、抗議の為の外交官を派遣する事が決定し、その護衛の為に転移してから新たに編成された第11護衛艦隊がその任に就くことが決定した。

パーパルディア皇国 皇都エストシラント

「ありがとう!釣りはいらさない!」

「お、お客さん!」

アルタラス王国から帰国したクロムは、すぐさま乗り合い馬車を捕まえて第三外務局へと直行した。

料金のお釣りを受け取る時間も惜しいほど、彼はとても焦っていた。

「急がなければ！急がなければ！いそが、イデエ!!?」

「ガア!!?」

第三外務局の玄関で、クロムは誰かにぶつかり倒れてしまった。

「す、済まない！急いでいたので、前を見ていなか」

「誰かと思ったら、クロムじゃないか！戻ってきていたのか！」

「ヴァルハル！君だったのか！ここに君がいるという事は、何か二ホンの情報を手に入れたのかい？」

「ああ、いやという程にな。お前の方は？」

「俺もだ。兎に角、カイオス様に報告しなければな。」

ぶつかつた相手が自分の親友だつたことに驚いた二人だったが、すぐに揃つて建物の中に入りカイオスの元へと向かつた。

カイオスは机に積み上がっていた書類を粗方片付けると、息抜きの為に紅茶を淹れていた。

パーパルディア名産の高級茶葉とお茶を淹れるのに最適な水を使った、シンプルだが贅沢な一品を飲むのが彼の日々の小さな楽しみの一つだつた。

これから小さな至福の時を過ごそうとしていた、まさにその時部屋の扉が強く叩かれた。

至福の時を邪魔した扉を叩いた無粋な奴に、若干の殺意を抱きつつも、カイオスは応える。

「誰だ!？」

「カイオス様、クロムです。ただいま帰りました。」

「おお！クロムか！待っていたぞ！」

扉の向こうからの声に、カイオスの不機嫌は跡形もなく吹き飛び自ら扉を開けた。

扉を開けると、服装が少し乱れている二人がいた。

走つて来たのか、と思いつつも二人を部屋に入れ、ソファアに座らせる。

「カイオス様、アルタラス王国の一件、誠に申し訳ございません。私の力不足でした。」

開口一番、クロムはカイオスに謝罪する。

自分の力不足で、パーパルディア皇国最大の魔石の取引相手を失ってしまったのだ。まじめな彼が、責任を感じてしまうのも仕方ない。「気にしなくてよい。アルタラス王国との国交断絶は、時間の問題だった。お前が全ての責任を負う必要はない。そんなことは良い、アルタラスで二ホン国の艦隊を見て来たのだろうか？二ホン艦隊を見て、何を感じた？」

「はっ、率直に申し上げますと驚異の一言に尽きます。二ホン国の艦隊はミリシアルの魔導戦艦より遙かに洗練された軍艦で構成されていました。そうそう、魔写を撮ってきましたので、ご覧ください。」
そう言うと、クロムはカバンの中から大きな封筒を取り出すと、封筒の中身を机の上に置いていく。

机の上に並べた魔写には、第七艦隊の所属艦艇がはつきりと映っていた。

そのうちの一只手に取り、カイオスは凝視する。

「なんと、これは……。確かにミリシアルの物より立派だな。少なくとも、我が国の戦列艦より頼りになりそうな姿をしている。」

「はい、この魔写では分かりづらいかもしれませんが、間違いなくアルタラスの戦列艦より、

遙かに巨大な事には間違いありません。……カイオス様、此方の魔写もご覧ください。」

「……おい、なんでミリシアルの「天の浮舟」が映っているんだ!？」
「いえ、よく見るとミリシアルの物とは全然違うものようです。信じられない事ですが、どうやら二ホン国は独自開発したものと思われる「天の浮舟」を保有しているようなのです。」

「なんてことだ……。我が国よりも国力が上なのは確定、という事か……。」

アルタラスで撮られた魔写を見て、日本の国力が上という事実に絶望にくれるカイオス。

そんな中、今まで沈黙を守っていたヴァルハルが口を開く。

「フソウ型戦艦に、タケミカズチ型空母か……。この本通りの姿だな。」
「ん？おい、まて！ヴァルハル！何故、二ホンの軍艦の艦級名を知っているのだ!?!」

「ああ、それはだな、ロウリアで手に入れたこの本を熟読したからさ。」
ヴァルハルはそう答えると、パーパルディアの物とは比較にならない程の彩り豊かな表紙の本を二人に見せる。

「この本の題名は、「決定版!!二ホン国防衛軍の兵器特集」。題名通り、二ホン国軍が運用している兵器が掲載された本だ。この本によると、その魔写に移っている戦艦は「フソウ型」という二ホン国最新鋭の戦艦らしい。全長390m、排水量20万トン超えの化け物だ。」

「デ、デカすぎる。しゅ、主砲の口径は!?!」

「聞いて驚かないでくださいよ、カイオス様？フソウ型の主砲口径は61cmです。」

「はっ!?!ろ、61cmー!?!」

予想以上に巨大な口径の大砲に、声を揃えて驚くカイオスとクロム。

ただ、驚いてしまうのは仕方ない事である。

世界最強と呼ばれるミリシアルのミスリル級魔導戦艦の主砲は38cm、ムーの最新鋭戦艦ラ・カサミの主砲は30cmなのである。

つまり、ふそう型の主砲はミスリル級の1.6倍、ラ・カサミの2倍という破格の大きさなのである。

大砲の口径が大きいという事は、その分破壊力も上がっている事は容易に想像が出来るだろう。

二人の脳裏には、ふそう型からの砲撃で一方的に撃沈されていく自国の戦列艦の姿が浮かんでいた。

数十秒程、フリーズしていた二人だったが、何とか立ち直りヴァルハルにさらなる質問をする。

「・・・ヴァルハル、二ホンの戦艦の脅威についてはよく分かった。では、この「天の浮舟」を載せている平べったい軍艦はなんだ?」

「それは、「空母」と呼ばれている艦だな。分かりやすいように、我が

国の艦に当てはめると「竜母」が、これに該当するな。まあ、要するに飛行機械用の竜母だな。だが、性能は空母の方が遙かに上だぞ。クロム、お前は竜母の弱点を知っているか？」

「確か、航行しながらワイバーンを飛ばせない事だったかな？」

「正解。我が国の物を含めた竜母という艦種共通の弱点だ。何しろ、航行に必要なマストや帆がワイバーンの発艦や着艦の邪魔になる。だから、ワイバーンを発進させるときは帆を畳み、必要ならマストも折りたたまなければならぬ。ところがだ、この魔写の空母にはマストや帆が無いだろう？つまり」

「航行しながら、飛行機械を展開できるという事か……。」

「その通り。」

「では、私からもいいかな、ヴァルハル君？二ホン国はどの様な「天の浮舟」を運用しているのだ？」

「ええとカイオス様、二ホン国が運用しているのは「天の浮舟」ではなく「航空機」、つまり飛行機械です。現在、二ホン国では複数の戦闘用航空機が運用されています。そのどれもが、非常に高速で飛行することが出来ます。最も遅い飛行機械でも、ワイバーンロードや開発されたばかりのワイバーンオーバーロードを余裕で振り切ることが出来ます。」

「何だと、そんな馬鹿な?!?ワイバーンオーバーロードは、ムーのマリンに対抗する為に開発されたものだぞ!その速度は、時速400kmを優に超えると聞いている。それよりも、速いのか!?!」

「は、はい。二ホン軍の飛行機械は一部の例外を除き、時速800km以上の速度での飛行が可能です。最速となると、音の三倍以上の速度で飛行することが出来るそうです。」

「お、音の三倍だと……。」

日本の戦闘機の予想以上の速度に、再び爆沈するカイオス。

尊敬する上司の心が壊れないか、心配しながらクロムは同じ様にカイオスのメンタルを心配するヴァルハルに質問を続ける。

「……ヴァルハル、この魔写に写っている砲を一門しか載せて無い軍艦はなんだ？いくら何でも、これでは碌な戦闘できないだろう。何の

為に、この様な船を造るのだ？」

「お、おう。それは、「護衛艦」という二ホン海軍の主力艦だ。で、お前が疑問に思っている事についてだが、それは単純。護衛艦の主力兵装が砲ではないからだ。」

「砲ではない？では、何を主兵装にしているのだ？」

「腰を抜かすなよ？護衛艦の主兵装は「ミサイル」という誘導式飛翔爆弾だ。」

「なっ!?!?そ、それはまるで・・・。」

「古の魔法帝国、「ラヴァーナル帝国」の「誘導魔光弾」そのものだ。俺もこの事を知った時、冷や汗が滝のように出たさ。しかも、ミサイルには様々な種類があつて、対艦用、対地用、対空用など用途に合わせたものがあるようだ。」

「まさか、二ホン国の技術力は「ラヴァーナル帝国」と同等というのか!?!なんて、国だ・・・。我が国に、全く勝ち目がないではないか。」

「全くだ。しかも、二ホン国には今まで紹介した兵器以上の「化け物の中の化け物」といふべき、切り札が存在している。」

「・・・おい、まだあるのか?」

「だが、外交に携わる者として聞かないわけにはいかないだろう、クロム。・・・覚悟はできた、話してくれ、ヴァルハル君。」

今まで聞いてきた物より、遥かに強力な存在が日本国にある。

胃がキリリと痛むのを感じたが、聞かなければならない立場にある事を自覚している二人は、テーブルに置かれたすでに冷えてしまった紅茶を、一気に喉に流し込み覚悟を決める。

「二ホン国には、二ホン人から「守り神」「国の誇り」「最後にして最大の希望」とまで呼ばれている3隻の超巨大戦艦が存在しています。名前は、アマテラス型戦艦。」

「アマテラス・・・。」

「全長1200m、排水量500万トン超。主砲に80cm三連装砲を六基。そして、ありとあらゆる攻撃を防ぐ鉄壁の装甲。正しく、兵器の王者「超兵器」の名前が相応しい戦艦です。そして、二ホン国は同盟国となったアルタラス王国を守る為に、一番艦アマテラスを旗艦と

する艦隊を派遣しました。」

「はあ．．．？．．．．済まない、クロム。どうやら私の耳は、いかれてしまったようだ。全長1000m超えとか、主砲が80cmとか、アルタラスにこの空想上の化け物のような奴がいるとか聞こえたが、全て幻聴だよな？」

「いえ、私にも聞こえました。残念な事に、私たちの耳は正常なようです。」

「はは、ははははははは．．．。」

規格外の話聞き続け心が疲弊していたカイオスだったが、天照の事を聞いた事で遂に彼は壊れてしまった。彼の薄気味悪い、生気のこもっていない笑い声は、尊敬する上司の壊れてしまった姿を見続ける事に耐えることが出来なくなつたクロムが、

「ご無礼をお許しください、カイオス様！」

と、思いつきり頬をビンタするまで続くことになる。

天照の事を聞き、心が大破して壊れてしまったカイオスだったが、クロムの強烈なビンタによってなんとか正常に戻ることが出来た。

正常に戻った後、心を落ち着かせるために紅茶を淹れ直し、茶菓子を口にする。30分後、カイオスは落ち着きを取り戻していた。

「ふう、すまない。みっともない姿を見せてしまったな。」

「いえ・・・、私も精神崩壊する一歩手前でした。・・・アマテラス型、恐ろしい存在ですね。」

「そうだな・・・。しかし、二ホン国の象徴たるアマテラス型が、隣国のアルタラス王国に居るとは。完全に我が国を意識して配置したとしか思えん。」

「はい、二ホン国は我が国を警戒していると思います。・・・ヴァルハル、その方面の情報はないか？」

「ああ、あるぞ。先ずは、二ホン国の政治体制だな。二ホン国の政治体制は、民主主義で国民が投票によって政治の代表者を選ぶ方法を取っている。」

「二ホン国には、国王は居ないのか？」

「二応、「天皇」という王家が存在しているようだ。ただ、我が国の様に強力な権力は持っていないし、政治に介入する事も出来ない存在のようだ。」

「王族が政治に介入できないだと・・・。変わった政治体制を取っているのだな。」

「はい、とても変わっております。・・・二ホン国の、総人口は二億一千万。二ホン国の各地に、大都市がいくつも築かれていて、とても栄えております。軍事技術と比例する様に、民間技術も非常に高いレベルであり、例えばムーの機械動力車より高性能な車が、庶民でも買えるほどの低価格で販売されています。また、全土に鉄道が網の目の様に巡らされています。」

「ううむ・・・。」

カイオスは、日本の豊かさに唖ってしまう。

ムーの機械動力車と言えば、中古でもかなりの高額であることが知られている。それが日本では、ムーの物より遥かに高性能な車が低価格で販売されているという。これだけでも、日本の技術力と生産能力の高さが伝わってくる。

「ただ、そんな二ホン国にも弱点はあります。」

「なに!?それは、本当か!」

「はい、それは食糧自給率の低さです。二ホン国は島国である上に、国土の大半が山間部です。その為、食料の半分近くを輸入に頼っています。」

「では、航路を封鎖すれば二ホン国は干上がってしまうと?」

「ミリシアルやムーを遥かに超える技術力で造られた艦隊を撃破できれば、ですがね。」

「あ」

日本の弱点を知り、対日戦略として考えた二人にヴァルハルは現実を突きつける。

「それに、二ホン国には「食物プラント」と呼ばれる、作物を短期間で生産できる工場がある様です。食料関係で優位に立つのは難しいでしょう。」

「なんてこった。二ホン国は、クワ・トイネの加護すら再現可能だというのか・・・。」

「はい、更には、食料の長期保存する技術も発展しています。カイオス様、実は日本の保存食の一つをここに持ってきております。食べていただけないでしょうか?」

「そうなのか?しかし、保存食はおいしくないと聞くぞ?いくら、技術が進んでいるからといっても、我が国の物と大差はないのではないか?」

「ふふ、まあ普通はそう思いますよね。兎に角準備してきます。」

そう言うと、ヴァルハルは袋を持って部屋を出ていった。

何をしているのか?と、部屋に残された二人は首を傾げていた。

三分後、ヴァルハルは日本の食べ物を持って部屋に戻って来た。

カイオスとクロムは、机に置かれたコップ状の器に入った日本の食

べ物を凝視する。

「これが日本の保存食の一つ、「カップラーメン」です。どうぞ、お食べください。」

「う、うむ。」

「これが保存食？」

疑問に思いつつも、二人はフォークを手にし、カップラーメンを口に入れる。

舌が味を感知した瞬間、二人は目を見開く。

「う、美味しい!!」

「少ししょっぱいが、これはこれで美味しい!これが保存食だというのか!」

二人の、いやこの世界の保存食の常識といえは、「硬い、塩が効きすぎる、臭い」である。

おまけに保存性第一なので、味は二の次であり、ましてや温かいスープ系などあり得ないのである。

だが、日本の「カップラーメン」という食べ物はどうだ。

すこし、味付けが濃いだけで普通に日常生活で食べられる代物である。

あつという間に完食した二人に、ヴァルハルは尋ねる。

「味はどうでしたか？」

「美味かったが・・・この「カップラーメン」とやらは本当に保存食なのか？」

「それに、わずか数分でどうやって調理したのだ?普通は、一時間ぐらいかかるぞ?」

「この「カップラーメン」は、保存環境が良ければ一年以上保存することが出来るれっきとした保存食です。そして、調理方法ですがお湯を注いで、3分待つだけです。」

「はあ!?これが、これがたった3分で出来るというのか!しかも、調理に必要なのはお湯だけだ?!」

「何という技術力だ・・・。」

「私の私見ですが、二ホン国の軍隊の行軍食はこれと同じか、似た技術

を使用したものを採用していると思います。」

「なんて国だ……。二ホン国からすれば、我が国の文化なぞ赤子同然だな……。」

「はい……。」

カイオスは、ソファアに深く座ると天井を見上げる。

長期保存できる食べ物でこの味なのだ。恐らく、食に關しても日本は、パーパルディア皇国を遥かに上回っているだろう。つまり、それ以外の文化も高いレベルで纏まっている事だろう。

レベルの高い文化を持っている国は、それだけ国が豊かに発展している事の証拠である。

国が豊かという事は、軍隊も強力である事も簡単に予測できる。

カイオスは、頭を抱える。

このままでは、桁外れの実力を持つ国と戦争になってしまう。

「二ホン国は、戦争を外交の手段として用いる事を禁止しているだど!?」

「そうだ、二ホン国の軍隊は「自国と同盟国の民の命と資産」を守ることにが使命だ。よほどの事が無い限り、二ホン国と戦争になる事は無い。」

「では、もしも我が国がアルタラス王国に攻め入った場合は、如何なる?」

「……間違いなく、二ホン国が介入してくる事になるだろうな。だが、どんなに馬鹿な奴でも二ホン国に、ケンカを売るような奴はいないだろう。」

「……もし、そんな馬鹿な奴が我が国の上層部に多数いるとすれば、君たちはどう思う?」

「!!!」

カイオスの発言に、クロムとヴァルハルは目を引ん?く。

冗談として話していた事が、まさか現実である事を知れば、誰でも二人の様な反応をするだろう。

「……どういう事ですか?」

「……我が国の上層部は、アルタラス王国の国交断絶を「蛮族の国が

皇国の顔に泥を塗った」として、侵攻計画を立案、提出した。近頃、開催される御前会議で正式にアルタラス王国侵攻が決定される予定だ。」

「なっ!?撤回できないのですか!?!」

「不可能だ。既に侵攻の準備が始められている上に、皇族の方々も強い関心を持っているという。私の力では、もう止められないのだ。」

「間違いなく、二ホン国と戦争になりますよ!?!そうだ、この本や魔写を提出すれば!」

「やめとけ、やめとけ。どうせ、嘘八百とかしようもない言い訳付けて揉み消されるぞ?俺がそうだったからな。上の人間は、自分達にとって都合の良い情報しか耳にしないからな。」

「クソ!!」

何とか、アルタラス王国侵攻を阻止する為に、自分達が手に入れた日本の情報を提出しようとしたクロムだったが、以前ロウリア王国での一件で正確な情報を上げたのにも関わらず、嘘と決めつけられたことがあるヴアルハルが止める。

「ならば、どうする!?!このままでは、我が国と二ホン国との戦争が起きってしまう!何とか、回避する方法は.....」

「この国の誰よりも早く、二ホン国と接触して交渉するしかないが.....、ダメだ!不可能に近い!」

頭を抱え唸る三人。

何とか平穩にこの事態を治める方法を考えたが、結局その日のうちに具体的な案を出すことが出来なかった。

次の日、カイオスは早朝から頭の痛い報告を受けていた。

「フェン王国に向かった東洋艦隊が、壊滅状態で帰投してきただ!?!それは、本当か!?!」

「は、はい!東洋艦隊22隻の内、帰還したのは二隻のみです。また、ワイバーンロードも20騎損失してしまいました。」

「なんてこった.....。艦隊司令のポクトールは、生きているか?」「はい。」

「何があったのか、本人の口から聞きたい。直ぐに連れて来てくれ!!!」

「は、はいいいい!!」

大慌てで出ていく職員と入れ替わるように、クロムとヴァルハルが入ってくる。

二人とも、夜遅くまで起きていたのか、それとも満足に寝ることが出来なかったのか、目の下にうっすらとクマが出来ていた。

「おはようございます、カイオス様。何かありましたか?」

「ああ、おはよう。朝一番に最悪な情報を、君たちに伝えなければならぬ。監察軍東洋艦隊が、壊滅してしまった。」

「え!?壊滅!?何者に!?!と、言いたいですが犯人はおそらく……。」「二ホン軍だろうな。何しろ、戦列艦20隻とワイバーンロード20騎を撃破できるのは、近辺の国だと二ホン国位だろう。」

「ですが、一つ疑問があります。二ホン国の軍隊は、防衛の為の戦闘しか出来ないはずです。」

「まあ、二ホン軍の仕業と決まった訳ではない。何かあったのかは、指揮官から直接説明してもらおう。」

一時間後、カイオスの部屋に何とか生きて帰って来たポクトアールが、やって来ていた。

挨拶もそこそこに、カイオスが強い口調でポクトアールに問い質す。

「単刀直入に聞きたい、ポクトアール提督。フェン王国で一体何があった?」

「はい……。我々東洋艦隊は、皇帝陛下の御命令通りにフェン王国の軍祭を襲撃しました。私は、まず最初に竜騎士達に、フェン王国の王城と軍祭に参加している軍艦を攻撃するよう命令し、出撃させました。」

フェン王国に向かうまでは、特に異常はありませんでした。ですが、軍祭が開かれているアマノキ上空に到達し、攻撃に入った直後に竜騎士隊からの全ての通信が途絶してしまいました。」

「攻撃に入った直後にか……。」

「我々は不審に思いましたが、確実に被害を与えられたかが不明だっ

たため、艦隊による直接攻撃を行う為にフェン王国へと急行しました。フェン王国の領海まで、あと少しというところで二隻の巨大艦が現れたのです。奴らは、此方の魔導砲の射程の遙か彼方から、一方的に攻撃してきました。そして、奴らのマストには、カイオス様のおっしゃっていた「白地に太陽の様な紋様が描かれた旗」を掲げていたのです。」

「「やっぱりか……。」」

ポクトアールの話聞いた三人は、監察軍東洋艦隊を壊滅させた犯人が、予想通りだった事に同じ言葉を同じタイミングで口から漏らす。

クロムは、自分が撮った日本の護衛艦たちかぜの魔写をポクトアールに見せる。

「ポクトアール提督、あなたが見た巨大艦とはこの魔写に写っている船ですか?」

「!!そうです、こいつです!!しかし、何故奴の魔写をあなたが持っているのですか!?!」

「実はな……。」

カイオスらは、自分達が得た二ホン国の情報を話した。

段々と、ポクトアールの顔は青白くなっていき、最後には死人の様な顔色になっていた。

「……今ここで聞いた事が、全て嘘だと信じたい気持ちです。」

「だが、すべて事実だ。」

「しかし、不味い事になりましたね。二ホン国は、我が国を完全に危険視する事になるでしょう。全く厄介な事になったな……。」

「ああ……。」

活気にあふれるパールディア皇国の皇都エストシラントの中で、この部屋だけ氷点下と言っても限らない程、絶望の空気が流れる。

全員の頭の中に最悪な未来が、日本の怒りを買ったパールディア皇国が火の海へと変わりこの世の地獄になる光景が浮かんでいた。そして、その最悪な考えが現実になろうとしている事も、彼らは理解していた……。

数日後の昼過ぎ

パーパルディア王国で最も栄えた都市、エストシラントの中心部には一際巨大で豪華な城、パラデイス城が存在している。この国の富の豊かさを強調する、この城の巨大な会議室で御前会議が行われていた。

「これより、御前会議を開始します。」

議長が開会の宣言をすると、最初に皇帝であるルディアスが軍の最高指揮官であるアルデに、威厳のある声で問い掛ける。

「アルデよ、アルタラス王国侵攻の準備は整ったか？」

「はい、戦列艦200隻以上、兵員数5万の出撃準備が整っております。後は、陛下の裁可を頂くだけです。」

皇帝の問いに、アルデは自信をもって答える。

「そうか……。余は……。今怒りに満ちている。」

皇帝の言葉を聞くと、全員の顔がサツと蒼くなる。

この国では、皇帝を怒らせたら一卷の終わりなのである。

全員が冷や汗をかきながら、皇帝ルディアスの次の言葉を待つ。

「文明圏外の国の分際で、我が国の顔に泥を塗ったアルタラス王国……。そして、アルタラス王国を増長させた国、二ホン国……。聞くところによれば、二ホン国はフェン王国で監察軍を退け、調子に乗っているようだ。アルタラス王国を滅し、世界に二ホン国と関係を持ってどうなるか教えさせるのだ。出来るな、アルデ。」

「ハハッ!!お任せくださいー!」

アルタラス王国に侵攻する事が確定しかけている事態に、カイオスは焦り始める。

このままいけば、日本の怒りを買ってしまうのは明らかであるからだ。

「……。しかし、監察軍を退けた二ホン軍がアルタラス王国に居ます。」
「心配ご無用ですぞ、カイオス殿。我が国の正規部隊は、世界最強の実力を持っています。貴方のところの情けない監察軍と比べないで頂きたい。……。ハッキリと言いましよう、第三外務局と監察軍は栄えある皇国の恥であります!」

「クッ!!」

公の場で罵倒されたカイオスの顔が、苦痛をこらえている時の様に歪む。

アルデは、そんなカイオスを見ながら話を続ける。

「どうやら、カイオス殿は二ホン国を過剰に警戒しているようだ。エルト殿、第一外務局の二ホン国に対する評価は、どの様なものですか？」

アルデに話を振られた、カイオスの元部下である第一外務局長エルトが、第一外務局が独自に手に入れた日本国の情報を元に話し始める。

「第一外務局が精査した所、二ホン国は「侮つてはならないが恐れるほどでもない国」であると判断いたしました。理由として、魔導砲の製造技術を持つてはいるもののその数がとても少ない事や、今まで第三文明圏でその名が知られていない事が挙げられます。」

エルトの報告にカイオスは内心で、(本当に情報を仕入れたのか?)と突っ込んでしまった。

少し調べれば、日本がパーパルディア皇国を遥かに凌駕する国である事は、すぐに判明する事だ。

それすら出来ていないという事は恐らく、局員が権力と地位の向上のために、パーパルディア皇国に有利になるような情報しか集めていないか、ありえないの一言で切り捨ててしまったかである。

呆れて黙ってしまったカイオスの様子を見て、言い負かしたと勘違いしたアルデは、満足しながら席に座る。

「反論する者はいないようだな……。では、アルタラス王国侵攻を正式に命ずる!! 蛮族に、我らの力を思い知らせてやれ!!」

ここに、アルタラス王国侵攻が国の意思として、決定された。

それは、日本との戦争が避けられない事、そしてパーパルディア皇国滅亡へと進むきっかけを自ら作り出してしまったという事だった。

パーパルディア皇国編―09

パーパルディア皇国 皇都エストシラント

アルタラス王国への侵攻が、御前会議で正式に決定した次の日、エストシラントは大きな騒ぎが起きていた。

事の発端は、この日の早朝に巡回を行っていた艦隊が、エストシラントに接近してくる複数の艦影を発見したことが始まりである。

「未確認の巨大船、複数発見。これより国籍を確認する。」

という、魔伝を受け取った海軍本部は、何処の国かと疑問を抱きつつ次の一報を待った。

最初の魔信から約30分後、

「巨大船は、砲を一門備えた魔導動力（見張りの人間が間違えた）船である。」

「巨大船の国籍は、二ホン国だと思われる。」

と、哨戒艦隊から立て続けに魔信が送られて来た。

この報告に、司令部の緊張は一気に高まる。

日本国と言えば、監察軍を打ち破り、アルタラス王国を増長させた事で皇帝ルディアスの怒りを買っている国であり、軍内部の噂ではアルタラスの次は日本国に侵攻するのではないかと、囁かれている。

そんな国が、砲を一門だけとはいえ武装した船で此方に向かって来ているのだ。

海軍総司令官バルスは、すぐさま警戒態勢に移行する様に命令するのと同時に、第一外務局に連絡を入れた。

普通は文明圏外国を相手にする第三外務局に連絡を入れるのだが、何故列強国の相手にする仕事の第一外務局に連絡を入れたのか？

それは、前日の御前会議が原因である。

会議の場での、カイオスの発言に不満を持った皇族の一人レミールが、日本との外交権を強制的に第一外務局に移管させると同時に、自らが日本との外交の場に出る事にしたのだった。

この一件を受けたカイオスは、（日本の怒りに、油を注がないでくれよ。）と心の底から思っていた。

しかし、同時に彼はそれが無理な事も理解していた。自分の元部下で優秀な素質を持ち、冷静に対応できるエルトならともかく、狂犬というあだ名を持ち皇帝ルディアスに心酔しているレミールが、日本国に失礼な事を言わないはずがない。間違いなく日本の怒りを買って、日本を本気にさせてしまうだろう。

カイオスの脳裏には日本の守護神に破壊され、この世の地獄となったエストシラントが浮かんでいた。

そんな中、クロムから日本の艦隊がエストシラントに向かって来ている事を知ったカイオスは、すぐさま行動を起こした。開戦を防ぐことが出来ないとしても、せめて戦争の被害を抑える為に。

一時間後

エストシラントの沖合では、日本の第1艦隊とパールディア皇国の戦列艦がにらみ合いをしていた。

パールディア皇国の戦列艦は、舷側の魔導砲を護衛艦に向け、日本の護衛艦も主砲こそ向けていないがいつでも発砲できるように備えていた。

一触即発の緊張感に包まれているエストシラント港から、逃げる様に出っていく馬車には、日本の大使として派遣された朝田と篠原が乗っていた。

「緊張しますね、朝田さん。」

「ああ、何しろ仮想敵国の中枢に飛び込むわけだからな。」

日本では目に掛かる事が出来ない中世ヨーロッパ風の街並みを、馬車の中から珍しそうに眺めながら二人は緊張を解す為の雑談を交わす。

雑談をしている間に、馬車は無事に第一外務局に到着した。

日本では有り得ないほどの豪華な装飾が施された建物に、若干ドン引きしながら二人は係員の案内でこれまた豪華な部屋に案内される。

「・・・いくら何でも、豪華すぎじゃありません？」

「自国の豊かさを他国に見せつける為だと思うが、確かにこれはやり過ぎだな・・・。」

部屋の内装に感想を漏らしつつ、パールディア皇国側の人間を

待っている二人。

部屋に入ってから十分後、閉まっていた扉が開き、煌びやかなドレスを着た女性を筆頭に、複数人が入って来た。

「貴様らが、二ホン国の大使か？私は、外務局監査室のレミールだ。貴様の国の外交担当だと思ってくれれば、結構だ。」

「日本国外務省の朝田と篠原です。急な会談にに応じてくれた事に、感謝します。」

パーパルディア皇国に良い印象を持っていないが、事前の通告なしの会談に応じてくれた事に、感謝の言葉を口にする朝田。

朝田の丁寧な言葉遣いと見た事もないが清潔に保たれた姿に、国力はともかく国民性は良さそうな国だな、と感じるエルト。

「急に来国して、一体何用だ？私は、忙しいので簡潔に頼む。」

「それでは・・・。我々はフェン王国での軍事行動に対しての、貴国の意思の確認と軍事行動に対する謝罪を要求しに来ました。」

「ハハハハ・・・。調子に乗るなよ、文明圏外の蛮族め。」

笑ったかと思えば、いきなり声のトーンを下げるレミール。

明らかに彼女は、頭にきているのだろう。

しかし、この程度の威圧で臆する朝田と篠原ではない。

「我が国は、第三文明圏唯一の列強。パーパルディア皇国だぞ!!文明圏外の国など、簡単に滅ぼすことが出来る超大国なのだ!!そんな我が国に、謝罪を要求するだ?!?ふざけるのも大概にしろ!!」

「外交の場でふざけた冗談を言う外交官は居ません。」

「全くなんと恥知らずの愚か者の国なのだ。だが、私はとても寛大だ。お前達に最後のチャンスをやろう。」

そう言うと、レミールは部下に書類を朝田と篠原に渡すように命令する。

日本人の感覚からすれば、質の悪い紙に何が書かれているのか、気になった二人が書類に目を通すと、そこには日本の、いや地球の常識では有り得ない事が書かれていた。

一部を抜粋すると、

・二ホン国の王は、皇国人とし、皇国から派遣された者を置くこと。

・二ホン国内の法を皇国が監査し、皇国が必要に応じ、改正できるものとする。

・二ホン国軍は皇国の求めに応じ、必要数を指定箇所投入できることとする。

・二ホン国は皇国の求めに応じ、毎年指定数の奴隷を差し出すこと。

・二ホン国は今後外交において、皇国の許可無くして新たな国と国交を結ぶことを禁ず。

・二ホン国は現在把握している資源の全てを皇国に開示し、皇国の求めに応じてその資源を差し出すこと。

・二ホン国は現在知りえている魔法技術のすべてを皇国に開示すること。

・パーパルディア皇国の民は皇帝陛下の名において、二ホン国民の生殺与奪権利を有する事とする。

などである。

日本としては到底受け入れることが出来ない事ばかりが、書かれていた。

あつけにとられた二人だったが、すぐに正気に戻るとお互いの顔を見つめ合う。

少しばかり相槌を打ち合うと、二人はレミールに向き合う。

そして朝田は、足を組み強い口調で話し始める。

「ハッキリと言います。なんなのですか、この非常識な要求は!?我が国を植民地にするつもりか!!」

「皇国の実力を知らぬ、蛮族の行う愚かな行動だな。お前達の国は我が皇国の近辺にあるのにも関わらず、我が国の事を知らなすぎる…。しかも、貴様達はアルタラス王国を増長させた。決して許されざる行為だ。」

「アルタラス王国を増長させた? ふざけるな!! 貴国がアルタラス王国を脅かしたのが、そもその原因ではないか!!」

「黙れ!! 貴様たちは、皇国の実力を知らうとしないばかりか、皇国を侮辱までするとか!!。まあ、よい。近頃、貴様達が増長させたアルタラス王国に軍事侵攻を行う。そこで、貴様らは我が皇国の真の

実力を知ることになるだろう……。お前達が頭を下げて謝罪してくる姿が、目に浮かぶわ。」

「……どうやら、我が国と貴国は分かり合えないようですね。失礼させていただきます。」

会談をする意味が無いと、判断した日本側は席を立ち、部屋を退出しようとする。

「貴様たちの行いに、皇帝陛下は怒りを感じていらつしやる。アルタラス王国が落ちるまでに、国に行く末を決めるがよい。二ホン国本土の運命も決するであろう。」

部屋を出ようとしている朝田に、レミールは余裕な表情で問い掛ける。

朝田は立ち止まると、レミールの問いに応える。

「私は、日本の全権大使ではありませんが、これだけは言わせてもらいます。貴国の行いに、我が国の二億一千万の国民は、強い怒りを感じています。この怒りの炎は、間違いなく貴国を焼き尽くすことになるでしょう……。実力を知らない？それは、貴国の方ではないか？我が国の実力を知った時の、貴方方の顔が目浮かびますよ。とても滑稽な光景でしょうね。」

「ふん、馬鹿馬鹿しい。」

そこまで言うと、朝田は扉の所まで行き、最後にもう一度振り返る。

「最後に一つ忠告しておきましょう、レミールさん。」

「何だ？蛮族の遠吠えぐらい聞いてやろう。」

「……我が国の守護神の怒りの雷に打たれることを覚悟しておけ。」

朝田は日本の外交官に許される「暗黙の宣戦布告」の言葉を言い切ると、部屋を出て行き扉を勢いよく閉めた。

馬車に揺られながら、港に戻る二人は終始不機嫌だった。

まさか、初対面の国相手にあり得ない要求をしてくるとは、予想していなかった。しかも、日本やアルタラス王国の事を蛮族と一方的に決めつけ、差別してくるとは夢にも思っていなかった。

「……これから、どうなるのでしょうか？」

「間違いなく、戦争状態に突入するだろう。しかも、非常識な要求をしてきたからな。一切の遠慮なく攻撃することになるだろう。」

「そうですね……。しかし、あの態度はとてもあり得ないですよ！よく、アルタラス王国は長年我慢してきましたね。」

「ああ、そうだな……。？馬車が止まったぞ？」

港まで止まるはずのない馬車が、急に止まったことに疑問を持つ二人。

そんな二人の元に、馬車の御者と見慣れぬ男が一緒にやって来た。

「どうしたのですか？事故があつたのですか？」

「いや、この旦那が突然馬車の前に飛び出してきました……。何でも、貴方方に話があるとか……。」

「そうでしたか……。それで、貴方は何の用ですか？」

「初めまして、二ホン国の大使殿。私は第三外務局所属のクロムです。少しお話をする時間を、頂けませんか？」

「……申し訳ないがクロム殿。我々は貴国から宣戦布告ともとれる言葉を受けています。貴方と話をしても、現状況が改善するとは思えないのですが。」

「それは、私も私の上官も十分に理解しています。ですが、貴国との対話が出来る環境が我々は用意できません。それに、いくら貴国と言えど話が出来る相手がいる場所に「みさいる」を撃ち込んだり、「せんりやくばくげきき」による「じゅうたんばくげき」は、しないでしよう？」

「!!!」
クロムの話に、二人は驚愕する。

まさか、この国に冷静かつ正確に日本の事を調べている人物がいるとは、思っていなかったのだ。

「……なるほど、話し合いの必要がありそうですね。分かりました、お伺いしましょう。」

「あ、ありがとうございます!!」

こうして、日本の大使とパーパルディア皇国の知日家の初の会談が行われることになった。

カイオス宅

朝田と篠原、更に途中で乗り込んだクロムの三人を乗せた馬車は、カイオスの自宅の前へと到着した。

何故、会談場所が第三外務局ではなく、カイオスの自宅なのか？

それは、至極単純な事で「盗聴される可能性が低い。」という一点にある。

この国の皇帝ルディアスは、日本と日本の味方をする国に攻撃を加える様に命令を下している。おまけにカイオスは、日本との外交に口出できない状態にある。そんな彼が勝手に日本の大使と会談をしている事がバレれば、最悪一族皆殺しになってしまう可能性がある。それを出来るだけ避けるために彼は、会談場所に自宅を選んだのであった。

「今回の一件、誠に申し訳ない。」

簡単な自己紹介の後、カイオスは朝田たちに謝罪をした。

パーパルディア人は傲慢な性格の持ち主が多いと聞いていた朝田は、カイオスが最初に謝って来た事に驚愕する。

「い、いえ。貴国の噂を聞いていたので、ある程度は覚悟していました。」

「ですが、第一外務局の連中が貴方方に不敬を働いたのは、揺るぎのない事実です。本当に申し訳ない。」

「・・・ひとつ、質問をしてよろしいでしょうか、カイオス殿。」

「何でしょうか？」

「何故、貴方とクロム殿は、我が国の兵器の名前を知っていたのですか？ 今日会ったレミール殿は、我が国の事を全く知らなかったようなので・・・。」

レミールの名を聞いた時、カイオス達は心の中でしかめっ面をした。

やはり、先日の会議の場で日本の事を話しておくべきだったかな、と後悔しつつもカイオスは質問に答える。

「私知っていたのは、彼ら・・・。クロムとヴァルハルの二人のお陰です。特に、ヴァルハルが正確な戦闘情報を我々に届けてくれなかつ

たら、私やクロムも二ホン国の真の実力に気付くことはなかったでしょう。」

「戦闘情報……まさか、ロデニウス大陸戦争にヴァルハル殿は居たというのですか!？」

「はい、小官は国家戦略局からの命令で、観戦武官の一人としてロデニウス沖の海戦に参加していました。」

「そう、だったのですか……。」

「では、何故パーパルディア皇国の政府は、我が国の事を知らないのですか？」

「とても恥ずかしい事なのですが、実は……。」

カイオスは、国家戦略局がヴァルハルの報告を「文明圏外の国がそのような事が出来るのは、あり得ない」という理由で、虚偽の報告として片付けてしまった事や、正確な情報を得ずに日本の実力を評価してしまったことなどを話した。

全てを聞いた朝田と篠原は、パーパルディア皇国の杜撰な情報収集と情報精査に心底から呆れてしまうのと、会談でのレミールの対応に納得した。

「なるほど……。会談でのレミール殿の対応が、よく分かりました。」

「この国は、今まで戦争に勝ち過ぎました。戦争に勝つのが当たり前、世界を支配し富を独占するのは自分達であると誤認している。大使殿の会談相手のレミールは、正にその典型的な例です。」

「このままいけば、現実を見ていない馬鹿な上層部だけでなく、我が国の罪のない国民まで戦火に巻き込まれることになるでしょう。私たちは、そのような事態だけは何としても避けたいのです。」

彼らの言葉は、本気で言っている重みのある言葉だと、二人は感じた。

勿論、朝田や篠原からしてもパーパルディア皇国の民間人を戦争に巻き込むのは最も避けたい事である。戦争とは国家間での問題解決の方法の一つであり、それに罪のない民間人を巻き込むのは、何としても防がなければならぬ事だった。

「う……む。……では、こうしましょう。我が国の無線機をこの館

に設置してみるのは、如何でしょう？これなら、何時でも連絡を取ることが出来ますし、この国の誰かに傍受される可能性もグツと低くなります。」

「おおーそれは有り難い!!」

「では、機材の搬入の日時と方法は・・・。」

その後、日本の大使とパーパルディア皇国の知日派の秘密の会談は一時間半ほど続いた。

会談を終えた朝田と篠原は、すぐに第11艦隊に合流するとパーパルディア皇国を出国していった。

この日、パーパルディア皇国には大きな絶望が降りかかる事が事実となった。

だがしかし、同時に小さな希望の光も生まれた日でもあった。

日パ会談から三日後、一つのニュースが第三文明圏から世界中に駆け巡った。

「第三文明圏の新興国ニホン国、パーパルディア皇国に宣戦布告。」

パーパルディア皇国編―10

「第三文明圏の新興国ニホン国、パーパルディア皇国に宣戦布告。」

このニュースが、世界に向けて発信される三日前の事。

パーパルディア皇国での会談を終えた朝田と篠原の二人を乗せた第11艦隊は、会談結果を政府に報告すると、命令に従いアルタラス王国へと直行した。

半日後に、アルタラス王国に到着すると二人の大使は、日本が改良工事を行い軍民共用の空港となったルバイル空港で、飛行機に乗り日本に帰国した。

一方、連絡を受け取った日本政府では、非常識なパーパルディア皇国の要求と罵倒に、政治に関係する全ての人間が猛烈な怒りを感じていた。

その怒り具合は、普段は温厚な武田ですら、頭から湯気が出るほどだった。

日本政府は、すぐさま日本と同盟国の国民とその財産を守る為の行動に移った。

まず、国交を開いている全ての国にパーパルディア皇国からの、各国国民の退去を強く求めた。

「パーパルディア皇国と戦争になる、その戦争に貴方方の国の民を巻き込むわけにはいかない」と。

日本の実力を知っている同盟国は、日本の要請にすぐさま応じ国民にパーパルディア皇国への渡航を控え、パーパルディア皇国に滞在している国民には即座に帰国するように通達した。

なお各国に要請を行う際、幾つかの国が観戦武官の派遣をしないと、提案して来た。

日本政府は、機密事項の持ち出しと作戦の漏洩をしないという条件を守るのならば、許可すると返答した。

次に、日本国防衛軍全体に戦時体制に移行するように命令を下した。

海軍は、アルタラス王国の防衛任務に第1艦隊を加え、他の全ての艦隊も戦闘行動可能な状態へと移行させた。

陸軍は、万が一パーパルディア皇国軍が上陸した時に備える為に、各大隊に指示した場所に移動する様に命令を出した。

空軍は早期警戒機のシフトを変更し、何時でも反撃できるように整えるのと同時に、戦略爆撃機「天神」70機をアルタラス王国ルバイル空港に移動させた。

最後に日本国内に向けて、今回の一件を包み隠さずに報道した。

この報道は反パーパルディア皇国感情が高まっていた国民の怒りの火に、航空機用燃料を注いだかのように一気に大きくなった。

「パーパルディア皇国を許すな！」

「傲慢なパーパルディア皇国に、怒りの鉄槌を下せ！」

そんな怒りに満ちた言葉が、日本の彼方此方で叫ばれた。

こうしてパーパルディア皇国での会談があった日から、僅かな時間で戦争準備を整えた日本は、ムーの報道機関の助けを借りて、全世界にパーパルディア皇国と正面から戦う事を伝えた。

このビッグニュースは、世界中に瞬く間に広がっていった……。

クワ・トイネ公国 首都クワ・トイネ

異世界転移した日本が初めて接触し国交を開いた国、クワ・トイネ公国。

いまや、第一文明圏の国以上に豊かな国となった国である。

日本と接触する前から政治を決める重要な場所である「蓮の庭園」では、緊急会議が開かれていた。

「……というわけで、二ホン国はパーパルディア皇国との戦争に踏み切る事を決断したようです。」

「パーパルディア皇国は、二ホン国の事を完全に舐めているようだ。」
「如何やら自分達の力を過信するあまり、盲目になってしまったようですな。」

会議場の彼方此方から、パーパルディア皇国を馬鹿にする声が聞こえてくる。

暫くして、首相であるカナタが話し始める。

「二ホン国政府は自分達だけではなく、我々同盟国の為にも戦いに挑む覚悟を決めました。．．．私たちも、彼の大国には良い思いがありません。彼らの戦いを、少しでも助けたいと私は考えています。二ホン国への更なる物資供給を考えていますが、他に良い案はありませんか？」

「では、私から．．．。」

クワ・トイネ公国は、第三文明圏にある全ての国の為に戦う日本を、自分達にできる限りの支援をする方向で、調整を始めた。

ロウリア王国 王都ジン・ハーク

パーパルディア皇国の一部にそそのかさされ、クワ・トイネ公国に侵攻するも日本国防衛軍に返り討ちにあつたロウリア王国だったが、日本の助けを借りてある程度国力と防衛能力が回復していた。

王都に聳え立つハーク城では、臨時の国家元首となったパタジンが報告書を受け取っていた。

「二ホン国が、パーパルディア皇国と戦争か．．．。しかも、我らの時とは違い全力を出す可能性が高いか．．．。どうなると思う、ターナケイン空軍大将？」

パタジンは傍に控える王都近郊で繰り広げられた日本との戦闘で唯一生き残った竜騎士であり、現在は日本からの支援を受けながら竜騎士団の立て直しと日本製戦闘機を採用した空軍の創設に奔走している若き軍人ターナケインに尋ねる。

「間違いなく、二ホン国の圧勝で終わることになるでしょう。」

「ほう？そう考えた理由は？」

「はっ、理由として二ホン国の兵器の性能が我が国や他国の物と比較にならない程の高性能である事です。音より早く飛ぶ戦闘機、城のように巨大な軍艦、百発百中の誘導兵器．．．。古の魔法帝国ですら霞んでしまうような技術を山の様に持っているのが二ホン国なのです。二ホン国の前では、パーパルディア皇国など赤子も同然です。」

「そうか．．．。二ホン国の大使に伝えてほしい。我が国は、何時でも貴国に援軍を派遣する用意が出来ている」と。それと、ターナケイ

ン空軍大将、君に新たな任務を与える。此度の戦争に観戦武官として二ホン国に出向いてほしい。君は、数少ない二ホン軍と戦って生き残った戦士だ。君ならば、二ホン国の力を正確に測ることが出来るだろう。」

「・・・分かりました。ターナケイン空軍大将、二ホン国の戦いをこの目に焼き付けてきます！」

「頼んだぞ。」

ロウリア王国史上最も若い指揮官は、以前戦った時の経験から日本が戦争に勝つと断言した。

パタジンは彼の判断と異常な速度で国力を回復させた実績を参考に、日本に味方をすることを決めるのと同時に、ターナケインを観戦武官として派遣する事にした。

フエン王国 王都アマノキ

「剣王様、遂に二ホン国が立ち上がりました!!」

「おお！誠か!!」

パーパルディア皇国の監察軍の襲撃の被害から立ち直りつつあるフエン王国の王シハンは、部下からの報告に思わず立ち上がった。

日本の大使から、「同盟国でないのならば、我が国は動かない。」と言われた時は彼は生きた心地がしなかったが、結局日本はシハンの選択に呆れつつも、国家の存亡が掛かっていた事を鑑みて国交の締結を行い、艦隊まで派遣してくれた。

パーパルディア皇国のワイバーンロードを一蹴してしまう程の強大な力を持つ日本が、遂にパーパルディア皇国との戦争に挑むという。

「二ホン国のお陰で、我が国は救われたと言っても過言ではないだろう。しかし、我々はその恩人を騙し、争いに巻き込んでしまった・・・この事実は消すことが出来ないだろう。・・・二ホン国に、二度とあのような事に巻き込まない様に、後世に伝えていかなければな・・・。」

シハンら、フエン王国の武士達は強大な悪に果敢に戦いを挑む日本

国に、最大の感謝をするのと同時に後世の人々が自分達と同じような過ちを犯さない様にする為に、自分達の行ってしまったことを伝承していく事にした。

ムー 首都オタハイト

日本が転移した第三文明圏から遠く離れた第二文明圏でも、日本がパーパルディア皇国との戦争状態になったというニュースは、大きな影響を及ぼしていた。

一部の人々は「パーパルディア皇国が勝つだろう」と考えていたが、大半の、特に日本の力を知っている者は「二ホンが圧勝する」と考えていた。

ムーの軍部では、日本とパーパルディア皇国の戦争に観戦武官を派遣する一件を巡って会議が行われていた。

「第三文明圏の列強パーパルディア皇国と、我が国が元あった世界から転移して来た二ホン国。どちらに観戦武官を派遣するべきでしょうか？」

「我が国の方針は、勝つ方に派遣する事だ。当然、二ホン国に派遣すべきだろう。」

「確かに、あの国は桁外れなまでの科学技術を有しております。初接触の時にやって来た二ホン国の艦隊が、それを裏付けています。しかも此度の戦争では、二ホン国最強の戦艦アマテラスも参戦する可能性が非常に高いとの事です。二ホン国に派遣すべきです！」

「よし、二ホン国に派遣する事にしよう！それで、誰を向かわせる？二ホン国の技術を理解する事のできる、知識と柔軟な考えを持つ人間でなければならぬ。」

「それなら、うってつけの人物がいます。情報分析課の技術士官のマイラスです。我が軍随一の秀才である彼ならば、二ホン国の実力を測ることが出来るでしょう。」

この場に居る全員の頭に、日本との国交開設、同盟締結に大きく関係した若い技術士官の顔が浮かんだ。

日本についての会議が行われた日、彼は不眠不休で可能な限り集めた日本の情報を元に日本との国交開設、そしてたとえ中立国としての

立場を失う事になったとしても日本と同盟を結ぶ事を強く求めている。

この会議での発言で、マイラスはムー軍内でかなり有名な人物になっていた。

「ああ、あのレポートを提出した技術士官か。確かに、彼以上に適任の人物はいないだろうな。他に誰を派遣する?」

「若くて優秀な人物が良いでしょう。我が国が現在把握している物だけでも、常識外れの物ばかりなのです。更なる力を二ホン国は、隠している可能性は十分にあると思います。」

「そうだな、では……。」

会議に出席している軍の幹部たちは、20代から30代までの若い軍人を中心に、観戦武官の任を与える軍人を選定していく。

ミリシアル帝国 カルトアルパス

この世界において、誰もが(一部例外を除く)認める世界最強の国、神聖ミリシアル帝国。

そんなの第二の心臓とも言われている港町カルトアルパスは、中央世界と第一文明圏の貿易の中心であり、数多くの商人が訪れる活気のある都市である。

この町の一角にあるとある酒場では、一日の仕事を終えた商人や海の男たちが様々な雑談を交えながら酒を楽しんでいた。

ある一人の商人が、最近耳にしたある話題を話し始める。

「おい、聞いたか? 第三文明圏の列強パーパルディア皇国にケンカを売った新興国があるらしいぞ。」

「なに? それは本当か?」

「ああ、ムーのニュース放送や新聞で扱っていたから、間違いないぜ。」

「そうか……。しかし、これでまたパーパルディア皇国の領土が、増えることになるな……。そのケンカを売った恐れ知らずの国の名前は、なんて言うんだい?」

「たしか、二ホン国だったかな?」

「もしかしたら、負けるかも知れねえぞ。パーパルディア皇国。」

日本の名前を聞いた時、一人の商人がパーパルディアが負けるという衝撃的な事を口にする。

「は!?!何で、そんなこと言うんだ?」

「何でかって?簡単な事だ、俺は二ホン国に行ったことがあるからさ!!」

「二ホン国に!?!おい、本当か!?!」

その言葉に、酒場の全員の視線が彼へと集中した。

中央世界や第二文明圏の商人の中で、日本に入学できた商人は極僅かである。

その理由として、第三文明圏に行くまでに何度も船を乗り換える必要があり、その分金が掛かってしまうというのもあるが、一番の障壁になっているのが、入学資格の獲得と入学審査がとても厳しい事が一番の要因である。

日本国政府が発行している「パスポート」なる身分証を取得しなければ、入学できないという事実が各国に出回った後、一獲千金を狙う商人や貴族たちが日本との同盟関係にある国にある日本大使館に殺到した。余りの申請数に対応する為に日本政府は、「一回に限り、パスポート申請書だけで入学可能とする」という対策を取らざるを得なかった。

と言っても、パスポート申請書を取得する為に、かなりの数の書類を用意する必要があるうえに、発行までに最速でも一カ月以上は掛かってしまうのだが。

第三文明圏の「ネーツ公国」の出身だという男は、日本国の事を聞くや否や、すぐさま行動に移り何とかパスポートを手に入れることが出来たのだった。

「二ホン国がロウリア王国に勝利したと聞いた時、俺はあの国は間違いないく世界へと進出していくだろうと考えた。そこで、俺はムーの機械式腕時計を数個仕入れて、二ホン国へと入学したんだ。」

「なるほど、手軽で持ち運びやすい上に、高価だから売るにはちょうど良い品物だな。二ホン人がムーの機械式腕時計を見た時、ものすごい驚いていただろう?」

「ああ、俺もそんな反応を期待していたが……。」

「なんだ、歯切れが悪いぞ?」

男は顔を伏せ、なぜか落胆の表情を顔に浮かべた。

周りで聞いていた客や店員たちは、何があったのかと疑問に思った。

「何があった?」

「……二ホン国は、とんでもない規格外の国だったのさ。俺は二ホン国に向かう為に、二ホンの商船会社が運航している船に乗る事にしたんだ。それで、クワ・トイネ公国の港に向かったら、見た事のない巨大で真っ白な船が、停泊していたんだ。帆やマストが無かったから、魔導動力か機械動力で動いている船に乗った時、俺はこう感じたのさ。俺は宮殿に入ってしまったのかとね。」

「……………」

男の話に、全員が沈黙する。

小話すら聞こえない中で、男は話を続ける。

「その船は、今まで乗って来た船と一線を画する快適さだった。清潔な船内、適度に保たれた温度、真っ白なシートが掛けられた大きなベッドが備え付けられた個室、陸の物と大差がない美味しい食事……。全てが規格外だった。その船で一日半航行した後、俺は二ホン国の港町「フクオカ」に到着した。デッキから都市を見た時、俺の中の新興国としての二ホン国のイメージが完全に崩れてしまった。」

「ど、どんな街だったんだ?」

「見た事が無いほどの高さの建物が、幾つも天に向かってそびえている。その建物の足元には、ミリシアルやムーの様な四輪駆動の動力車が、沢山走っていた。道路も石畳でなく、継ぎ目のないナニかで造られていた。交差点も事故が起きにくいように工夫が凝らしてあった。空にはムーの飛行機械より、遥かに巨大な飛行機械が飛び回っていた。しかも、これだけ発展しているというのに、フクオカ市は単なる地方都市の一つだという。二ホン国の国力は、計り知れないものだった。もしかすると、ミリシアル以上に発展しているかもしれない……。」

最後の言葉を聞いた客や店員たちは、大きな笑い声をあげた。

「はっはっはっは!!!あり得ないだろ!そんなこと!!!」

「酔い過ぎだぜ、おっさん!!そんな国、あるわけないだろうが!!」

日本国の事を思い出し、酔いがすっかり抜けていた商人は日本で購入したある品物をカバンから取り出すと、爆笑している周りの客に見せつける。

「では、こんな代物を作ることが出来る国があるか!?!」

突然の大声に驚いた客たちは、笑うのをやめて男が掲げる物に視線を向ける。

そして、全員が驚愕の表情を浮かべる。

男の手には、明らかにムーの物より洗練された機械式の腕時計が握られていた。

「この腕時計の前では、ムーの時計なんて玩具も同然だ!光をエネルギーに変えて、壊れない限り半永久的に時を刻み続けることが出来る上に、十数年たつても一秒程しか狂わない程、正確な時間を示し続ける!しかも、阿保みたいに頑丈だ!よく見てろ!」

そう言うと、男は手に持った日本製腕時計を床に叩きつけたうえに、何度も踏みつけた。

周りの客は男が狂ってしまったのかと考えてしまったが、男が床から腕時計を拾い上げると、店にいる全ての人間の口が顎が外れたかのように大きく開いていた。

そこにはムーの物なら、壊れてスクラップになってしまう程の衝撃を与えた筈なのに、傷一つ付かずに時を刻み続ける時計があったのだ。

「これを作った会社によると、動力車が踏もうが水の中に落とそうが、壊れる事が無いという。こんな代物を庶民でも手に入れることが出来る値段で、販売できる国が存在するか!?!」

あり得ない。ムーの機械時計はねじ巻き式であり、半永久的に時を刻むことはできない。

ましてや、派手に落とそうが踏みつけられようが、動き続けることが出来る、おまけに庶民でも手に入れやすい値段の時計など、彼らは

聞いた事が無かった。

ミリシアルでも作ることが出来ない、この場に居る全員はそう理解した。

「ま、まあ……。二ホン国が凄いつてことはよくわかったよ……。」
客の一人が、そうつぶやく。

その後も、酔っ払いたちの雑談は夜遅くまで続いた。

アルタラス王国 ル・ブリアス

パーパルディア皇国からの攻撃が確定してしまった国、アルタラス王国。

第三文明圏の国から、最も恐れられている列強国から宣戦布告を受けたのにも関わらず、国王ターラ14世や官僚達、国民は、とても落ち着いていた。

彼らが落ち着いて生活できる最大の要因は、王都のどこからでもその姿を見ることが出来る要塞艦が、ル・ブリアスの沖合に停泊しているからである。

その巨大艦こそ日本が派遣した、地球史上最大最強の軍艦、天照型一番艦天照であった。

ターラ14世はそのあまりにも頼もしすぎる後ろ姿を自室の窓から眺めながら、彼の船がやってきた日の事を思い出していた。

日本から、アルタラス王国防衛の為にやってくる艦隊が到着する日、ターラ14世は海軍艦艇を可能な限りかき集めて、盛大な歓迎式を行った。

初めて日本最大の戦艦をその目にしたとき、彼や官僚、軍関係者、そして父に同行して来た王女ルミエスは、自分の目を疑ってしまった。

最初に見た日本の巨大戦艦が小舟に見えてしまう程の巨体と、今まで感じた事のない雰囲気を纏った巨大な要塞艦は、米粒の様なアルタラス王国の戦列艦とゆつくりと並走しながら、港に滑り込んできた。

天照が完全に止まってから少しした後、王国が震えるような歓声が上がった。

ある者は何処からか取り出した日本の国旗を振り、ある者は跪き顔

を覆っていた。

パーパルディア皇国の脅威に日々怯えていたアルタラス王国国民は、日本から遙々やって来た天照に幾数年ぶりの安心感を感じていたのだった。

更に彼らを安心させたのは、日本人の素行の良さだった。

誰もが行儀よく親切であり、他国の軍隊では日常茶飯事の無銭飲食や暴行事件を一つも起こさない。圧倒的な国力を持つ国の軍人なのに、その国力に威を借りて威張る事もない。

パーパルディア皇国という日本とは真逆の事をしている国の兵士の対応を長年して来た彼らの間で、「二ホン軍は、正義の軍隊だ」という考えが広まっていく事になるのは仕方のない事だった。

そんな考えがアルタラス全土に広まっていた時に起こったのが、日本とパーパルディア皇国の開戦決定である。日本と日本の軍隊への信頼感から、絶対に日本があゝの悪魔のような国を倒してくれると確信していたアルタラス王国は、日本への恩を少しでも返すために、パーパルディア皇国への「実体のない最強の剣」の準備を始めた。

パーパルディア皇国 皇都エストシラント

日本との会談が終わった後、パーパルディア皇国政府は直ちに全軍にアルタラス王国侵攻へのG.Oサインを出した。出撃が決まるまで積み込むことが出来なかった、日持ちのしない物資を船に積み込んでいる最中に、日本が全世界に向けて声明を発表した。

この放送をレミールとエルト達は、第一外務局で視聴していた。

放送が終わった後、エルトがレミールの方を見てみると、彼女は怒りで顔が真っ赤になっていた。

「一体何なのだ!!これは!!」

遂に我慢できなくなったレミールは、自分が座っていた椅子から立ち上がり、発狂したと見紛うばかりに感情を爆発させる。

この放送の中で日本は、パーパルディア皇国の行いを許されざる悪と非難し、この様な非道な行いから日本と同盟国の国民を守る為に立ち上がる事を画面の中で声高らかに宣言した。

この日本の宣言は、パーパルディア皇国の指導者であるルディアスの考えに心から心酔している、レミールの怒りに火を付けた。

激怒の言葉を叫びながら彼女は、数日前の夜の事を思い出していた。

その日の夜、レミールは皇帝ルディアスの私室を訪れていた。

二人は、高級酒で満たされたワイングラスを片手に、ベランダからエストシラントの美しい夜景を眺めていた。

「レミール、この世界のあり方について、そしてこのパーパルディア皇国について、お前は思う？」

夜景を眺めていると、ルディアスがレミールに不意に質問をする。

「はい、陛下。数多くの国がひしめく中、皇国は第3文明圏の頂点に立っています。多数の国を束ねる方法として、我が国では武力を背景にした恐怖による方法を取っていますが、これは非常に有効的であると私は思います。」

ルディアスの問いにレミールは自らの考えを言うと、ルディアスは満足そうにうなずきながら話を続ける。

「そう、恐怖による支配こそ、国力増大のためには必要だ。神聖ミリシアル帝国や、ムーは近接国と融和政策をとっている。そんな軟弱な国よりも我が国が下に見られている事自体が我慢ならない。」

我が国は、第3文明圏を統一し、大国、いや、超大国として世界に君臨する。

何れは第1文明圏、第2文明圏を配下に置き、パーパルディアによる世界統一により、世界から永遠に戦争を無くし、真の平和が訪れる。それこそが、世界の国々の人のため……。そうは思わぬか？レミールよ。」

自信に満ちた声で、自分の世界平和の為の考えを話すルディアス。

レミールは感動に心が震え、瞳に涙を浮かべた。

自分が愛する偉大な陛下は、なんとという器が大きな方なのだろうか
と、感動していた。

「へ・・・陛下がそれほどまでに世界の民のことをお考えだとは・・・。
レミール、感動でございます。」

もしも、この場に日本人がいれば、彼らの考えが間違っている事に誰もが気付く事だろう。

なぜ、間違っている事を知っているのか？

その理由は簡単で、地球での歴史が恐怖政治の脆弱性を教えてくれるからだ。

恐怖政治を敷いていた国は短期間こそ？栄える事が出来るが、長期に見れば必ず破滅へと向かってしまう。恐怖を強くすれば政治体制こそ維持できるものの、出来るのはそれだけである。

経済は停滞し国力は落ちていき、他国の影響を受けやすくなってしまい、結局破滅へと向かってしまう。

ルディアスが軟弱と罵ったミリシアルやムーはその事に気付き、国の方針を変える事で破滅への道から逸れることが出来た。

その事実には、彼らは気付いていないのである。

「そのためには、多くの血も流れるだろうが、それは大事を成し遂げるための小事、止むを得ない犠牲だ。そして、皇国の障害となる者たちは排除していかなければならない。レミール、我に協力してくれないか？」

「はい!!喜んでお力になります、陛下!!」

涙を拭くとレミールは、この世で最も愛する人の夢を叶える為に全力を尽くすことを心の中で決めた。

そして今現在、彼女は我を忘れてしまう程の怒りを感じていた。

「・・・陛下の御心を理解しないばかりか、我らを許されざる悪だど!? ふぎけるなよ!!文明圏外の蛮族め!!」

怒りを隠すことのないレミールを横目に書類仕事に没頭するエルト。

「蛮族が・・・滅亡に向かって突き進む・・・か」

不意に耳に飛び込んだエルトの言葉によって、怒り心頭のレミールは怒りの言葉を吐くのをやめる。

エルトは続ける。

「トップが馬鹿だと大変ですね。二ホン国はすべての民が消滅の危機

にさらされているという事が、全く理解出来ていないのですから。」
エルトは日本に対し、もはや憐れみすら感じていた。

皇国は今まで多くの国々を滅してきたが、今回もその1つとなるだろう。

淡々と処刑される蛮族の姿がエルトの脳裏に浮かんだその時、コンコンとドアがノックされた。

「入りなさい。」

エルトが入室を許可すると、先程まで各国の大使の対応をしていた第一外務局の次長である、ハンスが顔色を蒼くし冷や汗をかきながら、入室して来た。

「どうしました?」

エルトが尋ねると、ハンスは冷や汗をふき取りながら話し始める。

「今回の戦争に関して、各国の観戦武官の派遣の有無を確認してきました。ミリシアルなどは、派遣しないとの事です。」

「いつもの事ですね。それで、ムーはいつ派遣してくるのですか?」

「そ、それが……。」

ムーが観戦武官を派遣するかどうか尋ねると、ハンスは言いよどんでしまった。

「どうしました?」

「そ、それが、ムーは、ムーは我が国ではなく、二ホン国に観戦武官を派遣する事にしたとの事です!それと同時に、ムー国民を我が国から退去させることを通達してきました!!」

その瞬間、レミール、エルト、そして部屋で作業していた全ての人間が、突然凍り付いたかのように固まってしまった。

「!!」「えっ!?!」「!!」

そして、全員が同じ反応をする事になった。

こうして日本の宣言と行動は、国内外に大きな影響を与えることになった。

日本とパーパルディアの決戦の時は、近い……。

パー。パルディア皇国編――11

アルタラス王国領海

太陽の光を受けて、宝石のように輝く青い海の上を一機の航空機が飛んでいた。

ムーが世界に誇る旅客機、ラ・カオスの機内には、日本に派遣されることになった軍人や技術者が乗り込んでいた。

彼らが雑談をしたり、読書をしたりして時間を潰していると機内にアナウンスが流れる。

「こちらは機長です。間もなく、アルタラス王国の領空に入ります。席に着き、シートベルトをお付け下さい。なお、護衛の為に二ホン国の戦闘機が二機来てくれる予定になっています。」

「んんんん!! やつつつと、アルタラス王国に到着か〜。」

マイラスはアナウンスを聞くと、読んでいた本を閉じて背伸びをする。

日本の技術を直接見る事を楽しみにしているマイラスの隣で、マイラスの同期の戦術士官ラツサンがため息をつきながら、頬に肘をついていた。

「どうした、ラツサン? 何か、不満があるのか?」

「いや、二ホン国の本土を見る事が出来るかと思っていたからな。少しガツカリしているんだ。」

「だが、これから降りるルバイル空港は、二ホン国が大きく手を加えたと聞いているぞ。二ホン国の建築に関する技術を見ることが出来るかも知れない。それに、もうすぐ二ホン国の戦闘機がやってくる。しっかりと、目に焼き付けようじゃないか。」

二人が話をしていると、突然耳を破壊する程の雷鳴が機内に轟いた。

何事かと、ムーの観戦武官たちが窓の外を覗くと、そこには彼らの大半が見た事のない形の戦闘機が通り過ぎていた。

矢印の様な胴体に、不思議な形をした翼、そしてムーの飛行機には必ずあるプロペラが無い戦闘機が、ラ・カオスの周りを飛んでいた。

「は……、速い!!マリンとは比較にならない程、速い!!」

「プロペラが無いぞ!!もしかして、ミリシアルの天の浮舟と同じか?」
仲間たちが啞然としている中、マイラスは冷静に窓の外の機体を観察していた。

(以前見た垂直離着陸が出来る戦闘機とは、姿が若干違う……。別の戦闘機か?)

やがて、ラ・カオスがルバイル空港に到着すると、彼らはあたりを見渡し驚愕した。

見た事のない、綺麗な舗装が施された滑走路と白く輝く建物。

だが、彼らが一番の衝撃を受けたのは、駐機場に綺麗に並べられた何十機もの巨人機であった。

桁外れに巨大な胴体と主翼、ラ・カオスの胴体直径と同じくらいの大ささの四基のエンジン。

自国の誇りとして、世界に宣伝されていたラ・カオスが、この巨大機の前では、とても小さな頼り無い姿に見えてしまう。

日本の戦略爆撃機「天神」を目の前に、彼らは日本が自国より数十年以上進んでいる事を、嫌でも自覚することになった。

「とんでもない国に派遣されてしまったな……。」

ラツサンの眩きは、ムー観戦武官全員の心情を表していた。

ラ・カオスから降りた一行は、空港で勤務している職員の案内で待合室へ向かった。

心地の良い温度と湿度に保たれ、空港を一望できる大部屋の中では、複数の人ばかりが出来ていた。

そのうちの一人が、物珍しさから部屋の中をキョロキョロと見渡している、マイラスたちの元にやって来た。

「初めまして、ムーの皆さん。私は、クワ・トイネ公国海軍から派遣されたブルーアイです。」

「は、初めまして。私は、ムー国軍情報分析課に所属する技術士官マイラスです。」

ブルーアイが差し出して来た手を取り、握手するマイラス。

握手し終わるのを見定めた空港職員が、ムーの観戦武官たちに飲み

物を配る。

マイラスとラツサンが飲み物を手に、一人用のソファ―に腰掛ける
と向かい合うようにブルーアイが座る。

「ブルーアイさん、なぜ二ホン国が我々をこの部屋で待機させている
のか、理由を知りませんか？」

「いえ、私も知らないです……。ただ、情報によると港に停泊してい
る二ホン国艦隊に動きがある様です。もしかすると、艦隊出撃が近い
のかもしれない。」

「なるほど……。となると、あの巨大戦艦アマテラスがいよいよ出撃
という事ですかね？」

「そうでしょうね……。海軍軍人である私としては、一度でいいから
あの巨大戦艦に乗ってみたいものです。」

「同感です。」
「私もです。」

この時、彼らは自分達が話題にした戦艦に乗ることになるとは、夢
にも思っていなかった。

その後二時間ほど、雑談をして時間を潰していた各国の観戦武官達
の元に、防衛軍の軍服を身に纏った日本人がやって来た。

「クワ・トイネ公国、ロウリア王国、アルタラス王国、そしてムー国の
観戦武官の皆さん、大変お待たせしました。これから、ヘリコプター
で第一護衛艦隊旗艦天照に移動します。荷物を持って、私に着いてき
てください。」

この言葉を聞いて、この部屋に居た大半の人間が、「やれやれ、やつ
と移動か」と立ち上がったのに対して、マイラス、ラツサン、ブルー
アイは石像のように固まっていた。

「は、ハハッ……。まさか願望がこんなに早く叶うことになるなん
て……。」

「夢ではないですよね、この状況……。？」
「と、とりあえず……。移動しましょうか。」

他の人たちが出て行くのを見て、ようやく再起動した三人は手荷物
を急いで纏めると、部屋を後にした。

空港内に新たに設けられたヘリポートで待っていた、二機の大型ヘリコプターは、観戦武官の一行が乗り終えんとすぐに大空へと飛び立った。

海が見えてくると、皆が顔を押し付ける様に窓際に集まり、窓の外を一心不乱に見始めた。

窓の外には、活気にあふれた港から少し離れた沖合いに、灰色の塗装が施された巨大な軍艦が幾つも停泊しているのが見えた。

その軍艦たちの中心に、他より群を抜いて巨大な天照が静かに海に浮かんでいた。

マイラスとラツサンは、初めて見る日本最大にして最強の戦艦の雄姿に、周りに人がいる事すら忘れて興奮してしまう。

「で、デケエ・・・！アレが二ホン国最強の戦艦、アマテラス・・・！」
「見ろ！ラツサン！アマテラスの隣にいる、フソウ型戦艦が小舟の様に見えるぞ！ラ・カサミの数倍以上の巨体を持つフソウ型がだぞ！」

かなり大きな声で会話をしている二人だが、そんな彼らを注意する者はこの機内にはいなかった。なぜなら、同乗している他の観戦武官たちも、窓の外に広がる衝撃的な光景を脳に刻み付けるのに必死だったからだ。

数分後、二機のヘリコプターは無事に天照に着艦し、天照の後部へり甲板に降り立った観戦武官たちの目前には、ふそう型の物より一回り巨大な三連装主砲と、その規格外の主砲より遥かに巨大な単装砲が二門、艦の彼方此方に配された数えきれない程の大小様々な砲、そして幾つもの砲に守られる様に聳え立つ艦橋があった。

天照に降り立った観戦武官だけでなく、ヘリコプターのパイロットたちでさえも天照の雄姿に言葉を失ってしまふ。

この船に初めてやって来た全ての人間の言葉を必ず奪ってしまう、その威容を一言で表すのならば、「摩天楼」が最も合う言葉だろう。

その後、天照の姿に圧倒された観戦武官の一行は、天照の乗員の案内で用意された士官室へと案内された。持ってきた荷物を部屋の中に置くと、指示に従って会議室へと足を運び、乗員から天照艦内で必

ず守らなければならぬ事について、説明を受けた。

説明の内容は、

- ・ 戦闘中は、決して甲板に出てはいけない。
 - ・ 機関室など一部の区画への立ち入り禁止。
 - ・ 写真撮影、魔写撮影は許可が下りた時のみ可能。
- などである。

天照の機関を直接見たかったマイラスは、少しガツカリしてしまつたが、日本政府の好意でこの場に居る事を思い出し、我慢する事にした。

説明が終わると、三度目の乗員の案内で天照の戦闘指揮所へと移動した。

戦闘指揮所にマイラスが入ると、彼は予想していたものと全く違う指揮所に目を見張つた。

彼が予想していたのは、明るい照明で照らされた大部屋に幾つもの机が置かれていてそこで多数の軍人が様々な情報が書かれた書類から作戦を練っている光景だった。

だが、目前に広がっている光景は全く別な代物だった。

暗い部屋の中で、複数人の軍人が幾つも備え付けられたテレビ画面と思われる光る板を前に手元で文字が書かれた複数のボタンを叩きながら何かの作業をしていた。

マイラスたちは、自分達の常識からしてみればとても非現実的な光景に目を奪われていたのだった。

観戦武官たちが戦闘指揮所の光景に呆気に取られている頃、日本海上防衛軍第一艦隊に所属する全ての艦艇が出港の準備を終え出撃の時を待っていた。

本来の「作戦計画」通りならば数日後に出撃する予定だった艦隊が、何故出港準備をすでに終えているのか？

それは、アルタラス王国侵攻の主力部隊と思われる大船団が確認されたからだった。

時はマイラスら、ムーの観戦武官の一行がルバイル空港に到着したころに遡る。

パーパルディア皇国周辺を監視していたアークバードが、エストシラント港から200隻以上の帆船で構成された艦隊が出撃したことを報告して来た。

この報告を受けた防衛省は「作戦計画」を前倒しにすることを決断し、第一艦隊に観戦武官を受け入れたのち直ちに突撃するよう命じたのだった。

多くの人でにぎわっている港に、突然汽笛の音が轟いた。

港に居た軍人や商人、買い出しに来た市民の大半が音のした方向に目を向けると、彼らに絶対の安心を与えてくれた異国の艦隊が錨を上げて動き出していた。

今まで自分達を苦しめた悪の皇国に太陽の旗を掲げた艦隊が正義の鉄槌を下しに向かうのだと、出港を見守っていた誰もが感じていた。

最初、つい先ほどまでの喧騒が嘘の様に静かだったが、

「……、頑張れよー！！！！」

と、誰かが大声で声援を送ると、港全体、いや王都全体が震えるほどの叫びが彼方此方から上がり始めた。

「パーパルディアのクソ野郎をぶっ飛ばしてきてくれ！！」

「頼むぞ、勝ってきてくれー！！！！」

「太陽神よ、どうか彼らに戦勝の加護をお与えください……」

パーパルディア皇国への恨みを晴らしてくれと叫ぶ声や、第一艦隊の勝利を望む声、日本艦隊の勝利を神に祈る声など、王都のあらゆるところから上がった「願い」を一身に受け止めながら日本海上防衛軍第一艦隊は出航していった。

パーパルディア皇国 エストシラント沖

蒼い海を埋め尽くすかのように航行する、エストシラント港から出撃した200隻以上の戦列艦。

以前、日本海上防衛軍第七艦隊が退けた監察軍東洋艦隊と違い艦隊を構成している戦列艦のほぼ全てがパーパルディア皇国が世界に誇

る、100門級戦列艦フィシャヌス級で構成されている。

第三文明圏において絶大な破壊力を誇る魔導砲と、第三文明圏で運用されているあらゆる兵器を弾く対魔弾鉄鋼式装甲を装備したパールディア皇国最強の兵器の一つである。

第三文明圏で運用されてるあらゆる艦船より巨大なフィシャヌス級で編成された艦隊の中央には、更に巨大な船体を持つ120門級超フィシャヌス級戦列艦の内一隻、艦隊旗艦パールが航行していた。

パールの甲板では、アルタラス王国侵攻軍の総司令官であるシウスが眼前に広がる青い海と艦隊を眺めながら考え事をしていた。

（あと一日半でアルタラス王国か……。アルタラス王国の制圧と、アルタラス王国にいる二ホン人を捕らえるのが我々の目標だが……。エストシラントに來航した二ホン国艦隊は、機械動力船である可能性が高いと聞いている。我々が保有していない様な船を、持っている彼らに勝つことが出来るか？上層部は、二ホン国が第三文明圏外の国である事と砲が一門しかない事を理由に大した脅威ではないと判断しているが……。なんだ、この嫌な予感は……。）

パールディア皇国の力に酔っている軍人が多い中で、比較的冷静に物事を判断できるシウスは未だ謎に包まれている日本の力に不安を感じていた。

監察軍の東洋艦隊はパールディア皇国内では二流戦力だが、第三文明圏外の国には決して負けない実力を持っている。その艦隊を返り討ちにした事と、日本がパールディア皇国の艦隊を退けたという事実を全く誇っていない事に彼は不安を感じていたのだった。

（何故、我が国の艦隊を打ち破った事を誇らないのだ……。？……。まさか、二ホン国にとって監察軍を打ち破った事など誇るべきことではないのか!?もし、そうだとしたら二ホン国の実力は……。）
「シウス様、どうされましたか？何か、不安な事があるのですか？」
シウスの脳内で恐るべき仮説が浮かび上がって来たタイムミングで、旗艦パールの艦長を務めているダルタが話しかけて来た。

頭の中で考えていた不安事項で表情が曇っていた事に気付いたシウスは、自分の周りにいる船員に不安感を与えない様にする為に無理

やり表情を変える。

「・・・不安にさせてすまない。少し、二ホン国の事で考え事をしていたのだ。」

「二ホン国？ああ、我が国に喧嘩を売った哀れな蛮族の国の事ですか？」

「君はエストシラントに来た、二ホン国の艦隊を見て不安に感じないのかね？」

「全くありません！確かに機械動力の船を持っている事は驚く事ですが、ただそれだけです。たった一門の砲しか積んでいない船に、一体何が出来るのでしょうか？我々は第三文明圏で最強です。我らの行軍は例えミリシアルの「第零式魔導艦隊」が相手だったとしても、止まる事はないでしょう。」

ダルタの考えに内心呆れつつもそうだなと言葉を返すとシウスは、不安感を拭う為に視線を水平線へと向けた。

絶対の自信をもって、アルタラス王国に進軍するパーパルディア皇国の大艦隊。

だが、この艦隊は出航前から既に監視されている事、破滅の時が刻一刻と近づいている事に誰も気づかなかった。

同時刻、アルタラス王国沖合い

港から出港した第一艦隊は、旗艦天照を先頭にした陣形を組んで航行していた。

天照の艦橋に設置された大モニターには、偵察衛星とアークバードからの情報を元にしたパーパルディア皇国の大艦隊が映し出されていた。

「パーパルディア皇国艦隊、進路変わらず。速力10ノットで航行中。」

「このままの速力と進路では、数時間以内に間違いなく接敵することになります。司令、如何しましょうか？」

モニターに映る情報を腕を組みながら見ていた艦隊司令の佐々木は、少しばかり目を瞑り考えを巡らした。

十数秒間思考した後、彼は艦内電話で戦闘指揮所に居る天照艦長倉田に連絡を入れた。

「何でしょう、佐々木司令。」

「倉田君、200隻の戦列艦ごときに時間を割いている余裕は、我々には無い。」

「存じております。」

「だからと言って、放置するわけにもいかん。一撃で敵艦隊を粉碎するしかない。艦首の100cm超電磁砲を使うぞ！弾種は、君の判断に任せる！」

「はっ！了解しました！」

佐々木からの命令を受け取ると、倉田は直ぐに行動に移った。

「砲術長！艦首100cm超電磁砲用意！！弾種、対艦隊殲滅弾装填！目標、敵艦隊中央部！」

「了解！艦首超電磁砲起動します！対艦隊殲滅弾、装填準備！砲撃シーケンススタート！」

「了解！艦首超電磁砲へのエネルギー回路、開きます！」

「砲塔内の回路、全て正常！砲身冷却機能の動作、確認！」

「艦内重力バランサー、超電磁砲発射モードに移行！」

「全艦に次ぐ、これより本艦は超電磁砲による対艦攻撃を行う！直ちに安全海域に退避せよ！繰り返す、直ちに安全海域に退避せよ！」

天照の装備の中でも特に目立つ100cm超電磁砲の発射準備が行われる様子を、マイラスたちは一言も話さずに黙って見ていた。これから起きる事を、何一つ見逃さない様にする為に……。

「艦外要員の艦内への退避を確認！」

「僚艦の安全海域への退避完了！」

「艦首超電磁砲、発射準備完了！いつでも撃てます！」

「砲術長、照準はどうか!?!」

「敵艦隊中央部の一回り大きな戦列艦を補足、現在追尾中！」

「了解した！艦首超電磁砲発射用意！総員、対シヨック姿勢！」

そこまで言うとう倉田は、後ろで自分達の様子を観察している観戦武官たちに向かって話し掛ける。

「皆さん、これから超電磁砲を発射します！本艦の衝撃吸収機構を最大出力で稼働させていますが、それでも桁外れの衝撃が発生します！全員、壁際の手すりか床に固定されている物に掴まって下さい！」

倉田の強い口調と目の前で繰り広げられていたやり取りから、自分達では想像する事すら出来ない事が起きると感じた観戦武官たちは、倉田の指示通りに壁際や床に固定されている机にしがみついた。

全員が対シヨック姿勢を取ったことを確認すると、倉田は前に向き直る。

「目標パールディア皇国艦隊、艦首100cm超電磁砲・・・。
てえー！！！」

「艦首100cm超電磁砲・・・、てえー！！！」

倉田が腹の底から絞り出したような声で、発射命令を下す。

命令を受けた砲術長が引き金を引くと、二門の超電磁砲の砲身が青く光りプラズマを纏う。

その直後、10トン近くの重量を持つ砲弾が発射され、防音設備が整った艦内にすら響き渡る轟音が轟き、500万トンを超える排水量を持つ天照が大きく揺れ、艦内に大きな衝撃が走った。

その時は唐突に訪れた。

長年のカンのお陰だろうか？

シウスが強烈な殺意が向かって来ている事を感じた次の瞬間、高速で飛来したナニかが自分達の頭上で爆ぜた。

反射的に空を見上げると、突如としてふたつの太陽が空に現れていた。

それがシウスのこの世で見た最後の光景となった。

パールディア皇国艦隊旗艦パールの上空に達した二発の砲弾は、設定どおりに起爆しその莫大なエネルギーを一気に解放した。

「いずも」と「でわ」がロウリア王国飛竜部隊に使用した対空殲滅弾の数十倍の威力を持つ、数万度の灼熱の風がパールディア皇国艦隊を襲った。戦列艦はあつという間にバラバラになり、木材だろうが装甲

だろうが関係なく燃やし尽くした。無論、戦列艦に乗っていた人々も何が起こったのか理解できず、炎の風の中で形を失っていった。

砲弾の起爆から一分後、地獄を生み出していた爆発が収まると、そこには青い海が広がるのみでそれ以外はなにも存在していなかった。

パーパルディア皇国が世界に誇るフィシヤヌス級戦列艦200隻で構成された大艦隊は、日本艦隊を見る事もなく、あっけなくこの世から消滅することになった。

マイラスは、パーパルディア皇国艦隊が消滅する様子を無人機からの映像で目撃し、石像の様に固まってしまった。

ムーでは既に使われていない旧式の戦列艦とは言え、200隻以上の大艦隊をたつた一撃で全滅させてしまうのは、脅威という言葉しか浮かんでこなかった。

マイラス以外の観戦武官たちも一言も発さずに、ただ茫然と立っていたのだった。

パーパルディア皇国艦隊が存在していた海域の現状を、オペレーターが報告する。

「敵艦隊の殲滅を確認。」

「了解した。」

パーパルディア皇国艦隊を全滅させた事を確認した佐々木や倉田、天照の乗員は目を瞑り、死んでいったパーパルディア皇国兵に黙祷をした。

数秒後、目を開いた佐々木は命令を下す。

「作戦の障害を排除した。これより進軍を再開する！目標、パーパルディア皇国皇都エストシラント！」

パーパルディア皇国編―12

アルタラス王国 ルバイル空港

日本海上防衛軍第一艦隊出港から18時間後、日本の手によって大きく姿を変えたルバイル空港の駐機場では、爆弾を満載した70機の戦略爆撃機「天神」が暖機運転を行いながら、出撃の時を待っていた。その様子をアルタラス王国王女ルミエスは、安らかな目で見つめながら日本と接触した時を思い出す。

初めて二ホン人と会った時、彼女が最初に感じたのは「異質」であった。

自分の国より遙かに発展しているというのに、自分達を見下す事や侮辱する事は一切しなかったばかりか、あり得ない程の丁寧な対応をする二ホン国の大使たちに、彼女を含めたアルタラス王国の面々は驚きを隠せなかった。

二ホン国との関係が結ばれると、ルミエスの父であるターラ14世の要請を受けた二ホン国は援軍を派遣して来た。そして彼女たちは援軍としてやってきた二ホン国軍人や二ホン人技術者の行動に、まとも驚かされることになる。

パーパルディア皇国の兵隊が当たり前の様にやっていた、無銭飲食や自国民への暴行を一切やらなかったのだ。そればかりか、個人単位でアルタラス王国国民と交流の場を設けて友情を育んでいた。つい先日も、非番の二ホン国軍人とアルタラス王国の住民が、「サッカー」と呼ばれる二ホン国から持ち込まれた球技をしていた。

両国の人々が笑顔を浮かべながら交流をしているのを目にして、ルミエスは父の判断が間違っていないかった事と、二ホン国が信用に値する国である事を改めて自覚する事になった。

そんな正しく太陽のような国にも、遂にパーパルディア皇国の毒の牙が向けられる事になった。

普段とても温厚な二ホン人が罵声を出してしまう程に、怒りの感情を高ぶらせている事、そしてその怒りの渦の中に、アルタラス王国に對しての野蛮な行いに対する怒りもある事を知った時、ルミエスは二

ホン人の友に対する感情に感動すると同時に、パールディア皇国は温厚で友人思いの二ホン国の逆鱗に触れてしまったのだと、悟った。

そして現在……。

日本国は自分と友人たちの明日を守る為に、誇示せずに隠し続けていた強大な力をパールディア皇国へと、振り下ろす覚悟を決めた。

第三文明圏全体に広がる絶望の闇を破壊すべく、敵地へと羽ばたく日本の軍人を少しでも応援する為に、彼女は空港に足を運んだのだった。

ルミエスが回想をしていると、ルバイル空港の駐機場で待機していた天神に、出撃命令が発令された。

空港全体に響き渡る程の甲高いエンジン音を出しながら、ゆっくりと滑走路へと移動する天神に向かって、ルミエスは小さく手を振って彼らを見送る。

天神のパイロット達は彼女に敬礼で返礼をすると、スロットルを離陸出力まで上げて巨人機を大空へと羽ばたかせていった。

同時刻、日本国海上防衛軍第一艦隊

アルタラス王国から爆撃隊が出撃するのに呼応して、第一艦隊でも動きがあった。

戦艦である天照、ふそう、とさを中心にした艦隊と別れた空母たけみかずちとずいかくから、次々にVTOLF-11型戦闘機とUAV F-111型無人戦闘機、更に対地爆弾を抱えたNFシリーズ最新鋭機NF-07型戦闘機が順次発艦していた。

編隊を組んで高速で空を飛んでいく姿は、力強くとても頼もしいものだった。

マイラスは、飛び去って行く日本戦闘機をじつくりと観察していた。

(やはり、とてつもなく速いな……。マリンは愚かミリシアルの天の浮舟ですら追いつく事は出来ないだろう。という事は、ミリシアルの天の浮舟の物より強力なエンジンが搭載されているのだろう。どん

な原理で造られているのだろうか？この技術力、一端だけだとしても国に持ち帰らなければ！）」

日本本土に上陸したら、日本の技術を余すことなく吸収する事を決意するマイラス。

そんな彼の上には、百以上の飛行機雲が青い空に白いラインを描いていた。

パーパルディア皇国 皇都エストシラント 第一外務局

第一外務局の局長室では、第一外務局の局長エルト、実質的に日本との外交を担当しているレミール、パーパルディア皇国軍最高責任者であるアルデが集まり、今後の対日措置について話していた。

日本に対して皇帝ルディアスが強い関心を持っている為、万が一失敗するわけにはいかない。

なので、皇国の幹部が異例ともいえる対策を行っているのだった。

「今頃アルタラス王国では、我が軍の誇る精鋭部隊と二百隻以上の大艦隊が蛮族どもの軍を一掃しているはずです。」

「ああ、そうだろうな。我が皇国は、第三文明圏で無敵の存在だからな。アルタラス王国制圧の暁には、皇国を侮辱した二ホン国の蛮族どもも、我らの力を思い知ることになるだろう。」

「そうですね・・・。」

「おや？エルト殿は何か不安ごとがあるのですかな？」

「いえ、ムー国が我が国に観戦武官を派遣しなかった事と、ムー国民を我が国から引き上げる様に通達している事が、頭に引つかかっているのです。」

「心配する事はないでしょう。彼らは機械技術に秀でている余り、魔導技術に疎い部分があります。そこで凶り間違えたのでしよう。それにご覧ください！」

そこまで言うと、アルデはテラスに向かう。

雲一つない快晴の空を飛行する飛竜隊を見上げながら、話を続ける。

「皇都上空を周回しているのは、我が皇国の最新鋭の兵器の一つ、ワイ

バーンオーバーロードです！時速400kmを超える圧倒的な速さと、ワイバーンロードから更に強化された導力火炎弾。この最新鋭の飛竜をもつてすれば、たとえ相手がムーのマリンだったとしても互角に立ち回ることが出来ます！」

「確かにアルデ殿の仰る通りかもしれませんがね。」

「そうだな、我が皇国は無敵だ。どの様な敵が来ても」

レミールがいつも通りの皇国賛美の言葉を口にしようとした、その時だった。

皇都を守る為に上空を周回していたワイバーンオーバーロードが、突如として空中で爆ぜた。

「えっ?!?!」

三人が驚いている間も、次々とワイバーンオーバーロードが何も出来ずに撃破されていく。

僅か二分余りの時間で、皇都の空を守っていた飛竜隊は全滅してしまふことになった。

「そ、そんな馬鹿な?! 皇国最強の飛竜隊があつという間に全滅だ?!」

「こんなことが・・・。一体だれが?!」

彼らの疑問に答えるかのように、何かが轟音を立てながら高速で皇都上空を横切った。

灰色の細長い胴体に見た事のない形の翼を生やした物体は、後方から二本の炎を吹き出しながらあり得ない程の速度で大空へと消えていった。

「い、一体何なのだ?! あれは?!」

初めて日本の戦闘機を見て思わず叫ぶアルデに、欄干に手を置いたまま固まっているレミール、そして部屋の中で腰を抜かしているエルト。

三人が驚いている中、制空部隊から少し遅れて飛行して来たNF-07型戦闘機がエストシラント郊外にある皇国軍皇都守備軍の基地への爆撃体制に入った。

本来ならば、迎撃のためにワイバーンオーバーロードを離陸させるのだが、先程の奇襲攻撃によって上空にいたものと離陸中のワイバー

ンオーバーロードが軒並み撃破され、僅かな数が残っているのみであつた。

更に世界最強と謡われていたワイバーンオーバーロードが、短時間でほぼ全て殲滅された事に基地は極度の混乱状態にあつた。

その為、妨害を一切受けずに接近することが出来たNF-07型戦闘機は、滑走路や対空設備などを優先的に攻撃し、破壊しつくした。

「あ、あ、あ……。」

「第三文明圏最強の……、最強の皇都防衛軍基地が……、あつという間に……。」

第一外務局のテラスから爆炎を上げる基地を見てしまい、自分達の信じていた最強の存在が呆気なく攻撃を受けたという事実にも、大きな衝撃を受け言葉を発することが出来ないレミール達。

あまりの非現実的な光景に呆然としている彼女たちを、現実を引き戻したのは局長室に駆け込んできた伝令の兵士の声だつた。

「アルデ様！至急、軍務局にお戻りください!!」

「!!わ、分かつた!!レミール様、エルト殿、これにて失礼します!」

二人に敬礼をすると、アルデは伝令としてきた兵士と共に第一外務局から去つていった。

部屋には、未だに目の前の光景を受け入れることが出来ない二人が残された。

パーパルディア王国 皇都防衛軍基地

パーパルディア王国の陸上戦力の約三分の一の兵力が駐屯している皇都防衛軍基地は、日本の奇襲攻撃を受け、極度の混乱状態にあつた。

基地の指令室も爆撃の影響で窓ガラスがすべて割れてしまい、その破片が床に撒き散らされていた。

その中では、この基地を預かる皇都防衛軍陸将メイガが、痛みを耐えながら指揮を取っていた。彼は、爆発の衝撃波で割れたガラスの破片を諸に喰らつてしまい、右目に大けがを負つてしまった。

だが、彼が片目の喪失という大けがを負つても自らの任務を全うし

ていたお陰で、この基地はかろうじて基地としての機能を維持していた。

「敵騎はまだいるか!?被害はどのくらい受けた!？」

「今のところ、敵騎は居ません!被害についてはですが、滑走路と対空用バリスタが壊滅的な被害を受けました!特に第一滑走路の復旧は、非常に困難です!!第二滑走路の被害は、第一滑走路より軽微です!!」

「分かった!工兵隊は、第二滑走路を最優先で直してくれ!!他の者は、上空監視を行うように!!魔導レーダーはどうか!？」

「報告によると、一切探知出来ないとの事です!」

「魔導レーダーが探知できない?・・・という事は、まさかあの飛行物体の正体は、飛行機械か!」

「そんな!?!あり得ません!ワイバーンオーバーロードの部隊を一瞬で撃破できる飛行機械など、この世に存在しません!!」

「確かにあり得ない事だがな・・・。兎に角、防衛体制だけでも早く立て直さなければ。」

皇都防衛という、栄えある皇国軍の拠点の中でも最も重要な役割を持つこの基地を一刻も早く復旧させるために最大限の事を行うメイから、パーパルディア皇国軍。

だがしかし、手加減する必要がなくなった日本防衛軍が、この程度で攻撃をやめるわけが無かった。

「敵大編隊、此方に接近中!!総数不明!!先程の敵騎より、遥かに巨大です!!」

「な、なんだと・・・。」

見張り台からの悲鳴のような報告に、メイガや軍幹部の間に絶望の空気が流れる。

同時刻 エストシラント都内

エストシラントでは、皇都に住む住民や交易の為に滞在している商人が、先程からたて続けに起きている爆発について、話をしていた。

「今の爆発音は、何だったんだ?」

「お、俺は竜騎士が立て続けにやられるのを見たぞ!少なくとも、皇国

の味方ではない何かがこの国を攻撃しているんだ!!」

「一体どこの国だ？戦争中の二ホン国かアルタラス王国か？」

「馬鹿な!!文明圏外の蛮国がいくら背伸びをしたところで、第三文明圏最強の列強パーパルディア皇国の皇都を攻撃するなんて、不可能だ!あり得ない!!」

「では、攻撃して来たのは、何処の国だ？」

「我が皇国を上回る国力を持つ、ミリシアルか、ムーのどちらかだろう。」

「まさかとは思うが、古の魔法帝国だったりしてな。」

「そんな馬鹿な事が……。」

その時だった。

住民や商人たちの会話を、かき消すような大声が上がる。

「あ、アレはなんだ?!!」

会話をしていた全員が、大声を上げた男が指差す方向に視線を向けると、そこには巨大な影が幾つもちちらに向かって飛んできていた。

「なっ!!!」

「いや、いやああああ!!!」

「ひ……ひいいい!!!」

彼らが知るいかなる飛行物体より、一回り以上巨大な天神の威容と日本の誇る四基の大型ジェットエンジンから発せられる重低音が、皇都に居る全ての人の心に恐怖心をかき立てる。

パーパルディア皇国に35機の天神で構成された爆撃隊を、止める術はない。

皇国臣民に出来るのは、ただ日本爆撃隊を見つめる事だけだった。

皇都爆撃隊 天神コックピット内

「間もなく、爆撃開始地点に到達します。」

「了解。爆弾倉のハッチを開け。」

天神の機長の眼下には、異世界の地、繁栄した大都市が見える。

覇権主義を唱え、驕り高ぶった国パーパルディア皇国。

日本のみならず、アルタラス王国やフェン王国の国民の未来を脅か

す国。

そんな国を相手に、容赦をする必要はない。

「最終セーフティー、解除……。投下までのカウントダウン開始。」

「5, 4, 3, 2, 1……。投下!!」

「投下! 投下! 投下!」

日本航空防衛軍の戦略爆撃編隊は、爆弾の投下地点まで作戦計画通りに到着すると、攻撃目標である皇都北側の大規模基地に対し、その身に抱えて来た多数の無誘導爆弾を雨あられの様に投下した。

皇都防衛軍基地

「敵が!! 敵が侵入してくるぞ!!!」

皇都防衛隊の幹部の一人が叫ぶ。滑走路が二本とも破壊され、パルデアア皇国自慢のワイバーンオーバーロードは大半が撃破され、僅かに残ったワイバーンオーバーロードも地上にいて、戦力として機能していない。

更に、敵は高高度を飛んでいるようで、残っていた対空用バリスタは掠りもしなかった。

つまり、この基地に現時点で出来る事は何一つ無かった。

「敵大編隊、間もなくこの基地上空に到達します!!」

「奴らは一体何をするつもりなんだ!!!」

基地にいる多くの者が、作業の手を止めて上を見上げる。

すると、目のいい兵士が何かに気付く。

「ん!? 何か落としたぞ!!」

「なんだ!? 何を落としたんだ!?」

「分からん!? ただ、黒いナニかが落ちてくる!!」

暫くすると、空を見上げていた彼らの耳に空気を切り裂くような高い音が、聞こえ始めた。先程、飛び去った飛行物体が落とした、凄まじい爆発を引き起こしたものが発していたのと同じ音が。

見上げていた全員の顔に、恐怖の表情が浮かぶ。

たった数発で基地の主要な設備を破壊した、何かが大量に空から自分達の頭上に降ってくるのだ。

恐怖を感じない者がいないはずがなく、基地はあつという間に極度のパニック状態に陥った。

「さっきの爆発物が降ってくるぞ!!」

「退避ー!!退避ー!!」

「クソ!!量が多すぎる!!どこに逃げればいいんだ!!」

敵に襲われた蜘蛛の子が彼方此方に散っていくかのように、バラバラになって逃げるパールディア皇国軍の兵士たち。しかし、爆弾は彼らが安全な場所に避難するまで待つてくれなかった。

一つの爆弾が炸裂した次の瞬間、次々と爆弾が破裂し猛烈な光と音、爆風、衝撃波を発生させた。

基地のあらゆる建物の何十倍もの高さまで爆炎が吹き上がり、煙が基地全体を包み込む。しかし、爆発は断続的に容赦なく続く。地面をえぐり取り、あらゆるものを吹き飛ばし破壊し尽くす。

全ての爆弾を吐き出し終え身軽になった爆撃隊は皇都上空で旋回すると、アルタラス王国ルバイル空港に帰投していった。

基地爆撃から数分後、皇都上空

未だに黒煙を上げ続けるパールディア皇国皇都防衛軍基地の上空を、パールディア皇国皇都基地攻撃の第一陣として、空母たけみかずちから発進したUAVF-11数機が旋回していた。

この数機が危険な敵地の上空で旋回しているのは、爆撃隊の戦果を確認する為であった。

もし、敵基地の破壊が不十分ならば、即座に第二次攻撃を行う予定になっている。

無人機に搭載された高性能カメラが、基地の現在の様子を捉えると、そこには爆撃の影響で空いたと思われる大きささまざまな幾つものクレーターだけが映っていた。

攻撃を受ける前にそこにあった、石づくりの立派な建物や、二本あった滑走路、数百騎のワイバーンを收容出来る竜舎、幾つもの巨大な倉庫は、影も形もなくなっていた。

「敵基地ノ完全ナ破壊ヲ確認。第二次攻撃ノ必要無シ。コレヨリ帰投

スル。」

数機のUAVF-11を束ねている隊長機に搭載されているAIが偵察情報を打電すると、エストシラント上空を旋回していた無人戦闘機たちは一斉に翼を翻して、母艦の元へと帰投していった。

パーパルディア皇国の力の象徴のうちの一つ、皇都防衛軍基地は日本国防衛軍の空母艦載機と戦略爆撃機による猛攻撃によって、原形の面影すら留めずに破壊しつくされ、基地に駐屯していた部隊もろとも、この世から姿を消すことになった。

だが、パーパルディア皇国の悪夢はまだ終わらない。

何故なら、この悪夢はまだ始まったばかりであるからだ。

パーパルディア皇国編―13

パーパルディア皇国 エストシラント港

第三文明圏において最大の貿易港であり、同時に皇国最大の軍港でもあるエストシラント港の一角には、海軍司令部が入っている立派な石造りの建物が建っていた。

パーパルディア皇国海軍の全てを司る作戦指揮所では、パーパルディア皇国の名将の一人、海将バルスが指揮を取りながら思考を巡らせていた。

皇都防衛軍基地が攻撃を受けたとの報を受けたバルスは、すぐさま主力第三艦隊に出撃命令を下し、第一艦隊と第二艦隊にも出撃の用意をさせていた。

精銳の第三艦隊は、既に警戒のための布陣を整えており、万全の態勢で敵を迎え撃つことが出来る状態だった。

更に彼は、海軍一の頭脳を持つと言われているマータルの案を元にした迎撃策を実行していた。

その策とは、戦列艦同士の間隔を普段の3倍ほど取り、展開範囲を広くすることだった。

こうする事で、以前来航した日本の軍艦が搭載していた巨大な砲の対策を行ったのだ。

(二ホン国の戦列艦は確かに巨大だったが、艦砲が一門しかない貧弱なものだった。いくら強力だったとしても、我が国の誇る数百門の魔導砲の前にはなすすべが無いだろう……。だがなんだ？この不安感は何？俺は必ず成功するはずの迎撃策に、自信が無いというのか？)

自分の心の中に僅かに存在する、不安感を払拭するために、バルスは海軍本部の指令所の窓から港の様子を眺める。

既に出港した第三艦隊に合流する為に、続々と出港していく戦列艦。その一隻一隻が、この世界の平均的な戦船に比べ、圧倒的に強く、圧倒的に大きく、そして圧倒的に速い。

特に皇国に四隻しかない150門級戦列艦が並んで停泊している

姿は圧巻であり、絶対的な強者の雰囲気を纏っていた。

その頼もしい姿に、バルスは不安感を払拭し自信を取り戻すのだった。

第三文明圏において、名実ともに最強の名を冠する列強パーパルディア皇国主力艦隊は、いずれ来るであろう日本艦隊の攻撃に備え、それを撃破する為に出港準備を淡々と行うのだった。

皇都防衛軍基地攻撃から一時間後

皇都エストシラントから100 km程南方の海域では、青い海を埋め尽くすかのよう200隻を超えるフィシヤヌス級戦列艦で構成された皇国第三艦隊が展開していた。普段は300 mほどの間隔で航行している艦隊が、約1 kmの間隔で広く展開していた。

同面内に敵が入ってきた場合は、複数の艦が攻撃に参加し敵を滅する。

同質同数の量であれば、各個撃破されることが明確な布陣であり、皇国海軍のセオリーなら決して行わない布陣。

この布陣は、敵よりも被害を受ける事を前提とし、しかし数で圧倒し、長射程かつ巨大な砲を敵が持っていたとしても、確実に敵にダメージを与えうる布陣だった。

第三文明圏において、質においても量においても、他国を圧倒し凌駕し続けた列強パーパルディア皇国にとって、この布陣は血の涙を流すほどの屈辱的な物であった。

しかし敵は、全く未知な方法で皇都の陸軍基地を短時間で壊滅させた日本軍である。間違はなく侮ってはいけない敵であり、屈辱を受けたとしても絶対に勝たなければならない相手であった。

第三艦隊を指揮する提督アルカオンは、皇国に4隻しか存在しない150門級戦列艦ディオスに乗船し、敵がいるであろう南方の海を見る。

皇都基地を攻撃した敵、恐らくはその正体は日本国であろうが、敵は間違いなく艦隊をこちらに向かわせているだろう。

「報告しますー。」

通信兵が叫びながら、此方に向かって来る。

余りの慌てようから、海図を見ながら作戦を練っていた他の幹部も、何事かと顔を上げ、彼を見る。

「どうした？」

「本国の皇都防衛軍基地の被害報告が来ました!!報告によると、基地設備の全てが破壊し尽くされ、駐屯していた陸軍は全滅したとの事です!!また、海軍本部はこの件を受けて、エストシラント港にて待機していた第一艦隊、第二艦隊の両艦隊に出港を命じました!」

「な……何だと!!」

「主力艦隊の全力出撃は、皇国の歴史上初めての事だな。」

「しかし……、鉄壁の防衛網で守られていた筈の皇都が、あつげなく攻撃を受けるとは!?!」

艦橋にいる幹部の面々は、驚愕の言葉を発する。

「敵艦隊の皇都侵攻も、極めて可能性の高い状況になったな……。竜母艦隊に打電!!索敵と防空のワイバーンの数を2倍、いや3倍に増強しろ!!それと、各艦の索敵体制も強化しろ!!怪しい物を一つも逃さないようにするのだ!!」

「「ははっ!!」」

アルカオンの命令は、魔伝によって迅速に後方の竜母艦隊に伝えられた。

命令を受けた竜母からは、次々にワイバーンロードが透き通るような青空へと飛び立っていった。彼らは風を掴み、力強く羽ばたき空を舞う。

その姿は、誇り高く、力強い。

第三艦隊提督アルカオンは、必ずここに来るであろう日本の艦隊に対し、敵意を燃やすのだった。

同時刻 パールディア皇国第三艦隊展開海域の南方100km海域

日本海上防衛軍第一艦隊は、超戦艦天照を先頭に25ノットで一路エストシラントへと、波を裂きながら北進していた。

アークバードからの偵察情報と各艦に備え付けられているレーダーによって、敵の大艦隊が行く手を遮るように展開している事や、敵空母艦隊と思われる船団の位置も把握していた。

また、最重要攻撃目標である敵海軍本部の位置も、偵察衛星とパールディア皇国内部からの情報提供で判明していた。

「アルタラス王国に向かって来ていた艦隊の規模も凄かったが、これから相手にしなければならぬ艦隊も凄い船の量だな。これだけの近代艦の大艦隊を相手にした海戦は、ユトランド沖海戦以来かも知れないな。」

艦隊司令の佐々木は、目の前のモニターに写っているパールディア皇国艦隊の情報を見ながら、つぶやく。

敵の空母を中心にした艦隊は、第一艦隊から北東方向約120kmに展開している。

パールディア皇国は夢にも思っていないだろうが、敵空母艦隊は既に対艦ミサイルの射程圏内に入っていて、何時でも攻撃することが出来る。

「司令、敵空母から多数の飛行物体が飛び立ちました！飛行速度からして、「ワイバーンβ型」（ワイバーンロードの日本側呼称）と思われます！」

「よし！対艦誘導弾により、敵空母艦隊を撃滅する！ミサイル一斉射の後、艦隊増速！敵本隊とワイバーンβ型は砲撃で仕留める！」

「了解！」

各艦に備えられたVLSや斜め上方に向けられた筒の中で、固体燃料に灯がともり、煙が上がると轟音と灼熱の炎と共にそれは発射される。

合計60発にも及ぶ10式艦対艦ミサイルは、固体燃料のロケットブースターにより初期加速を行う。

発射数秒後、十分に加速するとミサイルは燃え尽きたロケットブースターを切り離し、即座にラムジェットエンジンに点火して、さらに加速していく。

日本が威信をかけて開発した、重装甲の戦艦にも有効打を与えるこ

とが出来る対艦ミサイルは、海面すれすれの低空を音速を遙かに超える時速5000 km以上の速度で敵空母艦隊撃滅の為に飛翔していた。

その後、ミサイルを発射した艦隊は戦艦ふそうと戦艦とさの最大船速である33ノットまで増速、パーパルディア皇国第三艦隊との距離を一気に詰め始めた。

パーパルディア皇国第三艦隊所属 竜母艦隊 南方約50 km空域

愛騎のワイバーンロードに騎乗する竜騎士ラカミは、己の全ての神経を研ぎ澄ませながら、哨戒飛行をしていた。

不意に彼の神経が、海の上に何らかの違和感を感じた。

彼が違和感のした方を向いた次の瞬間、海面すれすれの低空を超高速で飛行する、何かを発見した。

「索敵隊より竜母艦隊司令へ!!我、海上を竜母艦隊方向へ向かう超高速未確認飛行物体を複数発見!総数は不明!注意されたし!繰り返しす……。」

「了解、未確認飛行物体の迎撃は可能か?」

「無理だ!既に通過した!あまりにも速すぎて追尾不能だ!」

「了解、こち」

不意に魔導通信が途切れる。

何が起きたのかと、疑問に感じたラカミが魔導通信のチャンネルをいじると、阿鼻叫喚な声が聞こえて来た。

「竜母アビス、轟沈!竜母ガルガオン、被弾!」

「ガルガオンが轟沈した!!うわっ!セイレーンもやられたぞ!!」

「戦列艦ミマス、ライク轟沈!!何が起きて、ぐわっ!!」

次々に聞こえてくるのは、悲鳴のような味方の被害報告のみ。

「い、一体何が起きているんだ……。」

竜騎士ラカミは、味方に一体何が起きているのか全く想像する事が出来ず、仲間の竜騎士が来るまでの間、茫然自失となっていた。

時は少し遡り、ラカミが日本のミサイルを発見する1分前に戻る。

竜母艦隊ではアルカオンの命令を受け、皇国の航空戦力であるワイバーンロードを次々に空へと上げていた。発進したワイバーンロードは、艦隊上空で編隊を組み南へと飛んでいく。

竜母30隻から各艦12騎ずつ、計360騎ものワイバーンロードが既に空に舞い上がっており、更に竜を吐き出し続ける。

発艦した竜騎士達は、敵が来るであろう南の方向へと向かって行く。

「これほどの竜が、一斉に飛び立つのは我が皇国の歴史上初めてだな。」

竜母艦隊の指揮を預かる艦隊司令バーンは、次々と飛び立つ竜騎士を見て側近に呟く。

「そうですね、この戦いは我が皇国の歴史に名を残すことになるでしょう。」

竜母艦隊の軍師アモルは、自信のある態度を持って、自分の上官の呟きに応える。

圧倒的な量の竜、その一体一体が文明圏において最強と呼ばれるワイバーンロードである事に、彼らは絶対の自信を感じていた。

その時だった。

哨戒飛行をしている竜騎士の一人から、緊急の魔導通信が飛んできた。

「索敵隊より竜母艦隊司令へ!!我、海上を竜母艦隊方向へ向かう超高速未確認飛行物体を複数発見!総数は不明!注意されたし!繰り返しす……。」

「おや、如何やら敵は捨て身の攻撃を仕掛けて来たようですね。」
「その様だな。」

皇都への攻撃に成功した国とはいえ、所詮相手は文明圏外の蛮国である。

自分達は圧倒的な強者であり、万全の体制ならば負けるはずがない。

二人は、そう考えていた。

だがしかし、報告からわずか数秒でその慢心した考えは、艦隊もろ

とも粉碎されることになる。

突如として、彼らが乗っている竜母艦隊旗艦の隣にいた竜母アビスが猛烈な閃光に包まれた。

「なっ!!」

突然の出来事に驚いた二人がアビスの方を見ると、そこには船よりも遙かに大きな爆炎に包まれていったアビスがいた。

少し遅れて、海上に爆発音と正体不明の音が木霊した。

「ひいひい!!」

軍師アモルは恐怖のあまり、腰を抜かし情けない声を出す。

日本艦隊が放った10式艦対艦ミサイルの直撃を受けた竜母アビスは、文字通り木っ端みじんに破壊され、海上から姿を消す。

「竜母アビス、轟沈!!」

通信士が悲鳴のような声で報告する。

驚愕と恐怖が艦橋に流れ皆が沈黙している間にも、味方の竜母艦隊は次々に爆発し、海へと沈んでいく。

血で拳が赤く染まる程の力で机を叩いた艦隊司令バーンは、自分の周りで黙っている幹部に命令を下す。

「・・・上空待機中の竜騎士団に、全騎南に急行する様に指令しろ!!敵を見つけ次第、各小隊の判断で敵への攻撃行動を行うように伝えるのだ!!急げ!!」

「はっ!!」

上空で待機している全ての竜騎士に、バーンの命令が伝達されると、命令を受けた竜騎士達は、次々と爆発四散していく艦隊に敬礼をすると、南へと飛んでいった。

「竜母全艦轟沈しました!!戦列艦クルトに被弾、轟沈しました!」

「くっ!!これまでか!!」

艦隊司令のバーンは、自らの乗る船に向かい飛んで来る敵の超高速飛行物体を、死の直前に僅かに視界に捕らえる。

10式艦対艦ミサイルが船に突き刺さり、大爆発を起こす。艦隊司令バーンは、猛烈な光と風に包まれながら、この世を去った。

パーパルディア皇国第三艦隊 旗艦ディオス

第三艦隊の旗艦ディオスの艦橋で、第三艦隊提督アルカオンは、前方の海を睨んでいた。

彼には、もう間もなく皇都を襲撃したであろう国、日本の艦隊と戦う事になる確信的予感を感じていた。

「報告します!!」

艦橋に飛び込んできた通信士が、大声を上げる。

見ると、彼の顔の表情は少しばかり蒼くなっていた。

「何事だ!？」

「そ、それが我が第三艦隊所属の竜母艦隊が、正体不明の高速不明物体の体当たり攻撃を受け、全艦撃沈されました!! 竜母艦隊司令のバーン様の生存は不明! 既に、上空に上がっていたワイバーンロード360騎は、バーン様の命令で正体不明物体が飛来した南方方向に向かい、搜索活動を行っています! なお、敵部隊を発見した場合は、攻撃を行う予定との事です!」

「な・・・何だと!?! 竜母艦隊が全滅しただと!!」

「そんな馬鹿な! 竜母艦隊は我らの主力艦隊よりも、遥かに後方に展開していたのだぞ!! 攻撃が届くはずがない!!」

報告を受けて、幹部たちがそれぞれ驚愕の声を上げ、艦橋内が一気に騒めき立つ。

様々な憶測が飛び交う中、彼らの上官であるアルカオンが手を挙げると、場が静まる。

艦橋内が静かになると、彼は幹部たちにゆっくりと話し始める。

「敵には、水平線の遥か彼方から正確に攻撃することが出来る兵器が存在しているのだろう。」

しかし、恐れる事はない。何故敵は、一気に全ての戦列艦を叩かずに、海戦において最も重要な役割を果たす竜母艦隊のみを狙ったのか? それは、敵には長射程攻撃の数が、我らを滅することが出来るほどの量が無いのだろう。今、我らに長射程攻撃が行われていないのが何よりの証拠だ。狼狽えるな。」

このアルカオンの冷静な分析は、悲壮感にあふれていた艦橋に、物事を正確に判断する冷静さを取り戻させた。

ただ、アルカオンの分析は半分正解であり、半分間違っていた。確かに、10式艦対艦ミサイルは一部の艦を除き、最大でも一隻当たり20発程度しか積載できない物だ。

しかし、例外は存在する。

日本の守護神である天照型戦艦には、今なお原理すら不明の装置「無限装填装置」が搭載されている。これを使えば、パーパルディア皇国の保有する全ての戦列艦に対して、10発ずつミサイルの雨を降らせることも可能だった。

それを日本側がしなかつたのは、日本人ゆえの「もったいない」精神が発動してしまったことと、各国の観戦武官に戦艦の砲撃を見せる為だった。

兎に角、士気の低下を防いだアルカオンの元に、新たな情報が飛び込んでくる。

「戦列艦アデイスから、艦影を確認したとの報告が!!」

「ほう、ついに見つけたか!!詳細は?」

「アデイス前方約60km地点に、艦影を確認!少なくとも、大型艦一隻に中型艦二隻は居るとの事です!!」

「よし!よくやった!!」

アルカオンは提督帽をかぶり直すと、手を振りかざし宣言する。

「第三艦隊全艦、第一種戦闘配備!!全ての竜騎士団にも敵艦隊に突入する様に伝えろ!!我々は艦隊の隊列を乱さずに最大船速で敵に向かう!!空と海から波状攻撃を仕掛け、敵艦隊を殲滅するぞ!!」

「はっ!!」

アルカオンの命令は、正確に各艦に伝達される。

各艦に搭載された「風神の涙」が光り輝き、帆に向かって強烈な風を発生させる。

この風を帆一杯に受け止め、各艦はぐんぐんと加速していく。

「既に竜騎士が空に居たのは、幸いだったな...。バーンよ、貴様の判断に感謝するぞ...。海と空からの同時攻撃、歴史上において今回の様な大規模攻撃を受けたものはいない。二ホン国よ、お前は耐えられるか?」

アルカオンは、鋭い眼光で日本艦隊のいる水平線の彼方を睨みつける。

日本海上防衛軍第一艦隊 旗艦天照

鋼鉄の城が波を裂いて進む。

空母とその直掩を除いた、総勢20隻の艦隊は既に戦闘態勢に移行しており、二列の複縦陣形で敵の大艦隊に向かう。

複縦陣の最前列には、旗艦超戦艦天照が一隻で航行しており、その後ろを二隻の戦艦が付き従う。

天照と敵艦との距離が40kmをなった時、艦隊司令佐々木が指令を下す。

「攻撃開始！繰り返す攻撃開始！各艦は、砲の射程に入り次第、順次攻撃を開始せよ！」

「了解！天照、攻撃を開始する！」

「主砲、副砲、各種砲撃兵器、攻撃準備完了！現在、敵艦に照準中!!」
戦艦ふそうの61cm三連装砲、戦艦とさの51cm三連装砲、そして超戦艦天照の80cm三連装砲が動き始める。

FC S射撃管制システムにより敵艦と自艦の相対速度が算出され、砲の飛翔速度、弾道、そして着弾予想地点を計算し値を算出すると、砲が計算結果に基づいた値通りの砲角度に調整される。

「目標、敵戦列艦……。主砲、交互撃ち方、撃ち方はじめ!!」

「主砲、てえー……!!!」

倉田の指令を受けた天照砲術長が、引き金を引く。

次の瞬間、轟音と爆炎と共に7トンを超える重量の砲弾が、パールディア皇国第三艦隊の戦列艦アデイスに向け、発射された。

後に、この世界に日本という国とその日本が保有する天照型戦艦を強烈に印象づけ、歴史書に「エストシラント沖大海戦」と記されることになる大海戦の火ぶたが、天照の咆哮によって切って落とされた。

パールディア皇国の悪夢は、まだその序曲に入ったばかりである……。

パーパルディア皇国編―14

パーパルディア皇国第三艦隊所属 戦列艦アデイス
パーパルディア皇国第三艦隊で、最初に日本艦隊を発見した戦列艦
アデイスは単独で日本艦隊へ向かって航行していた。

「ん!? 敵艦、発砲しましたー!」

アデイスのメインマストに備え付けられている見張り台にいた、水兵がその鍛え抜かれた目で日本艦隊の砲撃を確認した。

アデイスの艦長と副長は、この報告に首を傾げた。

「奴らは我らとの距離が20 km以上も離れているのにも関わらず、砲を放つとはいったい何のつもりだ? 威嚇か?」

「蛮族どもの行動は、全く理解できません。第三文明圏で最も強力な皇国の魔導砲ですら、射程は2 km程しかありません。完全に射程圏外です。たとえ億が一、敵の砲が皇国の魔導砲のものより、射程が長かったとしても当たる事はないでしょう。」

二人だけでなく、戦列艦アデイスに乗艦している全員が、日本の砲撃が自分達に当たるはずがないと考えていた。

だが、とても慎重な行動を行う事で出世して来たアデイス艦長は、微かに死の予感を感じていた。

「面舵一杯! 念のため回避行動をとるぞ!!」

艦長の命を受けた操舵主が舵を切り、戦列艦アデイスはゆっくりと右へと舵を切る。

舵が効き始め、船が右へと傾き始めた次の瞬間の事だった。

天照が発射した80 cm砲弾が、アデイスの左舷に着弾、爆発を起こした。

爆発で発生した巨大な水柱に半壊したアデイスは巻き込まれ、海面を離れ宙を舞った。

「ぐわああああ!!!」

「た、助けてくれー!!!」

多くの船員の悲痛な叫びと共に、戦列艦アデイスは海面に叩きつけ

られ、その衝撃で艦内に保管されていた魔石が爆発した事で、乗っていた船員もろともバラバラとなって海の藻屑となった。

パーパルディア王国第三艦隊 旗艦デイオス

「戦列艦アデイス轟沈！て・・・敵の攻撃は砲撃によるものと判明!!射程は20 km以上!!たった一発の発砲で命中させています!」

マストの見張り台からの悲鳴のような報告は、艦橋にいる幹部たちに大きな衝撃を与えた。

「な・・・、なななな・・・、なんだと!? 20 km!? 砲の射程距離が20 km以上もあるというのか!! 我が方の10倍の射程もあるというのか!? しかも、たったの1発で命中!? 動目標に対する命中率は、距離2 kmで発射した我が方の100倍もあるのか!!」

「何故、文明圏外の国が我が皇国の最新の魔導砲の性能を遥かに凌駕する砲を持っているのだ!？」

「敵の砲の威力は、たった一発で最新鋭の100門級戦列艦を轟沈させるほどの威力がある! 射程や命中率だけでなく、純粋な砲の火力についても、我々の認識以上の差があるのかもしれない!」

幹部たちは、敵の強大さに対する純粋な驚きと、今まで誇りに思ってきたパーパルディア王国の戦列艦と比較にならない程に、高い性能を持つている敵の船の性能に絶望する。

彼らが議論を交わしている間にも、索敵の為に先行していた戦列艦が次々と砲撃を受け、爆発、轟沈していった。

更に、彼らの元に最悪の報告が飛び込んでくる。

「ほ、報告! 敵との距離を計測し直したところ、敵との距離は40 km以上離れています!」

「そ、そんな馬鹿な!? 40 kmだと!? 間違えたのではないか!？」

「それが何度も計測し直しても、同じ結果なのです。間違いなく40 km以上離れています!!」

「な・・・、何だと・・・? そ、それでは、つまり・・・?」

「て、敵の船が・・・、距離を測り間違えるほどに巨大だということか・・・?」

幹部たちの顔が一気に蒼くなっていく。

歴戦の戦士、アルカオンですら頬に冷や汗をかいていた。

「提督、間もなく竜騎士360騎が敵艦隊上空に到達します。」

「もはや頼みの綱は、彼等だけです。」

「頼むぞ……。」

提督アルカオンとその幹部たちは、竜騎士による攻撃に最後の望みを託すのだった。

パーパルディア王国 第3艦隊所属 竜騎士団

「敵艦隊が見えたぞ!!」

第三艦隊司令部からの魔導通信による誘導を受け、日本艦隊の姿を水平線上に認める。

敵艦は、誰も見た事が無い程の大きさと速さだった。特に、艦隊の先頭を航行している船は、島そのものが動いているのではないかと、錯覚してしまう程に巨大だった。

竜騎士団全体に、強い緊張が走る。

敵艦は、摩訶不思議な方法で竜母を全て水底に沈め、20 km近く離れているのにも関わらず、砲撃を行い、友軍艦艇を次々に沈めていく。

竜騎士団長ダイロスは、一時目を閉じると覚悟を決める。

「全軍突撃！二ホン軍を滅せよ!!!」

「二うおおおお!!!」

自分達は第三文明圏最強の竜騎士団、自分の積み上げて来た全てを信じて、彼らは敵の超巨大要塞艦へと向かう。

パーパルディア王国第三艦隊所属のワイバーンロード360騎が攻撃目標に選び、突撃を敢行したのは、主砲を撃ちながら侵攻していた、日本海上防衛軍第一艦隊旗艦天照だった。

天照の戦闘指揮所では、敵艦隊から発進しこちらに向かって来ている、敵の航空戦力の存在を既に把握していた。

「ワイバーンβ型、本艦に突撃を開始した模様!!」

「それは好都合だ。一気に敵の戦力を半減させることが出来る！前部陽電子誘導光線砲、用意！」

「了解！陽電子誘導光線砲にエネルギー伝達開始！」

「敵に照準合いました！発射準備完了!!」

「陽電子誘導光線砲、撃ち方はじめ!!」

「てえー！ー！！！」

砲術長が引き金を引くと、天照の艦橋前方にある円盤状の兵器の外周が光り、天照に襲い掛かろうとしていたパーパルディア皇国の竜騎士団へ向かって、緑色に発光する光の奔流が放たれた。

竜騎士団団長ダイロスを含めた、全てのワイバーンロードの元へと飛来した緑のビームは、彼らに声を発する暇すらも与えずに、虚空の彼方へと消し去った。

天照の艦橋では、ロウリア王国の観戦武官ターナケインが一部始終を目にしていた。

（なんてこった……。300騎以上のワイバーンが10秒足らずで、全滅してしまった……。列強パーパルディア皇国の主力軍の中でも花形と言われる竜騎士団。ひとたび飛び立てば、7つの軍を滅ぼすと言われていた、第三文明圏最強の部隊が一隻の軍艦に呆気なく敗北した……。本当に、二ホン国には魔法の類が存在していないのか？科学を極めれば、魔法のようなことが出来るようになるのか？ううむ、これから俺はどうすればいいんだ!?)

ここ数日の出来事で、頭がパンク寸前になってしまったターナケインであった。

ただ一つ、彼が理解している事は、「日本と絶対に敵対してはいけない」という事だった。

旗艦ディオス

ディオスの艦橋は、人がいなくなってしまうかのように静まりかえっていた。

いや、静まり返っていたのはディオスの艦橋だけではない。第三艦隊全体が静まりかえっていた。

誰もが、自分の目を疑っていたのだった。

「……りゆ、竜騎士団、全滅……、しました……。敵艦に……、被害認められません。」

艦橋内に弱弱い通信士の声だけが、響く。

誰も可もが、ある事に気付き、それを理解し始めていた。

「自分達は、決して勝てない国に敵対してしまった」

と、いう絶望的状况に……。

パーパルディア皇国艦隊の誰もが呆然としている間にも、日本の攻撃は容赦なく続き、次々と戦列艦が漁礁へと変えられていく。

「戦列艦マルタス、レジール、カミオ轟沈、ターラスに敵砲着弾……」
絶望的な通信士の声だけが、ディオスの艦橋に響き続ける。

パーパルディア皇国きつての名将、歴戦の獅子とまで呼ばれた第三艦隊提督アルカオンでさえ、この状況に対応できず、ただ額に汗を浮かべ、沈黙していた。

皇国の頭脳マータルの考えた作戦も、列強ムー相手ならば効果があっただろう。

しかし、100発100中の長射程砲と、1発で沈むほどの威力のある砲弾なんて、反則すぎる代物ではないか。

「100発100中の長射程砲と、1発で沈むほどの威力のある砲弾」
だけなら、まだ何とかなつたかもしれない。だが、敵の砲はそれに加えて、恐ろしく装填速度が速いのだ。全く、手の打ちようが無かつた。

マータルの考えた作戦は、敵艦隊の圧倒的な戦闘能力を前に全くの無意味となり、味方艦の轟沈だけが続く。

敵の砲は、射程距離が40 km以上もあり、ほぼ100発100中、かつ装填がとてつもなく速い。

皇国の魔導砲の最大有効射程である2 kmまでに近づこうと思ったら、最大船速でも40分以上は掛かってしまう。敵艦は、船速が恐ろしいほどに速いようであり、もつと早く射程圏内に到達できるかもしれないが、戦場でそのような甘い考えが通用するはずがない。

あんな高威力かつ正確な砲撃を、40分も避け続けるのは不可能な事だ。

「……すまん。我らの命は此処までのようだ……。貴官らの命、

皇国海軍の誇りの為に捨ててくれ・・・。」

アルカオンは、命を捨てる覚悟を決めた。

そもそも、皇国の主力部隊が皇都の目と鼻の先で、戦力を残した状態での降伏や撤退が許されるはずがなかった。

彼等には、戦って生き残るか、戦場で散るかの二つの選択肢しかなかったのだ。

アルカオンの決断に、幹部を含めたディオスの乗員全員が、涙を呑んでアルカオンに敬礼をする。

「第三艦隊全艦、二ホン国艦隊に突撃せよ!!我らの、皇国の意地を奴らに見せてやれ!!」

第三艦隊に所属する、全ての戦列艦の風神の涙が光り輝く。

風の魔石によって生み出された風を帆いっぱいを受け、最大船速で敵の巨大艦に向かって、加速する。

しかし、味方艦は絶え間なく降り注ぐ敵の攻撃を受け、次々と轟沈していく。

マータルの作戦計画に基づいて、面の様に薄く広い範囲に展開した皇国艦隊、その面に棒が突き刺さるかのようには、日本海上防衛軍第一艦隊が侵攻する。

日本艦隊は、接近してくるパールディア皇国の戦列艦を次々と粉碎していき、破壊し尽くしていく。

絶望に包まれ、戦意を失っていく第三艦隊。

「二ホン軍の超巨大艦、我が艦の正面に来ます!!」

パールディア皇国第三艦隊旗艦超フィシヤヌス級150門級戦列艦ディオスの正面に、左右に広がっている味方戦列艦を沈め続けている日本艦隊旗艦天照が対峙する。

お互いの距離は、既に40kmを切っており、敵の射程圏内に入っているのは確実だろう。

「提督!北に転進し、二ホン艦隊との距離を取る事を進言します!旗艦を・・・、艦隊指揮能力を失うわけにはいきません!!!」

ディオスの艦長が、上官であるアルカオンに進言する。

「ならん!!進路そのまま、正面の敵艦に特攻せよ!皇国軍が引くわけ

にはいかんのだ!!」

「し、しかし!!」

「敵艦の主砲が動いています!!我が艦に照準を合わせているようです!!」

「提督!!早く本艦の進路を変えてください!!」

「ならん!!」

アルカオンは腕を組み、大声で吼える。

その時、マストの見張り員が悲鳴のような声で絶叫する。

「敵艦発砲!!」

艦の乗組員全員に、緊張が走る。

「敵の砲弾が来るぞ!!取り舵一杯!!総員、衝撃に備えろ!!」

ディオスの艦長が、アルカオンの命令を無視し、操舵員と乗員に大声で指示を出す。

艦がもどかしいほどゆっくりと、舳先の向きを変え始める。

その矢先の出来事だった。

天照の主砲から発射された80cmの砲弾が、ディオスの右舷に直撃した。

その瞬間、船全体を覆いつくすほどの閃光と巨大な衝撃波が発生し、灼熱の熱風が木造の船体をあつという間に引き裂き、破壊していく。

さらに追い打ちをかけるかのように、艦内に積まれていた魔石や魔術媒体が爆発し、砲弾が生み出した破壊の力と共に船を打ち壊していく。

パーパルディア王国第三艦隊の旗艦ディオスは、巨大な水柱と轟音を轟かせながら、船体が木っ端微塵になりながら、轟沈していった。

パーパルディア王国 エストシラント港海軍本部

海将バルスは作戦会議室の窓から、港から続々と出港していく王国の主力艦たちを眺めていた。

もう間もなく、第一、第二艦隊の出港も完了するだろう。

沖合ではすでに、第三艦隊と二ホン艦隊との戦闘が始まっているとの報告があがっている。

作戦会議室には、皇国の頭脳と呼ばれているマータルや、海軍本部に勤めている主要幹部が集まり、机の上に置かれた海図を睨んでいる。

彼らが睨んでいる海図には、次々にバツ印が書き込まれていく。それは先行している第三艦隊の戦列艦が撃沈された場所であり、バツ印の数だけ味方の船が沈んでいるという事である。

次々と入る戦況報告に、マータルは焦りの色を隠すことが出来ない。

まさかこれほどまでに、戦闘能力に差があるとは思っていなかったのだ。

マータルが日本艦隊の戦力として予想していたのは、ムーの機械動力船であった。

そこで彼は、もし日本がムー最強の戦艦であるラ・カサミを複数投入したとしても、それを破り勝利することが出来るような陣形を考え、作戦を立案したのだった。

だがしかし、日本の艦隊の戦闘能力は彼の予想を遥かに上回った。まさか文明圏外の国に、水平線の向こう側から戦列艦を一撃で沈めることが出来る威力かつ、百発百中の命中性を誇る砲が存在しているなんて、夢にも思っていなかった。

味方艦が敵に打撃を与える事すら出来ずに、海の底へと沈んでいく事態にマータルは、列強であるパーパルディア皇国と日本の軍艦の性能差は、列強と文明圏外の国の差よりも大きく離れている事を認めざるを得なかった。

「・・・第三艦隊旗艦ディオス、撃沈されました。第三艦隊は全滅状態です・・・。」

会議室に、弱々しい通信兵の声だけが響く。

部屋にいる全員が、沈黙してしまった。

誰も可もが、この現実を素直に受け止めることが出来なかったのだ。

「・・・よしー！これしかない！」

意を決したように、マータルが発言する。

意気消沈していた幹部たちは、皇国きつての天才が新たに考えた作戦に、期待の眼差しを向けた。

「海将！第一及び第二艦隊は、最密集隊形で二ホン艦隊に突入させましよう！まさかこれほどまでに、艦の性能に差があるとは想像していませんでした。幸いな事に、二ホン艦隊の数はあまり多くはないようです。圧倒的に高性能な船を保有している奴らを倒すには、数で押しつぶすしか方法はありません。」

「……許可する。」

マータルの新たな作戦に大きな期待を寄せていた幹部たちは、その発言に内心ガツカリし、コツソリとため息を吐いた。

マータルの考えた作戦は、海将バルスの命令となって、皇国軍主力第一艦隊と第二艦隊に伝えられる。

彼らは命令に従って、速やかに密集陣形を取ると日本艦隊に向かって行った。

日本海上防衛軍第一艦隊 旗艦 天照

一時も止まることなく流れる川の水のように、刻一刻と変化していく戦場の状況。

その状況の変化を一片たりとも見逃さない様にする為に、各種の情報が集められ戦闘指揮所へと伝えられる。

現在のところ、作戦は計画通りに順調に推移しているようだ。しかし、敵国の首都付近にある大きな港から、続々と出てくる敵艦の量は、日本艦隊を緊張させ続けるのには十分な脅威であった。

「敵艦隊、密集隊形で航行中！敵艦数、少なくとも400隻は超えているとの事です！」

各艦の各種センサー類や、宇宙空間からの偵察で判明した、敵艦隊の隊列とその規模に関する報告があがると同時に、艦隊司令佐々木や艦長倉田、各班の班長等、幹部達に緊張が走る。

「密集隊形をとってきたか!!それにしても、400隻だと?いくら何でも、進路上に敵が多すぎる!」

「どうしましょう?アルタラス沖の様に、超電磁砲で吹き飛ばしますか?」

「いや、それはダメだ。陸から100kmも離れていない海域での超電磁砲の使用は、民間人への被害が出る可能性がある。他の超兵器群も、同様に使用不可だ。」

「となりますと、敵艦隊の中央を強引に突破するしかありませんな。」
「問題は、本艦以外の艦の弾薬です。果たして、最後まで足りるでしょうか？」

様々な意見が僅かな時間の間に、次々と生み出され議論される。それを黙って聞いていた佐々木が、意を決したように呟く。

「艦隊の陣形はそのまま。砲撃については、天照以外は前方は射程限界、側面は10km圏内のみを攻撃せよ。」

「し、しかしそれでは危険すぎます！」

「それと、後方の空母に航空戦力を要請してくれ。艦隊の攻撃圏外の敵艦を攻撃、進路の確保を頼んでくれ。」

「な、なるほど！了解しました！」

短い時間の中で、日本艦隊の行動は決められた。

パーパルディア王国 エストシラント港 南方50kmの海域

エストシラントから微かに見える程度の距離の海域で、砲撃音が轟く。

海上には砲撃音と爆発音が絶え間なく響き、その音の数だけパーパルディア王国の戦列艦が沈んでいく。

上空には、空母から発進した戦闘機が飛び回り、パーパルディア王国の対空火器の射程外から攻撃を加える。

木造の船体に魔導装甲を張り付けた戦列艦では、この苛烈な攻撃に耐えることが出来ず、一撃で破壊され轟沈するか、攻撃で引火し燃え上がるか、至近弾を受けて船体に穴が開き浸水で沈むかの、三択しかなかった。

しかし、彼らは、パーパルディア王国の兵士たちは勇敢だった。

一回の音が起きるたびに、数百人の仲間たちが死んでいくにも関わらず、強大な敵に勇敢に立ち向かっていく。

その姿は、正しく国を守るにふさわしい守護者であり、その勇敢な

戦士に相応しい壮絶な最後を遂げる。

海上が静まりかえった時には、海上には日本海上防衛軍第一艦隊の艦影と、皇国の戦列艦の残骸が多数浮遊していた。

「敵艦隊を壊滅しました！周辺に脅威無し!!」

「よし！敵海軍本部に攻撃を加える！天照を前進させよ!!」

今まで共に戦闘して来た僚艦と別れた天照は、単独でエストシラント港との距離を更に詰めていった。

エストシラント港

つい一時間前まで平和なひと時が流れていた港は、収束不能の混乱状態に陥っていた。

混乱が起きた理由は単純明快であり、それはパールディア皇国第一艦隊と第二艦隊が向かった方向から立て続けに轟音が響き渡り、それが収まったと思ったら、明らかにパールディアの物ではない巨大船がこちらに向かって来ているのを、目撃してしまったからだだった。

混沌とした港の様子を、港の臨時職員として雇われたシルガイアが高台から見ている。

先程まで港の掃除をしていた彼は、港に接近してくる巨大な影にいち早く気付くことが出来たお陰で、誰よりも早く人気の少ない安全な場所へと避難することが出来た。

「い、一体何なんだ……。あれは……。」

シルガイアは、はつきりと姿が見える程に近づいた巨大艦を観察する。

（帆や風神の涙が無い……。とすると、あれは魔導動力か機械動力で動いているのか……。？しかし、余りにも大きすぎる!!一体どこの国の船だ？何のためにやってきたんだ!?)

シルガイアが疑問に思っていると、要塞艦の巨大な大砲が動き、何かに狙いを定める。

何を狙っているのかと、シルガイアが大砲が向けられた先に視線を移して行くと、そこにはある一つの豪華な建物があつた。

シルガイアの顔から、血の気が一気に抜けていく。

「あ、あれは、海軍本部!!ま、まさか!？」

次の瞬間、巨大な艦砲が火を噴いた。

天照の主砲から発射された砲弾は、数秒足らずでパーパルディア皇国海軍本部へと着弾し、大爆発を起こした。

彼はとつさに、パーパルディア皇国海軍の最高責任者であり、学生時代の親友である海将の名前を叫んでいた。

「バ、バルス!!!」

彼の叫びをかき消すように、爆炎と轟音をたてながら、豪華な装飾が各所に施され威厳と威容を放っていた海軍本部が、跡形もなく崩れ落ちていく。

他国を恐怖で支配し続けてきた列強パーパルディア皇国、その恐怖、力の象徴であった海軍本部が崩れて落ちていく音は皇都エストシラントにこだまする。

ここにおいて、パーパルディア皇国は、海軍全体の指揮能力を喪失したのであった。

海軍本部への80cm砲弾の着弾で発生した爆発音と衝撃音が、混乱状態にあった港に木霊する。

港にいた誰もが、崩れ落ち燃えている海軍本部の建物を見て呆然とし、本部の建物を破壊した存在を見て恐怖に震え上がる。

「な、何だよ、あれ……」

「海軍本部が……、海軍本部が吹き飛ばされちゃった。」

「列強の本土が攻撃を受けるなんて……。これは、夢なのか?」

「魔帝だ……。魔帝が復活したんだ!!」

港は、更なる混乱状態へと陥る。

一般の民間人や商人が内陸部へと走る傍らで、港の兵が港のあちらこちらに備え付けられた魔導砲の元へと走り、砲を天照へと向けようとするが、天照からの正確な砲撃で砲台は火柱を上げる。

続いて弾薬庫にも砲弾が命中し、港全体に猛烈な爆発が発生し黒煙に包まれていく。

「ちくしょう!ちくしょう!!あんな化け物に対抗できるはずがない!!!」

シルガイアは、震える足を懸命に動かしながら、エストシラント市内へと向かって行った。

日本海上防衛軍第一艦隊による攻撃により、パーパルディア皇国海軍の主力艦隊は軒並み壊滅し、海の底へと姿を消した。

また、エストシラント港は天照からの砲撃を受け、港湾施設と武器弾薬の貯蔵庫を完全に破壊され、軍港としての機能を完全に失った。

この一連の攻撃により、第三文明圏の唯一の列強として他国を圧倒してきたパーパルディア皇国海軍は、実質的な壊滅状態となった。

その日の夜 皇城パラデイス城

「それでは、これより緊急御前会議を始めたいと思います。」

パーパルディア皇国が危機的な状況に陥った時のみに開催され、普段の会議では必ず行われる根回しを全く行わず、それぞれの部署からの生の情報をぶつけ合う会議が始まるようとしていた。

会議は国のトップ、皇帝ルディアスを筆頭として、国の重役が顔を連ねる。

会議に出席している皆の顔は暗く、誰一人として笑顔を見せる者はいない。

会議に参加している面々には、日本との戦争を招いた皇族レミール、日本との外交を行っている第一外務局の局長エルト、この中でも日本の事を知っている第三外務局局长カイオス、軍全体の指揮を執っているアルデも含まれている。

今、パーパルディア皇国の未来を左右する、重要な会議が始まるようとしていた。

パーパルディア皇国の悪夢は、ようやく半ばに入ったばかりだった。

パーパルディア皇国 皇都エストシラント 皇城パラデイス城
緊急御前会議。

それは、国の重役の中でもトップの人間のみが参加し、実質的に皇国の意志決定が行われる緊急会議が、数十年ぶりに始まるうとした。

会議の議題は、もちろん日本対策である。

会議に参加している主なメンバーは、パーパルディア皇国のトップである皇帝ルディアスを筆頭に、皇族レミール、軍の最高司令官アルデ、第一外務局局长エルト、第二外務局局长リウス、第三外務局局长カイオス、臣民統治機構長パーラス、経済担当局长ムーリが参加し、その他にも各局の幹部の補佐が参加している。

無論、カイオスの右腕であるクロムや、クロムの補佐としてヴァルハルも、この会議に参加している。

「まずは、軍の現状からご説明いたします。」

青白い顔をしたアルデが、パーパルディア皇国軍の被害を報告する。

「海軍の状況についてですが、主力部隊である第一、第二、第三艦隊が壊滅しました。また、アルタラス王国攻略艦隊との交信も途絶えており、状況を鑑みると生存は絶望的です。残存海軍戦力は、現在遠洋航海中の艦隊を含む第一級艦70隻と、監察軍所属の第二級艦を含めた85隻であり、その戦力はアルタラス王国侵攻開始時と比べ、十分の一以下となっており、規模は大幅に縮小しています。」

アルデの額には、大粒の汗が幾つも滴る。

残存艦のみであっても、第三文明圏に存在するいずれの国の海軍よりも戦力は上ではあるが、主力艦隊をあつさりと葬り去ってしまった敵と対峙する事を考えた場合、その戦力はあまりにも小さく、頼りなく見える。

「次に、陸軍の状況についてご説明いたします。」

皇軍三大基地の一つ、皇都防衛軍基地が全滅しました。

壊滅の主な理由である、空中から大量の爆発物投下は今まで全く想定されておりませんでした。

今後基地を建設する際には、戦力を一点に集中させ過ぎないように配慮する必要が生まれましたが、この戦いには間に合いそうにありません。」

「質問宜しいですか？アルデ殿。」

一通りの被害報告を終えたアルデに、第二外務局局長のリウスが疑問を投げかける。

「何でしょうか？」

「皇都に攻撃を行った敵の正体は、判明しているのですか？もしや、列強第一位のミリシアルですか？」

「そ、それについては……。現在の状況と各種情報を照らし合わせてみた結果、敵国は……。敵国は、第三文明圏外の新興国である二ホンの可能性が、最も高いと思われます……。」

このアルデの答えに、会議の場が一気にざわつく。

第三文明圏で唯一の列強国であるパーパルディア皇国に、大打撃を与えたのが文明圏外の国である日本だとは夢にも思っていなかったのだ。

「そんな馬鹿な!?文明圏外の新興国が我らに大打撃を与えただど!?あり得ん!!」

「まさか、裏にはミリシアルかムーがいるのではないか？」

「両国の大使に、直ちに問い質すべきだ!!」

混沌と化した会議場。

彼らが「何故、文明圏外の国であるはずの日本が、あれだけの戦力を持っているのか？」という疑問をあらわにする中、一人の男が手を挙げた。

「発言宜しいか？」

「カイオス殿、どうぞ。」

司会の許可を取ったカイオスは、クロムとヴァルハルに目配せをすると席を立ち、話し始める。

「今回の戦争で敵対することになった二ホン国について、皆さまはどのような認識を持っていますか？」

「文明圏外の国であるクワ・トイネ公国との接触を皮切りに、他国との接触を始めた新興国であり、大砲を作ることが出来る事などから、文明国程度の国力があると認識しています。第一外務局の調査書にも、その様な事が書かれていました。」

「そうですね……。残念ながら、その認識は大きく間違っています。これから、二ホン国についての書類を配布しますので、目を通してください。」

カイオスが話している間に、クロムとヴァルハルが資料を会議に参加しているルディアスや各幹部たちに配る。全員の手元に資料がいきわたった事を確認すると、カイオスは自分達が収集した日本についての情報を話し始める。

「本戦争での敵対国、二ホン国。6つの大きな島と2000を超える島を国土として抱える島国です。人口は二億一千万人。島国としては、破格の人口を誇ります。」

「なに!? 島国で人口が二億一千万だ!?」

「皇国や、周辺国で最も人口の多いロウリア王国を凌駕していると。は……。」

「人口が多いのは確かに脅威ですが、二ホン国はそれ以上の力を有しています。皆様、資料の6ページ目を開いてください。」

大部屋に紙をめくる音だけが響く。

そのページには、二つの魔写が貼られていた。

「ページの右側にある魔写は、ムーのマリンです。最高速度380km、7.7ミリの機関銃を二門装備する対空戦闘用の飛行機です。我が皇国で運用されているワイバーンロードより速く、装備している機関銃はワイバーン種の鱗を容易く貫通します。このマリンに対抗する為に、ワイバーンオーバーロードが開発されたことは周知の事実でしょう。」

カイオスの言葉に、会議に参加している皆がうなづく。

「さて、ページの左にある魔写は、二ホン国が独自に開発し、運用して

いる戦闘用飛行機械の一つ、「VTOLF-11」です。最高速度はマッハ2.5、時速に直すと3000kmに達します。」

「何だ?!?時速3000kmだ?!?速すぎる!」

「ミリシアルの天の浮舟以上の速度を出せる飛行機械が、この世に存在しているなんて……。」

「まるで、古の魔法帝国のようだ……。」

日本の戦闘機の性能に、会議室にいる全員が驚愕する。

まさか敵国に、列強第一位の国ですら保有していない様な兵器が存在している事など、夢にも思っていなかったのだ。

「このVTOLF-11だけでも、二ホン国が非常に高度な技術を保有している事がわかります。私の調査によると、二ホン国には他にも強力な機体が存在している事が確認されています。例えば、皇都防衛軍の基地に大量の爆発物を投下した機体は、二ホン国の大型爆撃機「エンジン」です。数十トンもの爆弾を搭載でき、尚且つ爆弾を満載している状態でも、ワイバーンオーバードより速く、高高度を飛行することが出来ます。」

全員の顔が、特に日本との戦争原因を作ってしまったレミールや軍を総括するアルデの顔が青くなっていく。

レミールらの様子に、何度目か分からない呆れの感情を抱きながら、カイオスは話を続ける。

「次は、二ホン国の海軍戦力です。二ホン国は島国であり、皇国以上に海軍に力を注いでいます。資料の12ページをご覧ください。このページに記載しているのは、二ホン国海軍の主力艦の一つ、フソウ型戦艦です。全長390m、排水量20万トンを超える超巨大艦です。比較としてムーのラ・カサミと、ミリシアルのミスリル級の性能を揭示しています。比較すると、フィシャヌス級より遙かに強力なラ・カサミやミスリル級でさえも、二ホン国のフソウ型戦艦に太刀打ち出来ません。軍艦の性能は、国力を表すと言えます。二ホン国は、この強力な戦艦を10隻も保有しているのです。」

「……………」

会議室に集まっている全員が黙り、その額に冷や汗をかく。

「20ページから記載されているのは、二ホン国の首都トウキョウやオオサカ、フクオカなどの大都市の魔写です。高さが200mを超え、窓ガラスをふんだんに使った建物が、まるで森に生える木々の様に建っています。しかも二ホン国は、自然災害が毎年の様に発生する国であり、写っている建物すべてが非常に高い強度を持っています。皇国の建物が倒れてしまう程の災害が襲ってきたとしても、これらの建物はびくともしません。」

この場にいる全員が意気消沈し、ある事に気付き始める。

それは、「自分達は、超列強国を相手に侮辱し、相手を怒らせてしまった。」という事だった。

この資料とカイオスの発言がすべて正しければ、日本はパーパルディア皇国を遥かに凌駕する力を持ち、その差は列強と文明圏外の国以上にあるという事である。

この情報は、日本の事を蛮族の国と認識していた者たちにとって、これ以上にならない悲報であった。

「二ホン国はとても温厚であり、滅多な事が無い限り軍事行動には出ない国です。我々は、その国と戦争状態に陥ってしまいました・・・。エルト殿、二ホン国大使との会談時の記録はありますか?」

「え?ええ・・・、手元にありますが・・・?」

「少し、見せていただけませんか?」

突然のカイオスの要請に戸惑いつつも、エルトはカバンの中から日本との会談時の会話を書き記した書類を手渡す。

カイオスは書類を受け取ると、ぱらぱらとめくり会談の内容を確認していく。

「・・・何をしているのだ、カイオスよ?」

「はっ、実は二ホン国の怒り具合を表す言葉がある事が、調査の結果判明いたしました。その言葉を我が国に対して発言していないか、調べているのです、皇帝陛下。」

何かしらの言葉を探し、何度も書類を確認するカイオス。

数分後、彼の表情に変化が訪れた。

彼はしかめっ面をしながら、後ろに控えているクロムらにもそれを

見せる。

二人もまた、その内容に天を仰ぐように顔を上に向ける。

「何があったのだ、カイオスよ?」

「・・・陛下、どうやら二ホン国は相当頭にきているようです。」

そう言うと、彼は失礼しますと言いながらルディアスの隣に行き、ある一文を指さす。

「陛下、二ホン国大使が最後に放ったこの言葉、「我が国の守護神の怒りの雷に打たれることを覚悟しておけ」が、二ホン国の怒りの程度を表しています。」

「ふむ、どのような意味が込められているのだ?」

「意識しますと、「我が国の持つ最大の力を使ってでも、お前たちの国を解体してやる」です・・・。」

「な、何だと!?!」

まさかの内容に、全員が驚愕する。

つまり日本は、「全力でパールディア皇国を滅ぼしてやる」と、会談の場で宣言していたのだった。

もしこれが他の国、例えばロウリア王国の様な文明圏外の国が言ったことならば、笑いごとで済む話だが、明らかに超列強とまで言える實力を持っている日本相手では、冗談で済む話ではない。

「・・・陛下、事は予想以上に深刻です。我が国は、建国以来の重大な危機に瀕しております。おそらく二ホン国は本気です。本気で皇国を地上から消し去るつもりです。」

「し、しかし、我が国にはまだ聖都パールネウスと、工業都市デユロの陸軍基地が残っています! それにいくら二ホン国の軍隊が強力だったとしても、皇国の全土に攻撃を加える事なんて不可能だ!!」

カイオスの言葉に、思わずアルデが反論した時だった。

会議場の扉が勢い良く開かれ、汗だくの兵が入ってきた。

「何事だ!? 御前会議の場であるぞ!」

「そ、それが・・・、緊急事態です・・・!」

「だからと言って、この場への」

「よい、パラス。それで、何があった?」

突然の乱入者にパールラスが叱責したが、ルディアスが彼を止め、汗だくの兵に問い掛ける。

兵の言葉を聞き間違いない様に、全員が耳を澄ませる。

「はっ！聖都パールネウスからの緊急連絡によりますと、今日の正午頃に謎の巨大な飛行物体が南方より複数飛来、パールネウス郊外への基地へと攻撃を仕掛けて来たとの事です!!」

「な、何だと!?パールネウスが攻撃を受けただと!?ひ、被害は?!」

「ほう、報告によりますと、基地の被害は甚大であり、駐屯していた部隊は上空哨戒に就いていた飛竜隊もろとも全滅したとの事です!!」

この最悪の情報に、会議に参加している全員の顔から血の気が引いていく。

たった一日、たった一日でパールディア皇国は二つの一大拠点と海軍戦力のほぼ全てを破壊され、無力化されたのだ。

今まで受けた事のない、今まで聞いた事すらない被害に、ある程度日本の事を知っているカイオスやクロムですら絶望感に包まれていた。普段は、列強国の皇族としての振る舞いをしているルディアスも、苦悶の表情を浮かべ、手が震えていたが、それを隠しながらカイオスに問う。

「・・・カイオスよ。我が国において、二ホン国の事について誰よりも精通している貴様ならば、二ホン国の次の行動が予測出来るのではないか?率直に言ってくれ、二ホン国は今後どの様な行動をとると思う?」

「・・・恐らく、我が国最後の一大拠点であり、生産拠点でもある工業都市デュロに攻撃を加えると思われれます。皇国の軍事拠点を的確に破壊している二ホン国ならば、デュロの重要性は確実に認識しているはずです。」

「そうか・・・。アルデよ、全力でデュロを守り切るのだ!!どのような手を使っても構わん!!」

「は、はははっ!!」

ルディアスがアルデに命令を下しているのを、席に座りながら見ていたカイオスは、誰にも聞こえない様な言葉で呟いた。

「……もう、デユロは手遅れかも知れないな……。」

奇しくも、カイオスの直感は当たっていた。

この時既に、パールディア王国最大の工業都市デユロは業火と轟音、人々の悲鳴に包まれていたのだった。

パールディア王国の悪夢が覚める時は、未だに遙か遠くに存在していた……。

パーパルディア皇国編―16

パーパルディア皇国 工業都市デュロ

時は、エストシラントで緊急御前会議が始まる二時間前に遡る。

パーパルディア皇国最大の生産拠点であるデュロの郊外に建設された軍事基地では、エストシラントからの緊急の魔伝を受け取ったデュロ防衛隊長であるストリームと陸軍將軍ブレムと軍幹部が、緊急会議を行っていた。

「皆、落ち着いて聞いてほしい。皇都エストシラントが攻撃を受けた。」

「何ですと!?!被害は!?!」

「被害についてだが、皇都防衛軍基地は全滅。海軍戦力やワイバーンオーバードも大半が撃破され、海軍本部も攻撃を受け、機能を停止してしまった……。」

この最悪の一報は会議室にいた軍幹部や文官幹部達は、一瞬その言葉が理解できず、頭の中で何度もストリームの言葉を繰り返し再生した。

「う、嘘だろ……。」

「敵はいったい何者なんだ? ミリシアルかムーか?」

言葉をようやく理解した幹部たちの疑問に、ストリームは言いにくそうに答える。

「各種情報に照らし合わせた結果……、敵は、第三文明圏外の国である二ホン国の軍であると推定されている……。」

ブレムはその意外な国名を聞いて、絶句してしまった。

最近噂になっている国、二ホン国。

パーパルディア皇国内では、「皇国を侮辱した文明圏外の蛮族の国」と認識されている国だが、同時に主に一部の商人たちの間で、「列強国でも見ることが無い商品が沢山ある、科学技術が発達した国」とも言われている国である。

大半のパーパルディア人は、商人達の噂話を全くと信じていなかったが、ストリームとブレムは違った。

この二人は、この噂を裏付けるモノを手に入れていたのである。ストリームとブレムの左腕には、商人から献上された日本製の腕時計がはめられていた。

この時計を初めて見た時、二人はムー製の新型の腕時計かと勘違いし、生産した国を聞いて腰を抜かしそうになった。

この衝撃の一件の後、二人は出来る限り情報を集めた。

開戦直前に収集を始めた為、カイオス程情報を集めることが出来なかったが、それでもある程度の情報を手に入れることが出来た。

情報曰く、「帆のない巨大な船が軍民間わず普及している」や「皇国では貴重なガラスが、皇国の物よりも高品質であり、驚くほどに低価格で売られている」などである。

これらの情報から二人は、日本が普通の国では無い事を理解することが出来たのである。

「とても信じられない事だが、皇都が攻撃を受けたのは事実だ。デュロの防衛体制のレベルを上げる必要がある。」

「そうだな……、全軍に通過。第二種警戒体制に移行せよ。相手は、唯の文明圏外の国ではない。猛毒の牙を隠し持ったヒュドラだと思え。決して油断するな。」

会議の後、直ぐにデュロは第二種警戒体制に移行した。見張りの数を増やし、魔導レーダーの24時間監視、即応部隊の編成へと動き出したのだった。

デュロ沿岸部から300 km東の空域

日本防衛軍は、敵国の一大生産拠点への攻撃の前段階の偵察任務に、大気機動宇宙機アークバードをその任に充てていた。

パーパルディア皇国側が日本の事をあまり把握できていないのに対して、日本側は衛星軌道から地面に置かれたノートの字を判別する事が出来るほどの、高い観測能力を持つアークバードによって、攻撃目標の防衛体制を全て知ることが出来ていた。

この高精度の偵察情報はすぐさま、日本海上防衛軍第七艦隊と第九艦隊で構成されたデュロ攻撃艦隊へと送られた。

「ふくむ、列強を名乗っているだけあるな……。未だにこれほどの戦力を持っているとは……。」

「確かにこれだけの軍事力があれば、並大抵の相手には有利に立ち回ることが出来るでしょう……。何せ、確認されている船の数だけでも、クワ・トイネ公国やアルタラス王国の倍近くはありますからね。ただ、我々の相手にはなりません。」

「確かにその通りだが、油断は禁物だ。何しろここは異世界。魔法とか竜とかが当たり前前の存在だ。もしかすると、我々の知らない秘密兵器があるかもしれないぞ。……航空隊の準備はどうか？」

「空母りゆうほう及び空母かいようからは、何時でもいけるとの事です。」

「よし、航空隊発艦！目標、敵基地及び敵の軍事工場！本作戦は、パーパルディア皇国の力を削ぐ為の最後の仕上げである！この一戦に日本と同盟国の命運が掛かっている！各員奮闘し、努力せよ！」

第七艦隊旗艦えちごのマストに乙旗が掲げられると、二隻の空母から次々に戦闘機が発進していく。

戦闘機たちは空母から飛び立つと、艦隊上空で旋回しながら隊列を組み、一路デュロへと飛行機雲を伸ばしながら飛んで行く。

その飛行機雲の下を、彼らを追いかける様に艦隊が増速を行う。

第二種警戒体制に移行してから30分後

パーパルディア皇国 デュロ防衛軍基地所属 第11竜騎士団第1飛行隊第2飛行中隊

日が沈み始め、透き通った青色に夕暮れのオレンジ色が混じり始めた空を、ワイバーンロードが二騎飛行していた。彼らは、デュロの空の守りを担当するガウスの指示によって、一方がワイバーンの限界高度ギリギリを、もう一方が木々にかすめると錯覚するほどの低空を飛行していた。

高空を飛ぶ若い竜騎士の名は、サルクル。彼の下には、彼の所属する中隊を指揮するマグネの姿も見える。

彼は、祖国に攻撃をしてきた日本軍へ対抗心を燃やしていた。

(どんなカラクリを使ったのか分からんが、蛮族のくせに調子に乗りやがって……、まあ良いか。奴らがデユロに攻め込んで来たら、俺の操縦技術で返り討ちにしてやる……。)

その時、

「……ん？なんだ？あれは？」

透き通った空に黒い点が浮かんでいた。

「!!」

常人なら反応できなかったが、竜騎士は総じて目が良く、それが見えた。黒い点は異常な速度で彼との距離を詰めてくる。

本能的に命の危機感を感じ、手綱を動かして回避行動を取ったが、無慈悲な光景が彼の目に写る。

「っ、ついてくる!?!」

黒い点……いや、近くに来ると銀色の矢のように見える物体は方向を変えてくる。彼は無意識のうちに魔信の送話スイッチを握っていた。

ついてくる矢。味方の障害となるであろう物を報告しなければ。

だが、その思いは届かず、矢は彼の近くで爆発する。

パーパルディア皇国の竜騎士サルクルは、自慢の操縦技術を発揮する事もなく、空母りゆうほうから発艦したUAVF-11から発射された空対空ミサイルの直撃を受け、撃墜された。

サルクルが撃墜された時、彼の上官である竜騎士マグネは頭上で突然起きた爆発音に、咄嗟に頭上に意識を向けながら、部下の安否を確認する魔導通信を行っていた。

「サルクル、サルクル！応答しろ！サルクル！」

何度も上空を飛んでいた部下に問い掛けるが、反応が無い。

その内上空の黒煙の中から、ワイバーンの一部と思われるナニかがバラバラと降って来る。同時に、矢のような外見の飛行物体が高速でデユロに向かって行った。

この光景を見て彼は、部下が撃墜された事と敵からの攻撃を受けている事を認識した。

「緊急！緊急！サルクルが敵の飛行物体に撃墜された！！サルクルを撃墜したと思われる物体は、08分隊の方に向かっていている！！至急回避行動に移れ！！」

「こちら08分隊。マグネ中隊長、攻撃の詳細をお・・・ガキツ！」
「08分隊応答せよ!? 応答せよ!?!・・・クソツ!!まさか!?!」

通信中に相手側から猛烈な雑音が流れ途絶してしまったことに、マグネの脳裏に最悪の予想がよぎる。

身震いしながら、魔導通信機をいじると阿鼻叫喚の魔信が流れていた。

「アスタル！アスタル！チクショウ、08分隊のアスタルがやられた！」

「二ホン軍は高空のワイバーンを狙って攻撃をしている！高空に展開しているワイバーンは、至急低空へ侵入せよ！」

「03分隊、りよ、了K・・・ザザツ」

「畜生！ストールが！こつちもやられた!!」

「来るな、来るなあ・・・!!ヒイ!!やめ・・・グハツ！」

「05分隊が全滅した！クソ、こつちに来やがった!?!」

「ムーのマリンなんて比じゃないぞ!?!文明圏外の国が持っている戦力じゃないぞ!?!」

次々と続く仲間の戦死報告。あつという間に味方の竜騎士達が撃破されていき、今までに感じた事のない絶望感がマグネを襲う。

マグネの僚騎サルクルは、隊の中で最も若い血気盛んな若者だったが、周囲の人間に気を遣うことが出来るハキハキとした性格の持ち主で、とてもいい奴だった。

アスタルは竜騎士の中では大人しいが、つい先月長男が生まれとても幸せそうだった。

竜騎士は栄えある皇国軍の中でも、最も殉職率が低かった筈だ。
「チクショウ！家族になんて説明すれば・・・、ちくしよおおおおおおお!!」

マグネがワイバーンロードの上で慟哭した直後、03分隊を全滅させたUAVF-11から発射された空対空ミサイルが着弾し、マグネ

は爆発の中に消えていった。

数分後、パーパルディア王国 デュロ防衛軍基地

皇都エストシラントの防衛軍基地と、同等の設備を有するデュロの防衛軍基地の建物の内の一つにある空の守りを統括する防空司令部では、誰もが青ざめた顔で立ち尽くしていた。

一時間前までは平和そのものだった空に、大きな変化が起こったのは十分前の事であった。

突然、東の空を守っていたワイバーンロードの反応が魔導レーダー上から消えた。

当初レーダー手は、レーダーの故障かと考えたが他のワイバーンロードの反応が次々と消えていくのを見て、飛竜隊が何者かの攻撃を受けている事を知覚した。

レーダー手はすぐさま、上官にこの事を報告した。

「た、大変です！ワイバーンロードの反応が、複数消滅しました！敵の攻撃を受けていると思われます!？」

「なに!?そんな馬鹿な?!故障ではないのか!？」

「いえ、魔導レーダーは正常に稼働しています！間違いなく、現在進行形で敵の攻撃を受けています!？」

「クソッ！全飛竜隊に迎撃を命じろ！全てのワイバーンを空に上げるんだ！通信手、展開している飛竜隊と連絡はとれるか!？」

「そ、それが……。魔信が混乱しており、此方の命令をうまく伝達できません!？」

通信手の悲鳴のような報告を受けた上官が、ひったくるように魔導通信の受話器を奪い取ると、スピーカーに竜騎士達の報告が出力される様にするのと同時に、上空の竜騎士達に命令をしようとする。

「マグネ中隊長がやられた!!第二飛行中隊は全滅だ!!」

「低空のワイバーンもやられているぞ!?どうすればいいんだ!？」

「此方、10分隊。我が隊は敵の攻撃によって、壊滅寸前!誰か助けてくれ!」

通信機からは、竜騎士達の悲鳴か絶望的な報告のみが聞こえる。

「ば…馬鹿な!!被害を受けた部隊は相当の距離が離れているんだぞ!!」

「落ち着け!!マグネを撃墜した物体が他の分隊を攻撃したのであれば、敵は桁外れの速度で飛行していることになるぞ!!ムーのマリンはおろか、神聖ミリシアル帝国のエルペジオでも不可能な速度でだ!!」

「多方向からの同時攻撃だろう!!でなければ、現状の説明がつかん!!」

「一体何が…、何が起こっているんだ!!」

信じられない報告に騒然とする防空司令部の幹部達を他所に、魔導レーダーの味方を表す光点が次々に消えていく。上空で哨戒中であった部隊だけでなく、緊急発進したワイバーン隊の光点すらも、次々と消えていき、遂に最後の光がレーダー上から消えた。

「み、み、味方の飛竜隊…、全滅しました…。敵に…、敵に制空権を奪われました…。」

震える声で通信士が報告すると、騒然としていた部屋があつという間に静まり返った。

暫くの沈黙の後、防空司令部の幹部の一人が、未だに現実を受け入れられない様子で防空司令部に備え付けられた緊急アラートのボタンの向かい、それを押す。

ウウウウウウウウウウ、という音と共に陸上基地全体に非常事態を知らせる警報音が鳴り響き、緊急事態が発生した事を基地にいる全てのパーパルディア皇国軍人に知らせた。

この警告音が鳴り響いた基地内では、兵士たちが初めての事態に驚きつつも各々の武装を身に着け、それぞれの配置へと急ぐ。その他にも備え付けの対空用のバリスタを東の空へと向け、更には対地用の牽引魔導砲を引っ張り出し、敵の来る方向へとそれらを向ける。

パーパルディア皇国デユロ防衛隊は、史上初めての防衛体制に移行したのだった。

パーパルディア皇国の悪夢、その目覚めの光は、未だに彼らに降り注ぐことは無い…。

パーパルディア皇国編―17

パーパルディア皇国 デュロ防衛軍基地 総合司令部

史上初めての防衛体制に移行したデュロ防衛軍基地の司令部では、軍の幹部達が一つの大机の周りに集まり、敵の迎撃策を練っていた。「なんてこった……。あれが二ホン国の航空戦力だというのか……。」「精鋭の竜騎士が操るワイバーンロードが一方的に、しかも一瞬で撃破されるとは……。ムーのマリン、いやミリシアルの天の浮舟以上の性能だぞ！」

第三文明圏において、最強と言われているワイバーンロードが手も足も出ずに撃破されたことに幹部たちはもちろん、日本の事についてある程度知っている筈のストリームとブレムですら、額に冷や汗をかいていた。

その額の汗を拭うと、ブレムは現状を打開するために口を開く。「敵は、この後本格的な攻撃をこの基地に行うだろう……。此方の竜騎士団に甚大な被害を与えたのは、対地攻撃に集中する為に制空権を確保するためではないかと思われます。」

「つまり飛竜隊を全滅させたのは、敵の主力ではないという事か？」「恐らくは……。でなければ、陸上設備が攻撃を受けていない理由が説明できません。必ず攻撃があると断言できます。ただ、問題は敵の迎撃方法です。敵騎の速度は桁外れであり、通常の対空戦闘では対抗できません。そこで、「対空魔光砲」の使用を考えております。」

「なに？ た、対空魔光砲を実戦投入するだ?!？」
対空魔光砲とは、この世界の誰もが認める世界最強の国（ただし、一部例外を除く）である神聖ミリシアル帝国で、正式採用されている対空魔導兵器である。

第三文明圏のあらゆる対空兵器より、遥かに強力なこの対空兵器を自国で製造する為に、秘密裏に行われた取引の結果、一基の対空魔光砲がミリシアルから密輸され、皇国最高峰の製造技術を有するデュロへと運ばれていた。

デュロへと運び込まれてから、これまで長い調査が行われきたが、

この兵器の重要な基盤となる魔術回路があまりにも複雑で、複製は
ろく解析すらも非常に難航していた。

検証・解析の為に密輸されたので一門しか存在していないが、
パールディア皇国に存在している対空兵器の中で、最も高性能な兵器
なのである。

「あれは非常に貴重な代物だが・・・、このままむざむざと破壊される
よりは遥かにマシだろう・・・。それにあれを使えば、敵に皇国に凄
まじい兵器があると警戒させることが出来るだろうしな・・・。よか
ろう、使用を許可しよう。」

ストリームの許可を得たブレムは、すぐさま対空魔光砲を工廠の建
物から見晴らしのいい場所に移動させ、砲撃の準備をさせ始めた。

数分後、パールディア皇国 工業都市デュロ

デュロに住む多くの市民は、もう間もなく夕食の時間になるとい
うのに食事の準備をせずに空を見上げ、精鋭の竜騎士達が爆発し撃墜し
た飛行物体や基地から鳴り響いた警報音に、今度はこの都市が謎の敵
に狙われ、攻撃を受けるのではないかと戦々恐々としていた。

その時、誰かが上空から聞いた事のない不気味な音が聞こえてくる
ことに気付き、空を見渡した。

数秒後、彼はその音を発している物を見つけた。

見つけてしまった。

「おい！ひ、東の空に何かが沢山いるぞ!？」

「竜騎士団を攻撃していた奴よりもデカいぞ!？」

「もう終わりだ・・・。デュロはもう終わりだ!!!」

夕暮れの空に幾つもの白い尾を引きながら、大きな灰色の飛行物体
がデュロへと向かってくる。

この光景に、デュロの一般市民は大パニックに陥った。

ある者は荷車に荷物を載せて街から出ようとし、ある者は「どうせ
死ぬなら、愛する家族と愛しき家の中で最期を迎えよう」とドアを閉
めて家族で抱き抱え合い、またある者は一方的に自分達を攻撃しよう

とする敵に、憎悪の感情を向けながら見上げていた。

同時刻 デュロ防衛軍基地

デュロ市内が阿鼻叫喚の状態に陥っていたのと同じ頃、迎撃策を練っていたストリームの元に悲痛な声で報告が届く。

「敵飛行機械と思われる飛行物体が、高高度より此方に多数接近中!! 先程の物よりかなりの大型です!!」

「遂に来たか!? 総員、戦闘配置!!」

ストリームは指示を出しながら手にした望遠鏡で、空を見上げた。(かなり高いところを飛んでいるな……。しかも、やたらに速いな。もしかすると、ワイバーンオーバーロードよりも速いかもしれないな。やはり頼りになるのは、対空魔光砲だけか……。頼むぞ……。) ストリームは自分達の無力を感じながら、対空魔光砲に最後の望みを託したのだった。

同じく同時刻 デュロ工業地区 中央公園

防衛軍基地の近くにある工業地区の一角にある広い公園の真ん中に、デュロ防衛の最後の望みである対空魔光砲が設置され、射撃の準備を整えていた。

第三文明圏には無いはずの兵器である対空魔光砲の射撃準備を監督をしているのは、陸軍新兵器研究開発部に所属するハルカスである。

彼は、対空魔光砲の発射位置固定や動力源である魔石の接続作業、エネルギー充電作業を監督しながら、高空からデュロに侵入してくる敵を睨みつけていた。

「かなりの高高度を飛んでいるな……。しかもあの巨体であるの速度……。敵の飛行機械は、ムーの物より遥かに高性能な可能性があるな。出来れば鹵獲して、分解調査してみたいが難しいだろうな……。」

上司の忌々しそうな呟きに、彼の部下の一人が答える。

「この対空魔光砲ならば、あの高さと速度でも十分に対応できます!!」

奴らに一泡吹かせてやりましょう!!」

「だといいがな……。しかし……。」

対空魔光砲に接続された人間が5人くらい入りそうな大きさの鉄製の筐体が六つと、モニターとしての機能を持つ魔動圧計や水晶板を眺め、ハルカスは苛立ちを隠すことが出来ない。

「使用許可を得てから直ぐに準備を開始したのに、未だに魔力充電が終わらないのか?!? 一体どれだけの魔力を使うんだ!? この兵器は!?!」

「これを持ってきたミリシアルの技術者は「魔力充電はすぐに終わる」と言っていたのですが……。これほど魔力を使用する兵器を当たり前運用する事が出来るミリシアル帝国は、流石自他ともに「世界最強の国」と言われている国ですね。」

皇国は第三文明圏最強であり、唯一の列強ではあるが、魔導技術についてはミリシアルの足元にも届きそうが無い。皇国に数人しかない、大魔導士の称号を持つハルカスだからこそ、この事実を認めざるを得なかった。

「魔力充電……。98%……。99%……。100%!! ハルカス様、魔力エネルギー充電完了しました!!」

空に向かって突き出された筒状の銃身の発射口が仄かに赤く光り始め、球状の小さな粒子が発射口に吸い込まれていく。

「属性比率、雷14、風65、炎21、呪文高速詠唱開始」

人には聞き取りにくいほどの速度で自動的に詠唱が開始される。

その詠唱速度は人間が聞くと不快に聞こえ、思わず何人かの技術者が耳をふさぐ。

「詠唱完了! 射撃モードは連射モードを選択! 対空魔光砲、発射準備完了!」

ハルカスが望遠照準器の十字マークの真ん中に敵が来るように調整すると、見た事のない大きさと形の飛行機械が照準器いっぱいに写った。

「皇国は……。皇国は蹂躪させん!!」

彼は飛行物体への敵意をむき出しにし、発射ボタンを強く押し込んだ。

光の弾が地上から超高速で、連続で上空へと撃ちあがっていく光景はまるで、地から天へと光が昇っていくかのようで、とても美しいものであった。

同時刻 デュロ上空

パーパルディア王国最大の生産拠点であるのと同時に、同国最後の一大軍事拠点が存在するデュロへと爆撃を行おうとしている日本航空防衛軍爆撃隊。

その爆撃隊の右後方の位置する、最新鋭機NF-7型戦闘機を操る樋口は、地上からの攻撃を警戒していた。

眼下に見える敵国の工場群。その工場群の一角の開けた場所で、幾つものフラッシュを確認する。

彼は直ぐに無線を入れ、仲間に警告を送る。

「地上からの対空攻撃を確認！各機、警戒！」

樋口が警告を送った瞬間、爆撃機天神の内の一機の横を敵の対空砲弾が掠めた。

一瞬だけぶれた機体に再度光弾が襲い掛かり、天神の胴体と右翼のエンジンの一基に命中した。

「しまった!!敵弾を貫った!!」

被弾した天神のパイロットは、焦りの声をあげながらも機体の制御に集中する。

胴体とエンジンに命中した幾つもの光弾に内装されていた爆裂魔法は、光弾分の爆発を生んだ。

だが、「地球上でもっとも頑丈な航空機」の一機に数えられる天神は、たった数発の光弾程度ではびくともせず飛行していた。

「此方、11番機。胴体と一番エンジンに被弾した！外見上に何かしらの異常は確認できるか？」

「此方、ライダー2。燃料漏れ、及び火災の類は確認できない。」

被弾した天神のすぐそばにいた樋口が、11番機の通信に応える。

「11番機、右旋回で基地に帰投せよ。」

「了解。後を頼みます。」

被弾した天神には目立った外見上の損傷はなかったが、内部構造にダメージが入っている可能性を考慮して、編隊長からの帰投命令が下された。

「敵対空兵器を確認！破壊を要請する！」

「ライダー2、了解！敵対空兵器を破壊する！」

「了解！敵からの反撃には注意せよ。」

樋口はNF-7型戦闘機の機首を下げ、敵の対空兵器へと降下していく。

「此方、ライダー2。敵対空兵器沈黙状態。再装填中と思われる。これより、攻撃を開始する！FOX-3!!」

機銃発射の符丁をコールした後、樋口はトリガーを引き絞った。

毎分4000発の機関砲が咆哮し、20mmの弾丸が対空魔光砲が設置された公園へと降り注ぐ。

その直後、デュロ防衛軍基地の最後の希望である対空魔光砲は、20mm弾丸によって穴だらけになり、破壊されつくされた。粉碎された魔導エンジンと魔石が砕け、対空魔光砲の周りにいたハルカスや技術者を巻き込んで、色とりどりの派手な誘爆を起こした。

デュロ防衛軍基地 総司令部

「対空魔光砲、敵からの反撃で大破!!沈黙しました!!」

「敵飛行機械へ与えた被害は!!・・・何?!一機損傷させただけだど?!」

「敵超巨大飛行機械、デュロ上空に侵入！」

悲鳴のような報告が次々と総司令部に入ってくる。

対抗策をすべて打ち砕かれた事実、ストリームやブレム、幹部たちの顔は青白くなっていた。

そこに、更なる最悪の報告がやって来る。

「敵飛行機械が何かを投下しました！かなりの数です!!」

「なに!?!何を投下したんだ!?!」

雨の様に落下してきた黒い物体の一つが地面に接した次の瞬間、爆炎を上げ地面を大きくくえぐった。

この光景に彼らは、死の予感を確かに感じた。

たった一発であれだけの破壊力なのだ。それが雨あられの様に降ってくるという事は、つまり……。

「に、逃げろ!!高威力の爆弾が降って来るぞ!!」

「退避、退避いいいい!!基地の外に逃げろ!!」

命の危機を感じた兵たちが、一目散に基地の外や建物の中に逃げようとするが、爆弾の雨は彼らに逃げる時間を与えなかった。

猛烈な炎と爆風の嵐が、何度も発生し、基地や工場を破壊していく。

この攻撃によって、パールディア皇国三大軍事拠点の最後の生き残りであったデュロ防衛軍基地と、パールディア皇国の生命線であるデュロの生産施設は、全て破壊し尽くされ壊滅してしまった。

デュロ市民の多くは、軍の基地と工場群が僅かな時間で文字通り消滅してしまった事に、パニックを通り越して、唯々呆然となつてしまった。

工業都市デュロ 港湾エリア

皇都エストシラントの物には及ばないが立派に整備されたデュロの港では、この港に残っていた戦列艦をかき集めて編成された即席艦隊が出撃の準備を駆け足で行っていた。

この即席艦隊の旗艦を務める100門級戦列艦ムーライトの艦長サクシードは、副長らと話し合いを行っていた。

「なんて、こつた……。鉄壁の防御力を有していた筈のデュロ防衛軍基地が……。手も足も出ずにやられるとは……。」

「敵の飛行機械の性能は、予想以上だったという事か……。あのような飛行機械を保有する国に、我らは果たして一矢報いることが出来るのだろうか……。」

「おい!?変な事を言うな!?我らは精強のパールディア皇国軍だぞ!!油断をしなければ、蛮族相手に決して負けるはずがない!」

「貴様は現実を見る!!奇襲を受けたとはいえ、精鋭の部隊が何も出来ずに壊滅したのだぞ!!相手を蛮族と侮れば、何も出来ずに敗れることになるぞ!」

「何だと!？」

喧騒に包まれる部屋の中で、一人サクシードは考えを巡らせていた。

(おかしい・・・、あれだけ徹底的に防衛軍基地と兵站到不可欠な工場に攻撃を加えて来た二ホン軍が、我々海軍に全く攻撃を加えてこないのは、余りにも不自然だ・・・。一体なぜだ？爆弾の量が足りなかったからか？いや、これは私がそうあってほしいと願っているだけだ。では、他に理由は・・・？もしか、爆弾による攻撃を行う必要が無い？敵には、別の攻撃方法があるという事か。考えられるのは・・・、まさか!?)

思考を巡らせていたサクシードは、ある一つの恐ろしい答えにたどり着いた。

彼は、顔を蒼くしながらある事を部下に聞く。

「・・・副長、デュロ近辺で二ホン国の艦隊は確認されていないのか?」

「いえ、確認はされておりませんが・・・。どうされました?」

「不思議に思わないか?あれだけ防衛軍基地が苛烈な攻撃を受けたのに、何故我々海軍は攻撃を受けていないのかと。」

サクシードの指摘は、部屋にいた幹部たちの頭になかった事であり、部屋にいる全員が指摘されて初めて気づいた事であった。

「この状況に対して私は、二ホン国は海軍戦力を動員して我々を攻撃するのではないかと考えている。でなければ、敵の飛行機械の攻撃を受けていない現状を私は説明できない。」

「そ、それでは、艦長は敵艦隊がすぐ近海まで、接近している可能性があると考えているのですか?」

「そうだ。だが、このままむぎむぎとやられるつもりはない。今直ぐに出撃だ!先手を取るぞ!!」

「はっはっは!!」

このサクシードの命令は直ちに実行に移され、ムーライトを囲うように40隻余りの魔導戦列艦は、此処に迫ってきているであろう日本艦隊を迎え撃つために、デュロの港から出撃していった。

同時刻 日本艦隊

順調に敵の工業都市への攻撃を行っていた日本海上防衛軍デュロ
攻略艦隊。

だが、作戦の最終段階に入った直後、彼らに緊張感を与える事態が
発生する。

「司令、敵港湾都市から敵艦隊が出撃しました！」

「なに？ 敵艦隊の数は？」

「大小複数の戦列艦で構成された艦隊で艦隊総数は42隻、事前に確
認されていた隻数と同数です。」

「此方の作戦を読んだのか、若しくは別の港への退避か……。どちら
にせよ、逃がすわけにはいかん！ 本艦とあさひ、ゆきかぜを敵艦隊迎
撃に充てる！ 他艦は作戦通り、敵港湾都市へと侵攻せよ!!」

「了解！ 艦橋、増速黒二十!!」

パーパルディア皇国即席艦隊の出撃を確認した日本海上防衛軍
デュロ攻略艦隊は、戦艦さつまは護衛艦あさひと護衛艦ゆきかぜを護
衛に付けて、パーパルディア皇国艦隊へと向かって行った。

30分後、パーパルディア皇国艦隊

港から慌ただしく出撃したパーパルディア皇国艦隊。

艦隊を構成する戦列艦は、他国の船を圧倒する性能を保有してい
る。

その強力な戦列艦が42隻。

パーパルディア皇国が今まで敵対してきた国ならば、それだけで圧
倒することが出来る打撃力を有していた。

だが、艦隊旗艦ムーライトの面々の表情はあまり良くなかった。

「・・・もう間もなく、敵艦と接触することになるだろう。副長、我々
は二ホン国艦隊に勝てると思うか・・・？」

「今まで敵対してきた国ならば、圧勝することが出来ると断言できま
すが・・・。率直に申し上げますと、勝利どころか痛み分けですら難し
いと思われます。相手の兵器に使われている技術のレベルは、皇国を
遥かに凌駕しています。恐らくは、それを扱う兵の練度も相当高いと
思われます・・・。」

「そうか……。願わくば、敵が慢心して油断している事を期待するしかないな……。」

今まで相手にしてきた国とは、明らかに違う日本との実力差に不安を隠しきれないサクシードだったが、その不安感を兵たちに与えない様に、遠く彼方の水平線に目線を向けた。

日が沈み、空には満天の星が写っていた。

その光景は戦場に向かっていている事を忘れてしまう程に、美しい物であつた。

そんな中、マストの上で見張りをしていた見張り員が、大声をあげた。

「艦長、水平線上に艦影を確認！ 隻数は3隻！ 此方に接近してきています！」

「遂に来たか!? 総員戦闘配置!!」

報告を聞いたサクシードは、直ちに戦闘態勢に移行する様に命令しながら、手にした双眼鏡を敵艦発見の報告を上げた見張り員が見張っていた方向へと向けた。

暫くすると、水平線上に艦影を確認することが出来た。

「中央の敵艦はかなりデカいな……。」

「はい……。残りの2隻も本艦より大型のようです……。ん?」

双眼鏡で敵艦を観察していた副長は僅かな違和感に気づき、ほぼ同時にサクシードも猛烈な違和感を感じた。

「すまん、俺は疲れているようだ……。敵艦が異常な速度で接近している気がするのだが……。」

「……。艦長、私の目にもそう見えます。」

「という事はつまり……。敵艦がとんでもない速度を出しているという事か!？」

受け入れがたい現実を認識したサクシードは、吼える様に叫ぶ。

敵艦は、フィッシュヌス級より巨大な船体を持つているのにも関わらず、此方より遙かに高速で航行できるようだ。

中型艦は艦前方に一門の魔導砲、大型艦はその船体に見合ったサイズの巨大な魔導砲を六門搭載しているようだった。

「敵艦、高速で此方に接近中!!桁外れの速度です!?!」

「なんて速度だ!あんな速度を出せる舟がこの世に存在しているとは!?!」

「おのれ……、海の魔物め!!各艦に射程範囲に入り次第、攻撃を開始する様に伝達せよ!!」

海上防衛軍 護衛艦ゆきかぜ戦闘指揮所

パーパルディア皇国艦隊の迎撃を行う為に、本隊から分かれた三隻の海上防衛軍所属の戦闘艦。

艦隊の中で最も防御能力が高い戦艦より先行するのは、日本海上防衛軍内で最も有名な護衛艦と言われている護衛艦ゆきかぜであった。

「敵艦隊、主砲射程圏内に補足しました!」

「主砲撃ち方用意!!パ皇の連中に俺達にケンカを売った意味を教えてやれ!!」

血気盛んであり、ガンガンと攻める戦闘スタイルを得意としている、ゆきかぜ艦長古代徹が拳を振り上げながら、艦の指揮を執る。

ゆきかぜは最大戦速に加速しながら、砲撃を行う準備を行う。

「主砲照準、完了!!」

「主砲、撃ち方始め!!」

「主砲撃ち方始め!」

徹の指示を受けた砲術長が主砲発射トリガーを強く引き絞ると、艦首に備え付けられた127mm速射砲が火を噴いた。

最新鋭のFCSによって正確に命中軌道を飛翔した127mm砲弾は、パーパルディア皇国艦隊の最前列を航行していた80門級戦列艦グリーンルに着弾した。

パーパルディア皇国自慢の対魔弾鉄鋼式装甲を、まるで紙の様に易々と貫通した127mm砲弾は、弾薬室で爆発した。爆発によって発生した爆炎が、弾薬庫内の砲弾や魔石に誘爆を発生させ、強烈な爆圧を発生させた。

強烈な爆圧が艦内で発生したグリーンルはまるで船体を風船のように膨張させ、轟音を海上に轟かせながら轟沈していった。

「ぐ、グリール、轟沈!？」

「馬鹿な!!」

グリールの轟沈は、パーパルディア皇国艦隊に大きな衝撃を与える。

多少旧式化していたとはいえ、パーパルディア皇国の誇る魔導戦列艦が、たった一回の砲撃で撃沈されることなど端から想定されていなかった事だった。

「敵艦、更に発砲!!後続の敵艦も発砲を開始した模様!!」

「戦列艦ライサー、パターン轟沈!!」

悲観に浸る暇もなく、次々と撃破されていくパーパルディア皇国の戦列艦。

艦隊旗艦ムーライトの船尾楼甲板で艦隊を指揮していたサクシードは、魔導通信機を使用して現存している戦列艦に命令を下す。

「艦隊司令より全艦へ!全艦、増速!!先行している敵艦を撃破しろ!!」
サクシードの命令を受けた魔導戦列艦は、風神の涙の出力を最大まで上げ、船体が悲鳴を上げるほどの速度を出して、今も砲撃を続けるゆきかぜへと向かって行く。

しかし、その間にも味方の戦列艦は海の上から続々と姿を消していく。

数分後、海上には片手の指ほどの数しか戦列艦は残っていないなかった。

「副長!残存している味方艦は!？」

「本艦の他には、100門級戦列艦のレイモンド、60門級のアレク、サハケ、40門級ルーンのみです!!」

「40隻以上もいた我が艦隊が、わずか数分で壊滅するとは・・・やはり、勝ち目はなかったか・・・」

艦隊の被害状況に、皇国と日本との力の差を肌で感じるサクシード。

戦闘前は圧倒的な数の差があったというのに、こちらは一方的に撃破され、敵の船を一隻も沈める事も出来ないばかりか、損害を与える事すら出来ない。

「皇国は・・・、皇国は決して敵対してはいけない国に戦争を仕掛けてしまったのだな・・・。」

「艦長・・・。」

「・・・総員退艦!!今すぐに海に飛び降りろ!!海に飛び降りた後は、敵艦に救助してもらえ!!」

「し、しかし果たして敵が我らを、救助してくれるのでしょうか?」

「デュロへの攻撃を鑑みるに、二ホン国は攻撃をする意思のない者には攻撃を加えないと、私は考えている・・・。生き残る可能性が少しでもあるのならば、その可能性にしがみつけ!!」

「っ!?!・・・りよ、了解しました!!」

副長ら、ムーライトの幹部たちは、サクシードにパーパルディア皇国流の敬礼をすると、

「総員退艦!!総員退艦!!」

と叫びながら、海へと飛び込んでいった。

退艦していく水兵達の姿を見ながら、サクシードは舵輪を両手で掴み、前方に見える敵艦を見据える。

「・・・二ホン国よ、我らパーパルディア皇国はお前達に敗れた・・・。せめて、せめて部下の命だけは助けてくれよ・・・。」

そう言うと、サクシードは目を瞑り、自分に最後の時が訪れるのを静かに待った。

数秒後、ゆきかぜから発射された127mm砲弾がムーライトに命中した。

甲板を突き破るように火柱が立ち上がり、ムーライトは真つ二つになりながら轟沈していった。

その後、サクシードの最後の命令によって海上へと逃げ延びたパーパルディア皇国水兵達は、さつまとゆきかぜ、あさひの三隻によって、救助された。

その際、サクシードの判断がムーライト副長ら生存者によって日本側に伝えられることになった。

部下の為に命を散らしていったサクシードの行動に感銘を受けた一部の日本人の手によって、彼の名前は後世に長く伝えられ、戦後に

デユロの港に彼の名前が彫られた石碑が建つことになったのは、また別の話である。

此処にパーパルディア皇国最後の軍事拠点であり、皇国最大の生産拠点であった工業都市デユロは壊滅し、その機能を完全に停止する事となったのである。

パーパルディア皇国にとって、地獄の様な一日がようやく終わりを告げた。

だが、パーパルディア皇国の悪夢は一日程度の地獄を経験した程度では、覚める事は無かった。

そして、彼らは気付かなかった。

悪夢にうなされてる自分達の首元に、皇国を破滅へといざなう刃が突き付けられていた事に・・・。

パーパルディア皇国編―18

アルタラス王国 王城アテノール城

日本防衛軍の攻撃によって、パーパルディア皇国の主戦力が根こそぎ壊滅した日の二日後の正午、アルタラス王国王都ル・ブリアスに聳えるアテノール城で最も巨大な部屋に国内外から多くの人々が集まっていた。

彼らは、アルタラス王国、日本の連名による重大発表の場にやってきた日本、クワ・トイネ公国、クイラ王国、ロウリア王国、フェン王国、そして第二文明圏の長である列強ムーの報道関係者達である。

これから発表されることを一単語も聞き逃さない様に、手帳を開いて待機している多くの記者に紛れる様に、日本とムーのテレビ局のカメラが壇上に向けられていた。

彼らは、これから何が伝えられるのかを他社や他国の記者と話しながら待っていた。

一方、壇上の裏では、アルタラス王国皇族のみが身に着けることが出来るドレスに身を包んだルミエスが、これから自分が話すことが書かれた原稿を読んでいた。彼女のすぐそばには、正装に身を包んだ自分の父であるターラー14世が落ち着かない様子でうろろうろとしていた。

「・・・お父様、少しは落ち着いてください。みつともないですよ?」「い、いや、これから我が国の・・・、いや、第三文明圏の歴史を変える場に出なければいけない事に、物凄く緊張しててな・・・。」「もう・・・。ニホン国の報道官の方を見てください。とても落ち着いているではありませんか。」

ルミエスが視線を移すと、そこには落ち着きのない父とは違い、静かに椅子に座っている日本政府関係者達がいた。

落ち着いている日本人と落ち着きのないアルタラス王国人、会見の場を待っているこの場面だけでも自分達が日本の足元にも及ばない事をいやでも認識してしまうルミエスだった。

数分後、椅子に座っていた日本国報道官がゆっくりと起立し、ルミ

エスたちの方を向いた。

「会見の時間になりました。行きましよう、ターラ陛下、ルミエス王女。」

「はい……。行きますよ、お父様。」

「わ、分かった。分かったから、袖を引つ張らないでくれ！」

まだ幼い自分の娘に引つ張られながら、会見の場に向かうターラー4世。

その姿は、とても後に歴史書に乗ることになる場に向かう人間の姿には見えなかった……。

同時刻 パールディア皇国 皇都エストシラント

パラディアス城にて開かれている緊急御前会議は、日をまたぎながら続けられていた。

会議の場では、カイオスが会議の進行状況に焦りを感じ始めていた。

あれだけ一方的な攻撃を受けたというのに、力の差を実感したはずなのに会議の流れは、日本に対し徹底抗戦を行う方向で話が進んでいた。

「……であり、皇国は経験したことのない危機的状況です。そこで、財務省から大規模な予算調達を行い、軍の早期の再建をします。具体的には、デュロの生産施設を大幅に拡大し兵器の大量生産、属領からの大規模な徴兵を行います。予定では、軍の規模は今までの三倍の規模になる予定です。この圧倒的な量を持って、ニホン国首都トウキョウに夜襲を掛けます。……このような方向性で行きたいと思っておりますが、皇帝陛下、よろしいでしょうか？」

「ふむ……。アルデよ、この計画はデュロの生産施設を当てにしたものだな？」

「はっ、その通りでございます。」

「もし、カイオスの予想通りデュロがニホン国の攻撃を受けていたのならば、どうするのだ？」

「軍の再建が、大幅に遅れることになりましたが……。私は、そこまで

被害を受けていないと考えています。理由としては、ニホン国は皇都エストシラントと聖都パールネウスへの攻撃に軍の主力を向けている可能性が、非常に高いからです。もし、デュロに軍を向けていたとしても、それは二線級の戦力でしょう。少なくとも、奴らの主力が本国に帰投し、デュロ攻略を行うまでの時間的猶予があると、私は考えています。それまでに、軍の再建を完了して見せます！」

「そうか……。」

このやり取りに、カイオスは頭が痛くなる。

アルデの計画は、確かに現段階では最良と言えるかもしれない。だが、この計画には大きな落とし穴がある。

それは、この計画は「ニホン国が暫くの間、何もしてこない」という、あり得ない理論を元に行っていることだ。

何処に、戦争中の敵国が弱まっているところを叩かない国があるだろうか？

それに。皇都を攻撃したのが敵軍の主力の全てだと、どの様に断言することが出来るのだろうか？

周りを見ると、大半の出席者は皆自信を取り戻したかのような表情をしているが、カイオスには受け入れがたい現実から顔を背けているようにしか見えない。

アルデの再建計画が承認される、正にその時だった。

「会議中、失礼します!!カイオス様、緊急事態です!!」

急に会議室に入ってきたのは、遂先程の小休憩の時にパラデイス城から退城していたヴァルハラであった。

何処からか走ってきたのか、額に大粒の汗を幾つも浮かべていた。

「何があった!?!」

「デュロが……、デュロがニホン国の攻撃を受け、大損害を受けたとの事です!!」

「なに!?!ひ、被害の詳細は?！」

ヴァルハルの言葉に、アルデは大声をあげてしまう。

ルディアスも、人前では滅多にしない表情を浮かべている。

「現時点での複数の報告をまとめたところ、昨日の午後六時ごろデュ

口郊外の防衛軍基地と工場群が攻撃を受けたそうです。被害に関してですが、基地に駐屯していた部隊は全滅、工場はほぼ全て破壊されたとの事です！」

「は、う、嘘だろ……。」

「そ、そんな!!」

最後の大規模基地の壊滅にアルデは氷の様に固まり、巨額の予算を捻出された財務局長のムーリも、違う意味で顔色が悪くなる。

「更に基地攻撃を受けて、港から出港した戦列艦42隻も消息不明となっております！恐らくは、ニホン国艦隊に……。」

皇都と聖都の二つの防衛設備を破壊した後に、皇国の経戦能力と残存戦力を的確に叩く判断力と徹底さ。

そして列強たるパールディア皇国の主要戦力を、たった一日で壊滅させた日本の実力に、全員が沈黙する。

しんとした会議室内に、又もや男が飛び込んできた。

カイオスの右腕であるクロムである。よく見ると、彼は公共放送用の魔導通信機を持ってやって来ていた。

「会議中失礼します!! 一大事です!!」

「今度はなんだ?!何が起きた!?!」

「兎に角、この放送を聞いてください!」

そう言うと、クロムは魔導通信機の電源を入れた。

会議室の誰もが沈黙し、放送に耳を傾ける。

「皆さん、こんにちは。私はアルタラス王国国王ターラー14世です。これより、我が国の同盟国ニホン国との連名で、極めて重要な情報をお話しします……。」

アルタラス王国

「昨日、ニホン国によるパールディア皇国皇都エストシラント、聖都パールネウスへの攻撃が行われました。」

様々な国から集まった記者たちは、ターラー14世の言葉を一言一句聞き逃さないように耳を澄ませます。

「エストシラント攻撃の前日に我が国より出港したニホン国艦隊は、途中我が国へと向かっていた。パーパルディア皇国艦隊を壊滅させつつ、エストシラント沖へと向かいました。パーパルディア皇国は防衛の為に、500騎を超えるワイバーンと600隻以上の戦列艦を投入しました。」

おおっ、という声が会見の場から幾つかあがる。

その声が収まるのを待ってから、ターラ14世は言葉を続ける。

「戦闘の結果は、ニホン国軍の圧勝です！この戦いにおいてニホン軍は一隻の軍艦の沈没もなく、一人の死者も出さず、それどころか一発の被弾すらありませんでした。対するパーパルディア皇国軍は、550隻以上の戦列艦と全てのワイバーンを失い、皇都防衛軍基地と聖都防衛軍基地、海軍総司令部を破壊されました。更に夕暮れには、ニホン軍の別動隊による工業都市デュロへの攻撃が行われ、此方の戦いでもニホン軍は圧勝し、デュロ防衛軍基地とパーパルディア皇国の継戦能力を破壊することが出来ました。それに加えて、皇国の名だたる名将たちも軒並み戦死したという報告も、私の手元には届いています。」

この情報に、日本以外の国から来た記者たちは開いた口がふさがらなかつた。圧倒的な数の差を覆したうえで完勝するなど、尋常ではない事だった。

因みに、パーパルディア皇国の名将の戦死に関する情報は、会議の合間を縫ってクロムが日本側にもたらしたものである。

此処で今まで話していたターラ14世に代わり、ルミエスが話し始める。

「パーパルディア皇国は、主要戦力の壊滅によつて開いた防衛網の穴を埋めるために、属領統治軍の撤収を始めました。これは、私たちにとつて大きなチャンスなのです。」

ルミエスは両手を差し出しながら、その美しい声を張り上げる。

「長きに渡つてパーパルディア皇国に搾取され、苦しんできた人々よ！！今こそ自由と希望を取り戻すときです！第三文明圏を覆っていた闇は今、強く優しく輝く太陽の国「ニホン国」の前に打ち払われようとしています！今こそ、祖国を取り戻すときです！！共に戦い、驕り高

ぶったパーパルディア皇国を倒そうではありませんか!!パーパルディア皇国という悪しき巨人を倒すには、皆様の小さくても決して折れる事のない力が必要なのです!!」

ルミエスの演説に、その気迫に誰もが押し黙る。

彼女の父であるターラ14世ですら、自分の娘がこのようなことが出来る事を知らなかった。

最後にスーツ姿の日本人報道官が壇上で口を開いた。

「最後に我が国の、日本国の意思を改めてここに宣言させていただきます・・・。我が国と我が友に対し、自らの欲のみを満たす、悪烈非道な要求をしたパーパルディア皇国の為政者達よ。お前達の愚かな行為は、十数年の間眠っていた我が国の「血」を、例えば十万を超える世界最強の軍勢や世界最大の国相手にも臆せずには戦い、勝利した戦闘民族としての「血」を覚醒させた。我が国は、我々は自由と平和を確実にこの手に納めるまで、例え後世の人間から愚かな事だと言われることになったとしても戦い続けるだろう・・・。パーパルディア皇国よ、我らの正義の光の前にひれ伏したまえ!!」

日本の宣言の後、記者たちが質問を始める。

日本がどのくらい軍事力を有しているのか?どの様な攻撃を行って列強の軍隊を壊滅させたのか?次の作戦についてすでに動き始めているのか?

これらの質問に重要な部分は濁らせつつも、一つ一つ応えていく。

こうして、第三文明圏に大きな希望をもたらし、パーパルディア皇国に混乱と絶望を与える、アルタラス王国が開戦時から日本とひそかに用意していた「実体のない最強の剣」は、振り下ろされることになったのだ。

パーパルディア皇国 皇都エストシラント

アルタラス王国の放送が終わった時、パラデイス城の会議室は不気味なほどに静かであった。

パーパルディア皇国の首脳部、特に皇帝ルディアスやレミール、アルデなどの顔色は青白くなっていた。

何故、彼らの顔から血の気が無くなっているのか？

それは、彼らがパーパルディア皇国の政治体制における最大の弱点を知っているからだ。

これまでパーパルディア皇国は強大な軍事力を背景に恐怖政治を行い、属領や周辺国から富を吸い上げる事で列強国としての地位と第三文明圏最大の発展をしてきた。

だがその源である、第三文明圏の国々が恐れた最強の軍隊が、文明圏外の国、日本の手によってたった一日で砕かれてしまった。

もし、その事実を今まで虐げられてきた属領に住む人々が知ればどうなるか？

それは、どんなに政治に疎い人間でも簡単に想像する事が出来るだろう。

「……おのれ。おのれ、ニホン国めええええ!!!」

この事態に対して、ルディアスはただ怒りの言葉を叫ぶ事しか出来なかった。

そして、彼らが思い浮かべた最悪の事態はその日の内に現実へとなっていた。

パーパルディア皇国 属領クーズ

パーパルディア皇国に攻め滅ぼされ、属領となったクーズ。

憎きパーパルディア皇国を追い出し、クーズ王国の再建を目指しひそかに水面下で活動を続ける「クーズ王国再建軍」のリーダー、ハキは魔導通信機の前で今すぐにでも叫びたい衝動を抑えつつも、人生最大の興奮を感じていた。

「パーパルディア皇国の主力が一日で壊滅だ?!ニホン国、なんて強さだ!!」

「とても信じられないがこの情報が本当ならば、ここ数日の属領統治軍の動きも説明できる。恐らく壊滅した主力軍の穴埋めをするために、引き上げたのだろう。」

「時は来たんだ!!今こそ、クーズを我らの手に取り戻すチャンスだ!!」

「そうだ!!僅かな兵しかいないのならば、我らにも勝機はあるぞ!!」

ハキの周りでは、再建軍の幹部たちが盛んに意見を交わし合っている。

彼らの熱気にあてられたのか、普段は冷静なイキアも攻勢に出る事を提案している。

「・・・よし、皆！今日の午後三時に武装蜂起を行おう！！人数分の装備はすでに整っているし、僅かな数だがパ皇のマスクेट銃も手に入れた！！クーズ王国を、俺たちの祖国をパーパルディアの連中から、取り戻すぞ！！」

「「おう！！」」

ハキの決定に、全員が賛同の声を返す。

彼らは、皇国に対し武装蜂起をし、彼らの愛する国を取り戻す事を決定した。

この時、パーパルディア皇国から祖国を取り戻す為の行動を起こしたのは、クーズだけではなかった。

長年に渡って、侵略者によって虐げられ苦しめられたパーパルディア皇国の属領。

彼らにとって、パーパルディア皇国は強大な力をもつ悪魔のような存在であり、何としても打倒したい存在だったが、同時に決して敵わない存在でもあった。

そんな彼らにとって、悪魔のような皇国自慢の軍の主力部隊が、かつての自分達と同じ文明圏外の国の攻撃によって、手も足も出せずに全滅した。

この報せは、祖国の解放を目指す者たちにとってこれ以上ない朗報であり、希望をもたらしてくれるものだったのだ。

彼らがパーパルディア皇国から自由と誇りを取り戻す為の行動に移るのは、時間の問題だった。

結果として、アルタラス王国での会見が行われたその日の内に、パーパルディア皇国の属領全てが武装蜂起を起こしたのだった。

パーパルディア皇国の終わりの時は、刻一刻と彼らに近づいてい

た
・
・
・
・
。

設定集 各プロジェクトについて

「Project A」

航空防衛軍を主体にした「とある構想」を実現する為の大型航空機を開発する計画。

本計画において、それぞれ別の役割を与えられた四種類の大型機が設計され、合計16機が製造されることとなった。

対パーパルディア皇国戦において、正確な敵の情報を日本防衛軍全体に伝達し続けた大気機動宇宙機アークバードは、この計画に基づいて開発された高度な索敵と先制迎撃を主眼に置いて開発された機体。残りの15機の大型機も建造中であり、どんなに遅くても5年以内には全ての機体が完成する予定である。

本計画の予定建造数

大気機動宇宙機 「アークバード」 計二機

大型○×○○機 「???」 計八機

超大型×機 「???」 計四機

超大型×機 「???」 計二機

「Project T」

本計画は、陸上防衛軍のさらなる強化の為の新たな兵器開発プロジェクトである。

現時点において、最初期から開発されていた機体の試作機が完成、防衛軍関係者のみ入ることが出来る硫黄島にて、各種テストが行われているが一部装備品の開発が遅れており、実戦投入にはまだまだ時間が掛かる見込みである。

テストが行われている機体以外にも、複数の機種が並行して開発されている。

なお、作者が感想欄にて書いていた「とある世界において、未完成の鉄くずだったが特定の相手を撃破する為に投入され、英雄となった

機体」は、試作された機体の原作における印象を、筆者が感じたままに書いたものである。

計画進行状況

PTX 001	???	試作機が完成、現在稼働テスト中。
PTX 002	???	試作機を制作中。
PTX 003	???	基本構造の開発が難航中。

「Project N」

本計画は、新素材と新理論を用いた海上防衛軍新型艦船開発計画である。

本計画の根幹となる「新素材」の材料は、硫黄島の設備拡張工事中に偶然発見された物であり、他にはない特徴を持っており、本計画が完遂すれば海上防衛軍はより強大な存在へとなることが出来ると予想されている。

ただ、本計画におけるもつとも重要な「あるモノ」の数を揃える事が、現時点では非常に難しい状態である。その為、上記の各計画と比べるとその進行度は大きく後れを取っている。

計画進行状況

最も重要な部分を除けば、計画は予想を超える速度で進行しており、建造予定の試作艦の建造も6割ほど完了している。

「Project S」

本計画は、防衛省直轄の計画である。

この計画において、建造する軍艦は様々な新機軸の機能を持たせることを計画されている。

具体的には新兵器を主兵装として搭載、様々なユニットを交換することの出来る機能の採用による多機能な艦を運用できるようにする事などが予定されている。

現時点での計画進行度は他の計画と比べてダントツに遅れており、特にこの計画で建造される艦にとって、最も重要な技術の開発が暗礁

に乗り上げてしまっている状態である。

計画進行状況

他の計画と違い、試作艦の建造にすら難航している。

その為、一部の技術をテストする為の別の艦が急ピッチで建造されている。

????型戦艦について

現在の技術力とノウハウでは建造不可能。

硫黄島にて極秘に研究を行いつつ、海底より発見された「????」の修復、改修を通じてそれらを蓄積中。

コンピューター上でのシミュレーション結果によると、本艦の戦闘能力は天照型戦艦の八割ほどになると予測されている。

パーパルディア皇国編―19

パーパルディア皇国 皇都エストシラント

日本、アルタラス王国の共同声明発表から一週間後。

パーパルディア皇国の国家運営にとって、最も重要な軍務を預かる軍務局の局長室では、皇国軍最高責任者であるアルデが頭を抱えていた。

アルデが日本という国を初めて認識したのは、第三文明圏外の国口ウリア王国が日本に敗戦したという報告を聞いた時だった。

自国の周辺で武力衝突があれば、普通はその戦争に勝利した国の調査を行い、自国に対して脅威になるかどうかの調査を行い、分析、判断をしなければならない。

しかし、パーパルディア皇国にとって文明圏外の国など、恐るるに足らない存在であり、調査する必要すらない。

この様な考えがあったからこそ、第三文明圏の外で行われた戦いは正確な調査すらされずに、次第にアルデの頭から日本という国の名前は消え去ってしまった。

次に日本の名前を聞いたのは、皇国監察軍がフェン王国の沖合で日本の艦隊に追い返された時だった。

監察軍に所属する戦列艦は前線を退いた旧式であり、その上数も少ない。

質をはねのけるほどの数を揃えたのかと、アルデは考えたのだ。

だからこそ、アルタラス王国への侵攻が決定された会議にて、第三外務局からの「艦隊に所属するワイバーンロード20騎が消息不明になり、艦隊も二隻を除き撃沈されてしまった。」という報告を真に受けず、そればかりかカイオスに対して、

「第三外務局と監察軍は栄えある皇国の恥であります！」

と、言い放ったのだ。

だが、今なら判る。

本当の皇国の恥は、一体誰だったのかを。

カイオスはあの会議の場でただ一人、日本と皇国の力を正確に比較

し、物事を判断していたのである。

「私は、二ホン国の力を・・・、見誤ってしまった・・・。」

彼の常識では、文明圏外の国が列強国に勝つなどあり得ない事であり、事実フィリアデス大陸の歴史上にも一度もなかった事であった。

あつてはいけない事のはずなのに、現実はそのあつてはいけない事が起こってしまったている。

最新鋭の戦列艦や精鋭のワイバーンロードを搭載した竜母艦隊、更にはムーのマリンに匹敵する性能を持つワイバーンオーバーロードでさえも、惜しむこともなく投入した。動員人数も過去最大であり、文明圏外の蛮族の国を複数同時に相手をしてでも圧勝できるほどの大戦力だった。

しかし、敵国に与えた損害はゼロ。

そう、ゼロだ。敵の一兵すらも討ち取っていないのである。

自慢の大艦隊も飛竜隊もまとめて蹴散らされた上に、昼間の内にエストシラントとパールネウスの基地を破壊され、最後に残っていたデュロも夜中に攻撃を受け、最後の防衛軍基地とアルデの最後の望みであった工場群も破壊されてしまった。

しかもこれだけの被害を、たった一日で受けてしまったのである。

どうにかして反撃を行おうにも、パーパルディア皇国主力部隊を一日で壊滅させた日本を相手に打つ手がまるで浮かばない。

そのうえ、日本とアルタラス王国の共同声明に勇気づけられた属領が一斉に反旗を翻したことで、パーパルディア皇国は四方八方を敵に囲まれてしまった。

「四面楚歌」、この言葉以外にパーパルディア皇国の状況を説明できる言葉があるだろうか？

失意のどん底に沈む、アルデ。

・・・トントン

執務室のドアがノックされる。

「入れ!!」

アルデが入室の許可を出すと、部下が汗をかきながら飛び込んでくる。

「ああ・・・、今度はなんだ、いったい何の悪い知らせだ？」

「報告をします！つい先程、最後まで抵抗をしていた属領が陥落しました！これで我が国は、全ての属領を失ってしまいました！」

属領が全て落ちる。

それはつまり、侵略戦争に明け暮れることになる前の状態、パールディア皇国の前身であるパールネウス共和国の時代にまで、国土が戻ってしまうという事である。

「なんてことだ・・・。我が国の100年余りの努力の成果が、全て失われてしまったというのか・・・。」

「・・・さらに、悪い知らせがごぎいます。」

「一体なんだ!?!これ以上に悪い知らせがあるというのか!?!」

アルデは、パンク寸前の頭を抱えながら、ヒステリックに叫ぶ。

「反乱を起こした各属領軍が互いに通信を行い、「フィルアデス大陸解放軍」を名乗り、我が国に宣戦布告、地方都市アルーニに向けて侵攻を開始しました。解放軍には少数ですが、二ホン国軍が同行しているとの未確認情報もあります！」

「な、なんだと!?!アルーニの防衛は、大丈夫なのか!?!」

「現時点では、何とか持ちこたえることが出来ているとの事です。」

「そ、そうか・・・。全く、次から次へと・・・!!」

キリキリと胃が痛むのを感じながらも、アルデは軍の最高責任者としての指示を続け、皇国防衛の為に奔走する。

同時刻 レミール邸

従者を通じて入ってきた報告に、レミールは失意と絶望のどん底に突き落とされる。

(いったい、自分の何が悪かったのか・・・。)

自分はいつものように、皇国のために思い、「仕事」をしただけ。

今回も皇国の更なる発展のために、アルタラス王国を挑発し戦争状態に突入させるのと同時に、アルタラス王国に肩入れし増長させた日本の民を捕らえて、日本大使の目前で処刑することで日本に自国の力を思い知らせるはずだった。

圧倒的な国力を背景に脅迫外交を迫る事も世界では当たり前前の事、特に問題はなかったはずだ。

しかし、今回の相手は余りにも特殊であり、戦争を仕掛ける相手としては余りにも悪すぎた。

全世界に向けて、列強国と正面切って戦う事を宣言した日本は、たったの一日で皇国の三大基地とパーパルディア皇国海軍のほぼ全てを葬り去ってしまった。

更には、日本とアルタラス王国の手によってパーパルディア皇国の属領全てが一斉に反乱を起こし、わずか一週間で全ての属領を失い、国家の存亡にかかわる状態へとなってしまった。

しかも日本は、自らの敵が降伏するまで攻撃を続けると宣言をした。

日本大使の前であのような事を言った自分もまた、間違いなく日本の攻撃対象に入っている事だろう。

(二ホン国が憎い！二ホン国が怖い！)

ベットの中で布団を頭からかぶり、ガタガタと震えているレミールの脳裏に、日本大使の言葉が思い出される。

「私は、日本の全権大使ではありませんが、これだけは言わせてもらいます。貴国の行いに、我が国の二億一千万の国民は、強い怒りを感じています。この怒りの炎は、間違いなく貴国を焼き尽くすことになるでしょう……。実力を知らない？それは、貴国の方ではないか？我が国の実力を知った時の、貴方方の顔が目に浮かびますよ。とても滑稽な光景でしょうね。」

「我が国の守護神の怒りの雷に打たれることを覚悟しておけ。」
負け犬の遠吠え、弱者の戯言だとその時は軽く聞き流していたが……。

(しかし……。私は、力を見誤ってしまった……。)

レミールの思考は、過去の行動への後悔とパーパルディア皇国への懺悔で埋め尽くされていった……。

アルデが国防のために奔走し、レミールが皇国への懺悔をしているのと同時刻。

パーパルディア皇国皇帝ルディアスは、自国を短期間でここまで追い込んだ日本について、皇国の内政において絶大な権力を誇り、圧倒的な外交能力と優れた先見性を持つ相談役ルパーサと話をしていた。

「・・・では、貴様は二ホン国が陸軍基地や工場に対して行った空からの攻撃を皇都に対して行う可能性は、低いと考えているのだな？」

「その通りです、陛下。皇都には大使館に駐在している各国の要人やその家族が住んでおります。また、外国の商人も多数滞在しています。二ホン国が今まで攻撃を行ってきたのは、陸軍基地や軍港などの軍事拠点や、軍事を支える生産拠点のみであり、居住区域には攻撃を行っておりません。」

「うむ、そうか・・・。それでは、二ホン国は我が国に対し、これからのどのような策をうってくると思うか？」

「・・・恐らく二ホン国は、二ホン国と彼の国の同盟国に対し、すべての脅威が取り除かれるまで、この戦争を継続するでしょう。本戦争における二ホン国の参戦理由は、「自国と同盟国アルタラス王国の国民の防衛」です。自国と同盟国の最大の障害である我が国を滅ぼすか降伏させるまで、本戦争は続くでしょう。」

「戦争を終わらすためには、皇国の降伏か滅亡しか無いというのか!？」
はいと答えるルパーサに、ルディアスは頭を抱え込む。

このまま戦い続ければ、列強パーパルディア皇国は、間違いなく歴史書の中だけの存在となってしまうだろう。

かと言って降伏すれば、日本はとても厳しい条件をパーパルディア皇国に突き付けてくるだろう。

かつてパーパルディア皇国が、第三文明圏の国々に理不尽で受け入れがたい事を、強引に突き付けたように。

「どうすればよい・・・。どうすれば、現状を打開できる・・・?」
「陛下・・・。」

部下の前では絶対に出さない、か弱い声を漏らす皇帝ルディアス。
今までに経験したことの無い絶望的状况に、皇帝は考察を巡らせる

ことしかできなかつた。

カイオス邸

パーパルディア皇国の重役の殆どが頭を悩ませている頃、エストシラントのカイオス邸にはカイオスとクロムやヴァルハルをはじめとした、彼の信頼を受けている者たちが集まっていた。

「全ての属領が落ち、アルーニに「フィルアデス大陸解放軍」が侵攻してきているこの状況……。この国を存続させるには、もはや二ホン国に降伏するしかない。だが問題は……。」

「はい、皇帝陛下や皇族の方々、更には強い権力を握っている者たちが権力や利益を失う事を恐れ、まともな行動を取ることが出来ていません。レミール殿が最も良い例でしょう。間者によると、二ホン国の力に怯え、仕事もまともに出ていないとの事です。」

「あれだけ威勢が良かったのか？滑稽だな。」

パーパルディア皇国の力に酔い、自分達を馬鹿にしていた小娘の現状に、少しばかりの笑みを浮かべるカイオス達だったがすぐさま真剣な顔になり、話を続けていく。

「現在の政府では、二ホン国に降伏など到底出来ないだろう。かと言って、このまま戦い続ければ間違いなく亡国となってしまうのも事実だ。しかも、今のフィルアデス大陸には二ホン国の他にも「フィルアデス大陸解放軍」という敵対組織が存在している。軍関係の施設のみを攻撃する、理性のある二ホン国ならば、まだ交渉の余地があるが「フィルアデス大陸解放軍」は別だ。何しろ、この軍に参加している者たちは、我が国に長年搾取されていた属領の住人だ。我が国を滅ぼし、蹂躪しなければその怒りは収まらないだろう……。だからこそ、私は決心した。この国を救うためには、反乱を起こすしか無いと！」

カイオスの言葉に、この場にいる全員は緊張感を覚える。

この国において反乱とは許されざる行為であり、一族郎党皆殺しになってもおかしくはないのだ。

だが、カイオスは愛する祖国の為に、その禁じられた行為を行うという。

もし平時ならば、必ず止める様に説得する事であるが、今は政府がまともに対策案を打ち出せていない緊急事態。

やらなければ、この部屋にいる者たちもろとも皇国は滅んでしまうだろう。

禁忌だがやらざるを得ない事は、この部屋にいる全員が嫌でも理解していた。

「問題は、この反乱計画にどれほどの兵が集まってくれるかです。戦力が少なければ、反乱を起こしたところで鎮圧されるのは、目に見えています。」

「うむ、それは私も理解している。そこで、ポクトアール提督とゼクト十兵長に兵を集める事を依頼した。二人とも、そちらの方はどうかね？」

カイオスは、白いあごひげをたくわえたゼクト十兵長とその隣に座るポクトアール提督に戦力がどうなっているのか質問する。

「率直に申し上げますと、現時点での計画成功確率は50パーセント程です。現状に不満を持っている兵の大半を引き込むことが出来ましたが、それでも皇居などを守る近衛兵の八割ほどの数です。そのうえ、全ての兵を引き込んでいる訳ではないので……。」

「更には、武器が全く足りておりません。足りているのは刀剣のみであり、他の武器、兵器の類は全く用意できておりません。」

「そうか……。成功の確率を上げる方法は？」

「これらの兵が留守の時に突入することが出来れば、成功確率は上がります。ただ、そのためには囹か陽動を用意しなければならぬのですが……。」

うむむ、と全員が頭を悩める。

このままでは、反乱は失敗してしまう。

どうにかして、障害を取り除くことは出来ないものかと全員が小一時間程思考を巡らせていると、不意にクロムの頭にある計画が浮かび上がった。

「……カイオス様、私に一つ妙案があります。」

「なんだね？話してくれ、クロム。」

「はい、私が考えた案とは……」

クロムが練り上げた計画、その内容はカイオス達を大いに驚かせるものであった。

が、同時にこれならば確実にこの反乱を成功させることが出来るものであった。

最終的にクロムの案が通り、カイオス達は計画を実行する為に様々な準備を始めたのだった。

日本 東京

パーパルディア王国の政治、軍関係者が自国の現状に絶望している頃、日本の首都東京のホテルの一室ではムーから観戦武官として来日したマイラスとラツサンが自分の目と耳で体験した事について、自分の考えを交えながら話し合っていた。

「マイラス、二ホン国艦隊の戦いぶりを見て君はどう思う？」

「そうだな……。一言で言うなら「驚異的」だな。例えば、艦隊の速力だ。我が国の最新鋭戦艦であるラ・カサミの最高速力が、この国の船では巡航速度だという。二ホン人曰く「カクユウゴウ炉」と呼ばれる機関を搭載していると聞いたが、その機関がどのような理論でエネルギーを生み出しているのか見当もつかないよ。他にも、艦砲の命中精度だ。波があるうえにあれだけ高速で航行しているというのに、一発たりとも外れる事もなく、敵艦に命中した……。百発百中とは、あの光景の事だと思ったよ。……ラツサンは？」

「俺は、二ホン国の戦闘機に驚いたな。ムーと同じ機械動力の飛行機であるにも関わらず、ミリシアルのエルペシオ3に似た外見をしていて、しかもその速度は音よりも速い……。正にラヴァーナル帝国の天の浮舟その物だ。更には、あのミサイルという誘導兵器だ。伝説上の誘導魔光弾の様な兵器を、この目で見ることになるとは思わなかったよ……。だけど一番インパクトを与えたのは……」

「アマテラスだよ……。以前、二ホン国の軍人から「フソウ型より遙かに巨大な戦艦だ」と聞いていたから、どんな戦艦なのか気になっていたがあれほどの戦艦だとは思っていなかった。」

「ああ、本当にな……。パーパルディア皇国の戦列艦200隻以上を、たった二発の砲弾で消し去り、300騎以上のワイバーンを一瞬で撃墜し、パーパルディア皇国艦隊の半数以上を沈めたうえで、エストシラントの港に大損害を与えてしまった……。あんな戦艦が3隻も存在しているなんて、夢だと思いたいよ……。」

エストシラント沖での海戦での光景を思い出したのか、思わず身震いしてしまふ二人。

あの海戦で見たモノだけでも、腹いっぱいになる代物であったがそれに加えて、日本に入国した後にも大きな衝撃を受ける出来事があった。

それは、現状ムーの最大の懸念であるグラ・バルカス帝国の誇る戦艦グレートアトラスターの、正確にはグレートアトラスターに類似した日本の戦艦の情報を入手する事が出来たのだ。

現在運用されているふそう型などの、日本型新世代戦艦の始祖ともいえる大和型戦艦の性能を知った時、彼らは頭を金槌で殴られた様な強い衝撃を受けた。

現行の日本の戦艦よりは幾分か性能が劣るとはいえ、46cm砲というどの国も運用していない巨大な艦砲に、それに耐えることが出来る分厚い装甲、ムーのどの軍艦より速い速力など、目を疑いたくなる程の性能がそこには記述されていた。

だが、マイラスとラツサンがグレートアトラスターの性能以上に脅威に感じたのは、この戦艦の経歴に書かれていたとある一文だった。

それは、「大和型戦艦二番艦武蔵が第二次世界大戦時、地中海にてドイツ空軍の航空機によって大破、沈没一步寸前まで追い込まれた。」である。

この一文を目にしたとき、マイラスとラツサンはピシリと凍り付いてしまった。

何故、二人は凍り付いてしまったのか？

それはこの世界では、「航空機、若しくはワイバーンの攻撃では戦艦は沈まない」という定説が一般的なのである。

実際、地球上の歴史においても臨戦状態の戦艦が爆撃で沈んだ例は

あまりない。(数少ない例の一つが、空の魔王ことルーデルの急降下爆撃で撃沈した戦艦マラート(旧式のド級戦艦、ガングートグートの姉妹艦)である。)

航空攻撃によって撃沈された戦艦の大半は、航空機からの雷撃による浸水によって沈没したのである。

魚雷という兵器が存在しないこの世界において、航空機では戦艦は沈まないという考えが当たり前の常識となっていた彼らにとって、大小さまざまな対空火器を200門近く積んでいた武藏が、長崎の港で見た海に浮かぶ城ともいえる武藏が、航空機の攻撃によって撃沈寸前まで追い込まれてしまった事に、二人は大きなショックを受けるのと同時に、自国の軍艦が航空機には全くの無力である事を知ってしまったのだ。

「ラツサン、俺は帰国したら軍の上層部に二ホン国製の兵器の購入を再度打診しようと考えている。少なくとも、戦闘機と軍艦用の対空火器の購入は必須だ。今のままでは、グラ・バルカス帝国に一方的に蹂躪されてしまう・・・。」

「ああ、俺も賛成だ。二ホン国の軍艦と比べると、我が国の軍艦の対空兵装は余りにも貧弱すぎる。現状、最も充実しているラ・カサミでさえも十数基程度の単装機銃しか装備していない。これでは、グラ・バルカス帝国の航空機には全く歯が立たない・・・。」

「ただ、問題はこの嘘みたいな本当の情報をどの様に報告し、上層部に信じさせるかだな・・・。」

これからやらなければならない難題に、思わず大きなため息を吐くマイラスとラツサン。

ムーの未来を切り開く若い軍人達の苦労は、まだまだ続く・・・。

パーパルディア皇国編―20

パーパルディア皇国 アルーニ

パーパルディア皇国の北東に位置する都市アルーニ。

この地方都市は様々な物資が行き来する交易拠点であるのと同時に、パールネウス共和国と名乗っていた時代から、国境を守る要塞都市としての顔も持っていた。

二重の城壁に多数備え付けられたパーパルディア皇国自慢の魔導砲が、周辺国に睨みを利かせていた。

そんな幾度となく、パーパルディア皇国を守ってきた鉄壁の地方都市アルーニは、その自慢の二重の城壁に幾つもの大穴を開けられ、街のあちこちで火の手が上がり、途切れる事の無い砲声と銃声が轟いていた。

その響いている銃声には、主に二つの音があった。

一つは、「パン、パン」というパーパルディア皇国の魔導マスケット銃の銃声。もう一つは、「ダダダダダッ」という断続的に発生する銃声であった。

アルーニの一角に存在する公園に設けられた防衛線では、パーパルディア皇国兵達が悪態をつきながら、都市内に侵入してきた敵兵の撃退をしていた。

「クソ！このアルーニが、ここまで敵兵の侵攻を受けるとは!?!」

「黙って撃ち返せ!!これ以上侵攻、ガハッ!!」

「テム!?!テムがやられた!!」

「チクショウ！何なんだよ、あの銃は!?!何であんな銃を属領の奴らが持っているんだ!?!」

悪態をつきながらも、「フィルアデス大陸解放軍」に反撃を行うパーパルディア皇国兵達。

だがしかし、現実是非情であった。

数分後、公園に設営された防衛陣地は「フィルアデス大陸解放軍」によって占領された。

なお、最後の最後まで抵抗したために、パーパルディア側に生存者は一人もいなかった……。

フィルアデス大陸解放軍司令部

激戦の続くアルーニの郊外に設けられた「フィルアデス大陸解放軍」の司令部内では、なし崩し的に司令官となったハキが各地からあがって来る様々な報告を受けていた。

「第41部隊がパーパルディア皇国が設営した防御陣地を占領しました。敵に生存者は無しとの事です。なお、弾薬が二割を切ったため補給に戻るとの事です。」

「第22部隊が、「携行式タイセンシャ噴進弾発射器」で地竜を撃破したとの事です！死傷者はなし！」

「第9部隊が敵の猛反撃に苦戦中、援軍を要請しています！」

「二ホン国軍の方々に支援を要請してくれ！彼らのセンシャならば、敵陣を突破する事が可能だろう。」

「了解！二ホン国軍、聞こえますか？此方は、フィルアデス大陸解放軍司令部……。」

休む暇もなく入って来る戦況に若干目を回しながらも、「フィルアデス大陸解放軍」の各部隊に指示を出しながら、ハキは日本から提供された武器の性能に唯々驚愕していた。

（凄……、凄すぎる……。なんて高性能な武器なんだ。あれ程恐れたパーパルディア皇国軍を、まるで赤子の手を捻るかのように簡単に撃破することが出来る……。そんな武器が、二ホン国では倉庫に長年眠っていた旧式だという事だ。二ホン国、なんて恐ろしい国なんだ……。）

アルーニ攻略戦の戦況から、日本製の武器の性能の高さに驚愕するハキ。

此処で時間は、アルーニ攻略戦が始まる数日前に戻る。

アルーニに向かって進軍していく「フィルアデス大陸解放軍」の面々の前に、突然日本のヘリコプターが現れた。始めて見る奇妙奇天烈な飛行物体に、最初ハキ達は強い警戒心を抱いたが、その飛行物体が彼らの希望である日本の物であると知ると、それまでの態度を18

0度変え、大いに彼らを歓迎した。

フィリアデス大陸解放軍と無事に接触することが出来た日本は、フィリアデス大陸解放軍に参加している各属領との戦時条約を結ぶと、日本はフィリアデス大陸解放軍に結んだばかりの戦時条約に基づいた兵器を無償で譲渡した。

譲渡したのは、万が一の為にと倉庫の片隅で保管されていた52式小銃や59式対戦車噴進弾発射器（一般的には、バズーカと呼ばれる兵器）などの旧式武器である。

更にはアルーニ攻撃までに、可能な限りの貸与した兵器の取り扱いなどを訓練した。近代的な銃など触った事のないフィリアデス大陸解放軍の面々だったが、幸いな事にこの解放軍に参加している多くの兵たちが、かつて軍事に携わっていた者たちばかりだった。

その為、僅かな時間で最低限度の練度ではあるが、日本製武器の取り扱いを習得することが出来たのだった。

そして、現在……。

各属領から集まった圧倒的な人員数と日本製の兵器、そして少数とはいえ日本国の援軍、この三つが組み合わさった結果が、現在の戦況であった。

因みに「フィリアデス大陸解放軍」に供与した武器はどこから持ってきたのかと言うと、パールディア皇国の海軍を壊滅させた海上防衛軍第一艦隊に予め積載されていた物をヘリコプターでピストン輸送したのであった。

（いける、いけるぞ!!俺達でもあのパールディア皇国にも勝つことが出来るんだ!!……これからの第三文明圏は二ホン国を中心に回っていくだろう。パールディア皇国に勝利し、祖国を取り戻した暁には二ホン国と親密な関係を作り上げなければならないな。）

圧倒的に有利な戦況に、今まで感じた事のない高揚感を感じ、確実に来るであろう未来に他死しての考えを巡らしながら、ハキは「フィリアデス大陸解放軍」の指揮を執り続ける。

アルーニの戦いは、佳境へと入ったばかりであった。

日本 防衛省

日本の軍事行動を司る防衛省の一室では、防衛大臣の巖田が最新の戦況情報を受け取っていた。

「ふむ、アルーニの戦況は「フィルアデス大陸解放軍」の優勢か……。いくら我が国では旧式化している兵器と言え、近世程度の技術力しか持っていないパーパルディア皇国では拠点を防衛する事すらままならないという事か……。彼ら「フィルアデス大陸解放軍」を構成する国々が独立した暁には、良き隣人となるだろうな……。だが、問題はリーム王国か……。」

巖田を現在進行形で悩ませている一つの問題、それは「無宣告で勝手に対パーパルディア皇国戦に参加しようとしているリーム王国」である。

この問題が発覚したのは、アルタラス王国での共同宣言の後である。

フィルアデス大陸を監視しているアークバードから、「第三文明圏の文明国であるリーム王国の大軍勢がパーパルディア皇国に侵入した。」との報告が入ったのだ。

宣戦布告なしでの大軍勢の派遣。

覇権国家が多いというこの世界の常識やリーム王国の過去の行いなどを照らし合わせた結果、日本政府はリーム王国がパーパルディア皇国の領土や彼の国が保有する技術をかすめ取る、火事場泥棒をしようとしているのではないかと判断した。

「全く、後々に禍根になるような事をする国がこの世界にもあるとはな……。お陰で対パーパルディア皇国戦の戦略を大幅に修正しなければならなくなったではないか……。クソ！めんどくさい事をやってくれたものだ！」

リーム王国の首脳部への苛立ちを落ち着かせる為に、コップに注がれていた冷たい麦茶を一気に飲み干すと、新たな書類に目を通す。

「だが、アルーニへの攻撃のお陰で、この戦争を早期に終わらせる可能性が出て来たのも事実だ。しかし、まさかパーパルディア皇国側からあんな事を頼み込んでくるとはな……。」

書類に目を通し終わると、巖田は窓から外の風景を眺めながら呟く。

「この戦争の早期終結は、君達に掛かっているぞ。頼むぞ、第一艦隊……。」

二日後、エストシラント沖

日本最強の艦隊の一つ、海上防衛軍第一防衛艦隊はエストシラントの沖合に10日ぶりに現れた。

艦隊旗艦天照を先頭に戦艦ふそう、とさとその護衛が単陣形で朝焼けの大海原を進む。

無論、この艦隊がエストシラントに接近している事をパーパルディア皇国側は知る由もなかった。

この戦争以前ならば毎日哨戒の小艦隊が航行していて、敵や所属不明の艦隊の接近を知ることが出来るのだが、主力艦隊が第一艦隊の攻撃によって壊滅した現状では哨戒任務用として運用されていた二線級戦列艦ですら、パーパルディア皇国の貴重な海軍戦力として港に温存されていた。

その為、海上警戒網は全くと言っていいほど機能していない状況となり、第一艦隊はパーパルディア皇国に知られる事無くエストシラントの沖合まで侵入することが出来たのだ。

「艦隊司令、もう間もなく作戦ポイントです。付近の海域に敵の姿は認められません。」

「了解した。後は「のろし」が来るのを待つだけだな。」

「はい。この作戦を成功させれば、この戦争を何とか終わらせることが出来ますね。」

「ああ、戦争程国民を圧迫する事は無いからな……。しかも火事場泥棒も現れそうだとこの事だ。絶対に失敗は許されないぞ。」

佐々木と倉田が話していると、日の出の時間となり太陽が水平線から登ってきた。

美しい日の出に、一部の防衛軍人はこの作戦の成功を祈っていた。ちようどその時、第一艦隊に通信が入った。

「司令！「のろし」が上がりました！」

「よし、作戦開始だ!!全艦に作戦開始を伝達せよ！倉田艦長、天照の船速を増速せよ！」

「はっ!!増速30ノット!!これよりエストシラント港に突撃する!!」

アルタラス王国征服艦隊の撃破から約一カ月、泥沼化する可能性のあるパーパルディア皇国との戦争を早期に終わらせる為の、最後の作戦が今開始された。

パーパルディア皇国の悪夢は、目覚めの時を迎えようとしていた。

番外編―02

とある海兵の話

「役立たずの木偶の坊」

それが「彼女」の、いや「彼女達」に付けられた最初のあだ名だった。

現在の華々しい活躍が反映された、幾つものあだ名を持つ「彼女達」の最初のあだ名がこんなひどい物なんて、今ではとても信じない事だろうか？

だが、これは紛れもない事実の事だ。

この世に「彼女達」の存在が知られた時、一時世界は大騒ぎになったもんさ。

とんでもない化け物が現れた、と・・・。

だが、数日もすればその反応は正反対のものになった。

確かに「彼女達」は桁外れの巨体を持つていたが、訳の分からないモノばかり搭載しているうえに、ノロノロとしか動けない、おまけに最も重要な心臓部がともに動かないと来たもんだ。

「彼女達」を手に入れようと躍起になっていた各国の政府のお偉いさんたちは、この事を知るとあつという間に興味を失ったばかりか、罵声を「彼女達」に浴びせた。

政府だけじゃない、あらゆる人が「彼女達」に罵声を言い、馬鹿にした。

当時若かった俺もそのうちの一人だ。

時は流れ、人類が経験したことのない大きな戦争が起きた。

列強国の一員だった俺の国も参戦し、俺もまた戦場に赴くこととなった。

俺はとても幸運だった。

何しろ、当時最新鋭の軍艦に配属されたからだ。

最高の火力と、最新の装甲を身に纏い、戦場を駆け巡ることが出来る快足を持った船だった。

最高の気分で甲板を歩いていると、ふとある物が港の沖合に浮かん

でいるのが見えた。

それは、遙々極東の海からやってきた「彼女達」、正確に言うならば長女と三女だった。

俺の国のお偉いさんたちは、「彼女達」を自国の最新鋭の軍艦を守る為の大きな囀として利用する為に、極東の海から「彼女達」を呼んだのだと、当時の俺が所属していた班の班長がそう言っていた。

実際、誰もが「彼女達」の事を馬鹿にし、嘲笑していた。

「役立たずの木偶の坊も、ようやく役に立つことが出来る。」
と、誰もが言っていたもんだ。

歴史の残る大海戦が、遂に始まった。

砲声が途切れる事無く轟き、敵味方構わず砲を撃ちまくる。

俺の乗っていた船もそうだった。

だが、最悪な事が起きた、起きてしまった。

敵の戦艦から放たれた一発の砲弾、その一発の砲弾が俺の乗っていた船に致命傷を与えたのだ。

砲塔が撃ち抜かれ大爆発が起き、火災が至る所で発生した。

艦橋にいた多くの士官も負傷し、機関も停止してしまった。

戦場の真っ只中で俺の乗っていた軍艦は、動く事すら出来ない鉄の棺桶となってしまった。

そんな俺達に止めを刺す為に敵の戦艦の砲身が此方を向いた、その時だった!!

突然、俺の乗っていた船に、砲を向けていた敵の戦艦が爆ぜたんだ。文字通り木っ端みじんとなり、数秒後には海中へと姿を消していたんだ。

何かかと思った、俺の耳に誰かの声が流れて来た。

「アイツだ……。アイツがやってくれたんだ!!」

その声を聴いた全員が、そいつが指差す方向を見ると……。居たんだ、「彼女」が。

いつも誰かにバカにされ、嘲笑されてきた「彼女」が……。スクラップにした方が役に立つ、居ないほうが国の為になるとまで

言われた「彼女」がそこに居たんだ。

そこからの戦いは、誰もが知っているものさ。

「彼女」は百発以上の戦艦の主砲クラスの砲弾を受けながらも傷一つ負うことなく、翼がついているのかと錯覚するほどの速さで戦場を疾走し、駆逐艦だろうが最新の戦艦だろうが関係なく一撃で撃沈し、俺の乗っていた船を含めた複数の味方艦を曳航して港に帰還し、更には多くの将兵の命まで救った。

この海戦以降、誰も「彼女達」を馬鹿にする者は居なくなった。

海軍、特にこの海戦で戦った俺の国の海兵たちは、「彼女達」に尊敬を通り越して、信仰心のような物まで芽生え始めていた。

かく言う俺もそのうちの一人だけだな。

「彼女達」の最初のあだ名「役立たずの木偶の坊」はあつという間に否定され、忘れ去られた。

その代わりに新しいあだ名が定着したのだ。

「Great Guardian」、偉大な守護者。

それが日本の守護神にして誇りとなった「彼女達」の、天照型超巨大戦略戦艦の輝かしい伝説の始まりのページとなったのさ。

とある日本人技術者の話

「彼女」を初めて目にしたとき、私は自分の目を疑っていました。

何しろ、自分の目の前には日本海海戦の武勲艦である三笠や当時最新鋭の薩摩型戦艦が豆粒に見える程に巨大で傷ついた船が居たのですから。

奇跡的に作動した「彼女達」の推進機関と日本海軍の全ての主力艦を総動員して何とか曳航してきた、傷だらけで彼方此方が歪み、穴が開いていた「彼女」に乗り込むと、そこには訳の分からないモノが沢山ありました。

円盤状で中欧に突起の付いたモノや、甲板の至る所にあるハッチの様なもの、半壊した艦橋らしき構造物に取り付けられた正六角形の板等々、何の為の機器なのか我々には見当もつきませんでした。

特に我々を悩ませたのは、艦内の至る所に取り付けられた幾つもの突起物状のボタンとガラスの様なモノがセツトになった機械と艦内の中央に据え付けられた謎の機械でした。

臨検を行った海軍の軍人さん達によると、突起物状のボタンの一つを押すと、機械のガラス部分に鮮やかな色の絵やグラフ、文字が浮かび上がったとの事です。

その事を聞いた私の同僚は、これはタイプライターの種類、若しくはその発展型ではないかと言っていました。

その後、世界中から「彼女」が嘲笑されている中でも調査は行われていました。

実はこの時、我々は「彼女」の幾つもの驚くべき事実を知ることが出来ていました。

例えば、艦内の中央に据え付けられた謎の機械は「彼女」の全てを司る、人間に例えると脳に当たる物であり、その正体は電気を使った機械式計算機でした。その性能は一澗を超える計算を計測不能な速度で行うことができ、気象情報を入力すれば、日本列島の全ての集落の十分ごとの正確な天気を予測できるほどでした。

他にも日本どころか、世界中の電力すべてをまかなってしまう程の出力を持つ燃料いらすの機関や圧倒的な破壊力を持つ多数の兵器、水平線の彼方まで観測することが出来る機械など、驚くべき事ばかりでした。

これらの調査結果を受けて我が国の政府は、「彼女達」の真の性能を多くの軍人にすら秘匿しながら、修復作業を行い我が国の戦力にすることにしました。

「彼女達」は暫くの間、発見された場所から「超巨大硫黄島漂流戦艦」と仮の呼称が与えられていましたが、発見から一年、遂に我が国の正式な軍艦となり、新たな名が与えられました。

佐世保に回航された最も損傷の少なく、他の二隻の復元参考になった艦は「八咫鳥」。

瀬戸内海の交通を制限したうえで、艦の操舵機能をフル活用して呉に回航された甲板上の多くの構造物が破壊されていたが、一切の浸水

が起きていなかった艦は「須佐之男」。

そして私が勤務している横須賀海軍基地に回航された、艦の至る所で浸水が発生し僅かに傾きながらも、海の王者としての風格を放ち、硫黄島にて昇る美しい朝日をバックに海軍軍人達を迎え入れた「彼女」に与えられた新しい名前は……。

「本艦を天照型戦艦一番艦、天照と命名する!!」

天照型超巨大戦略戦艦一番艦「天照」、後に世界最大にして世界最強の王者として君臨する超巨大な戦艦の歴史が、この日に始まったのです。

エストシラント カイオス邸

天照を中心とした日本海上防衛軍第一艦隊に配属されている日本海上防衛軍人達が朝日に作戦の成功を祈っていた頃、同じように朝日にこの計画の成功を祈っている人物がいた。

「カイオス様、二ホン国艦隊に合図の「のろし」をあげました。もう間もなく彼らがエストシラント港に突入してきます。」

「もう後戻りは出来ないところまで来てしまったか…。各部隊の状況は？」

「はっ、ゼクト十兵長の指揮する部隊が各政府機関の周辺に待機しています。また、ポクトアール提督の指揮する部隊が皇族の確保のための行動に移っております。」

「そうか…。本計画において政府機能の掌握と皇族、特に皇帝陛下やレミールの身柄の確保は絶対だ。なんとしても成功させなければならぬ。もしこのクーデターが失敗すれば…。」

「我が国の命運は尽きたも同然、ですね…。」

「そうだ。だから何としてもこのクーデターを成功させなければならぬ…。しかしまあ君も博打家だな。まさか我が国の政争に二ホン国を巻き込むとはな。」

「それが我が国にとって最善策だったからですよ。」

カイオスはクロムと話をしながら、反乱を起こすことを決めたあの夜の事を思い出していた。

時はカイオス邸にて、反乱を起こすことを決めた日の夜まで巻き戻る。

「…カイオス様、私に一つ妙案があります。」

「なんだね？話してくれ、クロム。」

「はい、私が考えた案とは本計画に二ホン国を巻き込むという物で

す。」

「な、何だと!？」

クロムが出した案にこの部屋にいる全員が驚く。

クロムはこの戦争を終わらせる為のクーデターに、敵対国である日本の手を借りようと言うのだ。

戦争中の敵国にクーデターの手助けをしてもらうなんて、この世界では前代未聞の事であった。

「待て待て待て!!我々の戦力が足りないからと言ってても、敵国の力を借りるのは前代未聞の事だぞ!?!何考えてるんだ、お前は!?!」

部屋にいる全員の心境を代弁する様に、ヴァルハルがクロムに疑問を吹っ掛ける。

それに応える様に、クロムが話し始める。

「我が方の戦力は圧倒的に劣勢です。だからこそ規格外の力を持つ二ホン国軍を巻き込む必要があるのです。彼らがエストシラントやデュロの主力部隊をたった一日で殲滅させたのは記憶に新しい事です。二ホン国軍が再びエストシラントに現れば、皇都の防衛隊は彼らへの防衛体制を取らざるをえなくなります。」

「つまり、我々の敵を二ホン国軍に引き付けてもらおうという事だな?。」

「その通りです。この案ならば確実に反乱計画は成功させることができます。ですが新たな問題が一つ浮かび上がってきます。それはどうすれば二ホン国をこの計画に加担させることが出来るか、です。」

クロムの言葉に、一時明るい顔をしたカイオス達の顔がまた曇る。

確かに彼らに何かの見返りを用意しなければ、反乱計画に加担という面倒ごとに首を突っ込んでくるはずがない。

「どうする…?我が国の金では決して納得しないだろうし、あの国の性格からして領土の割譲など受け付けるはずがない。奴隷なんてもつてのほかだ。どうすればよい…?。」

「それについても私に考えがあります。此方から出す見返りは戦争の早期終結と全属領の解放、大規模な軍備縮小、そして正式な政府の謝罪です。」

「ほう？それであの二ホン国がこの計画に協力してくれるというのかね？」

「無論、この条件だけでは首を縦には振らないでしょう。ですが現在の状況とあの国の性格を加味すると、二ホン国がこの条件に合意してくれる可能性が十分にあります。ヴァルハル、二ホン国の戦争に対する考え方についての説明を頼む。」

此処で今まで話をしてきたクロムに代わり、ヴァルハルが話をする為に椅子から立ち上がる。

カイオスやゼクト、ポクトアールらは、唯々黙って彼らの話に耳を傾ける。

「二ホン国の戦争に対する考えについてですが、如何やら二ホン国はかなり変わった規則を自らに課しているようです。幾つか挙げますと、「民間人、民間施設に攻撃をしてはならない。」「降伏した敵国の軍人に拷問をしてはならない。また、その生命を脅かしてはならない。」「武力の行使は自国、若しくは同盟国が他国からの侵略を受けた場合のみである。」「武力を用いた外交活動をしてはならない。」等です。これは我が国の常識からすると、かなり異質です。」

ヴァルハルの話に、部屋にいる何人かが頷く。

実際、あれだけの武力を持ちながらその武力を見せびらかすこともせず、他国に脅しをかける事もしない日本の外交はこの世界では有り得ない事だった。

この日本の特異な政治体制が覇権主義を掲げるパーパルディア皇国には理解できず、レミールをはじめとする多くのパーパルディア皇国人たちが日本の力を測り間違える結果を生みだすことになったのだ。

此処で再びクロムが話し始める。

「さて、本戦争で二ホン国側で参戦しているのはアルタラス王国とファイルアデス大陸解放軍のみです。これは二ホン国が戦後処理を簡潔に済ます為に当事者のみでこの戦争を終わらせるためだと考えられます。ですが、此処にこの戦争で生じた甘い汁を手に入れる為に乱入しようとしている国があります。その国の名前はリーム王国で

す。」

「リームだど!?あの蝙蝠がこの戦争に関わってくるというのか!」

「はい、不確定ですがリーム王国は大規模な侵攻の為の準備を進めているとの情報が入ってきています。恐らく戦争の混乱に乗じて我が国の領土をかすめ取る事と、この戦争で二ホン国によい印象を与える為だと思えます。ですが二ホン国にとっては有難迷惑な話でしょう。何しろ戦後処理をややこしくする様な行為を平然とする国が勝手に混じってくるのですから。」

「なるほど、つまり二ホン国も早くにこの戦争を終結させたいと考えている可能性があるという事か。」

その通りです、とクロムは応える。

カイオスは目を瞑り、静かに思考を巡らせる。

数分後、彼は静かに瞼を上げ、自分に目を向けるクロム達に自分の考えを伝える。

「…私はクロムの博打に掛けてみようと思う。皆はどうか?」

「カイオス様がクロムの案で行くのと仰るのならば、私に異議はありません。」

「「同じく。」」

「「異議なし。」」

「よし、では早速行動に移る事にしよう。先ずは二ホン国政府に連絡を入れなければな。」

その後カイオスらは事前の秘密の取引の結果、屋敷の一室に設置された日本製の無線機を使用して日本政府に連絡を取った。

このカイオス派のクーデター計画とその協力要請に日本政府は大変驚いたが、同時に非常に有難い申し出でもあった。

と言うのも、クロムの予想通りリーム王国の宣戦布告なしの戦争参加は日本政府にとって頭痛の種となっていたからだ。

事実、防衛省の一部では戦後の混乱と新たな戦乱の芽を残さない様にする為に、民間人に多大な被害が出る事が予想されるエストシラントへの強襲上陸と市街地戦でさえもやむを得ないと考えている程で

あつた。

そんな中でカイオスらクーデター派からのクーデター計画への協力要請は戦争を早期に集結させることが出来るだけでなく、新たなパーパルディア皇国政府が親日派となる可能性すら抱えた現状で最善の選択肢であつた。

ただし、これだけでは敵国の反乱に協力する事は出来ない。

カイオス派からの通信を受け取った日から、二日ほどの時間をかけてこの計画に協力する条件を立案すると今度は日本政府側から通信を入れ連絡を取つた。

日本政府が反乱計画に協力する為の条件の一部を抜粋すると、

- ・ 本戦争の即時終戦。
 - ・ パーパルディア皇国の現政体の解体。
 - ・ パーパルディア皇国の国名と政治体制の変更。
 - ・ パーパルディア皇国の軍事力の制限。
 - ・ 日本、アルタラス王国への正式な謝罪と賠償。
 - ・ 全属領の解放、並びに各属領、他国から徴収した奴隷の即時解放。
 - ・ 日本が要求した人物の身柄の引き渡し。
- などである。

パーパルディア皇国が今まで積み重ねてきた物や伝統をすべて否定し、破棄する事を迫る日本政府からの厳しい要求にカイオス達は気を失いそうになったが、パーパルディア皇国に住む多くの国民の為に致しかないと日本政府の要求を？むことにした。ただ、細かい部分は戦争終結後に取り決める事にするなど可能な限りの余地を残す為の努力もしたのだった。

こうして何とか第三文明圏屈指の強国の協力を取り付けたカイオスらクーデター派は、準備をしながら決起の時が来るのを見極めていた。

そして、フィリアデス大陸解放軍がアルーニへの猛攻を仕掛けていた事を知ったカイオスは計画の実行を決断し、大陸沖で待機していた日本艦隊に決起を知らせる合図である「のろし」を打ち上げたのだ。

「カイオス様、全部隊作戦準備完了しました!!後は、ニホン国艦隊が突

入してくるのを待つだけです!!」

「事前の打ち合わせでは、もう間もなくエストシラント港に突入してくるはずですが…。」

ちようどその時、港の方向から腹に響くような爆音が鳴り響いてきた。

窓から身を乗り出して海の方角を見ると、パーパルディア皇国の戦列艦より遙かに巨大な艦影が幾つも此方に向かって航行していた。

「諸君、ニホン国艦隊が突入してきたぞ!!全部隊に作戦開始の連絡を入れるんだ!!我々もパラデイス城に向かうぞ!!」

「二はっ!!」

パーパルディア皇国 皇都防衛軍仮設本部

此処で時間は、日本海上防衛軍第一艦隊が突入してくる少し前まで遡る。

日本の猛攻撃によって破壊し尽くされた皇都防衛軍基地の跡地に作られた仮設基地では、兵達が交代で硬いパンと塩漬けの肉の貧相な朝食を取っていた。

「クソー硬くて不味い!!とても食えたもんじゃないぜ!!」

「しよががないだろ、交通の要所であるアルーニが敵の手に落ちたんだ。食料を生産していた属領からの食料調達が出来なくなって、保存のきくものしかなくなっちゃったんだからな。」

「……なあ、現状の皇都防衛軍で敵に勝てると思うか?」

「ファイルアス大陸解放軍と名乗っている属領の反乱軍ならば、絶対に皇都まで来る事は無いだろうが…。問題はニホン国だな。」

「ああ、我が国の無敵艦隊を壊滅させ、この基地を破壊し尽くしたあの国の軍隊がもう一度来たら、このエストシラントは今度こそ終わりだな…。」

「そうだな…。ところでゼクト十兵長の部隊はどこだ?」

「一時間ほど前に市内巡回に向かったらしいが…。それにしても帰ってくるのが遅いな。一体どうし…、何の音だ?」

雑談をしていた兵士が何かが空気を切り裂くような音を認識した

次の瞬間だった。

此処にいる誰もが経験したことのない大爆発が起こり、朝食を取っていた全ての兵を吹き飛ばしたのだった。

同時刻、パーパルディア皇国 行政大会議場

「一体皇国軍は何をしているのだ!!全ての属領の反乱を許すどころか、交通の要所であるアルーニまで落ちるとは!!」

各行政の幹部が集まり、国の運営に対する実質的な対策を決定する行政大会議は、皇国の歴史が始まって以来の未曾有の危機を前に紛糾していた。

日本との戦争が始まった直後に起きた日本防衛軍による主要都市、主力軍への攻撃によって第三文明圏唯一の列強国として君臨してきた最強のパーパルディア皇国の姿は既になく、更には日本、アルタラス王国の連名の声明によって全ての属領が反旗を翻し国土は大きく縮小、パーパルディア皇国の国民の食を提供してきた穀物地帯までもがパーパルディア皇国の支配下から離れてしまった。

穀物地帯がなくなった事によりパーパルディア皇国の食料自給率は大幅に低下し、最悪の場合日本の攻撃ではなく、大飢饉によって国が亡びる可能性すら出て来た事が彼らの頭を痛める。

会議に出席している軍の最高司令官アルデは相次ぐ罵倒を受け止め、胃をキリリと痛めながらも彼らに説明をする。

「現在軍は再建の真っ只中であり暫くは動かせません。再建が終わり次第反乱を抑えるつもり…。」

「それはいつだ!?!いつになったら軍の再建は完了するのだ!?!」

アルデの発言を遮り、農務局局长が発言する。

「す、少なくとも4カ月は掛かります。以前の練度に戻すとすると更に時間が掛かります…。」

「そんな悠長に構えている暇は皇国にはありませんぞ!!このままでは6カ月、たった6カ月で食料がなくなるのだぞ!!統制すればもう少し伸ばすことが出来るが、それでも8カ月ほどしか持たない!!」

半年で食料が底をつく。この事実、会議場にいる誰もが息をの

む。

それはつまり、パーパルディア皇国の余命はほとんど残っていないという事だ。

農務局局長の話は続く。

「二時的にニホン国と休戦し穀倉地帯を取り返す、若しくは他国から食料を輸入する手続きは出来ないのか？」

農務局局長の提案に、出来るわけが無いとアルデは考える。

休戦については日本はそもそも唯の国内問題と見てくれないだろうし、寧ろより攻撃を苛烈に行うだろう。

戦争をしている敵国が弱っている時に手を抜く国が何処にあるだろうか？

食料の輸入にしても絶望的だ。

周辺国はほぼ全ての国が日本の味方であり、尚且つ今まで傍若無人の行いをしてきたパーパルディア皇国に救いの手を差し伸べる国が果たして存在するだろうか？

それに万が一食糧輸出の目途が立ったとしても、どの様に日本の警戒網を掻い潜って食料を運ぶのか？

船は当然無理だし、ワイバーンでは精々一人か二人分の一日分の食料しか運べないのだ。

アルデは農務局局長の無知に怒りを覚えながら、返答する。

「第一外務局局長とも何度も話し合いましたが、一時の休戦や食糧の輸入は不可能です。」

「では一体いつになったら穀倉地帯を取り戻せるのか!! 蛮族の戦力なぞだかが知れているだろう!! 何故さつきとしないんだ!!」

野次が飛ぶ中、何とかそれに耐えながらアルデが話をしようとした時、突如として会議場全体がビリビリと震え、少し遅れる様に何かが爆発した音が響いてきた。

「な、何事だ!? 一体何が起きた!?!」

「ほ、報告します!! エストシラント港沖合にニホン国艦隊が現れました!! ニホン国艦隊の攻撃によって、皇都防衛軍仮設基地とエストシラント港が壊滅的な被害を受けています!!」

「な、何だと!!二ホン国艦隊が攻めて来ただど!?クソ!!直ちに迎撃せよ!!何としても皇都を、陛下を守るのだ!!」

突如の敵艦隊の出現に驚きつつも、アルデはエストシラントに展開している各部隊に指示を出す。

だがまさか、砲撃から免れ、皇都内に展開している部隊の殆どがクーデター派についているとは夢にも思っていなかったのだった。

日本海上防衛軍第一艦隊 旗艦天照戦闘指揮所

「敵基地への着弾を確認!!」

「よし、本艦とふそう、ときは内陸部への砲撃を継続、その他の護衛艦はエストシラント港への攻撃を開始せよ!!」

「航空部隊へ指定した施設の攻撃を指示せよ!!決して民間人に被害を出さない様に厳命せよ!!」

「クーデター派から行動を開始したと連絡が入りました!!このままパーパルディア皇国軍の目を引き付けておいてほしいとの事です。」

「了解した。全艦に通達、「派手に砲撃をして、パーパルディア皇国の目を釘付けにせよ!!」

「ふそうから返信、「我、喜んで皇国軍の目を引き付ける役を引き受ける。」です。」

様々な情報と指揮が飛び交う天照の戦闘指揮所では、第一艦隊の司令官佐々木は少しばかり不安を感じ始めていた。

それは、もしクーデター派がパーパルディア皇国の各重要施設の制圧に手こずった場合、民間人に大きな被害が出る可能性が高い大通りや都市の外に通ずる門などにも攻撃を加えなければならなくなる。

いくら戦争中の敵国に住んでいるとはいえ、一般人への被害は何としても抑えなければならぬのだ。

砲撃開始から数十分後、佐々木のみならず天照艦長の倉田や幕僚たちが焦りを感じ始めたその時だった。

佐々木が待ち望んでいた情報が飛び込んできた。

「司令、アークバードより緊急通信!!パラデイス城に白い旗が翻っているのを確認したとの報告が入りました!!」

「何!?!それは本当か!?!」

「はい、間違いありません!アークバードからの映像を出します!!」

佐々木が指揮所メインモニターに視線を移すと、確かに作戦開始時にはパーパルディア皇国の国旗が翻っていたポールに白い旗が翻っていた。

「艦隊全艦、攻撃止め。．．．ここに本作戦完了を宣言する。」

一転して静まりかえった戦闘指揮所に佐々木の指令だけが響く。

此処に戦争初期から活動を続けた第一艦隊の戦いは、終わりを告げた。

それは同時に本戦争における、日本防衛軍の戦いに終わりを告げるものでもあった。

数分前 パーパルディア皇国 行政大会議場

突然の砲撃によって大混乱となった会議場。

そんな中で必死に指示を出していたアルデが、更なる細かい指令を出す為に軍務局に移動しようとした矢先だった。

「おい!貴様ら、一体何の用だ!!」

「うるさい!!我々はこの会議室にいる大臣達に用があるのだ!!」

不意に部屋の外で怒号が聞こえたかと思うと、突然大会議室のドアが強く開かれ、武装した軍人70名がなだれ込んできた。

軍人たちはパーパルディア皇国歩兵に正式配備されているマスケット銃を構えながら、会議室に押し入る。

「いったい何だ!何事だ!!」

突然入ってきた兵達に対して、アルデが声を荒げる。

「各人動かないでいただきたい!!この行政大会議場は、たった今掌握した!!勝手な行動をされると命の保証はない!!!」

会議室に乱入してきた軍人の代表として、ゼクト十兵長が声をあげる。

「貴様らは大馬鹿者なのか!?!貴様たちは、この国家の未曾有の危機の前に革命ごっこのつもりか!!!指導者のいない国は全く動かんぞ!!!お前たちはパーパルディア皇国を滅ぼしたいのか!?!」

アルデの言葉に場が静まりかえる。

だが、ゼクト十兵長はアルデの問いに応える。

「二ホン国の力も見抜けずにパーパルディア皇国の破滅の危機を作り出したのは、紛れもない貴方方だ!!我々は愛するパーパルディア皇国を、この国に住む民を大崩壊から救うために行動を起こしたのだ!!」
「やはり貴様らは大馬鹿者だ!!ただ皇国の行政機構を押さえたただけは、現在の状況は何一つも解決しない!!!相手が強力無慈悲の軍を持つ二ホン国と破竹の勢いで進軍をしているファイルアレス大陸解放軍がいるんだぞ!!貴様らがこの国を救いたいのならば、何か画期的な具体案か代替案を示してみろ!!それが出来なければお前たちは本当の愚か者だ!!!」

「具体案なら既にある!!!すでに我々のリーダーであるカイオス様が二ホン国と話しをつけておられる。我々が皇国内の大掃除をし、今までの行いを改め謝罪し、国の在り方を根本から変える。そうすれば皇国は救われるのだ。」

ゼクトの言葉に、場がざわつく。

まさか二ホン国との交渉から外されたカイオスが二ホン国との対話を密かに行っているとは夢にも思っていなかったのだ。

だが、それでも信じきれないのかアルデがゼクトに食い下がる。

「なっ!?そんなことが!?カイオスが!? だが、ファイルアレス大陸解放軍はどうするのだ?例え二ホン国との戦いが終わったとしても奴らがまだいるのだぞ!!奴らはどうするのだ!?!」

「それについても問題ない。二ホン国は我が国が降伏をすればファイルアレス大陸解放軍に対し、戦闘を終結させるように手を回してくれるとの事だ。」

「そんな馬鹿な!?!二ホン国は、敵国である我々を助けるというのか!?!有り得ない事だ!!」

「:..どうやらあなた方は私のような一兵卒よりも二ホン国の事を知らないと見える。やはりカイオス様の仰っていたように情報は上に行くほど簡素化され、都合の良いように捻じ曲げられるのだな。まあいい。もう問答する気はない、動かないでいただく。」

「…貴様ら、後悔するぞ。」

行政大会議場はクーデター派により、無血制圧された。

「後は皇帝陛下と皇族だけか…。後は頼みましたよ、カイオス様。」

同時刻、パーパルディア皇国 パラデイス城

「カイオスよ、これは一体どういうつもりだ？」

パーパルディア皇国皇帝ルディアスは、静かに目前に立つカイオスを睨みつける。

ルディアスの横にはクーデター派の軍人が彼を囲むように立つ。

「皇帝陛下、皇国の、この国に生きる民の為に、しばし動かないで頂きたい。」

カイオスは自らの周りを武装した兵が囲んでいても、なお皇帝としての風格を失わないルディアスの目を見つめながら話す。

「革命か。お前がこのような事をするとはな。だがこれからこの国をどうするのだ？まさか無計画ではあるまい。」

「私は極秘に二ホン国との交渉を行ってきました。非常に厳しい条件を叩きつけられましたが、この国に生きる民の為に、全てを呑む覚悟を私は心に決めました。」

「…それで、貴様は我をどうするつもりだ。」

「皇帝陛下は今後政治に口を出す事は金輪際許されません。二ホン国との講和会議の後、新たに生まれ変わる我が国の保護の元、静かに余生を送ってもらいます。不満はあると思いますがこれが精一杯でした。」

ルディアスは、しばし沈黙すると口を開く。

「…私の扱いについては分かった。ではレミールは、他の皇族はどうなる？」

「交渉の結果、他の皇族の方々に關しては一生政治にかかわらないという条件の元、引き続き我が国での生活をする事を許されました。ですがレミール様については二ホン国側が必ず引き渡す様に言及してきております。レミール様の二ホン国への引き渡しは免れる事は

出来ません。」

「…そうか。」

皇帝ルディアスとカイオスが話をしている最中、扉が開かれクロムが数人の軍人達とともに部屋に入ってきた。

クロムは一礼を、軍人達は敬礼を皇帝ルディアスとカイオスにする
と報告を始める。

「カイオス様、ポクトオール提督の部隊が皇都にいる全ての皇族の身
柄を確保しました。また、ゼクト十兵長の部隊も無事に各行政機関を
制圧したとの事です。」

「そうか、すべて上手くいったな…。ところでクロム、その顔の傷はな
んだ？」

「あ、これですか…。いえ、レミール様の確保の時に彼女が物凄く暴れ
まして…。偶々通りかかった元海軍軍人であるシルガイアのお陰で
何とか耐えましたが、下手をすれば取り逃がすところでした。」

「な、なるほど…。そのシルガイアとかいう元海兵には、十分な褒美を
やらなければな…。さて、この反乱の最後の行動に移らなければな。
今すぐに国旗を降ろし白旗に交換するのだ。早くしなければ二ホン
国艦隊の砲撃が大通りや門にも降り注ぐことになるぞ。」

「了解しました。では、失礼します!!」

駆け足で出て行くクロムらを見ながら、ルディアスは考え事をして
いた。

(まさか、私の代でこのパーパルディア王国が戦争に敗れるとはな…。
世界の制覇は、皇国にはあまりにも大きすぎる野望だったという事か
…。)

日本、アルタラス王国とパーパルディア王国との戦争が開戦してか
らちようど一か月後のこの日、パーパルディア皇国運営の最高指導者
は、皇帝ルディアスからカイオスへと移行した。

カイオスは直ちに日本政府に対し、クーデターはすべて上手くいつ
た旨の報告を行い終戦の手続きを始めた事を伝えた。

カイオスからの連絡を受け取った日本政府は、防衛軍とフィルアデ
ス大陸解放軍に戦闘停止を発信したのだった。

後日、カイオスを中心として設立されたパーパルディア皇国暫定新政府は、全世界に対して日本とアルタラス王国、フィルアデス大陸解放軍に降伏する旨の声明を発表した。

それは、今まで第三文明圏の唯一の列強国として君臨してきたパーパルディア皇国の侵略と繁栄の時代の終わりを告げるものであったのだ。

パーパルディア皇国編―22

パーパルディア皇国 皇都エストシラント

「それでは、これより仮称「フィリアデス大陸解放戦争」の講和会議を始めます。」

日本、アルタラス王国、フィリアデス大陸解放軍とパーパルディア皇国の戦闘が終結してから、一週間がたったこの日。

長年にわたってパーパルディア皇国の行政の中心として機能してきた行政大会議場にて、本戦争に関する全てを終わらせるための講和会議が開かれていた。

パーパルディア皇国側には、暫定政府のトップとなったカイオスや彼の右腕であるクロム、その優秀な能力から外交官としての地位を維持する事となったエルト、軍事の関係者としてヴァルハルが参加していた。

一方、反対側には日本政府の代表者としてやってきた朝田と篠原ら数人の外務局員や、アルタラス王国の国王であるターラー14世と各官僚、クーズ王国再建軍のハキを始めとしたフィリアデス大陸解放軍を構成していた各属領の反乱軍のリーダー達が集まっていた。

因みにだが、何の通告もなく勝手にこの戦争に参加しようとしていたリーム王国についてだが、信じられない事にこの会議への参加を要請してきた。

彼らは、「自分達が大军を動かしたことでクーデターが起きた。したがって、この戦争を真に終わらせたのは我々リーム王国であり、講和会議に参加するのは当たり前前の事である。」という言い分を唱えていたが、日本・アルタラス両政府はこの言いがかりを完全に無視し、リーム王国にオブザーバーとしての資格すら与えなかったのだ。

勿論、駄々をこねる子供の様に喚いたリーム王国だったが、いくら喚けどもこの決定は覆る事は無かったのである。

閑話休題。

司会が会議の開会を宣言をした直後、朝田が席から立ち上がり発言をする。

「日本政府の朝田です。前置き無しで申し訳ありませんが、早速我が国からのパーパルディア皇国に対する請求を改めて伝えます。」

そう言うと、朝田は手元にある資料に書かれた日本政府の請求を読み上げ始めた。

日本政府の請求は、以前カイオス達にしたものとほぼ同じだが、要求の一部が変化、削除、追加が行われた。

なので、ここに改めて掲載しておく。

日本政府は、以下の要求をパーパルディア皇国に通達する。

- ・パーパルディア皇国の国名と政治体制の変更。
- ・パーパルディア皇国の軍事力の制限。
- ・日本、アルタラス王国への正式な謝罪と賠償。
- ・全属領の解放、並びに各属領、他国から徴収した奴隷の即時解放。
- ・日本が要求した人物の身柄の引き渡し。
- ・パーパルディア皇国の領土内に、日本防衛軍の基地を建設する事をパーパルディア皇国政府は了承する。

・一定期間の間、軍事、若しくは軍事転用出来る技術を日本政府の許可なく、勝手に開発してはならない。

などである。

この請求に対して、クーデター前に日本政府の要求を知っていたカイオスらは余り驚いた様子はなかったが、この場で初めて知ったエルトや他の官僚達は誰が見ても分かるぐらいに、驚いた表情で固まっていた。

「…以上が我が国からの請求の全てです。」

「…な、なんだ、この要求の山は!?! 貴様らは栄えある列強パーパルディア皇国を解体するつもりなのか!?!」

「ほう? 他の国なら兎も角、貴国にそのような批判は出来ぬはずです。貴国は幾つもの国を亡国にし属領として長年搾取してきました。そのような行いをしてきた貴国に対し、国名や政体の変更が求められるとは言え、国家の存続が許されているだけでも感謝するべきなのでは

ないでしようか?」

「何だど?! きさ」

「黙れ!! 国家の存続が掛かったこの会議をややこしくするな! 衛兵、この馬鹿者をつまみ出してくれ!!」

朝田の発言が終わると同時に、一人の若いパーパルディア皇国官僚(クロムとほぼ同じ歳、因みにクロムは、彼の様子を見て天を仰いでいた)が噛みつき、会議の空気が悪くなりかけたがカイオスがすぐさま命令を出し、暴走した若い官僚を会議から排除した。

「申し訳ないアサダ殿。彼は若くて優秀なのだが、その…。」

「貴国の位の高い若者には、皇国の偏った教育のせいで他国を見下す者が多いと言う噂を聞いておりましたが、まさかここまで酷いとは…。今回の件は旧政権の教育方針のせいという事で水に流すとしましよう。」

「二ホン国の温情に感謝します…。」

最初にごたごたがあったが、此処にパーパルディア皇国の行く末を決める会議が始まった。

まず最初に、パーパルディア皇国政府としての正式な謝罪が行われた。

無論、亡国の危機に陥ったアルタラス王国や属領として圧政下に置かれていた各属領からは不満の怒声が幾つも上がったが、「日本政府が独立保障と戦後復興に力を貸すので、怒りを抑えてほしい。」と、朝田が発言しその怒声を抑え込んだ。

その後、パーパルディア皇国の新たな国名と政治体制に関する話し合いに移った。

「…ということ、我が国の新たな政治体制につきましては、二ホン国の政治体制を元に、我が国に合う最適な政治体制に再構築を行うべく予定です。」

「ふむ、では、新たな国名は?」

「我々としては、「パールネウス共和国」と改名したいのですが。」

「なに!? パールネウス共和国!? パーパルディア皇国が皇国となる以前の国名ではないか! 我がアルタラス王国は断固として反対する!!」

「クーズ王国も同じく反対だ!!」

結果として日本以外の全ての国家が猛反対し、「パールネウス共和国」への改名は無しとなり、カイオスが第二案として提示した「エストシラント共和国」が新たなパーパルディア皇国の国名となる事が決まった。

次の議題はパーパルディア皇国の軍事力の制限についてだった。

日本の軍事力（日本は防衛力と主張）と比べるとかなり劣るとはいえ、長年第三文明圏唯一の列強国として君臨してきたパーパルディア皇国の軍事力は多くの国々にとつて脅威であり、それは日本の攻撃によって壊滅した現状でも変わらない。

その為、パーパルディア皇国、もといエストシラント共和国の軍事力に上限を定めるのは至極当然であった。

「エストシラント共和国の軍事力の制限についてはですが、パーパルディア皇国の主力兵器として運用されていた兵器の新造、運用の禁止を提案します。新造禁止の兵器の一例を挙げるのならば、ムー国のマリンに匹敵するワイバーンオーバードや100門を超える砲を積載した戦列艦などです。これらの兵器は、第三文明圏の国にとつては脅威以外の何物でもありません。」

「確かに…。我が国も二ホン国に新たな海軍創設の為の機械動力の軍艦や空軍用の飛行機械の発注を行いました。現状の軍事力では壊滅状態にある皇国軍にさえ引き分けがやつとでしょう。」

朝田の発言に、アルタラス王国国王ターラー4世が同意の発言し、他の国の代表者達も賛同の頷きをする。

「…我が方としても、領土拡大施策の為に大規模な軍事力を保有していましたが、その過剰な軍事力が財政に大きな負担を掛けていました。なので軍事力の制限については反対はありません。また、ワイバーンオーバードや超フィシヤヌス級の製造禁止なども受け入れる覚悟があります。…ですが、現在エストシラント港に停泊している艦隊だけは、航路防衛の為に引き続き我が国で運用したいのです。」

カイオスのこの発言に、又もや会議場は騒めく。

その理由として、カイオスが挙げた港に停泊している艦隊の編成が

問題だったのだ。

カイオスらによるクーデターが成功した翌日にエストシラント港に入港してきたパーパルディア皇国海軍最後の艦隊の内訳は、150門級超ファイシャヌス級戦列艦1隻、120門級超ファイシャヌス級戦列艦2隻、ファイシャヌス級戦列艦10隻、竜母2隻である。

開戦前と比較するととても貧弱な艦隊だったが、第三文明圏に属する多くの国にとってはこの艦隊でさえも対抗する事が出来ない。

なので当然戦時賠償艦として接收したいが、カイオスの言い分も理解できるものであった。

何しろ様々な資源を算出していた属領が全て独立したことで、エストシラント共和国は国の運営に必要な資源を外国から輸入しなければならなくなる。

エストシラント共和国の生命線となる交易にとって最も重要な航路を守る為には長距離航海のできる海上戦力が必要だが、そのために必要な戦列艦の多くは日本海上防衛軍との戦いでほとんどが海に沈み、更には造船所も最重要攻撃目標の一つとして苛烈な攻撃を受け、破壊し尽くされてしまった。

そんなまともな船もない、更には新たに造る事すらも出来ない現状のエストシラント共和国にとって、戦争に参加する事無く無傷で港に帰還したこの艦隊の保有は、たとえどんな非難を受ける事になったとしても譲ることが出来なかったのだ。

この提案に会議場の意見は、最後の艦隊も賠償艦として接收するか、航路防衛などに限定して保有を許可するかで、真つ二つに分かれた。

その内接收派は内陸国が多く、保有許可派は島国などが多かった。接收派の言い分は「第三文明圏において強力な戦力となる超ファイシャヌス級を含んだ艦隊は、他の国に潜在的な脅威になる」という物だ。

一方、保有許可派の言い分は「海の交易路を守るのは非常に重要な事であり、航路を守る為ならば艦隊の保有は許可せざるを得ない」であった。

この議題を参加者全員が納得するよう導くのに長い時間が掛かったので結果だけを言えば、カイオスの主張した艦隊の保有は認められる事となった。だが、保有の条件として竜母の搭載騎はワイバーンのみとし、更には10年間日本製の発信機を取り付け、その所在を常に確認できるようにする事が決められた。

その後も様々な議題について話し合いが連日行われた。

議題の一例を挙げると、独立した属領の領土に関する問題やフィリアデス大陸での通貨の為替、戦後の第三文明圏での国際的な組織設立の下準備などである。

数日後、講和会議最後の議題についての話し合いが行われていた。

それは、各国からのパーパルディア皇国の要人の引き渡しについてである。

最初に意見を出したのは、日本政府の代表として参加している朝田であった。

「まず日本政府からの要人の引き渡し要求です。我が国が求めるのは貴国の皇族の一人レミールです。我が国としては貴国のトップであるルディアス陛下の身柄を求めたい所なのですが、カイオス殿からパーパルディア皇国の皇族の方々を二度と政治の世界に関わらせないことを条件に、身柄要求を取り下げました。ですがレミールだけは別です。理由として、彼女の発言が本戦争の始まりの原因となった事や他の国に対しても同様な事をしていた事を確認したからです。ですので、何が何でも彼女の身柄を確保し、我が国の法律で裁きたいのです。」

朝田の発言に、ターラ14世や各属領の代表者たちの多くが頷く。その中には多くの民間人をレミールの手によって虐殺された過去がある属領の代表者もいた。

彼らは拳を握りしめていて、その手からは血がにじみ出していた。それだけレミールが属領の人々から憎まれている事を表していた。

「此方としてもレミールの引き渡しに異議はありません。講和が終わり次第、直ちに二ホン国に引き渡します。」

「分かりました。カイオス殿の手際に感謝します。」

「いえ、レミールを確実に引き渡す代わりに、他の皇族の方々を引き渡さなくてもよいという条件を提案してください。二ホン国政府のお陰でもあります。寧ろ感謝したいのはこちらのほうです。」

日本政府の要望が通り、レミールの身柄が日本政府の手に引き渡されることが決まると、アルタラス王国や各属領からの身柄引き渡しの要求合戦が始まった。

アルタラス王国は、私利私欲でルミエスを奴隷にしようとしたカストを始めとした旧在アルタラス大使館職員全員の身柄（無論、クロムはこの中に入っていない）を要求し、その他の属領もそれぞれの属領統治機構の職員の引き渡しを要求した。

余りの数に会議の書記の筆記が追いつかず、涙目で作業をする女性書記の姿に見るに堪えかねた日本側が筆記（持ち込んでいたパソコンを使用した）に協力するという珍事も発生したほどだった。

一議題ごとに必ず一回会議室が大荒れになったり、最後にはちよつとした珍事が起きたりもしたが、無事に講和会議は終わりを迎えることが出来たのだった。

後は調印式を行い、本当に戦争を終わらせる事だけである。

調印式の為に更なる準備や調整を行う為に二日間ほどの時間が掛かる事になった。

二日後 エストシラント港

「まさか、私の最後の仕事がパーパルディア皇国の歴史に幕を下ろす事になるとはな…。」

「陛下…、最後の最後に重大な役を任せられてしまって申し訳ありません。」

「よい、カイオス。第三文明圏唯一の列強国パーパルディア皇国の歴史が終わることになったのは、元を正せば我が世界統一という野望達成の為に多くの事に目を瞑ってしまったのが原因だ。いや、それだけではない。パーパルディア皇国がこのような最後を迎えることになつてしまったのは、我々皇族の驕りが原因なのだ。元々、我がパー

パルディア皇国も唯の第三文明圏の小国の一つだったというのにな
…。」

「陛下…。」

調印式が行われる日本の軍艦に向かう為に、エストシラント港にて
迎いの船を待っている二人の人物がいた。一人はパーパルディア皇
国の最期の皇帝になったルディアス、もう一人は新たに国家元首とな
るカイオスである。

「我は、パーパルディア皇国こそが世界を統治することが出来る唯一
無二の国であり、パーパルディア皇国による支配こそが世界に平和と
発展を与えると考えていた。だが権力を？奪され、政治から隔離され
た後、何故、属領や属国を持たぬ二ホン国が我が国に勝る力を手に入
れる事が出来たのかをじっくりと考えることが出来た…。考え導き
出した答えは「二ホン国の外交戦略が我が国の外交よりも数段、いや
比較にならぬほど優れていた」だ。カイオス、お前ならばなぜ我がこ
の考えに達したのか理解できるだろう？」

「はい、我が国の外交戦略は簡潔に纏めるのならば「自国優先主義」で
す。我が国が発展出来るのならそれでよい。他の国がどうなつて
も構わないというものです。この政策は自国を急速に発展させるこ
とが出来ますが、その代わりに他国からの印象が最悪となります。国
がそのまま発展していければ特に問題は起きませんが、問題は自国よ
り強大な国が現れた時です。自国が滅亡しない為に此方の顔色を
窺っていた国々の多くは、その強大な国に鞍替えをする事となるで
しょう。一方の二ホン国は「共存繁栄主義」とでも言うべき政策を
取っていました。この政策は自国の急速な成長が出来ず、更には各国
への支援などで自国への負担が増大することになります。ですがそ
の代わりに多くの国を味方に付けることが出来ます。」

「その通りだ。加えて我が国が軍事力を背景にした恐怖政治を取つて
いたのも問題だ。結果として、どれほど国力に差があったとしても対
等に扱い、共に歩いていくという外交戦略を取っていた二ホン国に我
が国に虐げられていた全ての国や属領が味方をする事となった。：
我は以前、ミリシアルやムーの政策を弱腰と貶していた。だが今なら

判る。我の方が間違っていたという事に。」

穏やかな海を眺めながら、今までの自らの行いを冷静に分析し、過ちを犯してしまった事を語るルディアス。その表情は、憑き物から解放された様な顔をしていた。

その表情を見てカイオスは、目の前にいるパーパルディア皇国皇帝もまた、パーパルディア皇国の大いなる野望に巻き込まれた内の一人ではないかと考えていた。

数分後、二人がいる埠頭に日本の軍艦からやってきた短艇が接岸した。

「パーパルディア皇国皇帝ルディアス陛下とカイオス国家元首ですね？お迎えに上がりました。」

「お迎えにご苦勞様です。では、行きましよう陛下。」
「うむ。」

防衛軍人の手を借りながら、二人とその護衛が短艇に乗り込むと、短艇は搭載されたエンジンは甲高いエンジン音を響かせながら、調印式が行われる予定の軍艦へと向かって行った。

同時刻、エストシラント郊外

ルディアスとカイオスが埠頭から出発した頃、パーパルディア皇国の犯罪者留置所の牢屋から一人の女性が連れ出されていた。

彼女の名前はレミール。

日本大使との会談の場において、アルタラス王国への侵攻と日本の主権を脅かす要求をし、更には多くの国に非道を行ったパーパルディア皇国の皇族の一人である。

「お待たせしました。こいつがレミールです。ご確認をお願いします。」

「…確認しました。間違いなくレミール本人です。」
「では、これより彼女を二ホン国に引き渡します。」

「分かりました。では、我が国の手錠に交換するので首輪と手首と足首の拘束具を外してください。」

淡々と進められる引き渡し的事など彼女の頭に入ってこなかった。

彼女の頭にあつたのは「何故、この様な状況になつてしまつたのか」ただ一つであつた。

何故、列強たるパーパルディア皇国が解体されないといけないのか？

何故、皇族であり、未来のパーパルディア皇国皇后となる自分がこんな目にあつていいのか？

何故、周りの兵士たちは自分を蔑む様な目で睨みつけているのか？

何故、なぜ、なぜ……？

いくら考えても、自分が納得することが出来る答えが出てくることはなかつた。

「……これで良しと。しかしこの女、全く暴れませんね。捕らえた時、物凄く暴れたと聞いていたのですが。」

「恐らく自分の信じていたもの全てが否定され、気を失つてしまつたのでしょう。……まあ気の毒には思いませんがね。この女のせいで、いったい何人の人の命が失われ心に傷を負つたのか……。はつきりと言つて、自業自得という言葉しかありませんよ。」

「そうだな。我が国やアルタラス王国だけじゃない、彼女の愛するパーパルディア皇国の人々にも多大な迷惑をかけたんだ。しっかりと我が国で罰を受けてもらおうじゃないか……。おつ？どうやら調印式が始まつたようだぞ。」

「調印式」という単語にレミールは、無意識に日本人たちのほうに視線を向ける。

視線の先には、この部屋に備え付けられた魔導通信機に、彼女の想い人がパーパルディア皇国の歴史に終止符を打つた男、カイオスと並んで歩いている様子が映されていた。

「……ルディアス、陛下……。」

誰にも聞こえない様な小さな声で、愛する人の名前を口にするレミール。

そんな弱つた様子の彼女を他所に、戦争を本当の意味で終わらせる調印式が始まつた。

此処で時間は数分前に巻き戻る。

自国の手漕ぎボートよりも速く、そして滑らかに航行する短艇の上でカイオスとルディアスら、パーパルディア皇国の面々は目の前に広がる光景に目を疑っていた。

「デカい、余りにもデカすぎる!!」

「こ、これが二ホン国の守護神アマテラスだというのか!?!」

彼らの前には、日本海上防衛軍第一艦隊旗艦天照が静かに浮かんでいた。

天照が纏う圧倒的な強者の雰囲気、天照の存在すら知らなかったルディアスは当然の事、天照を知っていたカイオス達も、顎の骨が外れたかのような大口を開けて固まっていた。

そのまましばらくの間、驚愕の表情で固まっていた一行だったが、短艇が天照に接舷すると、何とか気持ちを切り替え、天照の甲板に続く階段を上り始める。

驚く事はもうないと考えていた一行だったが、甲板に足を踏み入れた時、再び彼らの常識には無い予想外の出来事が彼らを襲った。

「総員！パーパルディア皇国皇帝ルディアス皇帝陛下と、カイオス国家元首に、敬礼!!」

なんと天照の乗組員たちが、敗戦国の代表である自分達に敬礼をしてきたのだ。

ある程度の罵倒を受ける事を覚悟してきた一行は少しばかり呆けてしまったが、直ぐに現実に戻ってくると彼らに返礼をしながら、調印を行う机の元へと歩き出した。

（敗戦国の人間に対しても礼を欠かす事が無いというのか…。二ホン国、なんて国だ…!!）

（これは、我が国は国力云々の前に、国民一人一人の精神すら劣っていたという事か…。）

例え敵国の人間であったとしても、決して非礼な事をしない日本人に驚きながらも、机の元にたどり着く一行。

机の前には、朝田と第一艦隊の司令官佐々木が直立不動で立っていた。

「ルディアス皇帝陛下、カイオス国家元首、此方におかけください。」

朝田に言われるがまま席に着く二人の前には一つの薄い本が置かれていた。

その表紙には「フィルアデス大陸解放戦争終戦調印状」と書かれていた。

これに署名すれば戦争が正式に終わる。だがそれは同時にパーパルディア皇国の歴史も終わりを告げることもある。

「それでは陛下。ここに署名をお願いします。」

朝田に促され、日本側が用意したペンを震える手で取るルディアス。

一刻、目を瞑ると意を決し、彼は署名欄に自らの名を書き込んだ。

その後ペンをカイオスに渡すと、彼もまた少しばかり動きを止めた後、ルディアスの署名の下に自らの名前を書きあげた。

最後に、日本政府代表として朝田と佐々木が自分の名前を書き込み、朝田が調印状をパタンと閉じると、佐々木が部下から手渡されたマイクを手にとった。

「最後に本戦争で祖国の為に戦い、死んでいったパーパルディア皇国、フィルアデス大陸解放軍の戦士達に一分間の黙祷を行う。第一艦隊総員、姿勢を正せ!!」

佐々木はそこまで言うのと、一端間を開け、多くのパーパルディア皇国の戦士達が散っていった海の方へと向く。

「最後まで勇敢に戦い、散って逝った全ての戦士達に、黙祷!!!」

ザっ、と全ての軍人達が海、若しくは陸に向かって敬礼をし、外交官達は深々と頭を下げた。

その光景に驚きつつも、ルディアスとカイオスは日本の軍人達と同じように、海に向かってパーパルディア皇国流の敬礼をした。

「…パーパルディア皇国は終わりを告げた。我からの最後の命令をお前に下す。我らと同じような過ちを犯すなよ。カイオス。」

「…かしこまりました。陛下。」

西暦2018年、中央歴1640年。

此処に日本、アルタラス王国、フィルアデス大陸解放軍とパーパル

デリア皇国の間で発生した戦争「ファイルアデス大陸解放戦争」は、後に「アマテラス終戦条約調印式」と呼ばれる事になる調印式をもって、パーパルデリア皇国の敗北という形で終結を迎える事となった。

この戦争によって、長年第三文明圏を支配し続けた列強パーパルデリア皇国は解体され、新たにエストシラント共和国として再出発をする事となった。

それは同時に、第三文明圏の盟主が変わり、第三文明圏の技術、文化、影響力が大きく変化していく事を表していた。

そして、第三文明圏全体にある一つの言葉が広まっていく事となった。

それは、「第三文明圏に二ホン国在り。二ホン国にアマテラス在り。」である。

神聖ミリシアル帝国 帝都ルーンポリス

この世界において誰もが認める世界最強の国、それが第一文明圏の盟主、列強神聖ミリシアル帝国である。

遙か昔から古の魔法帝国の遺跡を研究、解析し、強大な力を手にすることが出来た国である。

この長い歴史を持つ帝国の中で最も栄えており、「眠らない街」と呼ばれている帝都ルーンポリスの一角に帝国情報局が存在している。

その帝国情報局は今、この情報局に所属する全ての職員達が寝る暇も惜しんで仕事に取り組んでいた。

彼らがオーバーワークする羽目になった理由は、主に二つある。

一つは、「レイフォルの滅亡」である。

昨年、第二文明圏外に突如として現れた第八帝国こと「グラ・バルカス帝国」によつて第二文明圏の列強国レイフォルとレイフォルの保護国パガンダ王国が減ぼされるという、歴史的出来事が発生する。

この出来事に帝国情報局は、大きな衝撃を受けることになる。

何故なら「文明圏外の国が列強国に勝つことは不可能である」というのがこの世界の常識であり、この常識が破られる事は有史以来一度もなかったのである。

だが、その有り得ない事が現実になってしまった。

この異常事態に帝国政府の上層部は情報局に対し、直ちにグラ・バルカス帝国の事を調査するように命じた。

ただグラ・バルカス帝国の調査については、グラ・バルカス帝国が閉鎖的である事が原因であり進んでいないのが現状である。

現時点で彼らが把握しているグラ・バルカス帝国の情報は、

・ムーと同じ科学技術立国である。

・グレート・アトラスターという名の戦艦を保有し、40cmを超える口径の主砲を装備していると予測されている。

・ムーの物より優れた性能の飛行機械を運用している。

などである。

この僅かな情報だけでも、情報局に努めている面々にはグラ・バルカス帝国が確かな技術力を持っている事を予想することが出来た。

そればかりか下手をすると、一部の技術に関してミリシアルの物より優れている可能性すら出てきた事で情報局に努めている職員は、気を休める事すら出来ない状況だった。

そして二つ目が第三文明圏から届いた衝撃的なニュースであった。

「なに!? パーパルディア皇国が敗北した!? それは本当か!?!」

「ムーの報道機関も繰り返し報道している事から間違いないようです。最新の情報によると、つい先日行われた「アマテラス終戦条約調印式」によつてパーパルディア皇国は国名をエストシラント共和国に変更し、国政も大きく変わる事となつたとの事です。」

「そんな馬鹿な! 我が国と比較すると幾分劣つていゝとはいゝ、列強であるパーパルディア皇国が文明圏外の国に、それも一か月で敗北するなどあつてはならない事だぞ!?! それで、パーパルディア皇国に勝利した国、確か二ホン国だったか? この国について何か分かつた事はあるか?」

「申し訳ありません、此方も余り情報を得ることが出来ていません。何分、第三文明圏という辺境の地の更に端にある国の為なかなか情報が届かないのです。現時点で判明しているのは「入国検査が他の国と比較にならない程、厳重に行われている事」、「ムー、グラ・バルカス帝国と同じ科学技術国である事」、「回転砲塔を持った戦艦を少なくとも5隻保有している事」、「二ホン国の各地に点在する都市は、文明国どころか下手な列強国よりも発展している」などです。」

「: : : そうか、兎に角グラ・バルカス帝国、二ホン国の情報は可能な限り集めてくれ。噂話などの真偽性が低い情報もだ。」

「はい、了解しました。」

局長が部屋から退出したのを確認すると、この情報局のトップであるアルネウスは手元の資料に視線を向けながら小さく呟く。

「グラ・バルカス帝国に、二ホン国か: : : 一体なぜこんな国が文明圏外

に突然現れたのだ…。」

資料をペラペラと捲りながら、考えを巡らすアルネウス。彼らの苦悩は途切れる事がない…。

日本 東京

一方此方はパーパルディア皇国関連の厄介事が解決し、ようやく一息つくことが出来た日本。

「争い事は終わった。さあ、これから平和を謳歌しよう！」

と、地球と同じような平和を楽しもうとした矢先、第三文明圏の北側にある国トーパー王国から、日本に再び厄介事が舞い込んできた。

しかも、その内容がかなり「異世界ファンタジー」感を感じるものであったのだ。

「魔王が復活したから撃破する為に軍を送ってほしい、か…。正しく、異世界だな。」

「ドラゴン、エルフ、ドワーフ、魔法と地球では創作物上の存在がごく当たり前に存在にしている世界なので、どこかに魔王と呼ばれる存在がいるのではないかと考えていましたが、まさか本当に存在しているとは夢にも思いませんでした。」

「ああ、全くだ。しかも人を喰う化け物とも聞いている。そんな怪物を大陸に野放しにするわけにはいかん。幸いな事に相手は魔物、つまり害獣退治という形で容易に軍事力を派遣することが出来る。」

「はい、その通りです。…しかし大臣、これは一体なんですか？」

予想外の事態に、苦笑いをしながら話をしている巖田に一人の職員がパッドの画面を見せる。

そのパッドの画面には、魔王討伐作戦の名前と魔王を討伐する為に派遣する防衛軍部隊の指揮官の名前が表示されていた。

それぞれ、

魔王討伐作戦「オペレーションモモタロウ」

・陸上防衛軍トーパー王国特別派遣部隊隊長 百田 太郎

・同部隊分隊長 城島 仁史

・同部隊分隊長 猿渡 学

・同部隊分隊長 犬神 剛

である。

作戦名や部隊長、分隊長の名前からして誰が見てもあの日本人なら誰でも知っている有名な昔話を連想させるものである。

「これ完全に遊んでますよね、大臣?」

「いや、唯のゲン担ぎだ。この世界の人々曰く「魔王は二本の角が額から生えている」との事だ。つまり、奴は鬼そのものと言っても過言ではない。鬼を退治するのは桃太郎とそのお供の仕事だろう?」

生真面目な巖田が冗談じみた事を口にした事で、会議室の面々は全員が笑みを浮かべてしまった。

少しばかり笑った後、熱い緑茶を一口飲んだ巖田は、普段の真剣な声で話を再開する。

「さて、此処からはとても重要な事を話す。本作戦において敵軍の戦力がどれほどのものかを判断する為の情報が無い。この件について総理や他の大臣と話し合った結果、ありとあらゆる事態を想定して部隊や兵器を編成する事が決定した。本作戦での主力は15式戦車を中心とした機甲部隊だ。だがこれだけでは強力な敵戦力が出現した時、何処まで対応できるか分からない。そこでだ、本作戦の切り札としてPTX—001を投入する事にした。」

「なっ!?!」

「嘘だろ!?!」

「Project Tを実戦に投入するのか…。」

「ですが大臣! PTX—001はまだ武装が完成しておりません!! いわば未完成の状態です!! そんな不完全なモノを実戦に投入するなど、愚の骨頂ですぞ!?!」

「現在の陸上防衛軍の保有する兵器で最も強力なのは、PTX—001だ。確かにPTX—001の武装は完成していない。だが完成していないのは「外付け武装」であり、「内蔵武装」は既に完成しているし、何なら射撃試験まで行っている。それにPTX—001本体の頑丈さは戦艦並みだ。多少の攻撃では問題にはならん。」

「ですが…。」

敵田の発言に全員が驚愕し、一部の職員がそれに反対するが敵田は陸上防衛軍の火力不足になる可能性を指摘し、PTX―001の投入の意見を変えなかった。

「ではもし火力不足になったらどうするのだ？海からの支援はあまり期待できないぞ。魔王軍の侵攻予想ルートは海から遠く離れているから戦艦からの艦砲射撃は不可能だ、艦対地ミサイルや艦対艦ミサイルでは弾薬が不足する可能性が高い。空軍も海軍ほどの火力は、「まだ」持っていないぞ。」

「航空防衛軍の天神ならば、十分な火力を提供する事が出来ます。」

「馬鹿野郎！天神は戦略爆撃機だぞ!!今回の作戦は一応害獣退治なんだ。害獣退治に戦略爆撃機なんて代物使ったら、国民から色々と突っ込まれるぞ。」

「ならアークバードを使いましょう！あれに搭載されている光学兵器ならかなりの火力が出ます！」

「無理だ。アークバードは現在硫黄島にてオーバーホール中で動かせない。」

「なんてタイミングだ。こんな肝心な時にアークバードが使えないなんて…。」

「私だってアークバードが使えるのならアークバードに任せろさ。だがアークバードは点検の為に動かせない。となれば、例え試験中の兵器でも動かすのもやむを得ないという判断に至ったというわけだ。」

「…分かりました、PTX―001の実戦投入を私は支持します。」

激しい討論の末、最終的に投入反対派が折れ、PTX―001の二号機を投入する事に決まった。

因みに、日本の守護神こと天照型戦艦を投入する話が出なかったのは三隻ともそれぞれ重要な任務があり、その任務から外すことが出来なかった為である。

一番艦天照はアルタラス王国周辺にてファイルアデス大陸の監視の任務を行っており、二番艦須佐之男は新兵の訓練中で日本近海から動けず、三番艦八咫鳥は日本海上防衛軍総旗艦の任で同じく日本近海か

ら離れることが出来ないのだ。

更に言うのであれば、天照型の火力は害獣駆除には余りにも過剰であり、本作戦には適さないと判断されたのも大きかった。

さて此処で唐突に、且つ大きく脱線することになるが、今回救援要請を出して来たトールパ王国とは何か？そしていつ日本と接触したのかを簡単に説明させてもらう。

トールパ王国はフィルアデス大陸の北東「魔物大陸」という別名を持つている大陸、グラメウス大陸に繋がる細い地峡の中央部に位置する文明圏外国である。

この国はパールディア皇国が第三文明圏の覇権を握っていた時代でも、フィルアデス大陸で独立していた珍しい国でもある。

何故この国がパールディア皇国に攻め滅ぼされなかったのかと言うと、この国はグラメウス大陸の魔物をフィルアデス大陸に入らせない為の、いわば「門番」としての役割を担っており、いくら傍若無人なパールディア皇国であったとしても神話や伝説で語られる強力な魔物からこの大陸を守っている国に対して、余り無礼を働くことが出来なかったのである。

そんな特殊な経緯を持つトールパ王国が日本と接触したのは日本、アルタラス王国とパールディア皇国との間で起きた戦争「フィルアデス大陸解放戦争」の最中の事である。

日本の発展ぶりをその目で見たトールパ王国の大使達は最も自国の為になる事、つまり日本との国交の開設と各種同盟と条約の調印を迅速に行った。

この行動は結果として、魔王の復活という前代未聞の事態に最高の形で機能することになったのである。

因みにトールパ王国の領海で港の一角に山が出来る程の大量のカニが取れる事が発覚すると農林水産省の職員や漁業関係、飲食業、更にはカニをこよなく愛する多くの人々が様々なメディア、特にインターネットの掲示板で大歓声を上げる事になったのはまた別の話である。

閑話休題

この会議から一週間後、全ての準備が終わった魔王討伐部隊は日本から北端の地へと出発していった。

魔王討伐作戦「オペレーションモモタロウ」に参加する戦力については下に記載したとおりである。

15式戦車 八両

09式装甲戦闘車 十二両

高機動車 十両

P T X—001 一機

兵員 約百名

強襲揚陸艦はしだて、おおすみに分乗した魔王討伐軍とP T X—001を積載した専用船が港から出港するのを見送った後、巖田は防衛省に足早に戻ると人払いをした後にとある場所に電話を掛ける。

「…ああ私だ。単刀直入に聞く、「特一号艦」は動かせるのかね？…なるほど分かった。では命令を伝える。直ちに出港し、此方が指定するポイントに向かってくれ。…そうだ、誰にも気づかれる事無く行動してくれ。…ああ、頼むぞ。」

電話を終え、受話器を静かに戻すと巖田は窓の外を見ながら呟く。「此方が打てる手はすべて打った…。だから一人も欠ける事もなく帰って来いよ…。害獣退治などで殉職したら此方とて遣り切れないからな…。」

魔王討伐編―02

トール王国 王都 ベルンゲン

日本人の大半が想像するような中世ヨーロッパの街並みの城下町とその街を見渡すようにそびえる中世ヨーロッパ風の城。

白い雪化粧が似合う趣のある町、それが北国トール王国の王都ベルンゲンの第一印象である。

「何?!ニホン国の援軍がもう到着したというのか!?!」

「はっ。間違いありません。昨日、港にニホン国の軍船3隻が到着しました。現在ニホン国軍は、城塞都市トルメスに向かっているとの事です。」

トール王国国王ラドスは軍務局からの報告を受け、非常に驚愕していた。

第三文明圏最強の国であった列強パールディア王国を僅か一カ月で、しかも自軍への被害を全く出さずに圧勝するほどの軍事力をもちながら、その力を動かす事があまりない不思議な国である日本が、援軍の派遣を即座に決定した。

外務局からの報告を聞いた時、ラドスは援軍が到着するまでに一か月程度掛かると考えていたが、実際には一週間という短い時間で援軍がこの国にやって来た。

ラドス達は、トール王国での一般的常識を遥かに上回る移動速度に驚いてしまうのは、仕方のない事だろう。

ただ、日本側が寄こした援軍は1000人程度と、かなり数が少ないという事もラドスに届いている。

幾つもの伝説的戦果を挙げている日本軍だが、この程度の数で勝てるのだろうかという不安がラドスの心の内にあった。

一体、彼らはどのような姿をしているのだろうか?

全員が歴史に名を残すほどの魔力を持った魔導士なのだろうか?

あるいは、超一級品の白馬に跨り、ミスリル製の金色の鎧を身に纏い、マントを羽織った騎士団なのだろうか?

ラドスの思考は、陸上防衛軍トールパ王国特別派遣部隊がトルメスに着くまで延々と続く事となる。

城塞都市 トルメス

魔王軍の攻撃を受けた「世界の扉」から、命からがらこの事を伝え、騎士モアと傭兵ガイはトルメス騎士団から日本からの援軍を案内する命を受け、南門で待機していた。

日本からの援軍は、港で合流したトールパ王国軍騎士団の護衛を受けながら、もう間もなくこの南門に到着する。

南門からは、案内の役割を騎士団から受け継ぎ城まで案内し、その後自分達は援軍に観戦武官として同行する予定だった。

「なあ、モア。俺達が案内する予定の二ホン国軍って、どんな奴らなんだ？小隊規模しか来ていないと聞いたが、そんな少数の援軍がああ魔王軍に通用するのか？」

「二ホン国の軍は、正確には「二ホン国防衛軍」と呼ばれているらしいが。しかし大規模な、それこそ万単位の大軍勢なら嬉しいが、100人程度の小規模の部隊が来て、しかも指揮権も異なっていると逆に混乱と戦力の喪失を招くだけだとは思うが……。だがあのパールディア皇国に短期間で勝利した二ホン国だ。私達の常識だけでは図りし得ない。ただ二ホン国についての情報はかなり、な……。」

「ん？何か可笑しいのか？」

「ああ、内容が突拍子もない事ばかりだな。パールディア皇国の竜騎士隊を一切の犠牲を出さずに、数分で殲滅したとか、アマテラスとかいう軍艦が300隻以上の戦列艦を沈めたとか、だな。」

「うーん……。そりゃウソだな。自国を強く見せようとするための情報操作ってやつだぜ。」

「そ、そう思うか？やはり？」

間違いのないで、と返したガイは、断定したように話し始める。

「俺は、幾多の戦場を見てきた。圧倒的に強い軍もいたが、いくら武器や戦略、策略が優れていても、死者数に大きな差は出ることはあれど、ゼロなんて数は聞いたことがない。いくら卓越した技術を持つとかが、

奇想天外な戦略を生みだし駆使しようが、最前線で兵が死なないなんて事は、絶対にありえない事なんだ。

多分、二ホン国は噂通りに強い国だろう。そこは認めるぜ。

だが、1人も死者が出ないなんて、話を盛りすぎだな。

そんな上辺だけを気にする国なんて、俺は大嫌いだぜ。外聞を重んじる国なら、どうせ先遣隊も金ぴかな鎧を着こんでいるんじゃないかね？」

「うゝむ、そうか…。しかしまあ、彼らは国賓の様なものだ。些細な出来事が王国と二ホン国の政治に影響が出る可能性が、十分にある。嫌いだからと言って、無礼を働く事はくれぐれも内容にな。」

「へっ、そんな事ぐらい解つてらあ。」

二人が雑談をしながら、時間を潰していると城門の上にいる衛兵が大声を張り上げた。

「モア様、見えました!!二ホン国軍の方々が来られました!!」

「そうか!彼らはどの様な装備で来ているのだ?」

「そ、それが…。見た事のないバケモノを従えて、此方に向かって来ているのです!」

どういう事だ、と二人が疑問に思っていると二人の耳に「ブウウウウウグオオオオオオオン」という、今まで聞いた事のない音が飛んできた。

二人が目凝らすと、深緑色の体色をした魔獣が遠くから近づいてきているのがはっきりと見えた。

咆哮をあげながら近づいてくる魔獣は、一本若しくは二本の角を前方に向け、地面を揺らしながら馬と同じ速度で走っていた。

そんな異様な魔獣の周りを走っている王国軍の兵達をよく見ると、全員の顔色が優れない。

「何なんだ!!この世の物とは思えないバケモノたちは!!?」

「私を知るわけが無いだろう!!?」

この世とは思えない光景に固まっていたモアとガイの前で、一団はピタリと停車する。

当たりに響いていた異音がいくらか静かになると、日本からの援軍

を先導してきた国軍の騎士が馬から降り、モアに近づく。

「此方が、二ホン国軍の方々だ。後の案内を頼む。」

「はい、了解しました!!」

何とか再起動を果たした二人が話をしているうちに、日本の化け物の内の一騎の側面の扉が開き、中から人が降りて来た。

その人物の服装を見て、二人は首を傾げてしまった。

降りて来た男性は、唯丸だけの飾り気のない兜を被り、緑の斑模様様の服を着ている。

更には、戦闘においては必ず身に着ける装備であるはずの鎧の類を身に着けていなかった。

モアやガイの想像していた、華のある姿どころか騎士の格式を表すものすら全くない。

一言で言い表すのならば、「蛮族」である。

「日本陸上防衛軍トーパ王国特別派遣部隊、隊長の百田太郎です。ご案内感謝いたします。これからお世話になります。」

この言葉に、更に二人は驚愕する。

目の前にいる装飾の類を一切していない冴えない男が、日本からの援軍のトップだとは、夢にも思っていなかったのだ。

「トーパ王国「世界の扉」守護騎士のモアです。これよりトルメス城にご案内した後に、隣にいるガイと共に貴方方二ホン国軍に、観戦武官として同行いたします。此方こそよろしく申し上げます。」

モアは何とか表情を崩さずに、百田に挨拶を返す。

その時、彼は目の前にいる変わった格好の軍人の左肩に描かれている模様に気付いた。

(ん?!どこかで見た事のある模様だな・・・?ええと、何処だったかな?)

モアは、彼らの模様に少しばかり疑問を抱いたが、それを一端おいておいて、日本からの援軍をトルメス城に案内する。

城に至る最中、トルメスにすむ人々はこの世に何か異物が入り込んできたかのような目で、異国の軍隊を見ていた。

数分後、奇妙な車列はトルメス城付近に到着した。

ここから先の城内には、車両は入れないので、隊長である百田を含んだ4人の武装をした防衛軍人が下車し、モアの案内の元、トールパ王国軍魔王討伐隊長の元に挨拶に向かった。

挨拶に向かっている間、他の者達は此処で警戒態勢で待機となった。

トルメス城、何処からか懐かしさを感じる中世ヨーロッパ風のこの城は、遙か昔の神話の時代の魔王軍侵攻の後に建設された歴史ある建造物である。

勿論、時代の流れと共に、大規模な改修が数十年単位で行われており、建築された時の面影はほぼ無い。そんな歴史的建築物の中を百田たちは歩いていく。

静まり返った廊下を歩いていると、異国の観光名所に来た気分になるが、耳をすませば、遠くの方から人の叫び声や気迫の籠った声、何かの唸り声が聞こえて来る為、此処が戦場の最前線にある事を再認識し、浮かれた気分を振り払う。

騎士モアの後について、階段を上り、何度か角を曲がると、重厚な扉が一行の前に現れた。

その扉をモアはノックする。

「入れ。」

中から入室の命令が聞こえると、モアは扉を開き入室する。

「失礼します。二ホン国軍の方々をお連れしました！」

モアの後続き、百田が中に入ると、巨大な円卓が部屋の中に置かれ、その奥にいる男が立ち上がり此方に歩いてくる。

年齢40歳くらい、身長180cmくらい、筋肉質で白色短髪、白い髭、銀色の鎧を着装し、赤いマントを羽織り、腰に帯剣をしたがっしりとした男性が百田の前に立つ。

「おお、二ホン国の方々、この様な僻地によく来て下さった！私はトールパ王国トルメス駐留軍団長のアジズです。」

「日本陸上防衛軍トールパ王国特別派遣部隊、隊長の百田太郎です。これからよろしくお願いします。」

お互いに挨拶を交わし、握手をすると一同は円卓に座り状況の確認

を行い始める。

状況確認の内容を要約すると、

・魔王軍の数は約二万であり、「世界の扉」を瞬く間に陥落させた。なお、守備隊は全滅したものと思われる。

・その後、魔王軍は城塞都市トルメスの北側に位置するミナイサ地区に侵攻、これを陥落させる。

・ミナイサ地区陥落の直後、トール王国軍の援軍が到着、被害を出しながらもミナイサ地区から先への侵攻を食い止めている。

・ミナイサ地区の住民の大半は安全な場所に避難できたが、600人ほどの民間人が取り残されている。

・取り残された民間人は地下のシエルターに避難しているが、いつまで隠れていることが出来るか分からない為、早期の救出が必要である。

である。

説明を聞き終えた百田は、戦場の状況は想定以上に切迫している事を理解する。

「なるほど。これは早急に魔王軍をミナイサ地区から一掃し、民間人を救出しなければなりませんね。」

「そうなのだ。無論我らも何度も救出作戦を行っている。だが、ことごとく失敗しているのだ。あの忌々しいオーガ共のせいだ。」

「失礼、オーガとは？」

「力がとても強く、並みの人間の何十倍もあるが、問題は彼らが疲れを知らない事だ。食事が出来る限り永遠に力が落ちずに動き続けられる、文字通りの化け物だ。」

さらに奴の毛は針金のようになっており、剣や槍を受け付けけない。バリストナならば有効打を与える事が出来るだろうが、素早い動きをする彼らに全く当たらないのだよ。」

「では、まず最初に鬼を退治する必要がありますね。」

「出来るのですか？相手はあのオーガなのですぞ？」

「恐らく我が国の兵器ならば、奴に引導を渡す事が出来ます。それに民間人救出の最大の障害である鬼を撃破できれば、民間人を安全に避難させる事が出来ますし、魔王軍の有力な戦力を削ることが出来ます。奴を討伐する事さえ出来れば、我々の仕事は半分終わったも同然です。」

「おお!!列強を圧倒する力を持つ二ホン国軍が動いてくださるというのならば、百人力、いや万人力です!!我々も貴国に合わせて騎士団を繰り出しましょうぞ!!」

「では、民間人救出並びにオーガ撃破作戦の協議を行いたいと思います。」

「なら、地図などを準備するので今から一時間後に行いたいと思う。」
民間人の救出とオーガの撃破を同行して行いう事が決まり、会議は休憩に入る。

その直後だった、黒い物体が一体、窓ガラスを割り室内に飛び込んできた。

漆黒の翼を生やし、白い服を着た乱入者に誰かが叫ぶ。

「ま、魔王の側近、マラストラスだど!?!」

モアを始めとしたトールパ王国の騎士達が剣を抜き、構える。

敵に囲まれた絶望的な状況にも関わらず、マラストラスは不敵にも笑みを浮かべる。

「ホホホ…人間の頭を打ち取るために、魔王様の側近たる我が足を運ばねばならぬとはな…。長き時を経て、なかなかの知恵を手にしたようだな、人間どもよ。」

マラストラスは話しながら、アジズに手を向ける。

その手には魔力の炎が現れていた。

「ヘル・ファイ「敵性生物確認!!射撃開始、てえー!!!」」

マラストラスが今まさに魔法を放とうとした時だった。

マラストラスの声を遮るように百田が射撃指示を下すと、百田らが持っていた試製18式小銃が耳を塞ぎたくなるような爆音をたてながら、7.62mmの銃弾を撃ちだす。

7.62mm弾を使用しながら、一般的な12.7mm口径の銃弾を使

用する機関銃を凌駕する威力を発揮する試製18式小銃の銃撃の前に、唯の空を飛べて強力な魔法を使える程度の力しかないマラストラスが耐える事は出来なかった。

「がっ!!!」

断末魔を上げる暇もなく、手足の一部が消滅し、上半身と下半身が千切れたマラストラスが円卓に崩れ落ちる。

それと同時に、マラストラスの後ろの石壁も穴だらけとなり、一部が崩れ落ちた。

静寂が支配した室内に粉塵が舞い、血と硝煙のにおいが立ち込めた。